

# 吉備における古墳時代の政治構造

宇垣 匡雅

博士(文学)

総合研究大学院大学  
文化科学研究科  
日本歴史研究専攻

平成20年度  
(2008)

## 目 次

序章 古墳時代の吉備－研究の目的－	-----	1
1 地域の特徴		
2 古墳研究の歴史		
3 研究の目的		
第1章 古墳の立地とはなにか	-----	6
1 はじめに		
2 研究の現状		
3 前期古墳の立地		
4 前期古墳の立地規定		
5 中・後期古墳の立地		
6 おわりに		
第2章 前方部の形状に関する一試論	-----	17
1 はじめに		
2 宍甘山王山古墳の前方部		
3 非対称をなす前方部		
4 前方部隅角の性格		
第3章 竪穴式石室の研究－使用石材の分析を中心に－	-----	23
1 はじめに		
2 研究の現状		
3 中部瀬戸内沿岸部の地質		
4 弥生墳丘墓の竪穴式石室		
5 前期古墳の竪穴式石室石材		
6 小結－使用石材の差－		
7 前期後半以後の竪穴式石室石材		
8 畿内の石室石材		
9 結晶片岩と白色円礫		
10 結語		
11 おわりに		
第4章 特殊器台形埴輪に関する若干の考察	-----	62
1 はじめに		

2	研究の現状	
3	特殊器台形埴輪を伴う古墳	
4	特殊器台形埴輪の製作集団－胎土の検討から－	
5	編年	
6	円筒埴輪の成立	
7	おわりに	
第5章	前期古墳における刀剣副葬の地域性	----- 83
1	はじめに	
2	研究史抄	
3	副葬の位置と方向	
4	副葬状態	
5	弥生時代の刀剣副葬	
6	副葬刀剣の少数派と多数派	
7	儀礼の斉一化	
8	おわりに	
第6章	吉備南部における古墳時代前半期小墳の埋葬頭位	----- 102
1	はじめに	
2	前期古墳の埋葬頭位	
3	東頭位の伝統	
4	備前と備中	
5	おわりに	
第7章	吉備の中期古墳の動態－使用石材の検討から－	----- 111
1	はじめに	
2	研究史と問題の所在	
3	使用石材	
4	造山古墳とその年代	
5	古銅輝石安山岩の再搬入	
6	中期古墳の変遷	
7	おわりに	
第8章	周濠の地方伝播に関する一試論－吉備の事例を中心に－	----- 129
1	はじめに	
2	資料の問題点と研究の課題	
3	吉備の古墳の周濠	
4	周濠の地方伝播	
5	おわりに	

第9章 巨大古墳の諸要素－両宮山古墳の占める位置－	-----	140
1 墳長と総長		
2 二重周濠の地方波及とその意義		
3 陪塚の空間表示		
第10章 巨大古墳築造の試算	-----	169
1 はじめに		
2 古墳築造に関する研究		
3 両宮山古墳の堆積と盛土量		
4 築造工程と労働量		
5 他の試算の問題点		
6 おわりに		
第11章 吉備の帆立貝形古墳	-----	176
1 はじめに		
2 帆立貝形古墳の特色		
3 吉備の諸資料		
4 各系譜における出現状況		
5 帆立貝形古墳の性格		
6 おわりに		
第12章 吉備地域における埴輪の普及とその画期	-----	183
1 はじめに		
2 各時期の様相		
3 埴輪使用の画期		
第13章 後期古墳の様相	-----	190
1 はじめに		
2 横穴式石室の規模と階層		
3 群集墳の形成		
4 群集墳形成の特色		
5 後期古墳出土の鉄滓の評価		
終章 古墳時代政治構造の変遷	-----	197
1 前方後円墳の出現		
2 前期古墳の諸要素と階層		
3 首長墳の減少と大形墳の築造		
4 巨大古墳の築造		
5 古墳諸要素の変革		
6 横穴式石室墳の展開		

7 吉備の古墳時代の特質

引用・参考文献一覧	-----	208
挿図出典一覧	-----	222
初出一覧	-----	227

## 序章 古墳時代の吉備－研究の目的－

## 1 地域の特徴

中国地方の瀬戸内海側中央部、岡山県および広島県東部が吉備と呼ばれる地域であり、東から備前、美作、備中、備後の四ヶ国からなる。

北から、山地とその間の盆地、高原と河川にそって形成された小規模な平地、瀬戸内海沿岸部に形成された沖積平野、そして南端の瀬戸内海島嶼部と、地理的な環境は大きく変わる。北部山間の恩原遺跡（旧石器）、沖積平野の上東遺跡（弥生集落）、瀬戸内海の黄島貝塚（縄文）など、代表的な遺跡を列挙しただけでも、それぞれの地域に残された考古資料のあり方や特性は大きく異なることが明らかである。

古墳時代に先だつ弥生時代後期、列島の各地域ごとに土器の特性が強まるが、吉備においては上東式と呼ばれる土器型式が成立し、やがて前方後円墳の成立期には、吉備甕と通称される直立した口縁に櫛描き平行沈線をもつ甕を指標とする土器型式に変化する。それらの分布の中心は備前南部から備中南部にかけての沖積平野部であり、そこには上東遺跡、津寺遺跡、百間川原尾島遺跡、百間川兼基遺跡といった大規模な集落遺跡が形成される。

古墳時代には、北部山間の蒜山原四つ塚古墳群、中部では月の輪古墳、沖積平野に造山古墳、島嶼部の喜兵衛島古墳群と、資料は吉備の全域に分布するが、主要な資料が集中して分布し中心を形成するのは瀬戸内海沿岸の沖積平野部とその後背に所在する盆地状の平野群である。その範囲を、東は備前市鶴山丸山古墳、西は倉敷市箭田大塚古墳あたりとするなら東西40kmを測り、これは奈良市から兵庫県西宮市までの距離に相当する。

ここで沖積平野部とひとくちに述べ、また、地図のうえでは一連の平野のようにもみえるが、詳細に見ると少し異なる。吉備南部の沖積平野は吉井川、旭川、高梁川という大河川とそれら間に所在する中小の河川によって形成されたものであるが、平野の間には大小の丘陵が所在しており、丘陵によってさえぎられ不定型な形状をなす平野が一部で接続しそれが東西に連なるといふ形状をなす。なお、現在の海岸線に近い平野部の大半は江戸時代から近代にかけての干拓によって形成されたものであり、中世以前の海岸線はかなり北側であった。列島各地の沖積平野それぞれの景観は現在と弥生・古墳時代とはかなり異なるものであったことが明らかになっており、一概に比較することはむずかしいが、台地や低地をまじえるものの一続きの平野の景観を呈する河内や大和とはかなり異なるものと言える。

## 2 古墳研究の歴史

## (1) 吉備の考古学の草創期

この吉備地域の考古資料、なかでも古墳は古くから注目され、その記録は江戸時代にさかの

ぼる。18世紀末頃（寛政～享和年間）に記された『吉備温古秘録』にはしばしば古墳についての記載がある。多くは簡単な記述であるが、七つぐろ1号墳の発掘状況のように破鏡3面という詳細な記載をもつものもある。同じく備前藩の地誌『東備郡村史』には牟佐大塚古墳の石室と石棺についての記載があり「尊貴を埋葬せしものならん」と、素朴ながらも合理的な解釈が示される。また、備中の国学者、古川古松軒が天明年間に記した『吉備之志多道』には天狗山古墳が墳丘図と円筒埴輪の図によって記される。墳丘図には段築、埴輪にはタテハケが示されており、考古資料の説明のため図（絵画）を示したのものとしては畿内の陵墓図などと並んでごく初期のものとなる。

明治・大正時代には日本考古学の進展とともに、若林邦勝、沼田頼輔、和田千吉、清野謙次などの諸先学によって吉備の資料が調査・検討される。とりわけ和田千吉氏による造山古墳の調査記録（和田1918）は造山古墳群の基礎的な文献であり、清野謙次氏の操山古墳群の調査（清野1906）は考古学史の一部となる。

大正末年から昭和10年代にかけてなされた梅原末治氏の調査は吉備の古墳研究の基礎をなすものであった。その足跡は朱千駄古墳、森山古墳、小山古墳、牟佐大塚古墳、千足古墳、宿寺山古墳、箭田大塚古墳など吉備の主要な首長墳のほぼすべてに及ぶといっても過言ではなく、過去の発掘に関する聞き取り記録や当時の所見は今なおその価値を失わない。また、盗掘の後始末といえは聞こえがよくないが、この時期に生じた地元住民による古墳の発掘を端緒とする調査は、鶴山丸山古墳を筆頭に花光寺山古墳、新庄上天神山古墳などの多くにのぼり、その所見と公表された記録は現在なお第一級の資料となっている。また、『岡山県通史』や『吉備郡史』などに結実する永山卯三郎氏の岡山県下の古墳の悉皆調査も多くの貴重な資料を含んでいる。

## (2) 戦後考古学の成果

戦後考古学の発展は吉備の古墳研究にも著しい成果をもたらしたが、むしろ吉備が古墳研究の中心地となり、数多くの成果を発信したというべきである。

これを主導した近藤義郎氏は、佐良山古墳群・月の輪古墳・喜兵衛島古墳群・牛窓湾の古墳群などの調査を手がけ、調査成果から数多くの論考・評価を提示した。佐良山古墳群の調査をもとに示した、後期群集墳の形成が家父長制世帯の成長にもとづくものであったとする論考（近藤1952）は、後期古墳研究にとどまらず、古墳研究そのものに多大な影響を与えるものであったし、喜兵衛島遺跡・古墳群の調査は、瀬戸内島嶼部で古墳時代後期に盛行した土器製塩とそれを担った集団についての解明に至るものであった（喜兵衛島遺跡調査団編1956）。こうした研究成果はさまざまな要因によってもたらされたものであるが、山間の盆地や島嶼部、可耕地の少ない湾といった、吉備の分断されたともいえる地勢も理解の一助になったとみてよいだろう。

また、中期古墳については西川宏氏による論考がある。吉備の大形前方後円墳の築造状況にもとづく、大首長権が首長間を輪番的に移動するという政治構造の提示（西川1964）は、考古資料の分析方法として学ぶところが大きい。こののち氏は地域の考古資料を丹念に調査し、考古資料による歴史叙述をおこなう（西川1975）。

こうした中期・後期古墳に関する研究とともに重要な位置を占めるのが古墳の成立をめぐる一連の研究である。戦後早い段階で備前車塚古墳の発掘が生じ、本墳から出土した11面の三角縁神獸鏡は小林行雄氏による同範鏡の分有関係論のなかできわめて重要な位置を占めることになるが、対比できる資料が皆無に近いこともあって本墳が吉備の前期古墳全体の中で論じられることは少なかった。

この後、近藤義郎、春成秀爾、高橋護氏らによって宮山遺跡・立坂遺跡・伊与部山遺跡・都月坂2号墓など弥生墳墓、前期古墳では都月坂1号墳の調査研究が精力的に進められる。これによって弥生時代後期の墳墓の様相が明確になるとともに、この地域の弥生墳墓に伴う特殊器台・特殊壺に関する研究が大きく進展し、特殊器台は農耕儀礼に用いられた器台・壺が儀礼的象徴的發展をとげたものであり、墳墓における首長権継承儀礼に用いられたものとする見解が示され（近藤・春成1967）、以降の古墳研究に大きな影響を与えることになる。

以後も弥生時代の墳墓と前期古墳の相違、つまり古墳とはなにかという問題について活発な議論（間壁・間壁1977）がなされるなか、弥生墳墓では楯築遺跡、黒宮大塚遺跡、雲山鳥打遺跡、前期古墳に関しては七つぐろ古墳群、浦間茶臼山古墳、矢藤治山古墳などの調査が進められる。とりわけ、この問題に正面から取り組んだ近藤義郎氏は弥生墳丘墓の概念を提唱して前方後円墳との相違を明確化し（近藤1977）、さらに弥生墳墓から前方後円墳への変遷を中心に体系的な古墳時代論を提示した（近藤1983）。

こうした研究課題の解決を目的とした学術発掘とは別に1970年代から急増の一途をたどったいわゆる行政発掘は、膨大な遺跡の破壊と引き替えに大量の資料を提示することになる。弥生・古墳集落が中心にはなるものの、その性格上、旧石器時代から近世におよぶ多種多様な考古資料が明らかになり、そのなかには用木古墳群や殿山古墳群といった古墳時代前期の古墳群、あるいは板井砂奥古墳群他のように小地域全体の後期古墳群を調査した例も含まれる。入念な整理作業と評価によって遺跡や古墳の意味が追究され、現在も活用されているものがあるが、重要な資料であっても多くのなかに埋没しているものも少なくない。

1990年代以降では、備中山間盆地に所在する大谷1号墳、これに続いて実施された定北古墳、定東塚古墳などの調査により、同地域の終末期古墳の実像が明らかになり、陶棺に関する研究も長足の進展を示すことになった。また、1970年代後半に示された埴輪編年を基礎に古墳の編年作業は大きく進み、首長墳の動態もかなり把握することが可能となり、また、造山古墳・作山古墳といった巨大古墳の位置付けもより明確なものとなってきた。

### 3 研究の目的

古墳にみられる大きな特性は共通性・画一性、そしてその一方で表示される格差であり、そのうち後者は量的な場合と質的な場合があり、しばしばそれらが複合した形をとる。

前期の浦間茶臼山古墳は墳丘全長138mの前方後円墳であり、後円部には埋葬施設として竪穴式石槨が築かれる。一方、同じ前期の南坂8号墳は全長27mの前方後方墳で後方部に排水溝を備えた竪穴式石槨が設けられる。前方後円墳と前方後方墳という差はあるが、ともに前方部を



そなえ竪穴式石槨の採用も共通する。そうした共通性を示す一方、墳丘の規模には著しい差があり、築造に投入された労働量に圧倒的な差があることはうたがいない。さらに浦間茶臼山古墳は盗掘によってその大半が失われていたとはいえ大量の鉄製武器・工具や後漢鏡など豊富な副葬品を伴うのに対し、南坂8号墳は未盗掘ながら副葬品は皆無と、著しい差を示しており、石槨を構築する石材も全く異なっている。この共通性・画一性と格差の表示という特性は、古墳時代後期、巨石を用いた全長19mの横穴式石室をもつ牟佐大塚古墳と、全長4m程度の横穴式石室を設ける小墳の間においても同じである。

古墳時代に先行する弥生時代にあつては、前期・中期の埋葬は基本的に等質的であり、そこに格差や階層性を見出すことは困難である。墳墓において埋葬間の格差が明瞭となるのは後期後半、楯築墳丘墓の築造以降であり、大形の墳丘、木槨・竪穴式石槨をもつ墳墓が出現する。後期後半の墳墓のうち楯築墳丘墓、黒宮大塚墳丘墓など最大級のものは個別要素の点でも、総体としての比較においても古墳との差は小さい。しかしながら、そうした要素を備えた例は備中南部にごく少数築かれるにすぎず、また、墳丘・墳形・埋葬施設それぞれの個性が顕著であり、列島に面的といってよい広がりを示す古墳とは決定的に異なる。

さらに古墳のもつもう一つの特色として、中央と地方という関係の表示がある。三角縁神獣鏡の分布や箸墓古墳とそれに続く巨大古墳の築造状況にみられるように、大和・河内地域の卓越と、そこから周辺に対して多くの情報の伝播があつたことは確実である。

古墳の諸要素にみられる格差は、中央と地方、ここで扱う領域で述べれば、大和・河内と吉備の関係によって生み出されたと考えられるが、それに加えて吉備地域内部の関係も大きく作用しているとみてよい。重層した首長間の政治的関係を表示するのが古墳、とりわけ前方後円墳であり、本論究において古墳の諸要素の分析を示す理由はその点にある。

吉備には数多くの古墳が実に多様なあり方を示しつつ築かれている。先学の努力により多くの成果があげられているが、なお解明すべき点は多い。古墳に最も近い要素をそなえた墳丘墓を築いた吉備の地域が前方後円墳の成立に関与したと考えられるが、その段階で、またそれ以降、吉備の首長たちはどのような関係にあり、また、大和、河内の首長や大王といかに関わったのか。中期には造山古墳・作山古墳・両宮山古墳という3基の巨大古墳が築かれる。とりわけ全長350mの巨大古墳・造山古墳は河内・和泉に築かれた大王墳に匹敵する墳丘規模をもつ。その築造を可能にしたものは何であり、そもそも列島全体の政治秩序のなかでどのように位置付けられるのか。

本論究では吉備の古墳について多角的に分析をおこない、吉備の古墳の特質を抽出し、列島の古墳時代史にいかん位置づけられるかを論じる。

中央と地方という関係が明確化する古墳時代の研究においては、中央である畿内の古墳の諸要素の変化や消長は常に留意すべき存在である。それを吉備という地域からの視点で眺めることによって吉備の特性と畿内の特性はより明瞭なものとなる。地域史の枠にとどまるのではなく、また、一律に畿内の要素というものさしで事象を測るのではなく、畿内との、あるいは他地域との相違をとらえ、それが吉備に生じた要因と意味を考察する。しばしば見出される相違点は吉備と畿内それぞれにおける古墳の意義の差ということになる。また、両地域で同じ様相

が認められることもあるが、時として吉備ではより単純な形で現れ、現象の意味を理解しやすい場合もある。両地域の様相の異同のなかに古墳の本質を見ることができると考える。

なお、吉備の古墳時代史においてしばしば引用され、あるいは論及されるのが記紀に記された吉備の「反乱」伝承である。また、それにもとづいた「古代吉備王国」ということばは「歴史ロマン」のキャッチフレーズとして地域のマスコミや観光マップ等で用いられることが多く、市民にはその存在が考古学の学術的成果以上に浸透している。

吉備の反乱伝承は日本書紀の雄略紀に記された記載で、吉備の豪族が大王に反抗的な姿勢を示して滅ぼされ、さらに後には大王位の篡奪をも企てるというものであり、吉備の強大さ、独立性の根拠とされてきた。文献史学の領域に属する資料であるが、吉備の考古学との関わりは深い。1964年に発表された西川宏氏の論考「吉備政権の性格」は、畿内中心の古墳時代史が主であった当時、考古資料を用いて「吉備政権」の存在を提唱した画期的な論考（西川1964）であるが、大王墳に匹敵する墳丘規模をもつ造山古墳・作山古墳の評価において、この吉備の「反乱」伝承が地域勢力の大きさを裏付ける資料として示された。これ以降の研究においてもこの論証の構造は継承され、今日に至っていると言ってよい（間壁・間壁1972）（葛原1983）（吉田1990）。ごく単純に言えば造山・作山という2基の巨墳が吉備に築かれた理由を考古学のみで説明することが容易ではなかったということになる。一方、古代史の側においても「反乱」伝承や記紀に記された吉備氏の始祖伝承についての研究が深められていくが、それに際しては西川氏以降の考古学の研究成果が参照される（吉田1995）。文献史学と考古学の協同と評価できる一方、論証が相互に寄りかかっているということもできる。

中期後半の両宮山古墳の築造の後、吉備において大形古墳の築造が途絶えるのは反乱の結果を反映すると認識されてきたが、それは畿内の巨大古墳群においても巨大古墳の築造が停止してくる動きと同一であるなど、古墳の編年の位置づけが明確になってきた現在、より明確な古墳時代像を提示することができる。記紀がかつてとは別の意味で桎梏となっている研究の現状、そして先にふれた通俗的な理解の広がりを見れば、改めて吉備の古墳時代の首長間関係を提示し、文献史学の成果と対比する必要があると考える。

作業にあたっては2つの点に留意してきた。その1つは現地にあたって最大限の情報を得ることと、資料化と公開による資料の共有である。2つには、ことさらに述べることでないが、過去の行政発掘によって得られた資料を改めて分析の俎上に置き、さらに成果を引き出すような心がけた。発掘ののちに報告書が刊行されて貴重な資料が得られたことが示され、出土遺物の一部は展示に用いられ他は収蔵される。古墳1基の資料によって得られる情報には限りがあり、地域のなかでいかなる意味をもつか語ることがむずかしい場合も少なくない。しかし、それらを総合し比較検討することによって個別の資料では明らかでなかったことがら明確になり、資料は新たな価値をもつ。調査によって得られた資料を活用するという事は、そうした営みを行うことであろう。

なお、本論究においては『前方後円墳集成』編年を基本とするが、そのうちの8期は中期後葉と呼ぶ。また、七つぐろ古墳群等の名称に含まれる「ぐろ」は常用される漢字ではないため、ひらがなで表記した。

## 第1章 古墳の立地とはなにか

## 1 はじめに

本章においては前方後円墳の立地について分析を試みる。

通常、前期古墳は眺望の良い山頂や尾根上に築かれることが多いとされるが、それは各地の前期古墳の見学時や調査時に常に実感させられることであり、墳頂から見渡される水田の広がり、墳墓は本貫の地に営造されるという理解を改めて我々に印象づけていると言ってよいだろう。そのため、なかば自明のこととされるのか古墳の立地に関しては調査報告の冒頭において必ず記載がなされるものの、それ自体についての議論がなされることは少ない。

前期古墳のなかには特異な立地を示すものがまれに認められる。それらが個別の特殊な事情によるとするならとりたてて議論をおこなう余地はないが、その特異さが古墳立地の基本的な属性にもとづくものであるなら、それらを材料として立地の意味を問うことは、古墳というものの性格を考える際の一つの手がかりになると考える。

この問題を考えるのに適当な資料は全国に数多いが、旧地形や周辺遺跡の状況など古墳以外の情報が必要となるため、小論では吉備の資料を用いる。

## 2 研究の現状

「古墳は旧首長の権力が新首長に継承されたことを内外に誇示するための政治的モニュメントで（略）、高い丘の上や海上交通の要衝など、人の目をひく場所を選んで築造された」という評価（都出1989）は、古墳と古墳の立地についての研究の現状を要約したものといつてよいだろう。これより前の評価、たとえば大塚1966においては前期古墳の立地に関しては、低地からの眺望の良さと、「支配地を見おろしうような場所を選択」した可能性の指摘がなされている。

検討の手がかりはほとんど無く、解釈・理解の問題とならざるをえないためか、後述する沿岸部の古墳に関するものを別にすれば、古墳の立地そのものについての研究は僅少である。松本正信氏は播磨中・西部の古墳立地の検討から、前期古墳はその集団領域の外縁近くに築かれることを指摘し、古墳は外界にむかって領域の確立を宣言し続けるもの、一種の「結界表示」であり、首長霊が神としてそこにとどまり集団領域を守り続けることを期待されたとする考えを示した（松本1985）。一方、岸本道昭氏は同じく播磨の前期古墳について検討し、隔絶した立地・比高を示すものと弥生墳丘墓のそれに近いものの2者があることを示し、墳丘規模や副葬品などの分析とあわせて、前者が政治的地域集団首長墳であるとの見解を示している（岸本1986）。また、今尾文昭氏は全国の前古墳の立地を概観し、高所への立地は集落からの隔絶性において弥生墳墓の選地とは異なる新しい現象であるとの指摘をおこなった（今尾1987）。この

ほか管見の範囲で示せば、中塚良氏は山城盆地の古墳の眺望について検討し時期的な変化を指摘しており（中塚1988）、小林久彦氏は東三河および遠江の首長墳の立地と視界の検討をおこない交通路等との関係を述べる（小林1992・1993）。また、三好博喜氏は由良川中流域の古墳の眺望範囲の差異から古墳間の関係の追求を試みている（三好2001）。

こうしたこれまでの評価を整理するなら、古墳の立地、特に前期古墳のそれについてはその視認性から、a. 被葬者が統括した集団の成員によって仰ぎ見られる、b. 集団の外部から遠望される、c. 古墳、つまり被葬者（の霊）が領域を見おろすという、3つの視線が想定されているようである。aとbは古墳への眺望の良さと古墳のビジュアル性にもとづいたもの、cは古墳からの眺めの良さから導かれたものである。これらすべてが表裏一体となって古墳の立地を形成したとも、都出1989に言うようにaとb、松本1985のようにbとも解釈しうるが、3者はそれぞれ大きく異なる属性であり、古墳の立地はそのなかのいずれを、あるいはそれ以外を主眼とするものであるかが問題となる。

検討の材料として、極端とも言える立地を示し、眺望域を限定して検討することができる沿岸の古墳・臨海性の古墳を最初に取り上げる。これらについては早くから注目されており、比較的長い研究史がある。可耕地が僅少な岡山県牛窓湾に所在する5基の前方後円墳の築造理由を考察した近藤義郎氏は、この地が大和政権の朝鮮半島進出にあたって瀬戸内海航路の港湾として機能した可能性を指摘し、それがこれらの築造をもたらしたと考えた（近藤1956）。この後、この視点を継承・発展させた西川宏氏らは瀬戸内海沿岸にこうした立地の古墳が連続することを示し、それは内海航路の拠点を示すとした（西川ほか1966）。これ以降、間壁忠彦氏（間壁1970）、西谷真治氏（西谷1983）、森浩一氏（森1986）、山本三郎氏（山本1998）などによって沿岸部の古墳についての論考が示されている。諸氏の論はいずれも近藤1956・西川ほか1966を受け継ぎながら各地域の古墳についてさらに細かく検討をおこない、詳細な評価をおこなったものである。これらの論においては、沿岸部の古墳が必ずしも4世紀末～5世紀に位置づけられるものばかりではないことが明らかになり、朝鮮半島への派兵という事象からではなく、大和政権の地方への進出、海上輸送にもとづく交易といった、より普遍的な要因が示されている。

### 3 前期古墳の立地

#### (1) 海にのぞむ古墳

改めて言うまでもないが児島まで続く現在の岡山平野の南半は近世～近代の干拓によって形成されたもので、古墳時代の海岸線は操山丘陵、吉備中山の南側をへて倉敷市北部の丘陵地帯に至るものであった。

吉備の前期古墳のうち、主要な大形墳の多くがこの海岸線に面した丘陵上に築かれており、前節に述べたようにその立地は瀬戸内海とのかかわりを示し、「瀬戸内海航路に、積極的関心をもっていたことを示す」と理解されている（西川1975）。しかしながら海への眺望が可能であればその古墳は海との関わりをもっていたと言えるのであろうか。海岸線が近い吉備南部の

場合、ある程度の高さの所に古墳を築造すればそれはおのずと海への眺望を得ることになる。吉備南部平野の北側に位置する古墳、たとえば備前車塚古墳からでも宍甘山王山古墳からでも海への眺望は可能である。

煩雑ではあるが、海にのぞむとされるこれらの古墳のうちのいくつかを具体的に見てみる。操山丘陵の西端には西から操山109号墳（76m）、網浜茶臼山古墳（92）、湊茶臼山古墳（120）の3基の前方後円墳、それらからやや離れて丘陵の中央には金蔵山古墳（162）が築かれる。これらは1期の操山109号墳から4期の金蔵山古墳まで継続して築かれた首長墳である。また、尾上車山古墳（120）は操山丘陵の西7.5kmに位置する吉備中山の南東端に築かれた前方後円墳で、4期の築造と考える。いずれも当時の海岸線にほど近い立地であり、海にのぞむ古墳と評価されている。

図1には眺望関係を示すため、それぞれの古墳から見渡せる範囲を示した。検討にあたって注意されるのは、海側に古墳が築かれたとした場合、集落遺跡<sup>1)</sup>との眺望関係はどうなっているのかである。なお、古墳からの眺望と古墳への眺望は必ずしも同じではなく、古墳からは視認できても至近の尾根が下方からの見通しの支障となる場合があり、両方向からの検討をおこなない眺望関係をしぼりこむ必要であるが、市街化のため後者は細かい作業が困難な状況にある。

**操山109号墳** 丘陵の最高所から南に下降する尾根を加工して築かれているため北側への眺望はきかない。視界はほぼ南側に限られ児島の山並みとその手前の海がその大半を占める。旭川西岸の拠点集落と目される天瀬遺跡から見通すことはほぼ不可能である。鹿田遺跡からの見通しも現状では北西に所在するの尾根斜面の樹木によってかなりさえぎられ前方部のみとなるようで、仮にこの樹木がなかったとしても後円部すべては見通せないようである。

**網浜茶臼山古墳** 丘陵の頂部に築かれているため眺望は良く下方へは250°の視界をもち、旭川西岸平野のほぼ全域と南の海を見渡すことができる。天瀬遺跡からは墳丘を側面から見通すことができるが、鹿田遺跡からは古墳の所在する丘陵の尾根が遺跡にむかって伸びているためそれが下からの見通しの邪魔となる。現状では後円部裾までは見えない程度であるが、現状のように全山が墓地としてはげ山となっておらず、ある程度の樹木があったとすれば、見通しはより悪くなることは確実である。

**湊茶臼山古墳** 操山丘陵西端の3基のうち最も東に位置する。地図上では上記の2基と同様の立地にみえるが、西の網浜茶臼山古墳との間に所在する高まりのため西側への眺望はまったくきかず、北側も尾根線の鞍部から平野のごく一部を垣間見ることができるにすぎない。古墳からの視界は南の海側に限られる。

**金蔵山古墳** 丘陵の稜線上に築かれているため南北2方向への眺望が可能となる。北側は百間川遺跡群が所在する旭川東岸平野の中央～西部を、南は海側を見渡すことができる。なお、下から古墳を見上げるとするならば、墳丘主軸を尾根線と直交させて築かれているため南の海側からは後円部のみ、北の平野中央部からでは前方部正面から見るようになってしまい、墳丘の全景をとらえることができるのは西くびれ部が見える平野部の北西部に限られてくる。

**尾上車山古墳** 当時の海岸線にほど近い位置にあり、古墳からの眺望は東～南に開けている。古墳の東側には弥生～古墳時代集落は知られておらず、主要な集落遺跡は西側の川入遺跡とな

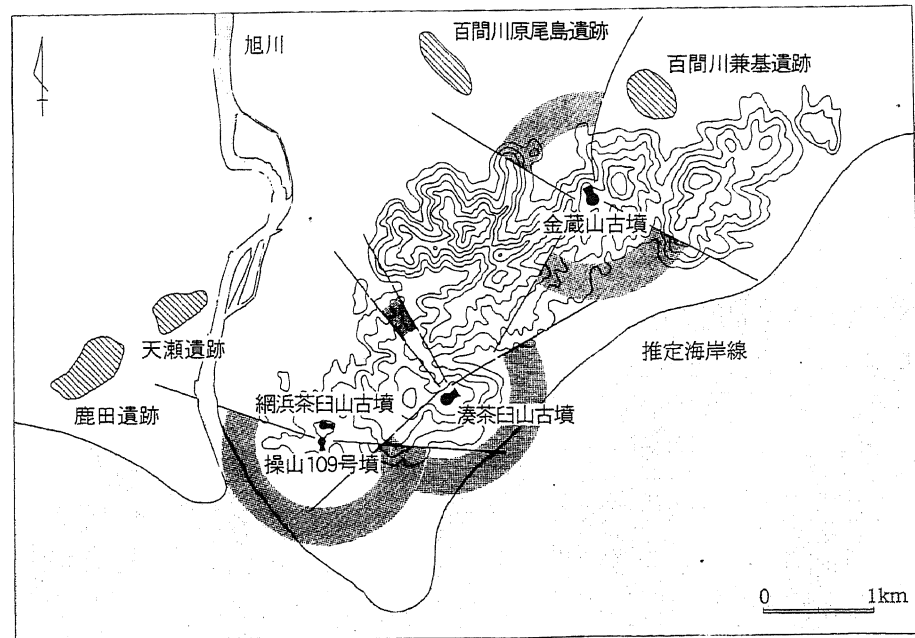


図1 操山丘陵における古墳と集落の眺望関係

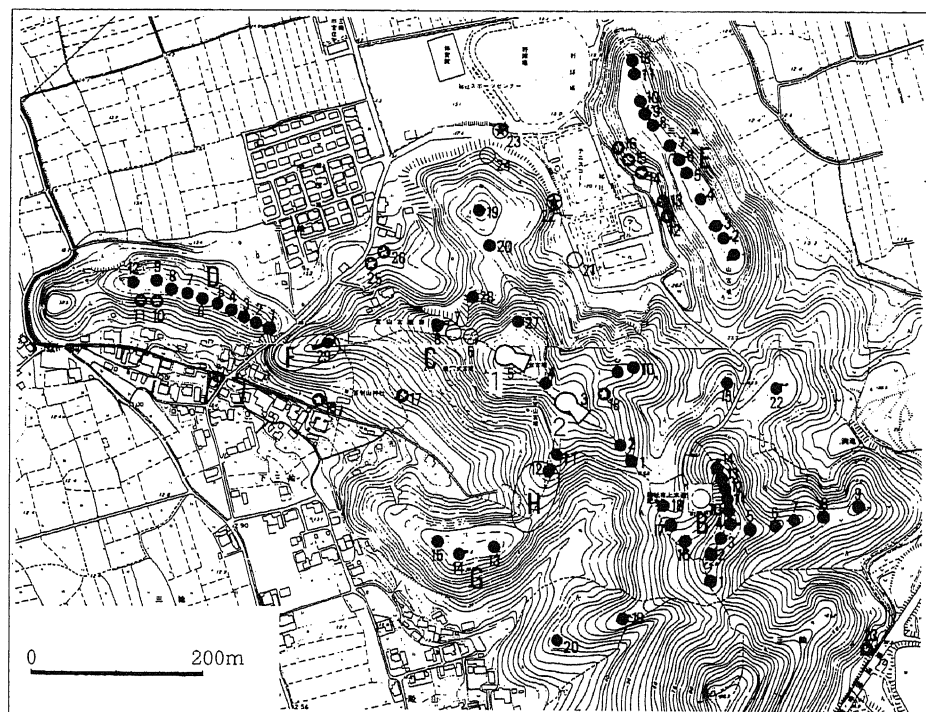


図2 三輪山丘陵における古墳の分布

1. 天望台古墳 2. 三笠山古墳

るが、両者の間に吉備中山の南麓が張り出しているため川入遺跡の主要部から見通せる関係にはない。

以上の5基の前方後円墳のうち、操山丘陵の4基と集落の関係であるが、これらが百間川原尾島遺跡や百間川沢田遺跡といった旭川東岸平野の集落群を基盤とするとした場合、金蔵山古墳を除いて眺望関係にはない。また、操山109号～網浜茶臼山古墳の3基が旭川西岸平野の集落群に拠るとした場合も、操山109号墳はそれらからの眺望は良いとは言えず、まして湊茶臼山古墳は見通すことができず、これらが西岸平野の集落群への視界を十分考慮して築かれたとは考えにくい。

集落からの眺望にはいずれの古墳も難があるが、とりわけ湊茶臼山古墳の立地は特徴的で、旭川東岸・西岸のいずれであれ、集落を、また集落から見るができない位置にある。

## (2) 海にのぞむ古墳の立地と視界

以上に示した古墳の立地の特徴を改めて整理してみる。

第1は言うまでもないが海に近接して築かれていることである。第2は眺望関係であるが、集落と古墳が視認できる位置関係になくともよいこと、それを必須とはしていないことである。

後者の理由を立地から求めた場合、海からの、あるいは海への眺望の方が重視されたということになる。これは冒頭に示したこれまでの見解であり、魅力的かつ有力な考え方と言えるが、そうであるとするなら航路・港湾、あるいは漁場など、海とのかかわりが集落そして水田とのかかわりよりも重視されたことになる。古墳時代前期のこの地域において製塩や漁撈が農業生産よりも重要であった可能性は低く、航路・港湾など海上交通が残ることになるが、それが平野部から古墳を引き離すほどの重要性をもっていたのだろうか。

航路が近くにあったかどうかは証明不可能であるし、港湾についても証明はかなりむずかしいと言わざるをえないが、以下のことを指摘できる。

尾上車山古墳の場合、奈良時代の文献から古墳が面する笹ヶ瀬川河口部付近には葦原が広がっていたと推定され、海路や港湾として利用できる地形が古墳に近接して所在していた可能性が高いとは言い難い。この付近に弥生・古墳時代の集落遺跡がほとんど見られないのもそうした環境であったことを示すと考える。

また、操山丘陵の南側もそれと同様であった可能性が強い。操山丘陵の東、芥子山丘陵南麓の沿岸も奈良時代には葦原であったことが記され<sup>2)</sup>、操山丘陵一帯にはハイガイを主体とする中世の貝塚が濃密に分布し、江戸時代前期には干拓がこの付近から着手されていることは、操山丘陵の南側が遠浅で泥質の浜であったことを示しており<sup>3)</sup>、それは良好な湾であったため古代から近代に至るまで一貫して瀬戸内海航路の要地として機能した牛窓湾の場合とは大きく異なる点である。もちろん、はるか沖合の航路、あるいは旭川などの河口への航路を想定しそれとの眺望関係を考えることも可能ではあるが、それは湾を見下ろすように前方後円墳が築かれる牛窓湾の場合とはかなり異なる様相と言える。

さらに、内海航路の掌握が農業生産と同程度、あるいはそれ以上の重要性をもつものであったとするなら、海流の関係から潮待ちの場所として古代から近代まで内海航路において重視され、さらに荒神島遺跡、高島遺跡など付近の島嶼に形成された古墳時代中期の祭祀遺跡から、

少なくともその時期までそれがさかのぼるとみられる児島の沿岸に前期古墳が1基も築かれな  
い4)ことも不可解と言える。

沿岸部において古墳が集落から分離して海側の高所に築かれることは多い。後述のように牛  
窓湾の古墳が海に基盤をおいたものとする評価に筆者も異論はないが、海に近接するという共  
通項のみをもって他の古墳にも同じ評価が与えられ、その評価をもとに港が存在したろうと  
いう類推がなされていると言わざるをえない。海にのぞむという立地の要因を別に考えること  
ができるとすれば、あえて根拠が不明確な内海航路に求める必要はないと考える。

### (3) 平野部の古墳

**高所の古墳** この問題を考えるため、通常の高所の古墳の立地を整理しておく。集落にのぞむ位置に  
築かれた例として総社市天望台古墳・三笠山古墳、赤磐市用木山古墳群などがある。これらの  
古墳群の特徴は、それぞれの地域のなかで最も高い場所に立地することで、いずれの場合も最  
初の古墳が最も高い頂部に築かれている。三輪山丘陵の場合、標高80mの丘陵最高所に天望台  
古墳が築かれ、続く三笠山古墳は5mほど下降した位置に築かれるし、用木山古墳群の場合も  
標高90mの頂部へ1号墳が築かれた後、継続して順次下方に古墳が築かれている。もとより、  
全くの最高所ではない尾根の上に築かれる備前車塚古墳や七つぐろ古墳群のような場合も少な  
くないが、この場合でも首長墳よりも高い位置に後続の古墳が築かれないことからすれば5)、  
古墳築造可能な最高所が選ばれたとみられ、また、先代の古墳、特に首長墳よりも下方に築く  
という原則があったと考えられる。こうした選地の結果、首長墳である前方後円・後方墳が最  
も高く、中位・下位の小墳はより下方に位置するという垂直方向の分布が形成されることにな  
る。

この高所への指向は集落を見下ろす眺望の良さを追求した結果と理解されているが、ある程  
度以上の高さをとれば眺望に極端な差は生じないはずである。また、極端な高所を指向するこ  
とは平野部一集落から遠くなることであり、古墳は小さく、また細部が見えにくくなり、古墳  
への視認をさまたげる結果となる。にもかかわらず山頂や尾根先端の高まりを強く指向するの  
は、古墳自体がなるべく高い所に築かれることを求められたためではないかと考える。

**低丘陵の古墳** こうした高所に立地するもの以外に、低丘陵上というやや特異な立地をとる前  
期古墳として浦間茶臼山古墳がある。全長138mを測る前方後円墳で、古墳時代前期の吉備を代  
表する古墳である。測量調査の報告(宇垣1987)にも記したが、古墳からの眺望は北西側と南  
東側の2方向に限られる。北側には盆地状の平野が広がるが、沼の地名や水田中に近年まで設  
けられた掘り上げ田に示されるように排水のよくない平地であり、有力な生産基盤であったと  
は考えにくく、実際、付近に弥生後期～古墳時代の集落はほとんど知られていない。また、南  
東側も吉井川の後背地にあたり、やはり集落遺跡の存在は明確でない。もとより付近がまった  
くの荒地であったとするわけではなく、山麓部に小規模な集落遺跡が点在すると予想される  
が、この地域に吉備最大の前期古墳を築造する主体があったとみることは困難で、それは浦間  
茶臼山古墳付近における前期小墳の分布の少なさからも裏付けられると考える。築造の主体と  
なった集落が付近に求められないとする理解が妥当であるとするなら、そのことから集落と  
古墳が大きく分離している可能性が考えられる。分離の要因を吉井川あるいは砂川の河川交通



に求めることも可能であるが、それにもとづくとするほどそれらからの眺望が良い位置とはいえない。

#### 4 前期古墳の立地規定

以上、海にのぞむ古墳を中心に前期古墳の立地の検討をおこなった。海にのぞむ古墳の場合は集落から離れて築かれる傾向にあり、通常のあり方と言える平野部の古墳は高所を強く指向すると言える。前者は内海航路からの、後者は集落からの眺望を企図したと理解することも可能であるが、すでに述べたように必ずしもそうした企図に合致するとは考えにくい部分がある。うえに、前者は集団の外からの、後者は内からという別々の視線を対象としていることになる。また、前記の浦間茶臼山古墳の集落から離れるという点は海をのぞむ古墳の立地特徴と共通する。

吉備南部で近接しあった前期古墳がばらばらに立地原則をもち表示の対象が選択可能であったのではなく、共通の指向・規定をもつとするなら、それは以下のように整理できる。

すなわち、高所への指向は広い眺望を得ることが目的ではなく、集落から垂直方向に離れることを目的としており、一方、「海にのぞむ古墳」は水平方向に集落から離れた結果、海に面することになったと理解することができる。

吉備の前期古墳は垂直あるいは水平方向に集落域から離れた位置、集団の領域の外縁に築かれるという原則を持つとみれば、ほぼすべての古墳の立地が理解可能となり、これは松本1985に示された播磨の場合と同様である。この立地原則の主因として考えられるのは古墳の祭祀性であり、「亡き首長がカミとなって集団を守護する」（広瀬1999）、（松本1985）という思想であろう。鏡や刀剣などによる幾重もの辟邪<sup>6</sup>がなされて封じられた亡き首長がその力を発揮すべき場所は領域の中ではなく、外縁と観念された場所であったと考える。したがって、前方後円墳という墳形の共通性、副葬品やその配置の共通性によって示される政治性ととも、前期古墳では強い祭祀性を保有していたと考えることができる。これは例示した古墳、浦間茶臼山古墳～金蔵山古墳の年代、1期から4期を通じて保持されたとみられ、さらに極端ともいえる高所に築かれた月の輪古墳の5期まで継続するとみられる。

#### 5 中・後期古墳の立地

古墳立地の様相は中期中葉に大きく変化する。

様相の変化をよく示す資料の1つに赤磐市南部の高月地域がある。盆地状平野西端の北側に両宮山古墳（206m）が築かれ、その周囲から南縁の山麓にかけて森山古墳、朱千駄古墳、小山古墳といった前方後円墳が7期から9期にかけて築かれる。水田面から古墳までの比高は数mから10m程度で、位置・高さとも前期古墳の立地にみられた特徴は認められない。留意すべきはこの平野のほぼ中央を古代山陽道が貫通していることで、両宮山古墳の外濠前を通過し、西には高月駅家推定地も所在する。この経路が古墳時代中期までさかのぼるかどうかの確証はな

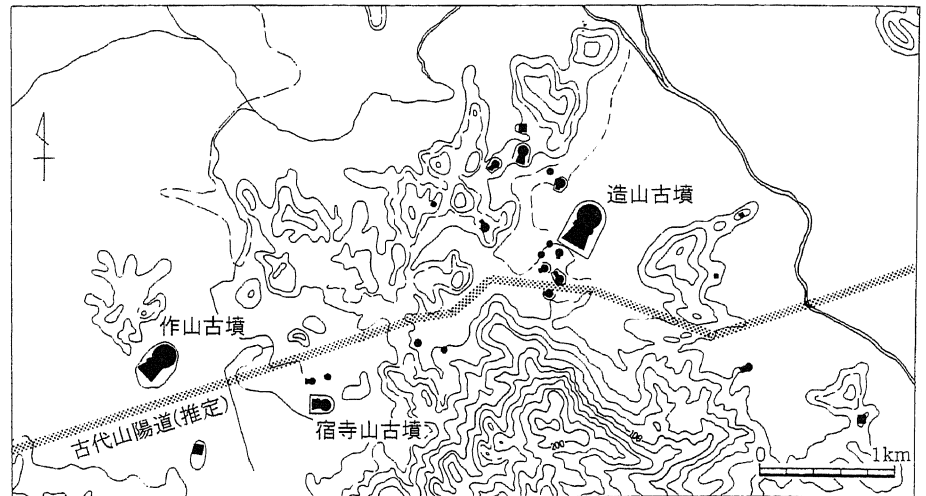
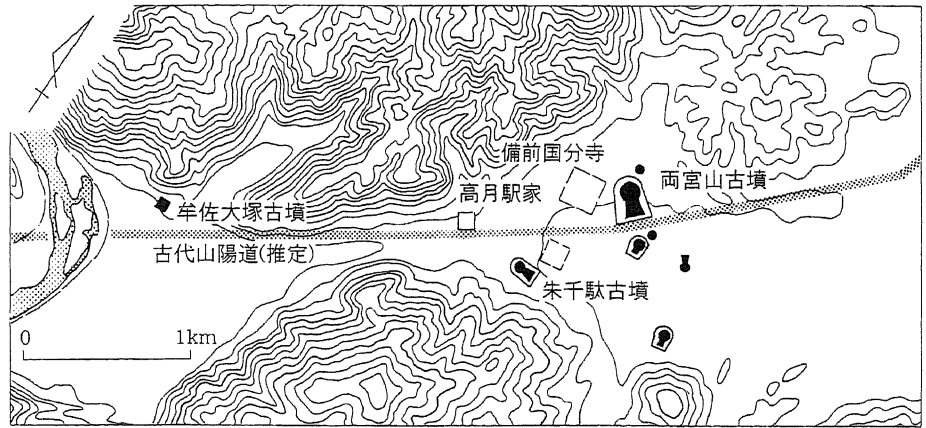


図3 高月地域（上）、造山・作山古墳群（下）の分布

いが、大河川である吉井川・旭川の渡河可能地点と東西にのびる小平野の形状を勘案すれば、この付近に備前南部を東西に横断する陸路が所在し、それに対して古墳群が形成されている可能性が強い。つまり古墳が視覚的な、その威容を間近に表示する存在に変化すると考えることができる。

このことは備中南部の足守川西岸～総社南部地域に形成される造山・作山古墳群についても指摘できる。6期の造山古墳の築造を嚆矢として巨大古墳・大形古墳が順次築造され東西4kmの細長い範囲に古墳群が形成されていくわけであるが、ここは古代・近世山陽道が通過する位置でもある。上記と同様、古墳時代の道がいずれにあったかは推定の域を出ないとはいえ、南には海近くまで広がる江田山～福山山塊が所在する一方、北側の総社平野北半には河道が網状に広がる。またこの位置の西には小田川にそって西の備後へ通じる回廊状の地形がのびることなどからすれば、備中南部を東西にぬける陸路はこの付近にならざるをえない。造山・作山古墳群はこの道に対して、道からの眺望を考慮してこの地に形成されたと考えられる。これは先に示した5期までの様相とは大きく異なるものであり、居住域の外縁にあつて機能すると観念される祭祀的構造物からその威容をもって首長の権威を表示する構造物に変質したと考えてよい。

海にのぞむ古墳にもどれば、牛窓湾には牛窓天神山古墳（4ないし5期）、黒島古墳（6期）、鹿歩山古墳（8期）、波歌山古墳（9期）、二塚山古墳（10期）と前方後円墳の築造が継続してなされる。湾を取り巻くようにそれぞれが築かれ、また、この地は古代から近代にわたって内海航路の要地であることからすれば、上記の陸路に対すると同様の性格をもち海路・港湾からの眺望・視認を主眼として築かれた古墳群とみてよいだろう。時期的にも造山・作山古墳群等とほぼ併行する。

以上の理解をまとめれば、5期前後を境として以降の古墳はその巨大さ・威容によって首長の権威を視覚的に訴える存在、「目に見える形としての権威」としての性格を示すようになる。造山・作山古墳の間に備中こうもり塚古墳が築かれ、7世紀前葉の巨石墳、牟佐大塚古墳が旭川の渡河地点に面して築かれる（図3上）ことなどからみて、その性格は後期の間も継続したとみられ、それが変化するのは山間の谷奥の南面に立地が変化する終末期古墳の段階であろう。

4期以前の古墳を祭祀性、以降を権威の表示という語句でまとめるならば、前者は月の輪古墳の立地から5期まで継続するとみられる一方、後者の最も早い例となる牛窓天神山古墳はそれに先立つとみられ、この変化はある程度の時期幅をもって進行・定着していったとみられる。またこれは巨大古墳の出現とほぼ軌を一にすることからみて、吉備で達成されたものではなく畿内から導入されたと考えてよい。古市古墳群は大阪湾から大和に至る経路の間に選地することが指摘されており、誉田山古墳の埴輪馬についての著名な説話も交通路に面する巨大古墳の威容や存在感を物語るものと言える。この視認性を重視した新たな古墳の立地思想が吉備に導入され急速に波及したと考える。

先に述べたように前期の首長墳は必ずしも基盤とする地域の内に築かれませんが、こうした立地要因をもつため中期以降の首長墳も本貫の地から離れることが多いと考えており、その点に

においては特定の地域に古墳が凝集し古墳コンプレックスを形成するとみなす松木武彦氏の理解（松木1997）と共通する。具体的に言えば造山・作山古墳群のうち少なくとも東群は東の足守川下流域平野を基盤とするものであろうし、両宮山古墳は単に砂川中流域の高月の地域を本拠とするものではなく、むしろ旭川下流域平野を基盤とするものであったと考える。

## 6 おわりに

以上、吉備の古墳の立地について検討をおこない、中期前半を境に立地の様相が大きく変化しそれは古墳の性格の変化に起因すると考えた。吉備の古墳は5期前後までは祭祀性にもとづき、6期以降は政治的な表象としての側面が強くなると判断する。

立地に端的に示される古墳の性格の変化は吉備にとどまるものではなく近隣の讃岐や播磨においても指摘でき、きわめて広範な変化であったと考える。しかしながら大和や筑前の例、大和・箸墓古墳や筑前・那珂八幡古墳などの出現期古墳は集落域の縁辺に築造されており、古墳時代の当初からここで言う後者の性格を内包するのか、あるいは祭祀性を発現させる別の立地形態とみるべきかまだ整理できておらず、今後の課題としたい。

いま全国の古墳の立地規定を網羅的に整理する余裕はないが、眺望というこれまでの観点を一度はずし、古墳の立地要因を上記の二側面から分析することが必要であると考え。

### 註

- 1) 操山丘陵西端の前方後円墳が基盤とする領域、築造主体となった首長が基盤とした集落をいずれに想定するかについては2つの考え方がある。1つはこの操山丘陵が所在する旭川東岸平野、具体的には百間川遺跡群などを想定するものであり（葛原1987・宇垣1991）、もう1つは天瀬遺跡や鹿田遺跡など旭川西岸河口部の集落を想定するもの（松木1993）である。前者は大河川による平野・丘陵の区分を重視するものであり、後者は古墳と集落間の距離の近さを重視するものである。いずれも有力な根拠をもつと言えるが、前者では操山109号墳など、金蔵山古墳を除く3基と集落との間にかなりの距離があるという難点があり、後者は近いとはいえ現在でも幅150mを測る河口をこえて古墳の築造がなされたのかという疑問がある。
- 2) 『大安寺伽藍縁起并流記資財帳』（『寧楽遺文』中巻 東京堂出版 1962）
- 3) 湊茶臼山古墳はその名に示すように所在地名は湊である。16世紀には春の湊と呼ばれていたと言われ、かつて港が所在していた可能性はあるが、それが古墳時代までさかのぼるかどうかは全く不明である。
- 4) 前半期の前方後円墳、滝堀の内古墳は児島の内陸部に築かれる。9期後半の出崎灰出1・2号墳は海にのぞむ前方後円墳と評価できる可能性がある。
- 5) 備前車塚古墳の場合、後方の龍ノ口山山頂近くに後期の群集墳が築かれ、七つぐろ古墳群の場合は中期と推定されるダイミ山古墳が東2kmの山頂に築かれるが、こうした時期が大きくへだたるものは含めない。
- 6) これについては第5章で考察するが、本論究では死者の遺体あるいは霊に、悪いものがとりつくこ

とを防ぐという意味で、この語を用いる。

- 7) 造墓主体についての評価は異なるが、本論と同じく立地の要因を交通路に求める見解を安川満氏が示している（安川1998）。

## 第2章 前方部の形状に関する一試論

## 1 はじめに

前方後円墳という墳形をかたちづくる前方部とは何かという課題は古墳研究と同時に生じ、現在まで多くの論が示されてきた。その学史を編むだけで一書をなすといっても過言ではない。

前方部は古墳を前方後円墳あるいは前方後方墳と定義づける要素であることは言うまでもないが、その機能なり起源を想定させ、あるいは証明する資料は、測量図から読み取ったり発掘調査によって得ることがむずかしい。このことは、前方部というものがきわめて観念的な意義をもって成立したことを示すと考えられるが、そのために解釈の余地はきわめて大きなものとなり、証明の手続きがきわめてむずかしい命題となることは否めない。

ここでは宍甘山王山古墳の測量によって把握できた前期前方後円墳の前方部の特徴を手がかりに、前方部の意味を考えてみたい。

## 2 宍甘山王山古墳の前方部

旭川東岸平野の東縁に位置する宍甘山王山古墳は全長68.5mの前方後円墳である。備前車塚古墳に続いて築かれた首長墳とみられ、第3・4章に述べるように最終型式の特殊器台形埴輪を伴い、古銅輝石安山岩を埋葬施設に用いるとみられる。

段築は明瞭ではないが、2段築成と推定される。後円部径39.5m、同高さ6mを測る。

前方部はバチ形に開いており、そのため墳端線は等高線に斜交して下降しており、前方部前端中央が-6.8mであるのに対して、前方部西角で-9.4m、東角で-7.5mとなる。したがって、墳丘主軸から東西の前方部角までの距離は同一ではなく西側が長くなる。また前方部の平面形状も左右対称とはならない。西側ではなだらかにのびる前方部側縁の墳端線と前方部前端線が鋭角をなして交わるのに対し、東側側縁の墳端線は屈曲を示し、直角に近い角度で前端線と交わっている。

なお、前方部上面は前方部頂からわずかに下降したのち後円部斜面にそって上昇し、後円部頂の平坦面に接続している。こうした前方部から後円部に続くスロープの典型的な例は奈良県箸墓古墳に見られるが、岡山県備前車塚古墳、七つぐろ1号墳、浦間茶白山古墳なども同様の形態をとっており前期前半の前方後円墳の特徴とみなすことができる。

## 3 非対称をなす前方部

こうした左右非対称形の前方部をもつ前期古墳として、まず指摘できるのは箸墓古墳（白石

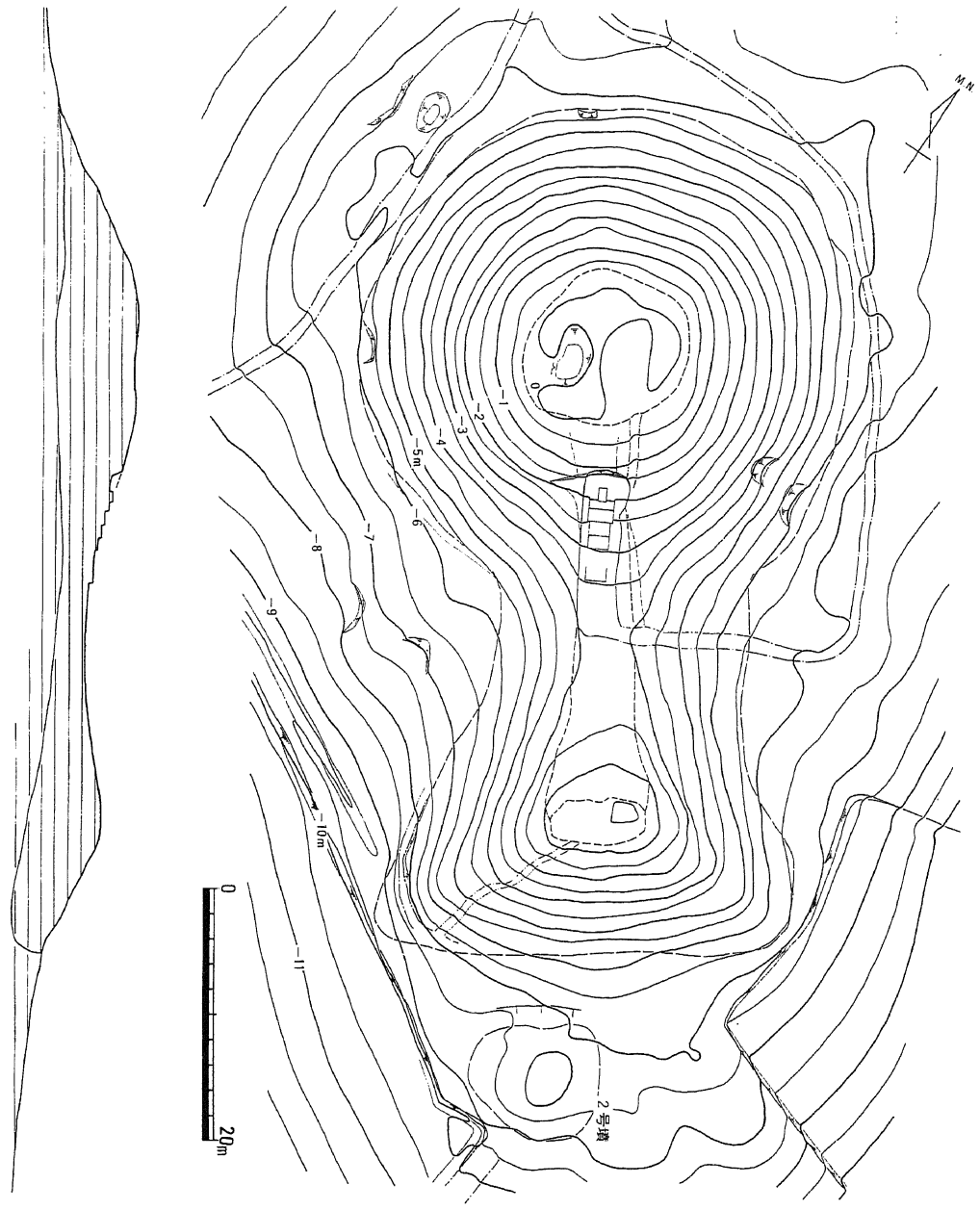


図1 穴甘山王山古墳墳丘測量図

・春成・杉山・奥田1984)である。箸墓古墳についてはこれまでさまざまな墳丘復原がなされてきたが、いずれの場合においても前方部は左右対称形に復原されており、前方部南側の屈曲は後世の削平とみなされているようである。たしかに前方部南側の裾部分は墳丘ぞいに通る道路によって削られている。しかしながら、それよりも上方の等高線に乱れはない。箸墓古墳の前方部がもと左右対称形であり、その一方が削られたのであれば、前方部の南側角部は大きな崖状を呈するはずであるが、そうした状況は認められず、また、あえて左右対称形をなしていたと考える必然性もない。箸墓古墳前方部南側も穴甘山王山古墳のそれと同様の形状をなしていたと考えて支障ないとする。

通常、前方後円墳や前方後方墳において流出や後世の改変をもっとも受けやすいのは前方部の両角部である。このため、発掘調査をおこなった場合も前方部角部まで遺存していることは少なく、ましてその部分に葺石が残っていることはきわめてまれである。したがって前期前半の前方後円墳の前方部の形状について検討をおこなうことは容易ではないが、こうした左右非対称で一方の側が台形状をなす前方部の例がこの2古墳のみであるのかどうか、いくつかの例をあげて検討をおこなってみる。

**備前車塚古墳** 全長48.3mの前方後方墳で、バチ形の前方部を西に向ける(近藤・鎌木1986)。前方部には二段の石垣状の葺石がめぐっており、葺石の遺存状態は良好である。穴甘山王山古墳とおなじく前方部は尾根斜面の等高線に斜交してひろがる。前方部南角部は若干流失しているが斜面下方に鋭角をなして伸びているのに対し、北角部は南角部よりも高い位置にあり、前方部北側墳端は北角部から数mの直線をなしてのち屈曲して、くびれ部に至る弧状の墳端線に移行する。また、南角部は北角部よりも前側に位置し、かつ、前方部前端と墳丘主軸の交点から角部までの距離は南側のほうが長い。

**鶴尾神社4号墳** 香川県高松市、石清尾山の尾根上に位置する全長約40mの前方後円墳で、積石塚である。後円部の竪穴式石室からは伝世鏡として知られる獣帯方格規矩四神鏡、碧玉製管玉などが出土しており、墳丘には底部穿孔のある壺形土器を伴っている。

墳丘東半部の遺存状態がよくないため前方部東角部の形状は明らかでないが、墳丘西半部では墳端の列石が検出されており、前方部西角部の形状を知ることができる。前方部西角では前端線からほぼ直角に長さ3.2mの直線部分がのび、そののち屈曲して、くびれ部に至るバチ形のカーブを描いている(渡部・藤井1983)。

**中山大塚古墳** 奈良県天理市に所在する全長120mの前方後円墳(東1981)。特殊器台形土器が出土しており、大和地域最古の古墳の一つと判断できる。バチ形に開く前方部をもつが前方部の前面には神社が所在しており、前方部前端はかなりの掘削を受けている。古墳の現状および墳丘測量図から判断すれば、前方部の西側墳端はゆるやかにひろがっていく状況を示すのに対して、東側の墳端は墳丘ぞいにめぐる水路の形状にも示されるように屈曲をみせており、この部分が屈曲部分となる可能性が強い。

これら以外にこの時期の古墳として京部府椿井大塚山古墳、岡山市七つぐろ1号墳、網浜茶臼山古墳などいくつかがあるが、いずれも前方部の遺存状況が良くなく、検討をおこなうことは困難であった<sup>1)</sup>。



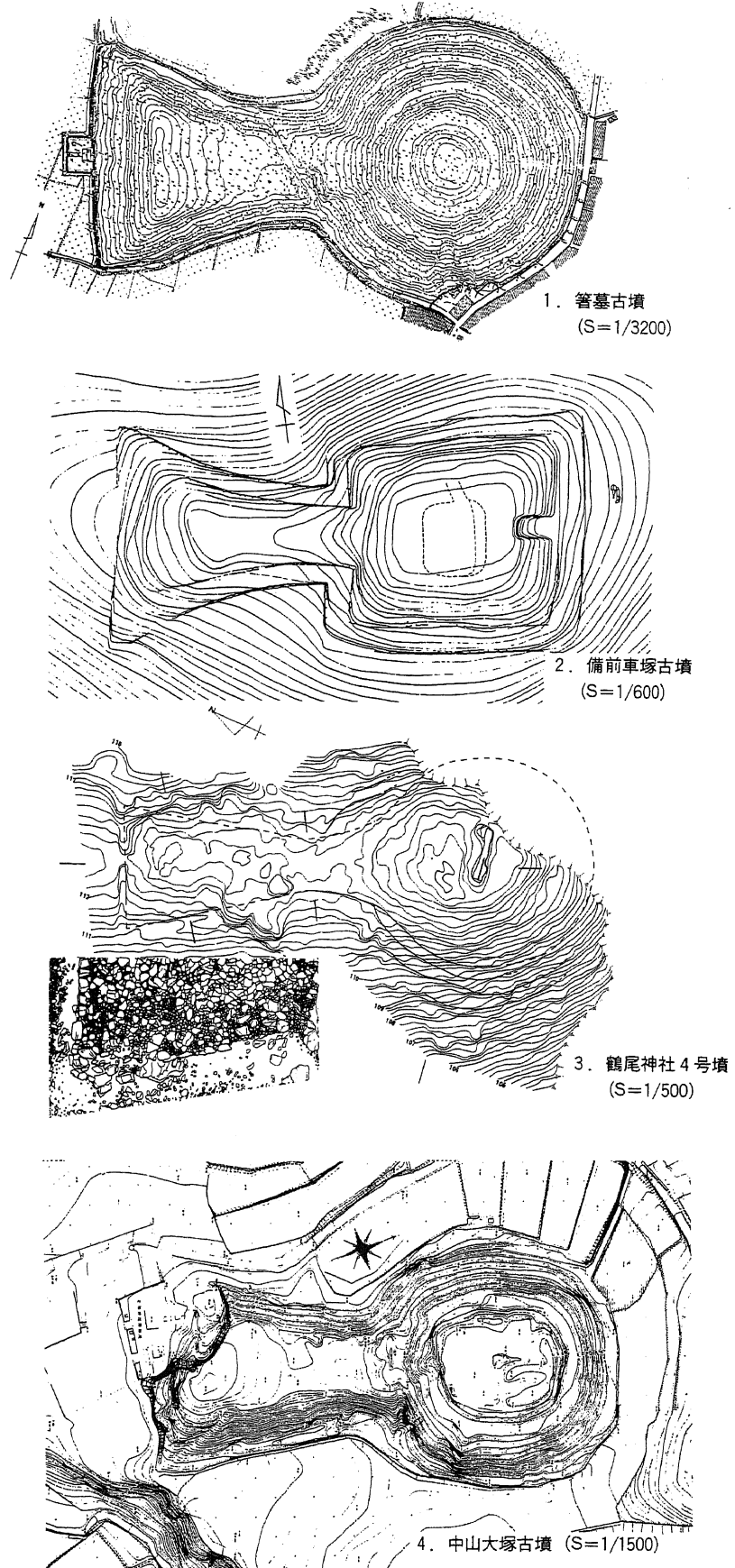


図2 前期古墳の前方部

類例は必ずしも多くはないが、宍甘山王山古墳や備前車塚古墳、鶴尾神社4号墳など遺存状態が良好な資料において高い頻度でその事例が認められることからみて、前期前半の前方後円墳・後方墳のうち、かなりが厳密な左右対称形とならず、一方の角が鋭角をなしもう一方の側が台形状になる前方部形状をとる可能性が強いと考える。

#### 4 前方部隅角の性格

この、前方部の非対称性についての評価は発掘調査例がほとんどないこともあり、容易に評価をおこないがたいが、2つの点を指摘することができる。まず第1は前方部の2つの角のうち、鋭角をなす側の方向についてである。宍甘山王山古墳では鋭角側、すなわち古墳の西側の平野部には雄町遺跡をはじめ多数の集落遺跡が形成されているのに対し、東側の平野部にはほとんど遺跡が分布しておらず、排水が阻害される地形からその付近の低位部の開田は遅れた可能性が強いとみられる。また、備前車塚古墳の場合は、鋭角をなす側は平野の方向である南側に向いており、墳丘の北側は、ただ山と谷がひろがるにすぎない。箸墓古墳の場合は纏向遺跡がひろがる北西の方向に鋭角をなす側が向いており、中山大塚古墳も前方部西角部が鋭角をなすと想定すれば、その方向は奈良盆地平野部の側である。このように、いずれの例においても前方部の鋭角をなす側は集落の側に位置しており、それは、いふなれば古墳の「正面」側に設定されていた可能性が強いと考えられ、前方部の2つの角部のうち鋭角をなす側にこそ意味があったと思われる。

もう1点は、鋭角をなす角部は大きな突出をなしているため、その古墳の墳丘のなかで最もゆるやかな斜面を作り出していることである。宍甘山王山古墳の場合、後円部が $24^{\circ}$ 、前方部側面が $28^{\circ}$ 、前方部前面が $27^{\circ}$ の斜面であるのに対し、前方部西角部は $20^{\circ}$ となっている。また、箸墓古墳を例にとっても後円部斜面が $30^{\circ}$ 、前方部側面が $26^{\circ}$ であるのに対し、前方部北西角部では $16^{\circ}$ となっている。

前方後円墳の前方部は、前方後円墳の成立に際して、弥生墳丘墓の突出部が転化して成立したものと考えられており（近藤1983）、都出比呂志氏はそれについて「突出部がそれ自体として独立化し、葬送祭祀の一過程において重要な役割を有する「方形壇」に転化したもの」と述べている（都出1979）。弥生墳丘墓の突出部が墓の内外をむすぶ通路から成立し、突出部が形式化し前方部に転化するという過程にもとづくならば、道としての機能は転化の段階で否定され、失われることになる。

たしかに前方部は基本的に方形壇としての性格を有するものと考えるが、ここに指摘したように、前期前半の前方後円墳においては前方部の一方の角が、明確に一定の方向を指向して鋭角的に突出する。この指向性、そしてそのゆるやかな角度という2点を重視するならば、前期前半の段階においては前方部から道としての機能は完全に除かれておらず、その一部分、すなわち前方部隅角部が、なおその機能を担っていた可能性を考えることができる。そして、古墳時代前期の次の段階ではこうした一方の角の突出は見られなくなり、また、基本的に前方部斜面に段がめぐらされるようになり、ここで完全に「壇」としての機能のみを表すようになると

考えられる。

註

- 1) 浦間茶臼山古墳の場合は前方部北側が屈曲の側となる可能性がある。また、椿井大塚山古墳の場合は南側に鋭角部をもつ前方部を想定することも可能である。

## 第3章 竪穴式石室の研究—使用石材の分析を中心に—

## 1 はじめに

近年、考古学の研究において、しばしば自然科学にもとづく分析が用いられ、その成果が援用されている。たとえば旧石器時代遺跡の研究は広域火山灰の研究成果を無視して語ることはできないであろうし、また、製鉄や青銅器の研究においても、自然科学的分析に負うところは少なくない。

考古学にとって自然科学の応用は、年代測定や古環境などに関するものから遺物等の材質の分析にかかわるものまで、非常に多岐にわたっている。このうち材質の分析に用いられる分野に限っても、遺物の多様さを反映して、岩石学、冶金学、植物学、生物学等々と、非常に多方面に及んでいる。

土器や石器の分析では、その性質上、岩石学がおもに用いられる。その主なものを取りあげれば、蛍光X線分析による石器石材の産地推定（鎌木ほか1984）、蛍光X線分析や放射化分析などによる土器胎土の分析とその産地推定（三辻1983）（三辻ほか1984）（小山1984）（清水1984）、土器胎土中に含有される岩石片の観察による産地推定（清水1973）（奥田尚1985a）、偏光顕微鏡観察や蛍光X線分析による石棺や竪穴式石室石材についての産地推定（逸見1974）（間壁ほか1974～1976）（奥田1985b）などがある。また、金属器では鉛同位体の分析による青銅器原料の産地推定（馬淵ほか1984）がある。

これらは、そのいずれもが産地の推定にとどまらず、同一産地資料の分布関係から、土器なり石器なりの生産と流通、それらの移動の背後にある社会的関係、政治的関係の解明をめざしている。

こうした自然科学的分析を用いることによって、考古学の手法のみでは検討が困難であったり、決着がつけがたい課題に対して大きな成果が出されつつあり、それは考古学にとって非常に魅力的なものとなっている。しかしながら、それらのなかには分析結果とこれまでの考古学の成果との対比検討が十分におこなわれていないものもないとは言えない。一方、多くの考古学の研究者にとっては、そうした点に十分な批判を加えることが困難であり、無批判にその成果を用いがちであることもまた、研究のいっそうの進展を遅れさせているといえよう。

さて、こうした自然科学的分析のうち岩石学による分析は、先に述べたように石器、土器、石棺、竪穴式石室石材等についておこなわれており、大きな成果をあげている。本章では吉備地域の資料を中心に、弥生墳丘墓、前期古墳の竪穴式石室石材について分析を行い、その変遷を検討する。観察はおもに偏光顕微鏡を用いてのものであるが、いくつかの資料についてはサンプルの採取がむずかしいため肉眼観察にとどめている。

なお、時期区分については川西宏幸氏による埴輪のV期編年（川西1978）を主に用いる。

## 2 研究の現状

### (1) 研究史・1960年代まで

前述のように石材に関する岩石学的検討は、分析方法・分析対象の両者ともきわめて多岐にわたっている。岩石学による分析を理解するうえでは、これらすべての分析の手法とその成果を具体的に提示することが有効であろうが、論が広範囲にわたりすぎるため、ここでは古墳の石室石材・石棺に関する分析に限って若干の整理をおこない、これまでの研究の成果を概観しておきたい。

古墳を構成する主要な材料は土と石であるが、その形状、大きさを容易に把握できるものであるため、石材についての関心は、古墳に対する科学的な研究の開始と同時に生じたとみられる。坪井正五郎氏は「足利古墳発掘報告」において横穴式石室の石材について述べ、使用石材が円礫と角礫であること、それらは異なる産状を示し、またその運搬・整形に多大な労力を費やしたであろうと述べている（坪井1888）。それ以降の報告で石材が記載された例は少ないが、たとえば1923年に梅原末治、森本六爾両氏によって発表された奈良県柳本大塚古墳の報告では竪穴式石室石材は「日向石（輝石安山岩）」と記されている（梅原・森本1923）。

1928年には、兵庫県会下山二本松古墳の竪穴式石室石材についての分析が行われる。どのような分析方法が用いられたかはあきらかでないが、用いられている石材は花崗岩・硝質輝石安山岩・石英斑岩の3種類であり、このうち、硝質輝石安山岩は兵庫県内では産出しないものであること、石英斑岩も古墳付近では産出しないものであることがあきらかにされた。そして、こうした石材の搬入について、それは「墳墓築造上の好尚ならびに古代の交通および地方豪族の権勢等を考察するに足る」ものであると述べられた（辰馬ほか1928）。

つづいて1938年には梅原末治氏によって岡山県鶴山丸山古墳の報告がなされる。氏は竪穴式石室石材については京都帝国大学理学部、村上政嗣氏に鑑定を依頼し、石材は石英粗面岩であるとの結果を得、その産出地が備前市三石付近である可能性を想定している（梅原1938）。

こうした竪穴式石室石材のありかたについて初めてまとまった検討をおこなったのは小林行雄氏である。氏は1934年に発表された「技術から見た古墳の様式」において竪穴式石室と横穴式石室の対比を行い、そのなかで石材の問題にふれ、会下山二本松古墳にみられる石材の遠隔地からの移入について、「此の石室形式（竪穴式石室・筆者）がかかる構造方法に適せる岩石産地の様式として先ず行はれた事を意味するであらう」と述べ、板状石材の産出地において竪穴式石室が成立したがために、竪穴式石室の伝播につれて、その構築材である石材も遠隔地に運ばれていったのではないかの解釈を提示した（小林1934）。その後、氏は「竪穴式石室構造考」を著し「石室の構築に扁平な割石を用いることが重要な特徴の1つであるために、もっとも多く使用している石材は板状節理を有する安山岩・石英粗面岩の類であり、砂岩・片岩の類がこれについている。（中略）はるばる数十キロの遠方の産石地から、かかる石材を運搬して構築の用にあてたことさえ」あったと述べ、さらに同一古墳においても、また、同一地域においても板状の割石を用いる石室とそうでない石室とが混在していることがあることを指摘し

た（小林1941）。

戦後、1950年代から60年代にかけて梅原末治氏、小林行雄氏ほか多くの研究者によっておこなわれた前期古墳の発掘調査により竪穴式石室石材に関する知見はさらに蓄積されてゆく。石室石材に安山岩<sup>1)</sup>が用いられていることが判明したものに大阪府松岳山古墳（小林1957）、奈良県大和天神山古墳（伊達ほか1963）、同小泉大塚古墳（伊達1966）<sup>2)</sup>などがあり、奈良県桜井茶臼山古墳では安山岩を主体とし石室上部のみ花崗岩が用いられていることがあきらかになった（上田・中村1961）。

その産地に関しては松岳山古墳の場合は奈良・大阪府県境の二上山芝山付近の大和川川床と推定され、桜井茶臼山古墳、大和天神山古墳の石材は二上山のものと述べられている。松岳山古墳から大和川までの距離は比較的短い、桜井茶臼山古墳などの所在する奈良盆地東南部から二上山までは直線距離にして約18kmを測る。

また、奈良県室大墓古墳（秋山・網干1959）、大阪府紫金山古墳（小林1962）、同茨城将軍山古墳（小林1956）（堅田1968）では結晶片岩割石が使用されており、そのうち紫金山古墳、茨城将軍山古墳の石材については和歌山県紀の川流域から約100kmの距離を運搬されて用いられたことがあきらかにされた。

このほか福岡県一貴山銚子塚古墳（小林1952）、岡山県金蔵山古墳（鎌木・西谷1959）、大阪府池田茶臼山古墳（堅田1964）、京都府元稲荷古墳（西谷1965）、静岡県三池平古墳（内藤・大塚編1961）などの調査においても竪穴式石室の石材について注意がはらわれ、それらが数kmから10数km離れた産出地から運搬されたものであることがあきらかにされている。

このように、前期・中期古墳の調査がすすめられるなかで石室の構築に用いられる石材についての資料が増加し、その結果、先にふれた小林行雄氏の指摘、すなわち安山岩や結晶片岩など板状節理が発達した岩石が主に用いられていること、それらには非常な遠隔地から搬入されているものがあるということが、より一層明瞭となったといえる。

そして、大塚初重氏はこうした石室石材の問題にふれ、「I期の竪穴式石室の築造に際しては、構築に容易であった板状の安山岩系統の石が選択された。それは竪穴式石室の1つの規制として板状の石の使用がのぞまれていたのではないか」（大塚1966）とその解釈を示した。

また、岡山県総社市こうもり塚古墳、岡山市牟佐大塚古墳など吉備南部の後期古墳の石棺石材については、それを人造石とみる意見すらあったが、1937年に宗田克巳氏によって岡山県西部、井原市に産出する波形石（貝殻石灰岩）であることが指摘（宗田1937）された。そして、佐上静夫氏は石棺石材が古墳まで数十kmの距離を運搬されていることについて「運搬に支障なく作業が行なわれるほどまとまった広い政治圏が確立していた」（佐上1955）と、石材の長距離運搬についての評価を示した。

## (2) 1970年代以降

1960年代までの研究が、おもに古墳の発掘調査に随伴して、あるいはその副次的な問題として扱われていたのに対し、1970年代以降、石材そのものの分析からそれぞれの古墳を検討することをめざした研究が開始される。以下、そのうちのいくつかを取り上げてみる。

間壁忠彦・間壁葎子両氏は中・四国、近畿地方の石棺、竪穴式石室天井石について、蛍光X

線分析を用いた検討をおこなった。それまで石棺等の石材については凝灰岩等として一括され、細かく検討されることがなかったが、その分析によってきわめて多くのことがあきらかになった（間壁・間壁ほか1974～1976）（間壁・間壁1981）。すなわち、在地の石材を用いて作られている石棺もまれに見られるが、多くは遠隔地から搬入されたものであり、その動態はきわめて複雑であることが知られるに至った。割竹形石棺・舟形石棺が讃岐鷲の山石・同火山石・九州阿蘇溶岩で、長持形石棺がおもに播磨竜山石、家形石棺がおもに竜山石と二上山の石材で作られており、それらは各時期においてそれぞれ複雑な搬入関係を示していることが判明した。そして、そうした事象の分析から、両氏は古墳間、地域間の関係についての考察をおこなう。

一方、竪穴式石室の石材については北山惇氏、奥田尚氏、清水宗昭・高橋徹両氏（清水・高橋1982）などによって検討がなされている。

北山惇氏は東播磨地域の竪穴式石室石材の分析を行い、不定形扁平な石材を用いるものと、節理の発達した板状石材を用いるものがあることを述べ、それは被葬者の畿内勢力に対する政治的関係の差を示すものと捉えた（北山1978）。

また、奥田尚氏は畿内の竪穴式石室・石棺の石材について偏光顕微鏡観察・肉眼観察による検討をおこない、使用石材の変遷をあきらかにしている。このうち竪穴式石室の石材については、それぞれの古墳の石材の産出地の推定をおこない、それをもとにⅠ類型・二上山芝山南辺の石材を用いる古墳、Ⅱ類型・同芝山北辺の石材を用いる古墳、Ⅲ類型・寺山火山岩、亀の瀬東方、紀の川流域などの石材を用いる古墳という区分を設定し、この区分が時間的変遷をたどるとした（奥田1985b）。しかしながらこの類型差が時間的關係に置き換えうるかどうかはまだ検討の余地があるとみられる。

### (3) 研究の動向

このように、これまでの研究をふりかえってみれば、それは竪穴式石室石材の特異性の認識にはじまり、小林行雄氏による、その特性の把握と評価に至る。しかしながら、それ以降まとまった論考はなされず、個別の古墳の調査にさいしての検討にとどまっていた。そして、近年にいたって、石棺の動態の解明、石室石材の地域的な分析など、石材そのものを対象とした研究が活発に行われるようになったとすることができる。

## 3 中部瀬戸内沿岸部の地質

資料の提示・分析に先立ち、まず岡山県南部・香川県北部の地質について述べておく。

### a 岡山県南部

岡山県南部には吉井川、旭川、高梁川の3大河川と中小の河川によって形成された沖積平野がひろがっているが、そうした沖積平野の間には大小さまざまな丘陵、山塊が交錯して所在する。こうした丘陵や山塊は吉備高原の南端が分断・埋積されて形づくられたものであるが、その組成は単純ではない。

この地域の基盤となる岩石は砂質岩、泥質岩、およびその互層などであり、岡山市北部、吉井川西岸、児島などに分布しているが、多くは花崗岩類によってホルンフェルス化している。

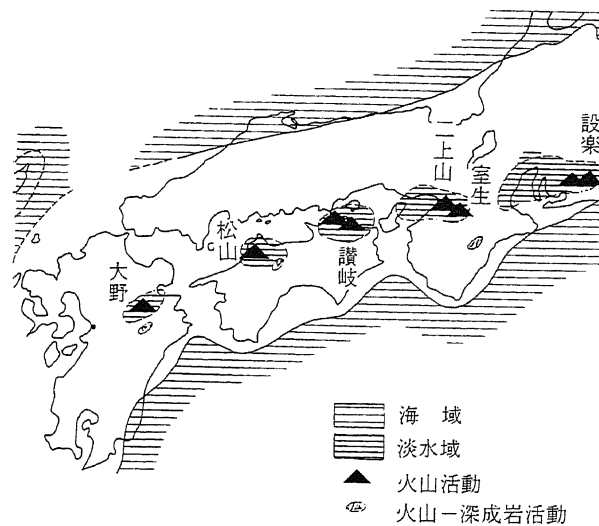


図1 第1瀬戸内期の古地理と火山活動

また、それらに貫入する夜久野侵入岩類と呼ばれる変輝緑岩などもみられる。中生代には吉井川下流域から兵庫県西部にかけての地域に流紋岩質火砕岩が噴出し、吉井川以西では花崗岩、石英閃緑岩が広く分布している。とくに花崗岩類は県南部で最も普遍的な岩石といえる。さらに洪積世には山砂利層が吉備高原から県南部にかけて形成されており、岡山平野付近の丘陵上に部分的にみられる（光野1977）（光野ほか1980・1982）。

#### b 香川県北部

広大な讃岐平野も中小の河川の沖積作用によって形成されたものであるが、そのなかに所在する丘陵は、基盤岩である花崗岩からなるものと溶岩からなるものがある。花崗岩は岡山県南部のものと同じく中生代末に形成されたもので、讃岐平野の丘陵のみならず瀬戸内の島々の多くもそれによって形づくられている。また、瀬戸内の島嶼部では広域変成作用によって片岩や片麻岩が生じており、それらは領家変成岩類と呼ばれている。

讃岐平野における火山活動の例として一般によく知られているのは屋島の溶岩台地であるが、これ以外にも火山活動によって形成された丘陵、山塊が香川県下に広く分布している。その主なものをあげれば屋島、石清尾山、五色台（国分台など）、城山、紫雲出山、小豆島、豊島などであり、讃岐平野北部から瀬戸内島嶼部にかけて散在している。これらはいずれも新生代第3紀中新世の火山活動によるものであり、これと一連の火山活動によって奈良・大阪府県境の二上山なども形成されている。こうした火山の岩相はかならずしも一様ではないが、概括的に述べれば花崗岩類を基盤とし、凝灰岩・凝灰角礫岩の上に古銅輝石安山岩を主体とする溶岩（瀬戸内火山岩類）が噴出している。これら古銅輝石安山岩のうち黒色ガラス質のものがサヌカイトであり、火山や鷲の山の凝灰岩は石棺石材に用いられていることが知られている（坂東ほか1979）（松本1984）。



#### 4 弥生墳丘墓の竪穴式石室

##### (1) 弥生墳丘墓の竪穴式石室の問題点

前期古墳の主要な特徴の1つとして、長大な竪穴式石室を有することがあげられる。前期古墳の竪穴式石室に関しては改めて述べるまでもなく、小林行雄氏（小林1941）をはじめとして、北野耕平（北野1964）、堅田直（堅田1968・1964）、嶋田暁（嶋田1967）、田中勝弘（田中1973）、山本三郎（山本1980）、都出比呂志（都出1979・1981・1986）などの各氏によって石室基底部の構造を中心に検討、分析がなされている。

これら前期古墳の竪穴式石室と弥生時代墳丘墓の竪穴式石室との関係については、後者の資料がきわめて少ないため細部にわたる検討は行われていないが、古墳時代の開始をどこにもとめるかという議論においてしばしばとりあげられ、2つの評価が示されている。

すなわち、兵庫県西条52号墓（西条古墳群発掘調査団1964）、岡山県黒宮大塚遺跡（間壁ほか1977）、同宮山遺跡（高橋・鎌木・近藤1986）などの竪穴式石室について、それらを弥生墳丘墓とする近藤義郎氏は、それらの竪穴式石室には長さが3mを大きく越えるものがみられないのに対し、前期古墳の竪穴式石室は長さ4～8mという長大な棺を納めるものであることを指摘し、それらは前期古墳の竪穴式石室の祖形とみなされるとする（近藤1983・1986）。それに対し、間壁忠彦・間壁葎子、石野博信氏らは、こうした竪穴式石室がそれまでの弥生時代の埋葬にみられなかったものであることを重視して、竪穴式石室の出現を古墳の指標の1つとし、これらを古墳に含めている（間壁・間壁1977）（石野1983）。

もとより、こうした古墳の出現についての見解は、それぞれ、竪穴式石室のほかに墳形、副葬品、埴輪・土器などの分析、さらに古墳・古墳時代についての評価など、多方面にわたる研究から導き出されたものであり、単に竪穴式石室のみをとりあげてその位置付けの差を指摘しても適切さを欠くであろうが、評価において大きく見解が分かれるものの1つである。

##### (2) 石室の諸例

弥生時代の墳墓は西日本を中心に関東、北陸など広い範囲に分布することが知られているが、方形周溝墓を除外すれば、その数はかならずしも多くない。それらの主体部は墓壙に木棺を納めたものであることが多く、ほかに土壙墓、箱式石棺、土器棺などがある。これら以外に木槨、礫槨、竪穴式石室など木棺を収める施設をもつものがあるが、その数は非常に限られている。

弥生時代の竪穴式石室の例としては、兵庫県西条52号墓、岡山県都月坂2号墓（近藤・春成1966）、さくら山方形台状墓（神原1973）、鯉喰神社墳丘墓（近藤1980）、宮山墳丘墓、鋳物師谷1号墓（春成ほか1969）、同2号墓（小野ほか1977）、黒宮大塚墳丘墓、金敷寺裏山墳丘墓（間壁・間壁1968）、香川県奥10・11号墓（古瀬1985）、徳島県萩原1号墓（菅原ほか1983）などがある。このほか弥生墳丘墓の可能性が強いとみられるものに岡山県楯津古墳（鎌木ほか1978）があり、最近調査がなされた岡山県雲山鳥打1号墓では木槨のほかに竪穴式石室にきわめて近似した構造の礫槨が検出されている（近藤1986）。

こうした竪穴式石室の諸例は、弥生墳丘墓の調査が他地域にくらべて進展していることによ

遺跡名	石室長cm (上面長)	石室幅cm (上面幅)	石室高 cm	床面の形状および施設	石室 蓋	頭位 (主軸)	墓 m	副葬品	他の埋葬との関係	その他
黒宮大塚墳丘墓	220	東-90 西-80	70	ゆるいU字形、円礫敷き	木	東北東		硬玉勾玉1、碧玉管玉1	二次埋葬、墳頂部北西に位置	石室上に供献土器
鶴物師谷2号墓 F主体	220	80	70	平坦、枕石	板石	北	長5、幅4	なし	他に竪穴式石室 木棺	
同 N主体	規模はF主体とほぼ同じ(未調査)				板石	(東北東- 西南西)	幅2.5	玉類、鉄刀	同上	
同 L主体	規模はF主体とほぼ同じ(ク)				板石	(北東-南西)		碧玉、鉄鏃、鉄斧	同上	
鶴物師谷1号墳 A主体	約290	東-97 西-91	90~85	平坦、円礫敷き	板石	東	幅3.1	飛鳥鏡1、硬玉勾玉4 碧玉管玉38、小玉665	中心埋葬、他に竪穴式石室、木棺、箱式石棺跡	床面に木棺側部下端痕
同 B主体	規模はA主体に類似(未調査)					(東西)		不明	他に竪穴式石室、木棺、箱式石棺	
郡月坂2号墓	265	90	68	平坦、円礫敷き	板石	(北東-南西)	長4.65 幅3.7	なし	中心埋葬、他に木棺12	石室内に棺押さえの板石4枚
金敷寺裏山墳丘墓	260	90	70	ゆるいU字形、長さ2.1m、幅0.3mの石組み、石敷き	板石	北	長4.1 幅2.4	なし	中心埋葬	
宮山墳丘墓	270	100		平坦、円礫敷き	木	(東西)		飛鳥鏡1、ガラス小玉1、鉄刀1、鉄剣1、鉄鏃3、銅鏃1	中心埋葬	
さくら山方形台状墓	192	35	38以上	平坦		北西-東南		なし	周溝内埋葬	
橋津墳丘墓	270	120	110	平坦、石敷き	板石		径約6	硬玉勾玉1、碧玉管玉4	中心埋葬	
香川奥10号墓	210 (330)	90 (200~190)	65	平坦	木	(東西)			中心からやや南による北側に壺棺	石室上に供献土器
奥11号墓1号石室	220 (290)	60~50 (150~140)	60	平坦、石敷き	木	(東西)			他に土塚墓、壺棺、竪穴式石室	石室流入土中に供献土器
奥11号墳2号石室	140 (230)	40~35 (120~100)	45	U字形	木	(東西)			同上	
徳島萩原1号墓	4 m以上	125	不明	平坦	木の可能性	(東西)		画文帯神獸鏡1、碧玉管玉4、鉄器片	中心埋葬、他に壺棺2	石室上に供献土器、白色円礫
兵庫西条52号墓	350	140	90	礫敷き、床面両側に列石	木			鉄剣、石室埋土中に内行花文鏃	中心埋葬、他に壺棺5	

表1 弥生墳丘墓竪穴式石室の規模

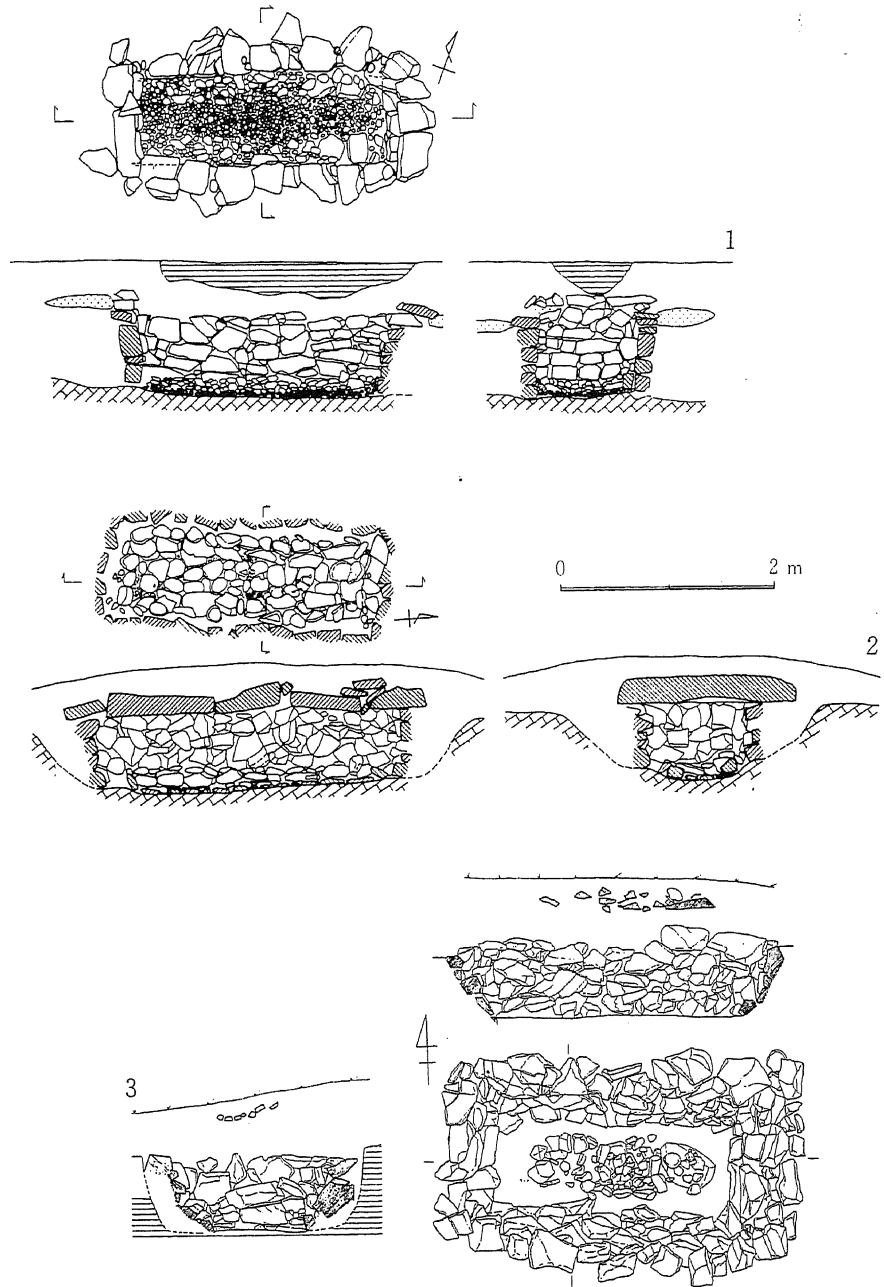


図2 弥生墳丘墓の竪穴式石室 (S=1/80)

1. 黒宮大塚墳丘墓
2. 金敷寺裏山墳丘墓
3. 奥10号墓

るかもしれないが、現在の資料に基づけば吉備南部地域を中心に中部瀬戸内地域に分布を示している。また、時期的には第1型式・立坂型の特殊器台形土器を伴う黒宮大塚墳丘墓例を最古とし、古墳時代直前の宮山墳丘墓まで連続して、つづく古墳時代の竪穴式石室に移行するとみられる。なお、竪穴式石室が木槨・排水溝・大規模な墳丘などとともに特殊器台形土器の最古型式の時期に出現することは、それを古墳時代の開始とみなす見解は措くとしても、きわめて重要な問題である。

これらの竪穴式石室をもつ墳丘墓は、吉備の例でみる限り、黒宮大塚墳丘墓、鯉喰神社墳丘墓など、それぞれの時期において最大級の墳丘規模をもつものを筆頭に、比較的大形の卓越した規模の墳丘墓にみられることが多い。ただし、その場合かならずしも中心埋葬にのみ用いられるわけではなく、黒宮大塚墳丘墓例のように中心埋葬以外の埋葬に用いる例もある。

ここではまず、弥生墳丘墓の竪穴式石室の特色を理解するため、いくつかの要素について前期古墳の竪穴式石室との対比を行っておく。

### (3) 石室の特色

**規模** 前期古墳の割竹形木槨と弥生墳丘墓の木槨を比較した場合、前者は長さ4～6mが一般的であるのに対し、後者は長いものでも3mを越える例は知られていないことが指摘されている。表1には弥生墳丘墓の竪穴式石室の規模を示したが、長さ2.2～2.7m、幅90cm付近にその大部分が収まっている。このまとまりから突出するものに萩原1号墓例があるが、本例は時期的にも弥生最終末であり、地域的には古墳出現前夜に棺が長大化する可能性も考えられる。また、石室高も70cm付近に集中を示しており、おそらくは木槨を納めることができる高さと思われる、前期初頭の古墳でしばしば見られる、棺の上方になお大きな空間をもつと想定されるものはみられない。

**形態** 弥生時代の竪穴式石室については石野博信氏の分類（氏は古墳時代とする）がある。氏は竪穴式石室を、

A型—割石小口積みで、壁はほぼ垂直に積むもの

（都月坂2号墓、黒宮大塚墳丘墓など）

B型—河原石積みで、壁面は外傾するもの

（西条52号墓など）

の2者に分類を行っている（石野1983）。しかしながら、香川県奥10・11号墓の石室は西条52号墓のものと同じく壁面は強く外傾するものの、使用石材は角礫であり、壁面の傾斜と使用石材を関連させて考えることは困難である。ただし、石室壁面の傾斜の差に限れば、A—壁面が垂直に近いもの、B—壁面が外傾するもの、という区分はなお可能であり、現在知られる資料によれば、A型式の石室は吉備に多く、B型式は播磨、讃岐などに分布を示すことができる。

しかし、弥生墳丘墓の竪穴式石室はこのように2型式に区分しうるとはいえ、前期古墳の竪穴式石室と比較した場合、それとの間に大きな差異を見出すことができる。壁面がほぼ垂直に積まれるとされるA型の石室も、それはほぼ垂直であるかやや外傾を示すものであり、内傾するものは知られていない。石室によっては長側の壁面が内傾を示すかに見えるものがあるが、

それらにおいても小口側は外傾を示しており、長側の壁面は土圧によって変形したものと判断される。

したがって、B型とA型の違いは外傾の程度の差にすぎないことはあきらかで、弥生墳丘墓の竪穴式石室で壁面が内傾するものは知られていないことをその特色として指摘できる。前期古墳の竪穴式石室はほとんどが強い内傾を示しており石室構築後に棺を納めることが不可能であることはよく知られている。前期古墳の場合、墓壇底に棺台を作り、壁体下部を築いた後に割竹形木棺を納め、その後さらに壁体を積んで石室を完成するのが基本的な手法である。それに対して、弥生墳丘墓の石室では使用する石材が板状の角礫であれ円礫であれ、いずれも壁面が外傾を示していることは、石室構築の過程における棺の設置時期が前期古墳の場合とは異なり、石室壁体の完成後に棺が納められることを示すと思われる。

弥生墳丘墓の竪穴式石室のうち底面の形状から納置された木棺の形状を推定できるものは12例あり、そのうち石室底面が曲面を示し割竹形木棺の存在が想定されるものが3例ある。残り9例は組合式木棺が使用されたと考えられるが、檜津「古墳」、奥10号墓、同11号墓1号石室など、その大部分では石室底面に木棺下端を埋め込んでおらず<sup>3)</sup>、また、石室内に木棺側面を押さえるための配石も見られないことからみて、組合式木棺とはいえ、一般の木棺墓に見られる墓壇埋土によって棺材の固定がなされるものとは異なり、部材の結合度の高いものであった<sup>4)</sup>可能性がある。

一般の木棺墓にくらべて弥生墳丘墓の竪穴式石室に高い頻度で割竹形木棺が見られるのは、それが石室の空間のなかでそれ自体で形を保持しうるものであったこと、また、そのため移動が可能であり、石室壁体の構築後に納入することが容易であったことによるとと思われる。

**構築** 壁面の傾斜の問題と関連するが、石室に控え積みがほとんど見られないことを指摘できる。前期古墳の場合、石室の壁体はその断面が下部で外方に広がる控え積みをもち、場合によっては、さらにその背後に砂利や礫を交えた土を充填している。それに対して弥生墳丘墓の場合はそうしたものが全く見られず、裏込めの土にもたせかけるように、あるいは墓壇いっばいに築かれており、控え積みはほとんどの場合見られない。そのため前述のように、垂直に近い角度で築かれた石室では、土圧のため壁面が変形していることが多い。

**墓壇** 前期古墳の石室をおさめる墓壇は盛土上部から掘り込まれていることが多く、その規模の大小を問わず、平面形が矩形ないし小判形をなし、深いもの場合は段掘りをなすが、その勾配はきわめて急角度である。

それ以外に兵庫県養久山1号墳（近藤ほか1985）のように墳丘築成前の地山面に墓壇が掘りこまれるものや、福岡県神蔵古墳（木下ほか1978）のように盛土によって墓壇が作りだされるもの、さらには徳島県曾我氏神社1・2号墳（天羽・岡山1981）のように墓壇をほとんどもたないものなどがあるが、それらは北部九州や東日本に多く、吉備や畿内の前期古墳においては墳丘築成がおよそ終了した段階において墓壇が掘り込まれるのが一般的であったとみられる。

それに対して、弥生墳丘墓の場合は小墳丘であるためわかりにくいことが多いが、第1次埋葬の墓壇は、地山面ないし若干の盛土を行なった面から掘り込まれており、墳丘築成のかなり初期、ないしは墳丘の築成開始に先立って墓壇の掘削がなされている。鑄物師谷1号墓（図4

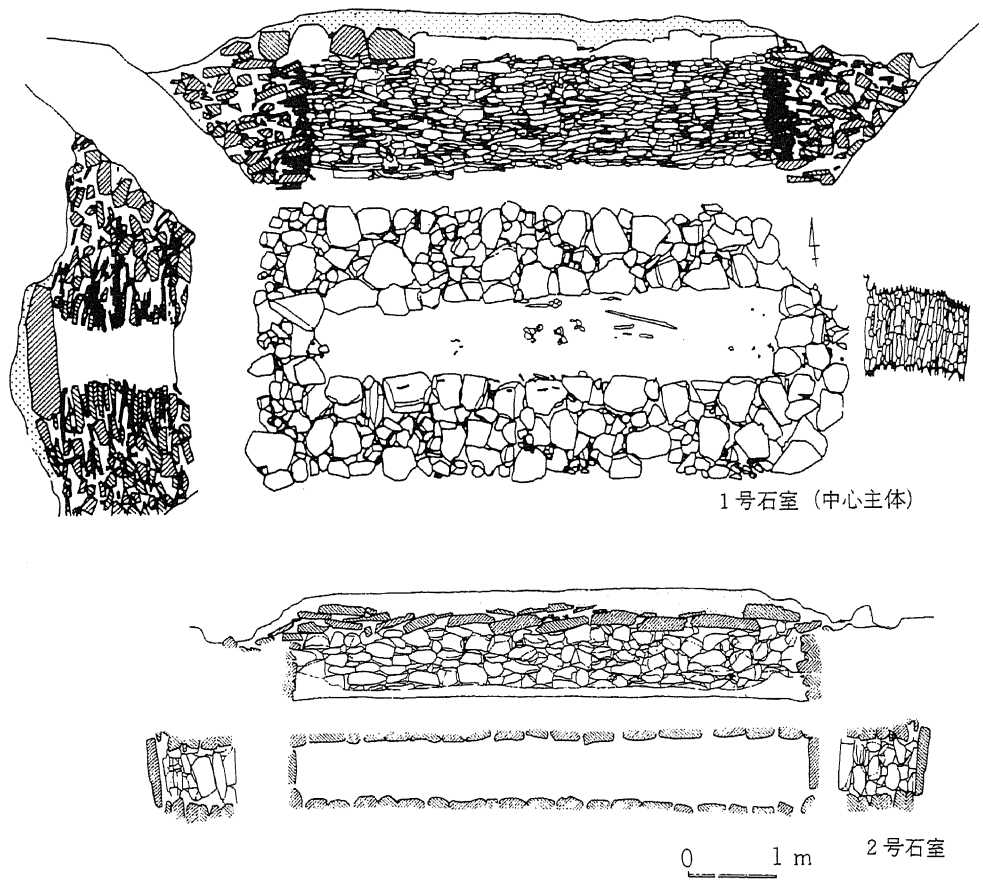


図3 前期古墳の竪穴式石室  
香川県高松茶臼山古墳 (S=1/100)

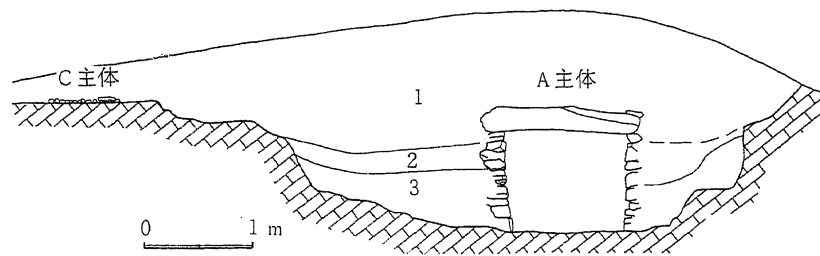


図4 鑄物師谷1号墓墳丘断面 (S=1/80)  
(墳墓が石室主軸に対して斜めに切断を受けているため、  
図では墓壙は左右非対称となる)

）では墓壙は地山面から、香川県奥10号墓（図2-3）では最下層の盛土から掘り込まれている。また、墓壙壁の角度はゆるやかなものが多く、そのため墓壙の平面規模は石室規模に対してきわめて大きなものとなっており、その平面形が不整形な例もみられる。

**蓋** 上記以外に石室の蓋がしばしば木製である点を指摘できる。黒宮大塚墳丘墓、宮山墳丘墓、奥10・11号墓などがその例であり、木蓋の腐朽に伴って、石室上に供献された土器が落ち込んでいることが多い。板石の使用が定式化し、木蓋の使用は非常に例外的である前期古墳とは異なると言える。

なお、埋葬頭位の問題は弥生時代の墳墓全体のなかで検討しなければならないが、表1に示した事例では頭位北のものが2例に対し、頭位東あるいは東西主軸をもつものが10例あり、東頭位が卓越する可能性が考えられる。

以上の諸点を取りまとめてみれば、弥生墳丘墓の竪穴式石室は墳丘築成に先立って、ないしはそのかなり早い段階において構築され、石室が完成して後に棺が納められ、その後に墳丘が完成されるものとすることができる。それに対して前期古墳では墳丘がほぼ完成した段階において墓壙の掘削がなされ、棺の納置後に石室が完成し、墳丘が完成されている。前期古墳のうち、たとえばここでふれた兵庫県養久山1号墳では墓壙は地山面から掘り込まれている点では弥生墳丘墓と同様な手法を用いるとすることができるが、他の点はすべて前期古墳と変わるところがなく、その石室は強く内傾するものであり、部分的に古い手法を示すものとして理解できる。したがって、ひとくちに竪穴式石室として一括されてはいるが、弥生墳丘墓と前期古墳では構造をはじめいくつもの点で差異がみられ、それは、それぞれの竪穴式石室の性格、葬送儀礼上の位置付けが異なるものであったことを示していると思われる。

#### (4) 弥生墳丘墓竪穴式石室の石材

弥生墳丘墓の竪穴式石室の調査例はきわめて少なく、石材にふれているものはさらに少ない。そのため、石室が現存しており筆者が確認できた資料を中心に、弥生墳丘墓の竪穴式石室に用いられている石材について述べる。

観察が可能であった石室は黒宮大塚墳丘墓、宮山墳丘墓であり、それ以外に雲山鳥打墳丘墓の石材についても検討することができた。いずれの資料においても角礫、亜角礫、亜円礫など、自然礫が用いられており、割り石の使用量は少ない。

#### 黒宮大塚墳丘墓（図2-1）

長さ約35m、幅約28m、高さ約5mの長方形墳丘墓で、第1型式・立坂型の特殊器台を伴う。墳頂平坦面の北西部分で長さ2.2m、幅90～80cm、深さ70cmの竪穴式石室が検出されている。石室石材は花崗岩、流紋岩類であり、床面には円礫が敷かれている。当墳丘墓が立地する小丘陵および背後の山々は花崗岩類からなっており、花崗岩の角礫を付近で採取するのは容易であったと思われる。それに対して、流紋岩類は小田川が形成した沖積平野を挟んで南側に位置する山塊を構成するものであり、そこから運ばれた可能性がある。

#### 宮山墳丘墓

円丘部の一方に低い突出部をもつ墳丘墓で、全長約38m、円丘部径約21m、高さ約3mを測る。第4型式・宮山型の特殊器台を伴い、円丘部中央には長さ2.7m、幅1mの竪穴式石室が所

在する。

石室石材は花崗岩の角礫と大形の円礫である。当墳丘墓が立地する丘陵は花崗岩からなっており、現在でも近くの尾根において花崗岩の露頭やそれらが崩落したものを見ることができ、花崗岩の角礫は付近で採取されたものである可能性が強い。それに対して円礫はかなり大形で、またその種類もさまざまであり、その採取地は高梁川の氾濫原であったと思われる。当時、高梁川の分流が墳丘墓北側の総社平野のなかを東流していたと考えられており、たとえば総社平野中央部に位置する真壁遺跡においては遺跡に接して円礫の膨大な堆積が検出されているが<sup>5)</sup>、そうした場所で採取されたものと思われる。

このように、宮山墳丘墓の石室はその採取地・形状ともに全く異なった2種類の石材によって構築されている。これと同様な石材の使用をしめすものに榑津「古墳」の石室がある。

#### 榑津「古墳」

榑津「古墳」は岡山市榑津の丘陵先端に所在し、径10数mの墳丘をもち、長さ2.7m、幅1.2m、高さ1.1mの竪穴式石室を内部主体とする。石室内からは勾玉1、管玉4点が出土している。土器が出土しておらず弥生墳丘墓とみなす根拠に乏しいため、報告では一応「四世紀を降らぬ古墳」とされているが、その石室・墓壙は先に述べた弥生墳丘墓の竪穴式石室・墓壙の特徴をすべてそなえており、他方、あえて前期古墳とする根拠がないことからみて、弥生墳丘墓と考えてよいであろう。土器の出土を見なかったのは、工事によって墳丘のかなりの部分が失われており、かつ、それ以前にかなりの削平を受けていたためと思われる。本墳丘墓石室の石材についての細かい記載はないが、角礫状の割石と円礫が用いられていることが記されており、2種類以上の石材、おそらくは異なる産出地の石材によって築かれているものと思われる。

#### 雲山鳥打1号墓

東西20m、南北15mの長方形の墳丘をもち、第1型式の特殊器台を伴う。1983年から3回にわたり岡山大学考古学研究室により発掘調査がなされ、墳頂部からは3基の埋葬施設が検出された。第1主体は配石をともなう木槨、第2主体は礫を多量に配する木棺墓、第3主体は木槨である。

使用されている石材は基本的には石英閃緑岩が風化して生じた30～15cm大の礫であるが、それらに混じって量は多くないが砂質岩ないし泥質岩の角礫が見られる。当墳丘墓の所在する丘陵は風化の進んだ石英閃緑岩が基盤となっており、石英閃緑岩の風化礫はこの丘陵内において採取されたものとみてよい。それに対して砂質岩・泥質岩の最も近い産出地は、足守川によって形成された沖積平野を挟んで対岸にあたる吉備中山付近から東にかけての丘陵であり、その付近から運搬されたものと考えられる。

以上のように弥生墳丘墓の竪穴式石室に用いられた石材はきわめて特色のある組成を示していると言える。その最大の特色は複数の産出地からもたらされた石材を混在させて石室を築いていることである<sup>6)</sup>。多くの場合、墳丘墓付近において採取した石材をおもに用い、遠隔地から運ばれた石材がそれに混ぜられている。しかし、石材の使用状況をみるかぎり、こうした石材の混用が石室構築において有効性をもっていただとは考えにくい。たとえば、宮山墳丘墓や榑津墳丘墓においてみられる角礫と円礫の混用は、小規模な石室であればともかく、高さが1m



ちかい石室ともなれば壁面に空隙を増すだけであり、どちらか一方のみの使用のほうが頑丈な石室を構築できると思われる。また、雲山鳥打1号墓での使用のあり方をみても、遠隔地から持ち運ばれた石材が他と区別されて使用されるという状況は認められない。

つまり、その石材の形態、堅牢性、色調、加工の容易さなど、なんらかの特性が必要とされたために、遠くの産出地から運び込まれたものとは考えがたい状況である。運び込まれた石材の多くは砂質岩ないし泥質岩、流紋岩類、円礫などであるため、その産出地を限定することが困難であるけれども、その岩石の分布域のうちそれぞれの墳丘墓にもっとも近いところから運ばれたとすれば、その距離は数kmであり、それを著しく上回るものはない。また、それらの場所はいずれの例も墳丘墓の位置する水系内の丘陵、谷や川である。

したがって、これらの石材はそれぞれの墳丘墓の造営に動員された集団のうちのあるものが運び込んだと考えるのが妥当である。そして、これらの石材が運搬という労力の投下を必要とするだけの特性をもっていないことからみて、石材の搬入は形式的な側面が強いものであったと考えられる。墳丘墓の造営にあたっては被葬者の配下の集団がさまざまなかたちで動員されたであろうが、それらが労働力のほか、石材そのものの提供をおこなった可能性が考えられる。

## 5 前期古墳の竪穴式石室石材

吉備地域南部では中小の河川によって形成された沖積平野を望む丘陵上に多数の古墳が築造されており、前方後円墳だけでも100基以上が知られている。それらのうち、発掘調査がなされ全容が把握された前期古墳は小規模墳を除けば備前車塚古墳（鎌木1962）（鎌木・近藤1968）（近藤・鎌木1986）、都月坂1号墳（近藤・春成1967）、七つぐろ古墳群（宇垣1982）（近藤・宇垣1985）、用木古墳群（神原1975）などのほか数基にすぎず、その規模すら明確でないものも少なくない。そのため、編年上の位置づけが明確さを欠くものが少なからずあり、ここでは発掘調査や盗掘によって知られた副葬品のほか、墳形、埴輪等によって時期を判断した。

石材の検討をおこなったのは瀬戸内市牛窓天神山古墳、黒島古墳、築山古墳、（牛文茶臼山古墳）、備前市鶴山丸山古墳、岡山市直山古墳、赤磐市武宮古墳、小山古墳、朱千駄古墳、岡山市茶の子山古墳、浦間茶臼山古墳、岡山市遺跡地図8-45号墳、金蔵山古墳、操山109号墳、網浜茶臼山古墳、宍甘山王山古墳、備前車塚古墳、一本松古墳、都月坂1号墳、七つぐろ1号墳、神宮寺山古墳、津倉古墳、飯盛山古墳、尾上車山古墳、小盛山古墳、尾籠山古墳、倉敷市矢部大ぐる古墳、総社市宿寺山古墳、秦大ぐる古墳などであり、これら以外にもかなりの数の古墳の踏査をおこなったが、盗掘坑が埋没していて石材が確認できないものや石室石材かどうか判断できないものなどであった。

分析の結果、これら吉備の古墳の竪穴式石室石材は複雑な様相を示すことがあきらかになった。まず、前期前半の古墳の石室石材について検討と評価をおこなう。

以前、筆者は特殊器台形埴輪について若干の検討を試みたが（第4章）、それら特殊器台形埴輪を伴う古墳は前期古墳のうちでも古くに位置づけられる。特殊器台形埴輪を伴う古墳は浦間茶臼山古墳、宍甘山王山古墳、操山109号墳、網浜茶臼山古墳、都月坂1号墳、七つぐろ1号

墳の6基である。また、備前車塚古墳は大量の三角縁神獸鏡を中心とする副葬品や墳形などから前期前半に位置づけられる。これら以外に津倉古墳、矢部大ぐる古墳も墳形の特徴からその時期とみてよい。

まず、これら前期前半の古墳のうちでも最大の規模をもつ浦間茶臼山古墳と、発掘調査によりその内容が判明した七つぐる1号墳の竪穴式石室石材をとりあげる。

#### (1) 石材の検討

##### a 浦間茶臼山古墳

吉井川西岸の低丘陵上に位置する全長138mの大形前方後円墳で、奈良県箸墓古墳の1/2規模墳である。径80mの後円部の中央には墳丘主軸と直交して長さ11m、幅6m、深さ2.2mの、長楕円形の巨大な盗掘坑がみられる。ここに竪穴式石室が構築されていたことは文献や地元の所伝からあきらかであり、盗掘の際に銅鏃、鉄器、朱などのほか、鏡、玉類が出土したと伝えられる(清野1925)(西川1975)。石室の石材は、そのほとんどが持ち出されており、盗掘坑付近に少量が残存し、後円部の墓地内に散見されるにすぎないが、本墳にほど近い集落内の石垣に大量に用いられている。盗掘の際に破損している石材が多いが、最大のもので長さ60cm、幅50cm、厚さ9cm、最小のもので長さ6cm、幅6cm、厚さ2cmである。長さ20~40cm、厚さ4cm内外のものが最も多いが、他の古墳の石材にくらべて大形のもので比較的多いようである。板状節理が発達した石材であるため、いずれも扁平な板状を呈するが、完全な「割石」と呼べるものはなく、大部分が角礫ないし亜角礫であり、それらの小口部や広口部を割って平面形を整えているものが少量認められる。また、長さ40cmをこえる大形の石材は円磨度が高いものが多い。

**石材** 外面は風化が進んでおり淡褐灰色~明灰色を呈し、節理に平行する自然面では浅い鱗状の面をなす。発泡孔がわずかに認められる。断面は青灰色~暗青灰色を呈している。

##### 岩石記載

**斑晶**：斜方輝石。長柱状~短柱状で2mm以下である。2V=90°という光軸角を示し、多色性を示さず光学的分散は $r < v$ である。このことからこの斜方輝石は古銅輝石(都城・久城1972)と判断される。

**石基**：ガラス質~ピロタキシチック組織である。構成鉱物は斜方輝石、斜長石、単斜輝石、不透明鉱物、シリカ鉱物、ガラスなどである(斜方輝石>斜長石)。

斑晶と石基の組成比は 斜方輝石斑晶-3.7 vol%、石基-96.3 vol%で、斑晶はきわめて少ない。

斜方輝石はブロンズ光沢をもち、さらに2V=90°という光学特性を示しており古銅輝石であり、この石材は古銅輝石安山岩と判断できる。当古墳の石材については奥田尚氏による鑑定がなされカンラン石玄武岩とされているが(奥田ほか1984)、ここに示した特徴、さらには表2に示すようにSiO<sub>2</sub>含有量が60.65%と高いことなどからそれは否定される。

##### b 七つぐる1号墳

全長45mの前方後方墳。後方部には墳丘主軸に平行して長さ5.2m、幅(北)1m~(南)0.9m、高さ約1.1mの竪穴式石室が構築されていた。石室は盗掘、塹壕の掘削などにより大規模

な破壊を受けていたが、鏡破片、碧玉製管玉、剣、刀子、板状鉄斧、有袋式鉄斧、ヤリガンナ、鎌などが出土している。また、前方部には主軸に直交して長さ2m以上、幅0.5mの小形の竪穴式石室が構築されている。

後方部石室の石材は古銅輝石安山岩で、板状の角礫が主体をなし、それを割って形を整えたものもみられる。一方、前方部石室の石材は花崗岩類の角礫であり、古銅輝石安山岩は用いられていない。

**石材** 石材は最大のもので長さ62cm、幅55cm、厚さ6cm、平均的な大きさのもので長さ36cm、幅24cm、厚さ4cmであり、比較的薄手のものが多い。いずれも角礫ないし亜角礫であるが、それを打ち割って平面形を整えているものもある程度見られる。外面は風化が顕著で白灰色～明灰色を呈し、発泡孔がわずかに認められる。断面は暗青灰色～暗青色を呈する。

#### 岩石記載

**斑晶**：斜方輝石。長柱状をなし2mm以下である。2V=90°という光軸角を示し、多色性を示さず光学的分散は $r < v$ であり、古銅輝石と判断できる。ほかに仮像としてカンラン石が非常に少量認められる。

**石基**：ピロタキシチック～粗面岩質組織である。構成鉱物は斜長石、斜方輝石、単斜輝石、不透明鉱物、シリカ鉱物、アルカリ長石、ガラスである（斜長石>斜方輝石）。

斑晶と石基の組成比は斜方輝石斑晶－3.0vol%、カンラン石－痕跡、に対し、石基－97.0vol%である。

以上の点からこの石材も古銅輝石安山岩と判断できる。

#### (2) 古銅輝石安山岩を用いる古墳

このように浦間茶臼山古墳、七つぐろ1号墳の竪穴式石室に用いられた石材はともに古銅輝石安山岩であった。以下、同様の石材を使用している古墳を提示する。なお、岩石記載はさきの2例とほぼ同様であるためそれに代表させることとし、以下は記述しない。

#### 穴甘山王山古墳

全長68.5mの前方後円墳。過去に盗掘がなされたと伝えられるが、出土遺物については不明である。石室石材は後円裾部、後円部斜面に作られた小祠付近にみられるがその量はきわめて少ない。石材のなかには長さ51cm以上、幅40cm、厚さ10cmの大形のものがあり、天井石の破片の可能性もある。石材はいずれも古銅輝石安山岩で、前述の七つぐろ1号墳の石材に似た特徴をもつ。

#### 操山109号墳

全長76mの前方後円墳。江戸時代以来墓地として使用されているため墳丘の損壊が著しい。後円部に所在する竪穴式石室はごく一部を残して破壊、削平されているが、その残存位置からみて墳丘主軸に平行し、頭位を北にとるものであった可能性が強い。わずかに残存した部分では朱の混じった灰色の粘土を敷き、その上に石材を積み上げている状況が認められる。

石材は墓石や墓石の基礎として用いられているほか、墳丘各所に散在している。石材は最大のもので長さ45cm、幅35cm、厚さ7.5cm、多くは長さ25cm、幅18cm、厚さ4cm程度である。すべて古銅輝石安山岩であり、板状の角礫が大半を占め、それを割って大きさを調整したものや割

石の可能性があるものが少量みられる。

#### 網浜茶臼山古墳

操山109号墳に近接して所在する全長92mの前方後円墳。墓地として用いられているため墳丘の損壊が著しい。石材は墓地の石垣の間などに用いられている。石材は長さ35～11cm、幅29～8cm、厚さ6～1.5cmでいずれも古銅輝石安山岩である。板状の角礫、亜角礫が主体をなすが、板状ながら亜円礫に近いものも認められる。

本墳にはこれら以外に、石室天井石として使用されたとみられる石材（図5）がある。現在、後円部裾部におろされ4片以上に割れて積み重ねられているが、長さ100cm、幅64cm、厚さ10cmの長方形をなすものである。上・下面は節理面にそって加工して均等な厚さとし、側縁部は細かい剥離を加えて直線をなす面に作りだしている。発泡孔が多く板状節理があまり発達していない石材であるが、加工して大形の板状とするには、こうした、ガラス質でなく板状節理があまり発達していない石材が適していると思われる。同様な板石の破片は墳丘内の別地点にも存在しており、こうしたものが複数存在していたと考えられ、おそらく7、8枚程度並べ、天井石として用いていたものと思われる。石室の壁面を構成する石材が古銅輝石安山岩であるのに対し、この石材はカンラン石安山岩である。

#### 津倉古墳

岡山市街北西部の丘陵上に所在する前方後方墳。全長39mで、前方部を北に向ける。これまでのところ特殊器台形埴輪は採集されていない。後方部頂および古墳の南辺は墓地となっており、石室石材は後方部頂の墓地内の貼り石などに転用されているが、その量は少ない。長さ37～12cm、幅21～11cm、厚さ10～3cmで、古銅輝石安山岩の亜角礫・角礫を主体とし、まれに円礫に近いものもみられる。

#### (3) その他の石材を用いる古墳

以上の古墳では竪穴式石室の石材に古銅輝石安山岩の板石が用いられていることがあきらかとなった。しかしながら、それ以外の石材を用いている古墳も認められる。

#### 都月坂1号墳

全長33mの前方後方墳。東西にのびる尾根の鞍部に所在し前方部を西にむける。特殊器台形・壺形埴輪を伴ない、後方部には墳丘主軸と直交して長さ約4m、幅80～60cmの竪穴式石室が所在する。大規模な盗掘のため発掘調査時にはすでに石室上半部が失われており、石室高などは不明である。また、副葬品も盗掘の持ち出しをまぬがれた鉄剣、鉄斧、碧玉製管玉各1点以外はあきらかでない。

石室石材には長さ・幅40～30cm、厚さ10cm内外の角礫・亜角礫が用いられている。これらの石材は砂質岩である。

#### 備前車塚古墳

全長48mの前方後方墳。舶載鏡多数が出土しており、都月坂1号墳とならんで吉備で最も著名な前期古墳のひとつである。岡山市北東部の竜の口山から派生した尾根頂部に位置し、前方部を西にむける。墳頂部から土師器破片が出土しているが、特殊器台形埴輪は伴っていない。後方部には墳丘主軸と直交し、北に頭位をとる竪穴式石室が所在する。石室は全長5.9m、

幅1.3～1.2m、高さ1.5mの規模をもつ。

石室からは三角縁神獣鏡11、画文帯神獣鏡1、内行花文鏡1面のほか、剣、刀、銚、斧、ヤリガンナ、鏃などの鉄器類と靱が出土している。

石室石材には長さ約40～20cm、厚さ約20～5cmの砂質岩ないし泥質岩の角礫が用いられているが、板状ではなく直方体あるいは塊状である。

#### 矢部大ぐる古墳

全長47mの前方後円墳。倉敷市東部の日差山丘陵から北東方向に派生した尾根上に築かれている。墳丘主軸を尾根線にあわせ、バチ形の前部を南西にむける。本墳からの出土とされる特殊器台形埴輪・特殊壺形埴輪が吉備考古館に所蔵されており（春成1984）、埴形、立地等からもその可能性が強いものであるが、それ以外に全く埴輪が確認されていないため、断定することは困難である。

後円部には墳丘主軸と斜交して南北方向をとる竪穴式石室が所在する。土砂の流入が著しかったため正確な規模は不明であるが、現状で全長4.3m以上、幅（石室上部）80cm、高さ90cm以上である。副葬品は鉄器小片（鉄鏃？）が知られるのみであるが、近年の盗掘の際に多量の朱と粘土がかき出されている。なお、石室はその後埋め戻されている。

石室石材は長さ50～30cm、厚さ20～15cm程度の大きさの、分厚い板状あるいは直方体の角礫で、石英閃緑岩である。

以上、吉備南部の前期前半の古墳のうち、石室石材を検討することのできる9基の古墳の提示をおこなった。そして、そのうち浦間茶臼山古墳、七つぐる1号墳、宍甘山王山古墳、操山109号墳、網浜茶臼山古墳、津倉古墳の6基は古銅輝石安山岩が用いられ、都月坂1号墳、備前車塚古墳では砂質岩ないし泥質岩、矢部大ぐる古墳では石英閃緑岩が用いられていることがあきらかとなった。このことから、1つには、それぞれの石材の産出地はどこであるか、もう1つには、同一地域内でなぜこうしたばらつきが生じているのかという問題が提起される。

#### (4) 石材の産出地

第3節において述べたように、岡山県南部には花崗岩、砂質岩～泥質岩などが分布するが安山岩は産出せず、県北部で産出する安山岩には古銅輝石は含まれていない。古銅輝石安山岩は瀬戸内火山岩類に特徴的な岩石であり、吉備南部に最も近い産出地は豊島・小豆島等の瀬戸内島嶼部から香川県北部にかけての地域であり、次いで奈良・大阪府県境の二上山がある。

偏光顕微鏡による観察によれば、吉備の竪穴式石室石材として用いられた古銅輝石安山岩は香川県北部の資料、なかでも屋島、石清尾山、城山、五色台のものにきわめてよく似た特徴を持っている。表2はこれらについての成分分析であり、図6はそのうちのSiO<sub>2</sub>とMgOの関係を図化したものであるが、これによっても吉備の石室石材は四国北部～瀬戸内島嶼部の古銅輝石安山岩のデータとよく一致しており（各地域の資料の分析値は参考文献として掲げた論文のものをういたが、表2には紙幅の関係上、その一部のみを提示した。ここでの分析はH<sub>2</sub>Oを除去して行ったため、図6にはそれに対応するよう参考資料の分析値を修正してプロットしている。）

8)、二上山産の可能性は否定される。

また、屋島、石清尾山などそれぞれの山体を形成している溶岩流のうち、下位溶岩は一般に

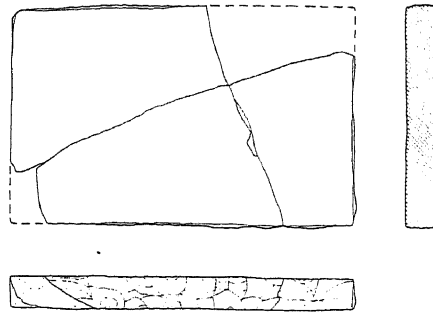


図5 網浜茶臼山古墳  
竪穴式石室 天井石 (S=1/25)

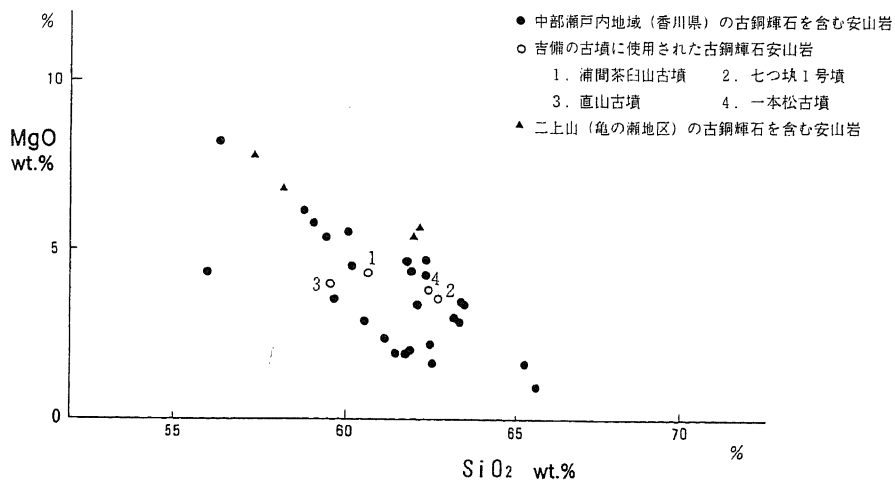


図6 吉備の石室石材と中部瀬戸内、二上山地域の古銅輝石を含む安山岩 (SiO<sub>2</sub>-MgO含有量の関係)

産出地	岡山 浦間茶臼 山古墳	岡山 七つ塊 1号墳	岡山 直山古墳	岡山 一本松 古墳	香川 屋島溶岩	香川 城山 下位溶岩	香川 五色台 の池西方溶岩	香川 大平山 下位溶岩	香川 石清尾山 溶岩	香川 石清尾山 安山岩	大阪 二上山 亀の瀬	大阪 二上山 亀の瀬	大阪 二上山 芝山
岩石名	古銅輝石 安山岩	古銅輝石 安山岩	カンラン石 古銅輝石 安山岩	古銅輝石 安山岩	普通輝石 古銅輝石 安山岩	カンラン石含 有古銅輝 石安山岩	古銅輝石 安山岩	カンラン石含 有古銅輝 石安山岩	古銅輝石 安山岩	カンラン石 安山岩	無斑晶 安山岩	無斑晶 安山岩	カンラン石 普通輝石 玄武岩
SiO <sub>2</sub>	60.65	62.69	59.54	62.40	58.87	58.31	59.56	60.82	62.30	55.20	59.94	60.50	53.63
TiO <sub>2</sub>	0.62	0.51	0.73	0.52	0.76	0.80	0.75	0.63	0.58	0.96	0.51	0.49	1.40
Al <sub>2</sub> O <sub>3</sub>	17.98	17.77	18.10	17.54	16.62	16.02	17.30	16.92	15.67	17.45	15.28	15.39	16.44
Fe <sub>2</sub> O <sub>3</sub>					2.59	4.02	3.76	2.51	2.44	2.86	3.31	2.15	3.15
FeO	5.56*	4.77*	5.67*	4.92*	3.75	3.97	2.17	3.13	3.46	6.31	2.38	3.40	4.52
MnO	0.11	0.09	0.11	0.09	0.11	0.08	0.10	0.08	0.05	0.12	0.14	0.12	0.17
MgO	4.31	3.59	3.99	3.82	4.47	3.43	2.34	3.29	3.43	4.27	5.45	5.22	6.89
CaO	5.62	4.97	6.46	4.97	6.12	6.18	5.41	5.06	4.65	6.89	5.24	5.95	7.87
Na <sub>2</sub> O	3.39	3.76	3.60	3.58	3.21	3.81	3.65	4.03	3.82	3.54	2.74	2.79	2.80
K <sub>2</sub> O	1.66	1.89	1.42	1.87	1.47	1.41	2.51	1.56	2.05	1.17	1.71	1.72	1.09
H <sub>2</sub> O <sup>+</sup>	-	-	-	-	1.15	0.79	0.84	0.37	0.44	0.64	1.30	1.54	0.93
H <sub>2</sub> O <sup>-</sup>	-	-	-	-	0.35	0.62	1.29	1.21	0.69	0.20	1.74	0.85	0.85
P <sub>2</sub> O <sub>5</sub>	0.16	0.13	0.14	0.13	0.17	0.13	0.21	0.20	0.21	0.11	0.14	0.10	0.19
Total	100.06	100.17	99.76	99.84	99.64	99.57	99.89	99.81	99.79	99.72	99.88	100.22	99.93

表2 成分分析値

吉備の竪穴式石室石材および各地域の資料

(\* FeOとしての全鉄  
- 資料を強熱し、融剤と混合して蛍光X線分析を行ったため H<sub>2</sub>O<sup>+</sup>、H<sub>2</sub>O<sup>-</sup>は測定されていない)

MgOに富み（3 wt%以上）、K<sub>2</sub>Oに乏しい（2 wt%以下）ことが指摘されているが（氏家1970）、吉備にもたらされた石室石材の分析値は同様な傾向を示しており、下位溶岩に属するものと判断される。

石室に用いられている石材はいずれも板状節理が顕著であるが、四国北東部～瀬戸内島嶼部の古銅輝石安山岩のうち板状節理が発達し、板状の石が多量に見られるのは四国北東部の屋島、石清尾山、城山、五色台であり、とりわけ下位溶岩で板状節理が発達している。

竪穴式石室に用いられている石材は基本的に板状を呈する角礫ないし亜角礫であり、それらを割って整形したものはある程度見られるが、すべての面に剥離面が見られるものはきわめて少量であった。板状の角礫・亜角礫は長方形ないし不整形をなし、厚さは2～8 cm、まれに1 cm程度のものがある。これらは露頭の石を割り取ったものではなく、板状節理によって生成した角礫であることは確実であり、山の斜面に形成されたこうした角礫の堆積や崖錐などで採取されたものと思われる。

一方、先に浦間茶臼山古墳においては板状の角礫のほかには円磨度の高いものが見られることを記したが、それらは山麓の海浜部で転磨されたものである可能性がある。

以上のように吉備の前期古墳の竪穴式石室に用いられた古銅輝石安山岩の採取された候補地は屋島、石清尾山、城山、五色台にしぼられ、このうち海岸から離れた城山は除外される可能性が高い。しかしながらこれ以上の限定は、これらの山の古銅輝石安山岩に際立った差がないこと、それぞれの山で岩相が垂直方向に変化しているため微細な点での検討が容易でないことなどのため、いまのところ困難と言わざるをえない。

吉備の竪穴式石室石材の大部分が古銅輝石安山岩であるなかで、網浜茶臼山古墳の天井石はカンラン石安山岩であった。カンラン石安山岩の産出地は古銅輝石安山岩のそれよりも限定され、石清尾山、五色台、城山に分布する一方、屋島では産出を見ない。石室壁面に用いる石材が天井石の石材と同一地点で採取されたとすれば採取候補地は両方の石を産出する石清尾山ないし五色台に絞られることになるが、石室壁面に用いる板石は屋島、天井石は石清尾山というような可能性も考えられる。

いずれにせよ、本資料はかなり特徴的な岩石であり、定量分析など今後の検討によって産出地を限定できると思われる。

以上のように吉備の前期前半の古墳の古銅輝石安山岩は四国北東部の屋島、石清尾山、五色台のいずれかの山の、海に近い斜面あるいは山麓で採取されたものである。こうした石材を用いる古墳がある一方、都月坂1号墳、備前車塚古墳、矢部大ぐる古墳などでは砂質岩ないし泥質岩、石英閃緑岩などが用いられている。これらの石材はそれぞれの古墳付近で採取されたと考えられ、前者ときわだつた相違を見せている。

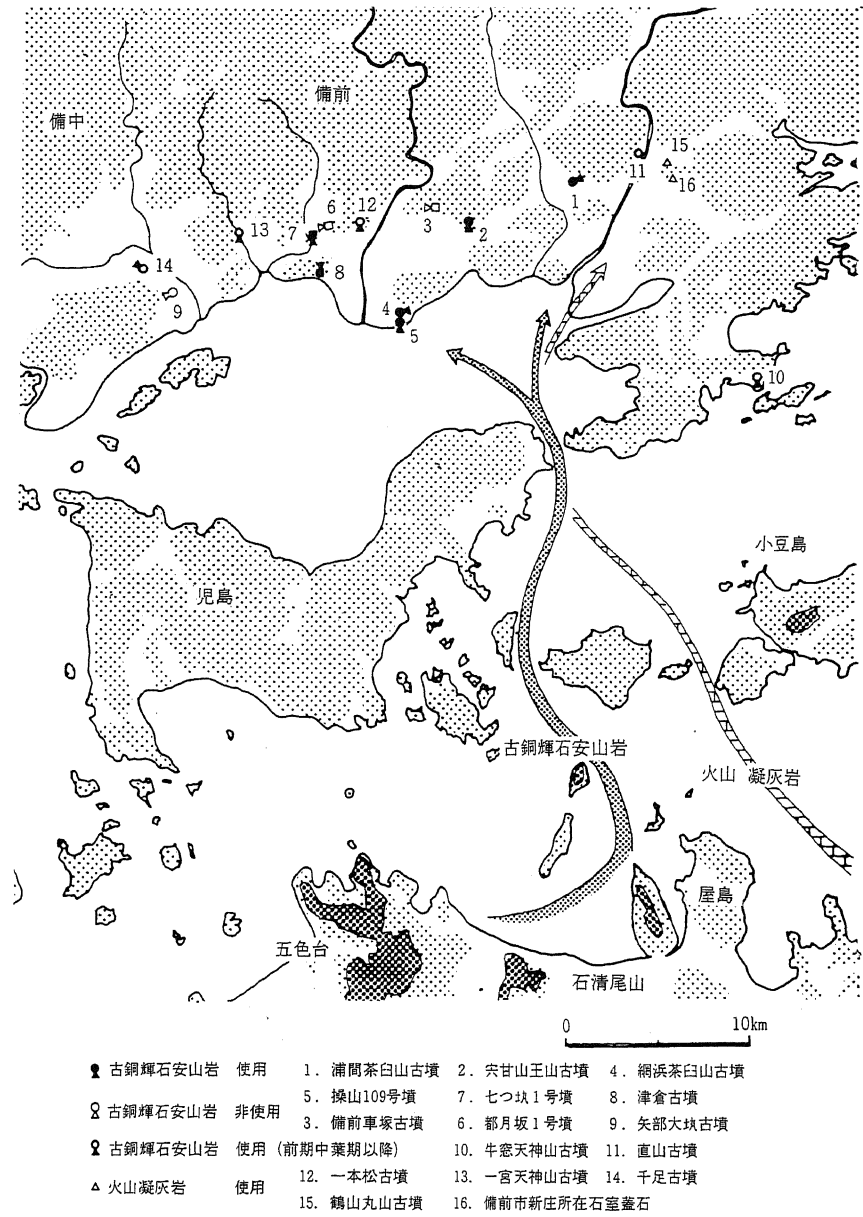


図7 吉備南部における古銅輝石安山岩使用古墳の分布 (S=1/40万)



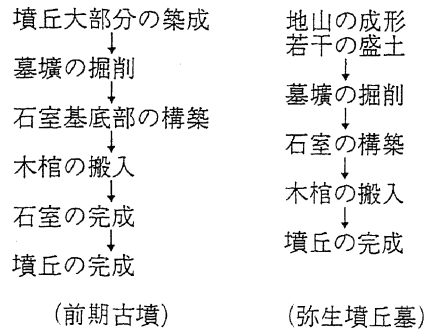


図8 弥生墳丘墓と前期古墳の石室構築

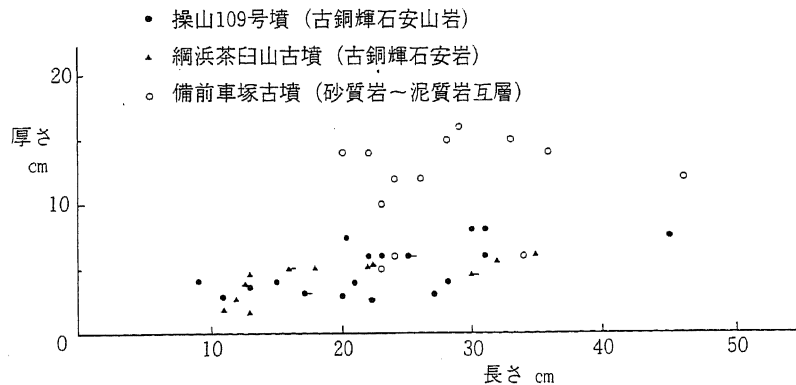


図9 石材の長さとの厚さの関係

6 小結—使用石材の差—

(1) 弥生墳丘墓と前期古墳

構造、使用石材の両面から弥生墳丘墓と前期古墳の竪穴式石室の検討を行ったが、その結果、両者の間には極端ともいえる差があることがあきらかになった。構造の点では、その規模に顕著な差がみられ、また、墳丘・石室・棺の関係が異なっている(図8)。使用石材の点でも、弥生墳丘墓のそれが、しばしば複数種の石材、すなわち複数の地点から搬入された石材によって築かれているのに対し、前期前半の古墳ではそうした使用はきわめてまれであり、単一種の石材によって築かれるようになる。さらに前期古墳の石材には古銅輝石安山岩のようにきわめて遠隔地から搬入されたものがみられるようになるが、こうした点も弥生墳丘墓とは異なっている。

特に、前期古墳の竪穴式石室石材は古銅輝石安山岩の搬入に示されるように板状石材への顕著な指向を示すのに対し、弥生墳丘墓の竪穴式石室石材においてはそれほど強い指向は認められない。板状石材への強い指向は、古墳祭式の成立にともない弥生墳丘墓の竪穴式石室が前期古墳のそれに移行した際に付与された属性であると考えられる。

## (2) 古墳間の使用石材の差

古銅輝石安山岩を用いる石室の場合、長さ5m程度の石室を築くためには少なく見積もっても6～8m<sup>3</sup>、17トン以上の石材が必要となる。それだけの量の石材を内海とはいえ海路を運搬するには、数回に分けて運ぶにしても相当の積載量をもつ船と操船技術が必要であり、それに加えて、採取にさいしての計画、つまり、築造すべき石室の規模や用いるべき石材の使用量についての積算が不可欠であったであろうことはいうまでもない。したがって、こうした非常な労力を要する石材の搬入は、それぞれの集団において個別的、独立的におこなわれたと考えるのは困難であり、吉備南部の首長連合の統率、指揮のもとに、おそらくは讃岐の首長の協力、または許諾のもとにおこなわれたとみるべきであろう。

そして、そうした石材の搬入は竪穴式石室の構築に適した板状の石材を入手するためであるのはもちろんであるが、古銅輝石安山岩を石室石材として用いる古墳が備前南部の39m以上の規模をもつ前方後円・後方墳に限られること、そのほとんどの古墳に、分布が限定される特殊器台形埴輪をともなうことからみて、これらの古墳間に、同一の石材を用いて竪穴式石室を構築するという規制、換言すれば、古銅輝石安山岩の使用を表象とする紐帯が存在していた可能性が強い。

一方、吉備の前期前半の古墳のうち都月坂1号墳、備前車塚古墳、矢部大ぐる古墳の3古墳では古銅輝石安山岩が使用されておらず、それぞれの古墳付近で採取された石材が用いられていた。このちがいについて十分な理解は困難であるが、検討のための材料をほとんどもたない矢部大ぐる古墳を除けば、他の2古墳では古銅輝石安山岩を用いる古墳との間に差異を見出すことができる。

まず、都月坂1号墳は全長33mと特殊器台形埴輪を伴う古墳のなかでも最小規模であることを指摘できる。古銅輝石安山岩をもつ古墳の多くが箸墓古墳の1/2～1/6規模墳である（北條1986）のに対し、都月坂1号墳はそれらに較べて格段に小規模である。この時期の前方後円・後方墳としては最小の規模であり、七つぐる1号墳などよりも下位の首長墳であるため石材も与えられなかったと考えられる。

一方、備前車塚古墳は七つぐる1号墳とおなじく箸墓古墳の1/6規模墳であり、規模の点では古銅輝石安山岩を使用する古墳と差異は見られない。しかしながら、副葬品についてみれば両者の間にはかなりの差がある可能性が強い。備前車塚古墳からは13面もの舶載鏡が出土しているのに対し、古銅輝石安山岩を使用する古墳で副葬品の内容が知られるものはほとんどないが、七つぐる1号墳が江戸時代に盗掘された際の記録には出土品は「破鏡3面」のほか若干の鉄器類（剣ないし刀）と記されており（松本 江戸後期）（和田ほか1737）、他の記載を勘案しても備前車塚古墳に匹敵する量の鏡を副葬していた可能性は低いと思われる。さらに、古銅輝石安山岩を使用する古墳のほとんどに特殊器台形埴輪がみられるが、備前車塚古墳では墳丘全域の発掘調査がおこなわれ、その結果、特殊器台形埴輪を伴わず墳頂部に土師器壺等を配置するのみであることがあきらかとなっている。

備前車塚古墳は墳形の点では他の同規模墳の多くと同様に前方後方墳という墳形をとっており、吉備南部の古墳の階層性の大枠には収まると見られるが、以上に述べたように、他とかな

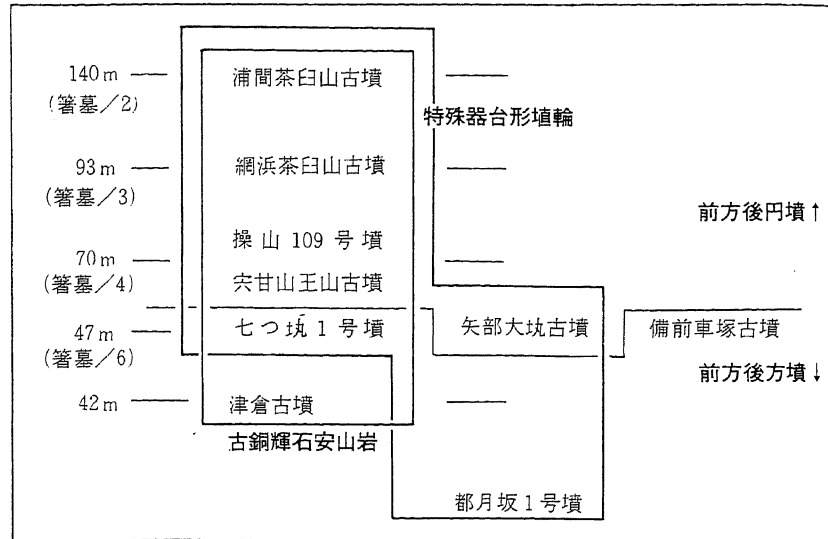


図10 吉備の前期古墳  
(古銅輝石安山岩と特殊器台形埴輪の関係)

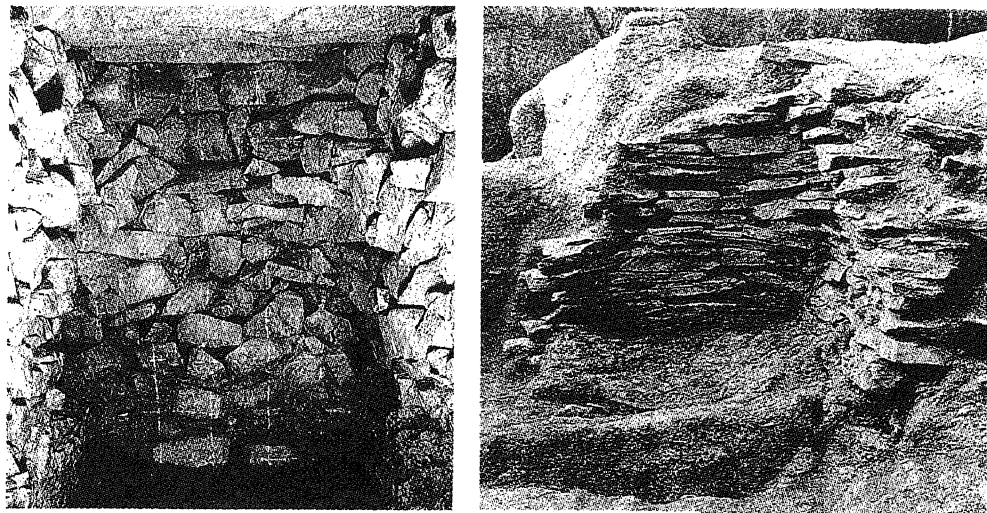


図11 竪穴式石室と使用石材  
左：備前車塚古墳（砂質岩ないし泥質岩）  
右：七つぐろ1号墳（古銅輝石安山岩）

り異なった特徴をもっており、特殊器台形埴輪と古銅輝石安山岩によって特徴づけられる一連の古墳とは別の位置を占めるものであった可能性が考えられる。

## 7 前期後半以後の竪穴式石室石材

前節までの検討において、吉備の前期前半の古墳には竪穴式石室石材として古銅輝石安山岩を用いるものと、古墳付近で産出する石材を用いるものの2者があることがあきらかとなり、その位置付けをおこなった。つづいて、それ以後の古墳の石室石材の変遷の検討をおこなう。

### (1) 石室の諸例

#### 牛窓天神山古墳

全長81mの前方後円墳。墳丘はかなり損壊を受けているが前方部は低く狭長で、後円部には竪穴式石室が所在する。石室は古く盗掘を受けたようであるが、現在は埋没しており副葬品等も不明である（近藤1956）。円筒埴輪・朝顔形埴輪を伴っており、保存状態の良好な資料は少ないが外面調整はいずれも縦ハケとみられる。年代を推定する資料に乏しいが、墳形や埴輪から川西編年Ⅱ期と考えられる。

石室石材は後円部斜面に散在しており、長さ25cm、幅10cm、厚さ4cm程度の大きさで、いずれも古銅輝石安山岩である。かなりの量の割石と角礫からなり、垂角礫や垂円礫はみられない。

#### 黒島古墳

牛窓湾内の黒島に所在する全長81mの前方後円墳。衣蓋、人物などの形象埴輪を含むⅣ期の埴輪、TK73形式の須恵器などを伴う（伊藤・島崎1984）。前方部に墳丘主軸に平行し、長さ2.5m以上、幅80cm、高さ60cm以上を測る竪穴式石室が築かれている。石室石材は長さ40～50cm、厚さ12～20cmの垂角礫および割石で、いずれも花崗岩である。

#### 築山古墳

全長81mの前方後円墳。前方部の発達した墳形を示し、Ⅳ期の埴輪を伴う。後円部には阿蘇ピンク凝灰岩製の家形石棺とそれを納める竪穴式石室が所在し、玉類、画文帯神獣鏡、馬具などが副葬されていた（梅原1957）。石室石材は長さ50cm程度の角礫、円礫で、花崗岩、流紋岩類などからなる。

#### 鶴山丸山古墳

径81mの円墳。墳丘中央部には凝灰岩製の天井石をもつ長さ4m、幅1mの竪穴式石室が所在し、香川県火山産凝灰岩製の特殊な形態の家形石棺が納められていた。石室内には約30面の仿製鏡のほか車輪石、大形の管玉、勾玉、碧玉製盤・合子、滑石製埴・器台、鉄器などが副葬されていた。埴輪資料は良好なものが少ないが楯、鞆などを伴っており、Ⅱ期とみてよい。石室石材は長さ40cm以下、厚さ5～10cmの流紋岩類の割石である。

#### 茶の子山古墳

吉井川に面した山頂に所在する全長26mの前方後円墳。後円部には長さ2.7m以上、幅70cmの竪穴式石室が所在する。石室石材には古墳の近くで産出する流紋岩類の角礫を用いている。埴輪は見られず、副葬品も不明であるが古墳の立地からみて前期古墳と判断される。

**直山古墳**

小形の円墳である。墳丘中央に竪穴式石室が所在するが、盗掘により破壊、埋没している。天井石は流紋岩類であるが、壁面に用いられる石材はすべてカンラン石古銅輝石安山岩の角礫で、長さ25cm、幅4cmのものを最大とする。副葬品は全く知られていないが立地や他の古墳との関係等からみて、前期の古墳と判断される。

**武宮古墳**

全長52mの前方後円墳。前方部は低く長い。前方部に墳丘主軸と直交して竪穴式石室が所在する（正岡1976）。石室の規模はあきらかでないが幅80cm、長さ3m前後と判断される。石室石材には流紋岩質礫岩の角礫が用いられている。

**金蔵山古墳**

全長162mの前方後円墳。後円部には2基の竪穴式石室が築かれており、主石室は全長6.1m、幅1.3m、南石室が全長7.2m、幅1.35m、高さ85cmの規模をもつ。主石室からは玉類・筒形銅器・鍬形石・鉄器類が、それに伴う副室からは埴製合子に納められた鉄製武器・農工具類が出土しており、南石室からは滑石製勾玉ほかの玉類や変形二神四獣鏡、鉄器類が出土している。

石室上方には方形区画が設けられており、円筒埴輪のほか多量の形象埴輪が配列されていた。南石室の埴輪には新しい様相のものを含んでいるが、主体をなすのはⅡ期の埴輪である。

石室の天井石には花崗岩が用いられ壁面には流紋岩質凝灰岩の角礫・割石が用いられている。

**神宮寺山古墳**

全長158mの前方後円墳。後円部には竪穴式石室と鉄製武器・農工具を納めた副室が所在する（鎌木1962）。墳丘上からはⅡ期の埴輪が採集されている。石室の石材は花崗岩の割石・角礫である。

**一本松古墳**

全長65mの前方後円墳。後円部には長さ約4m、幅約1mの竪穴式石室が所在する。現在東京国立博物館に収蔵されている眉庇付金銅装冑・金銅具付短甲・鉄鎚・鉄鉗・矛などは本墳からの出土品と伝えられる（村井1976）。石室の石材は古銅輝石安山岩の割石と角礫である。

**飯盛山古墳**

全長40mの前方後円墳。後円部に竪穴式石室が所在するが、埋没のため規模は不明である。天井石、壁面ともにアプライト質花崗岩の板状石材が用いられているが、角礫であるのか割石であるのか判断が困難である。埴輪が採集されているがⅠ期かⅡ期か不明である。

**千足古墳**

全長75mの帆立貝式古墳。墳丘中央には玄室長3.45m、幅2.5m、高さ2.7mの初期横穴式石室が所在し、それとは別にもう1基の埋葬がある。横穴式石室の玄室内からは五獣鏡・玉類・鉄鍬が、石室外の埋葬からは五獣鏡・巴形銅器・玉類・鉄製武器・甲冑などが出土している（梅原1938）。埴輪は有黒斑でありⅢないしⅣ期の可能性が強い。石室石材は古銅輝石安山岩の角礫・割石である。

**宿寺山古墳**

全長114mの前方後円墳で周濠をもつ。後円部に2基、前方部に1基の竪穴式石室が所在した。

後円部の中央石室は長さ3.75m、幅1.68m、高さ1.2～1.35mで盤竜鏡、刀剣、鉄鏃、ガラス小玉が出土している。後円部北石室は長さ2.7m、幅1.2m、高さ0.9mで変形四神四獣鏡、金製かんざし、刀剣、鉄鏃が出土している（梅原1925）（森本1926）。石室石材はすべて花崗岩角礫が用いられていた可能性が大きい。埴輪は多数の形象を含んでおり、すべてIV期である。

#### 秦大ぐろ古墳

全長59mの前方後円墳。後円部頂の細長い盗掘坑付近に花崗斑岩の割石・角礫が散在しており、竪穴式石室の存在は確実である。古墳の時期は不明であるが、立地、墳形から前期古墳と判断される。

#### 尾籠山古墳

全長約40mの前方後円墳。後円部頂に2基の竪穴式石室が所在する。石室は大規模な盗掘によって破壊されており、1基は長さ2.5m以上、幅約60cm、もう1基は長さ約3m、幅40cmである。盗掘の際、四獣鏡・鉄斧・玉類などが出土している（後藤1926）。石室の石材はいずれも閃緑岩である。

これらの古墳以外にもかなりの数の古墳の踏査をおこなったが、時期が不明確であったり、盗掘坑が埋没しているため石材を十分検討できないものなどであるため、ここではとりあげていない。

#### (2) 石室石材の変遷

以上、前期中葉以後の吉備の古墳の石室石材の概観を行ったが、これによってあきらかなように、前期前半の段階で数多く見られた古銅輝石安山岩は前期後半ないし中期前半の牛窓天神山古墳と直山古墳、下って中期中葉の千足古墳、一本松古墳で見られるにすぎない。千足古墳・一本松古墳は牛窓天神山古墳とある程度の時期差が見込まれ、中期前半前後で古銅輝石安山岩の搬入はいったん中断したと考えるのが妥当である。

なお、全長20mを下回る小墳である直山古墳においてカンラン石古銅輝石安山岩が用いられている。年代が明確でないこともあり評価がむずかしいが、前期前半でないとするならば石材に関する規制が弛緩した段階で一部の小規模古墳にその使用が許された可能性がある。

I期以降、古銅輝石安山岩を用いる古墳を除けば、多くの古墳では古墳付近で採集しうる石材のうち最も適したものをを用いて石室の構築をおこなっている。おもに用いられている石材は花崗岩類、アプライト質花崗岩、流紋岩類などであり、割り整えて用いる場合もあり板状石材への指向はなお強い。

I期からIII期の吉備の古墳を通して見た場合、墳丘規模、副葬品など多くの点で中小の古墳と大形古墳との格差がより顕著となってゆくが、それは使用石材の点からも認められる。この時期の大形古墳としては神宮寺山古墳、金蔵山古墳があるが、神宮寺山古墳の竪穴式石室には花崗岩の割石と角礫が用いられており、そのうち割石は3分の1を占める。完晶質で割りにくい花崗岩の場合、割石として用いられることは少ないが、そうした割石を多量に用い、板状石材へ強い指向を示すことは中小の古墳には見られない点である。また、金蔵山古墳では流紋岩類がもちいられているが、それは6km～18kmの距離を運ばれたものである。金蔵山古墳の所在する山塊は花崗岩からなるが、花崗岩はおもに葺石として用いられ、石室石材には節理が発達

し板状の石材をとりやすい流紋岩類が用いられている。

一方、IV期の古墳においては、砂質岩ないし泥質岩、花崗岩、流紋岩類など、やはり古墳付近で採取可能な石材が用いられているが、板状への指向は弱く、不整形なものでもかまわず用いている。この時期になると長大な竪穴式石室はみられなくなり、中規模の竪穴式石室あるいは石棺を収める比較的短い石室となっており、竪穴式石室の意義の変化とともに板状石材への指向も希薄なものになったと考えられる。

### (3) 使用石材の問題点

板状石材に強い指向を示すにもかかわらず、最も良好な板状石材である古銅輝石安山岩の搬入が停止する理由はいくつか考えられるが、その最大の原因として古墳時代前期における吉備南部地域の首長の淘汰と再編成が考えられる。図7に示すように、古墳時代の初期段階においては備前南部地域を中心に前方後円墳・前方後方墳がきわめて多数築造されており、各水系の小単位平野ごとに古墳の築造がなされたかのような状況を呈している。これらの古墳の近くには弥生墳墓が立地している例もしばしばみられ、たとえば都月坂1号墳のそばにはそれに先行して都月坂2号弥生墳丘墓が築かれており、墳形から前期前半に位置付けられる片山古墳の所在する山塊には第1型式・立坂型の特殊器台を出土する片山南斜面遺跡が所在する。これらの例からみれば弥生墳丘墓の造墓単位の多くがそのまま前方後円・後方墳の築造の単位となった可能性が考えられる。

しかしながらそうした前方後円・後方墳の多くは系譜的に築造がなされず、単独墳ないし2基程度の築造をもって断絶している。これらの古墳の多くは全長47m前後、すなわち箸墓古墳の1/6規模を標準とし、筆頭となるのは1/2規模の浦間茶臼山古墳である。こうした状況に対しI期以降においては大形前方後円墳のいっそうの大規模化と中小前方後円墳の減少、中形、大形の円・方墳の出現がみられる。前期前半の段階においては古墳間の較差が後代にくらべて顕在化しておらず、特殊器台形埴輪や古銅輝石安山岩などの使用を紐帯の表象とする、階層差が比較的少ない関係であったと考えられる。そうした関係は前期中葉以降首長間の較差が顕著となるなかで解消され、そのため、紐帯の表象の一つであった古銅輝石安山岩も搬入されなくなったと考えられる。

一方、中期中葉にふたたび古銅輝石安山岩の搬入がなされるが、それは千足古墳、一本松古墳の2古墳に限られており、その評価は困難であるが、すくなくとも前期前半に行われたような意味での石材の搬入ではなかったと思われる。

なお、前期における古銅輝石安山岩をもつ古墳の分布から気づかれることであるが、それらは備前南部にのみ分布を示し、備中南部にはまったくみられない。こうした分布の偏りは特殊器台形埴輪についても同様である。前期古墳を概観した場合、大形古墳、主要な中規模古墳の大半は備前南部に集中しており、備中南部にはそれほどの分布は見られない。弥生後期において大規模な墳丘墓を多数築造し、特殊器台形土器の分布の中心であった備中南部が古墳時代前期には大形古墳の分布がわずかで、かわって備前南部に前期古墳の分布の中心が移ることは、前方後円墳出現期の吉備を考えるうえできわめて示唆的である。

## 8 畿内の石室石材

## (1) 畿内の竪穴式石室石材の動態

第2節において述べたように、畿内の竪穴式石室には二上山や紀の川流域などから搬入された石材が用いられていることが、比較的早い時期に認識された。

数多い畿内の資料全体にわたる検討を行えていないため詳細な評価はむずかしいが、いくつかの資料の分析結果をもとに奥田尚氏による分析を検証し、畿内の前期古墳の竪穴式石室石材を概観すれば、以下のように整理できる。

## a 大和・河内地域

畿内の古墳のうち副葬品や特殊器台形埴輪、埴形などによって最古段階に位置付けられる古墳は京都府椿井大塚山古墳（梅原1965）9）、奈良県箸墓古墳（中村・笠野1976）（奥田1984a）、中山大塚古墳（田中1985）の3古墳である。このうち椿井大塚山古墳の竪穴式石室に用いられている石材は安山岩と花崗岩で、両者が混在して用いられていた。また、中山大塚古墳の石材は後円部の盗掘坑内の石材を分析したが、それによれば石材は無斑晶安山岩と呼ばれる、サヌカイトに近い組成を示すものであった。一方、箸中池の南東岸、すなわち箸墓古墳北西くびれ部に散在している石材は単斜輝石カンラン石玄武岩であった。この石材が箸墓古墳の中心主体の石材が崩落したものであるかどうかは、墳丘図を見る限り盗掘坑等が見られないため不明であり、にわかには決しがたいが箸墓古墳にかかわるものと考えておきたい。

箸墓古墳の単斜輝石カンラン石玄武岩の採取地は二上山地域、大和川河畔の芝山山麓と考えられる。また、椿井大塚山古墳、中山大塚古墳の安山岩の産出地は、大和川北岸の亀の瀬地区である可能性が高い。したがって、大和・河内の前期古墳の竪穴式石室石材の採取は芝山から始まった（奥田1985）のではなく、芝山、亀の瀬の2地区から併行してなされたと考えられる。この2地区からの石材の採取は古墳時代初頭以降継続的におこなわれ、板石積みの竪穴式石室の多くがこれらの石材によって築かれている。芝山、亀の瀬の2箇所ともに大和川の河畔に位置しており、吉備の場合と同じく、舟によって多量の石材の運搬がなされたものと思われる。

二上山から採取された安山岩、玄武岩を使用する古墳はきわめて広い範囲にわたって分布しており、奈良盆地はもちろんのこと北は河内忍岡古墳（梅原1937）、西は摂津会下山二本松古墳にまで及んでいる。東は椿井大塚山古墳の所在する山城南部は確実であるが、それより東にどれだけ分布が及んでいるか不明である。あるいは、安山岩の使用が確認された滋賀県安土瓢箪山古墳中央石室（梅原1938）10)もこうした例に含まれるものかもしれない。

もちろんこの二上山石材の分布は固定的なものではなく、時期によって広狭を示し、石材の複雑な動態を物語っている。1例をあげれば、山城南部地域では椿井大塚山古墳には二上山産の石材が用いられるのに対し、それにつづく時期の平尾城山古墳では流紋岩類（石英粗面岩）が用いられている（近藤ほか1977）。この点の解明のためには、今後、分布の細かい検討を行ってゆく必要がある。

## b 摂津東部・山城南西部



いっぽう、摂津淀川北岸地域においては二上山産石材の分布は希薄である。紫金山古墳で紀の川流域ないし徳島産の結晶片岩とともに安山岩が、茨木将軍山古墳で結晶片岩とともにごく少量の玄武岩ないし安山岩が用いられているのみであり<sup>11)</sup>、弁天山C1号墳では少量の結晶片岩と流紋岩類が用いられている（堅田ほか1967）。また、池田茶臼山古墳では流紋岩類が、万籟山古墳においては角閃石黒雲母花崗閃緑岩、花崗閃緑斑岩、チャートが用いられている（安田ほか1970）。

山城東南部乙訓地域の前期古墳においては京都府元稲荷古墳では千枚岩質粘板岩（西谷1965）、寺戸大塚古墳ではチャート（近藤・都出1971）、長法寺南原古墳では緑色岩（橋本1983）、鳥居前古墳ではチャートと粘板岩が用いられている（杉原1970）。これらの古墳のうち寺戸大塚古墳の天井石の一部には他地域から搬入された花崗岩が用いられているが（都出1983）、それ以外の石材はいずれもこの乙訓地域のなかで採取されたと考えられるものであり、二上山からの石材の搬入はなされておらず、中期の恵解山古墳ではじめて二上山石材が結晶片岩とともに用いられる（山本ほか1981）。

これらの古墳のうち弁天山C1号墳、紫金山古墳、茨木将軍山古墳、池田茶臼山古墳の4古墳、寺戸大塚古墳、元稲荷古墳、長法寺南原古墳の3古墳はそれぞれ竪穴式石室の平面形において緊密な類似性をもつことが都出比呂志氏によって指摘されている（都出1986）。このことは、結晶片岩の共有、あるいは二上山産石材の非使用といったことが一定地域内での古墳の親縁性にかかわるものであり、首長間の紐帯を示す可能性が強いと考えることの傍証となろう。

## (2) 畿内以外の地域

吉備、畿内以外の地域の前期古墳の竪穴式石室石材についてはあまり分析をおこなっておらず、また、石材が報告された例もあまりないが、やはり玄武岩、安山岩など火山岩類の使用が目立つようである。たとえば島根県神原神社古墳（前島・松本1976）では多斑晶質玄武岩質安山岩が用いられており、福岡県石塚山古墳（長嶺1984）の後円部には安山岩の板状石材が見られる。

もちろん、それ以外の石材の使用例もかなりあり、山口県竹島古墳では凝灰岩が（藤田1963）、同長光寺山古墳では古墳付近で採取された砂岩が用いられている（小野編1977）。

また、竪穴式石室ではないが、福岡県の博多湾沿岸地域に所在する竪穴系横口式石室を内部主体とする古墳、丸隈山古墳（柳沢1986）、鋤崎古墳（柳沢1984）、老司古墳（九大考古学研究室編1969）、博多1号墳（井沢・米倉1985）<sup>12)</sup>などではいずれも玄武岩の板状角礫ないしその割石が用いられている。福岡平野付近で玄武岩を産出するのは今山、能古島などに限られており、そこからそれぞれの古墳に石材がもたらされたと考えられ、他地域の例と同様、一定の地域内での石材の共有がなされている。

## (3) 箸墓古墳のくびれ部の石材について—板状石材の葺石としての使用—

ところで、先に箸墓古墳の北西くびれ部に玄武岩の板状石材が散布していることを述べたが、それらが竪穴式石室の石材として用いられたものであるかどうか、すなわちそれらの石材の分析結果をもって他の古墳の石材と比較することが適当であるかどうか問題となるため、このことについてここでふれておく。

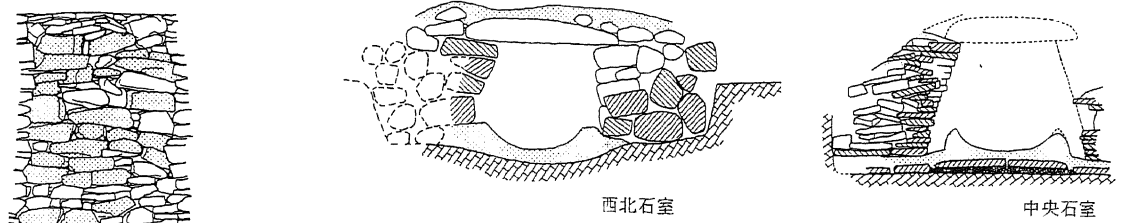
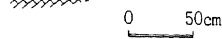


図13 滋賀県安土瓢箪山古墳  
後円部竪穴式石室横断面 (S=1/60)



□ 花崗岩  
他は古銅輝石安山岩

図12 樺井大塚山古墳  
石室小口部  
(S=1/60)

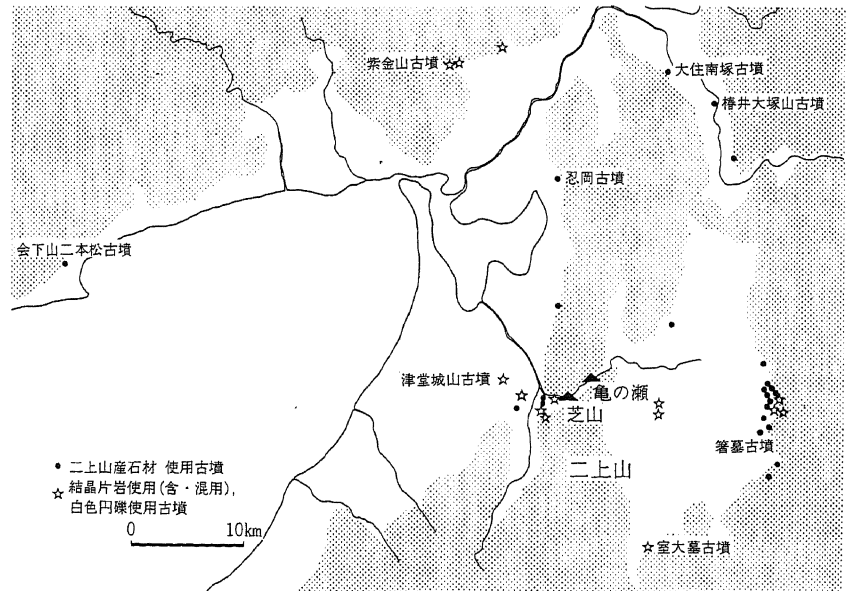


図14 畿内の竪穴式石室石材

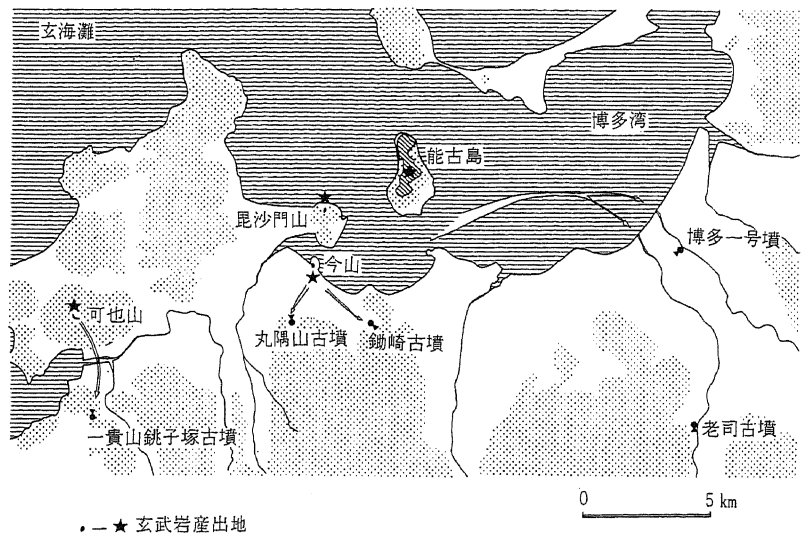


図15 博多湾沿岸平野における石材の移動 (S=1/30万)

すでに述べたように、安山岩や玄武岩の板状石材は基本的に竪穴式石室やその周辺の施設など、埋葬にかかわる部分に用いられている。それに対して箸墓古墳の場合は玄武岩の板状石材が箸中池南東の汀線部分、つまり北西くびれ裾部において崩落した葺石にまじって散見される。これらの石材は後円部頂の竪穴式石室部分から転落したものである可能性も否定はできないが、墳丘測量図を見るかぎり墳頂には全く盗掘の痕が見られないこと、また、後円部各段のテラスをこえて墳頂からかなりの量の石材が落下したと考えることは困難であることなどから判断して、これらの石材は竪穴式石室以外の部分に用いられていたと考えるのが妥当である。

安山岩や玄武岩の板状石材を竪穴式石室以外の部位に使用する例はあまり知られていないが、いくつかの古墳において葺石として用いられていることがあきらかになっている。古銅輝石安山岩からなる石清尾山の尾根上に築かれた積石塚、香川県鶴尾神社4号墳は、他の古墳の場合とは若干条件が異なるが、安山岩の板状石材は竪穴式石室およびくびれ部の葺石基底部分に用いられており、それ以外の部分は塊状の石材が用いられている（渡部・藤井1983）。また、発掘調査によって葺石の一部に玄武岩や安山岩などの板状石材が用いられていることが確認された例として京都府大住南塚古墳、福岡県老司古墳などがあり、大住南塚古墳ではくびれ部の葺石基底部に一点だけ安山岩の板石が用いられており（鷹野1986）、老司古墳では後円部斜面の葺石の間から玄武岩の板状石材が出土している<sup>13)</sup>。また、使用された石材の種類は不明であるが、大阪府大石塚古墳では後円部北西裾部のトレンチ部分においてのみ、下段斜面の葺石に板石が、中段斜面の葺石に板石と円礫が用いられていることが確認されている（柳本ほか1980）。このほかに奈良県室大墓古墳では墳端に接する池で後円部頂の竪穴式石室に用いられている石材と同様の板状石材が少量ながら散見される。

こうした葺石の一部に板状石材が使用される例は必ずしも多くはないが、それは前期古墳の葺石の調査例がそれほど多くないこと、また、発掘調査がなされた場合も使用石材に十分に注意がはらわれなければ見落とされてしまうこと、そして竪穴式石室の石材が墳丘斜面に散乱している場合は、葺石に用いられたものとの区別がつかないことなどによると思われる。葺石として用いられる板状石材が竪穴式石室の使用石材と同一種であることが確認されたのは大住南塚古墳例のみであるが、他の例も同様と考えるべきであろう。

これらのことからみて、箸墓古墳北西くびれ部の石材も葺石として用いられたものである可能性が強く、そしてそれは中心埋葬である竪穴式石室の使用石材の岩石種を示すと考えてよいであろう。

なお、こうした板状石材の葺石としての使用については、たんに竪穴式石室の構築後に余った石材を使用したという解釈も成り立つが、多くの場合、板状石材は相当の距離を運搬して古墳にもたらされたものであり、無計画な使用をおこなったとも考えがたく、今後、類例の増加をまってその使用位置や使用量などの検討をおこなう必要がある。

## 9 結晶片岩と白色円礫

## (1) 結晶片岩

畿内の前期古墳においては二上山産の玄武岩や安山岩が基本的に選択されているが、それ以外にこの地域に搬入されている石材として結晶片岩があり、それは摂津、淀川北岸地域にまとまった分布を示している。この地域では茨木将軍山古墳や紫金山古墳の発掘が比較的早くおこなわれ、それらの石室に結晶片岩がもちいられていることが判明し、また、海北塚古墳など後期古墳にもその使用がみられることがあきらかになっており、結晶片岩の使用は摂津淀川北岸地域の特色として理解されている。

しかしながら、竪穴式石室石材として結晶片岩を用いる古墳は後述のように大和・河内地域にもかなりの分布を示しており、摂津淀川北岸地域の特色としての評価とは別に、畿内の竪穴式石室石材の動態のなかに位置づける必要がある。

結晶片岩についてはまだ検討の途上にあるため、詳細な評価は稿をあらためておこなうこととし、ここではその動態について簡単にふれておく。

結晶片岩を竪穴式石室の石材として用いる場合、

- 1) 結晶片岩のみを使用
  - 2) 結晶片岩を主体とし他の石材（玄武岩、安山岩等）をまじえる。
  - 3) 他の石材（玄武岩、安山岩等）を主体とし、少量の結晶片岩をまじえる
- という3者に区分できる。

このうち1)の例は少なく、これに該当するのは室大墓古墳と茨木将軍山古墳のみである。ただし、茨木将軍山古墳では少量の玄武岩ないし安山岩が混用されており、厳密に言えば2)に含まれる。

2)の例も少なく、茨木将軍山古墳に近接して所在する紫金山古墳、京都府恵解山古墳のみが知られている。このうち、恵解山古墳では石材の出土量は少ないが、出土した約20点の板状石材のうち2点が安山岩で他が結晶片岩であることからここに置くことができると考えられる。また、紫金山古墳では安山岩が混用されていると伝えられる（小林1962）が量比が不明であり、あるいは茨木将軍山古墳のような使用状況であるのかもしれない。

そして、3)の他の石材を主体とし、少量の結晶片岩をまじえるものが最も多く、大阪府津堂城山古墳（藤井1982）、玉手山7号墳（白神1981）、同9号墳、茶臼塚古墳（奥田1986）、奈良県燈籠山古墳、櫛山古墳などがある。また、前記の古墳がいずれも結晶片岩と玄武岩あるいは安山岩という組み合わせであるのに対し、弁天山C1号墳では流紋岩類とともに結晶片岩が用いられている。これらのうち、玉手山7号墳では石材が少量しか確認できないけれどもここに含めてよいであろう。また、これら以外に、兵庫県五色塚古墳の外堤周溝、小壺古墳の周濠から結晶片岩（紅簾片岩、緑泥片岩）が出土している（神戸市教委1985）。五色塚古墳外堤周溝出土のものは古墳時代後期の堆積面から検出されているが、もと墳丘内に使用されていた石材の可能性が考えられる。

このように、結晶片岩を用いる古墳のうち大部分で結晶片岩とともに玄武岩や安山岩が用いられており、量的にも後者が凌駕することが多い。このことからみて、この2種の石材は排他的な関係にあるのではなく、むしろ補完的な関係にあるとみてよい。また、1)、2)のように結晶片岩が石室石材全体のなかで高い比率を占める例は淀川流域地域に集中を示しており、前述のように、この地域の特色と判断される。なお、ここに記したものはこれまでに確認できた資料にすぎず、竪穴式石室の構築に用いられた石材のなかで結晶片岩の占める比率が小さい場合は、櫛山古墳や燈籠山古墳のようにかなり大量の石材が散乱している場合を除けばその確認が困難と思われ、結晶片岩を使用する古墳は将来さらに確認されることは確実であろう。

さて、これら結晶片岩を用いる古墳の時期であるが、紫金山古墳、玉手山9号墳、燈籠山古墳がⅠ期、櫛山古墳、津堂城山古墳、玉手山7号墳、茶臼塚古墳、茨木将軍山古墳、弁天山C1号墳がⅡ期、室大墓古墳、恵解山古墳がⅢ期であり、Ⅰ期の段階でその使用が開始され、Ⅱ期、Ⅲ期に使用のピークをむかえ大形古墳を中心に分布の増加をみせる。

これらの結晶片岩は室大墓古墳の石材が緑色片岩、黒色片岩であるほかは、いずれも緑色片岩、紅簾石片岩、石英片岩である。これらは和歌山、徳島両県を貫通する中央構造線ぞいに分布する三波川変成岩帯において産出するものであり、この地域から搬入されたものと判断される。

## (2) 白色円礫

畿内の前期・中期古墳にかかわる石材として、前述のほか白色円礫がある。発掘調査によって白色の円礫の使用が確認された例として、櫛山古墳、室大墓古墳、茶臼塚古墳がある。櫛山古墳では中円部頂部および斜面に白色円礫がみられ、また、後方部に設けられた長さ約5m、幅3.4m、深さ80cmの特殊遺構には、白色円礫がぎっしりと詰められていた(上田1961)。室大墓古墳では後円部墳頂に二つの竪穴式石室が設けられており、発掘調査のおこなわれた南石室では石室上に板石と二重の形象埴輪列によって形成された方形区画が検出されたが、二重の形象埴輪列の間に白色円礫が敷かれていた。また、茶臼塚古墳では竪穴式石室内に白色の円礫が散布していることが確認されており(竹下1986)、割竹形木棺の下面に敷きつめられていたか、あるいは木棺の周囲を覆っていたかと想定される。

これら以外に白色円礫の使用が確認された例、その存在が伝えられる例としては、津堂城山古墳、松岳山古墳、大阪府仲津山古墳(上田1961)、奈良県乙女山古墳(原島ほか1981)、巢山古墳、柳本行燈山古墳(原島ほか1981)、五色塚古墳(上田1961)などがある。

これらの古墳の大部分はⅡ期からⅢ期にかけてのものであり、結晶片岩が搬入される時期とほぼ一致している。また、その使用位置は茶臼塚古墳例をのぞけば、散布の状況等からみて墳頂部に敷かれていたものと考えられる。

さて、この白色の円礫であるが、長径4～1cmの偏球形を呈し、円摩度はきわめて強くその表面はきわめて平滑である。色調は、灰白色～淡白色を呈し透明度の強いものが多い。

偏光顕微鏡観察の結果、これらは主に石英からなり、少量の白雲母が認められ、また片状構造が顕著であることが判明し、石英片岩と判断された。特に櫛山古墳の白色円礫にはその一部に紅簾石片岩が見られるものがあり、この場合は紅簾石片岩と石英片岩が互層をなしていたも

のとみられる。そして、その円磨度の強さからみてこれらは海浜部あるいは河川流域部で転磨されたものである可能性が大きい。

したがって、この白色円礫（石英片岩円礫）も畿内以外の地域、紀伊あるいは阿波から搬入されたものと考えられ、おそらくは結晶片岩とともにもたらされたとみてよいであろう。このことは、畿内地域への結晶片岩の搬入の時期と石英円礫の時期が一致すること、そして、津堂城山古墳、茶臼塚古墳、櫛山古墳など使用石材の全体像があきらかな古墳で両者が認められることから裏付けられる。そしてこれらの例から、おそらくは一方の石材のみが知られる古墳の多くは他方の石材をもつ可能性が大きいと考えられる。

### (3) 結晶片岩・石英円礫を使用する古墳

結晶片岩や石英円礫の使用はⅠ期に始まり、Ⅱ期、Ⅲ期にその使用が普遍化するとみることができる。また、それらⅡ期、Ⅲ期の古墳について見れば、松岳山古墳に従属する小形古墳である茶臼塚古墳以外は、そのいずれもが巨大な前方後円墳であることを指摘できる。

津堂城山古墳を例にあげれば本墳は墳丘全長208mの大形前方後円墳で、二重の周濠と内・外堤からなる広大な外域をもつことが知られており、後円部の竪穴式石室には竜山石製と考えられる大形の長持形石棺が収められていた（藤井1982）。また、仲津山古墳は津堂城山古墳に続く時期の巨大古墳で、墳丘全長290mを測る。柳本行燈山古墳は改めて説明する必要がないほど著名な全長240mの大形古墳であり、その背後に所在する櫛山古墳は全長150mの双方中円墳で、中円部の竪穴式石室にはやはり竜山石製の長持形石棺が収められていた。さらに、乙女山古墳にしても全長130mで帆立貝式古墳としては最大級の規模をもち、巢山古墳も全長204mの大形前方後円墳で後円部の盗掘坑には凝灰岩製の天井石が認められる。

このように、Ⅱ期、Ⅲ期の古墳で結晶片岩・石英円礫を使用する古墳は大形古墳に限られ、それは柳本古墳群、馬見古墳群、古市古墳群に前後して出現するようであり、その多くでは竜山石製の長持形石棺が用いられている。この時期の巨大古墳の多くが陵墓となっているため情報が少ないが、石材の状況が知られる大形古墳、巨大古墳でこれらの石材の存在が判明していることからすれば、さらに多くの大形墳、巨大古墳にこれらが搬入されている可能性は強い。

Ⅱ期にいたって大形古墳では割竹形木棺から長持形石棺への変換がみられることが知られているが、そうした棺制の変化以外にここに記したように石室石材にも変化が生じている可能性が大きい。つまり、中小の古墳ではそれまでと同様に二上山産の玄武岩、安山岩のみで竪穴式石室が築かれ、さらに、粘土槨や木棺直葬が主要な葬制となってくる。それに対して大形古墳では、玄武岩・安山岩に結晶片岩、石英円礫を加えた石材構成が基本的な形となり、さらに長持形石棺を用い、中小の古墳との格差をより明確に表示するようになると考えられる。

さて、これら結晶片岩・石英円礫がどこからもたらされたかという問題にふれておこう。前述のようにこれらの石材の産出地は中央構造線ぞいの三波川変成岩帯と推定され、畿内に近い産地として紀伊、阿波をあげることができる。そのどちらの地域からもたらされたかは、岩石学的には両地域は一連のものであるため困難と言わざるをえない。しかし、両地域の古墳の動態を概観した場合、その推測は不可能ではないと思われる。

すなわち、紀ノ川流域において前期・中期古墳の分布はきわめて希薄であり、本格的な竪穴

式石室をもつ古墳はほとんど知られていない。それに対して、吉野川流域においては、竪穴式石室を内部主体とし、多数の碧玉製腕飾類（鍬形石3、車輪石3、石釧3）や平縁変形神獸鏡、小形変形方格鏡、倣製獸帯鏡などを出土した大形円墳の巽山古墳、Ⅱ期の埴輪をもつ全長50mの前方後方墳、奥谷1号墳、Ⅲ期の埴輪をもつ全長約90mの前方後円墳、渋野丸山古墳など、多数の古墳が築かれている（徳島市教委1981）（徳島考古学研究グループ1985）。

また、石英円礫の使用という点でも、萩原1号墓において中心主体の竪穴式石室の木蓋上に大量の石英円礫が置かれていたと推定されており、この地域では石英円礫の使用は弥生時代末までさかのぼる可能性が大きい。

これらの点からみて、畿内への結晶片岩・石英円礫の搬入が、その産出地の集団となんら関わりなしにおこなわれたのではないとすれば、畿内との関係を示す事象やそれ以前からの伝統がみられる地域にもとめるべきであり、結晶片岩や石英円礫は吉野川下流域から搬入された公算が強いと思われる14)。

## 10 結語

以上、吉備および畿内の竪穴式石室に使用された石材の概観をおこなった。その結果、前期古墳の竪穴式石室石材は板状の石材に強い指向を示し、とりわけ安山岩、玄武岩などの火山岩類が用いられることが多いこと、一地域内の古墳間で同一産地の石材が共有される例がしばしば見られ、それは古墳間の紐帯を示すものである可能性が強いこと、また、使用石材が古墳間の階層にかかわる可能性が強いことなどがあきらかになった。

この板状石材への強い指向を検討するうえで参考となるのが、同一古墳内での使用石材の差である。たとえば安土瓢箪山古墳では後円部中央石室のみが安山岩の板石によって築かれており、後円部の北西・南東の2石室は塊状ないし直方体をなす流紋岩類（石英粗面岩）を用いて築かれている（図13）。石室規模という点では極端な差は見られないが、板状石材への指向という点では両者の差は顕著である。

また、七つぐろ1号墳においては後方部中央石室には古銅輝石安山岩の板石を使用するのに対し、前方部石室は、規模の点でも後方部中央石室におよばないが、用いられる石材も花崗岩類の角礫である。さらに、香川県高松茶臼山古墳では後円部の中央石室には古銅輝石安山岩の板状角礫やそれを割ったものが用いられているのに対し、後円部第2石室に用いられる石材は古銅輝石安山岩とはいえ直方体をなす亜円礫、亜角礫であり、石材の形状は全く異なっている（香川県教委1970）（松本1983）（図3）。高松茶臼山古墳は古銅輝石安山岩の産地である屋島に近く、板状の石材が一般的に好まれていたというのであれば、その入手は困難なことではなかったろう。にもかかわらずそれがなされなかったのは、板状の石材は中心埋葬として築かれる長大な竪穴式石室においてこそ、意味をもつものであったためと考えられる。

弥生墳丘墓から前期古墳までの竪穴式石室を通観した場合、二者の間に構造、規模の点で著しい差がみられることは第4節において述べたとおりであるが、それに加えて前期古墳の竪穴式石室、とりわけ、ここに示したように中心埋葬となる竪穴式石室においては板状石材の使用

が強く指向されており、それは弥生墳丘墓の竪穴式石室には見られない特徴であることを指摘できる。

板状石材の使用は椿井大塚山古墳、中山大塚古墳、浦間茶臼山古墳など最古の古墳から見られ、それが前方後円墳の出現、長大な竪穴式石室の成立と同時に始まったのは確実である。そして、それは大和、河内や吉備にとどまるものではなく、島根県神原神社古墳や香川県鶴尾神社4号墳など、各地域の前期古墳に共通してみられる現象であり、ここでの検討からあきらかなように、板状石材を得るため多大な労力の投下がなされている。こうした点からみて、板状石材への指向は前期古墳の竪穴式石室の重要な属性であったことは確実である。第4節において述べたように前期古墳の竪穴式石室はいずれも壁面が内傾し、またそのため壁体にはかならず控え積みが見られる。板状石材はこうした構造をもつ竪穴式石室に最適の材料であったと考えられ、前期古墳の長大な竪穴式石室は、基本的に、板状石材を用いて築くものとして成立した可能性が強く、板状石材の使用は竪穴式石室がみたすべき条件、規格として保持されたと考えられる。

そして、そのため中心埋葬となる竪穴式石室において最も顕著に板状石材への指向がみられ、また良好な板状石材の乏しい地域では遠隔地からの石材の搬入がなされるに至ったと考えられる。

特殊器台形埴輪の分布等から吉備南部の集団が古墳祭式の創出に深く関与していたと考えられるが、この地域の前期前半の古墳に古銅輝石安山岩の搬入がなされているのも、竪穴式石室にとって板状石材の使用が重要な条件であることを十分に認識しており、それを満たすためにおこなわれたものとみられ、さらに、大和の古墳と同様な石材の使用を意図したがために、長距離の運搬を労とせずその使用がなされた可能性も考えられる。

そして、古銅輝石安山岩が板状の石材として最適のものであり、その入手のために多大な労力が投入されたものであればこそ、その使用が吉備南部の首長間の紐帯を表象するものとしての意義をもち、首長墓のみに用いられるものとなったと判断される。

前期古墳の竪穴式石室の創出に際して新たに付与された属性として、棺の長大化とそれに伴う石室の長大化（近藤1983）、埋葬頭位の北への指向（都出1979）などが指摘されている。それに加えてここに述べたように、石室壁面の内傾、すなわち棺を納めて後に石室を築くという構築法の確立、そして板状石材の使用への強い指向もまた、それまでみられなかった点であり、弥生墳丘墓から古墳への飛躍に際し竪穴式石室に付与された要件であったと考えられる。

竪穴式石室はこうしたさまざまな新しい要素にもとづいて成立したとみられ、古墳祭式の中核の場として、また、石室の構築自体が一つの儀礼として機能することとなる。

石材の配しかた、割石の使用頻度等の検討や岩石学にもとづく分析をより広範に行なうことにより、古墳間の親縁性や時期差等についてさらに細かく分析できると思われる。今後、ここで十分に検討できなかった問題とともに、そうした面からさらに検討をおこなっていきたい。



## 11 おわりに

以上、石材の分析を中心に竪穴式石室についての検討を試みた。吉備以外の地域の状況についてはその素描にとどまらざるをえなかったが、若干ではあれ石材のもつ情報を引き出すことが可能であった。各地域の石材の動態の把握のためにはそれぞれの地域での面的な調査が必要であり、また、その集積によって石材の評価もより明確なものになると思われる。特に、発掘調査がなされる際は石室の規模にかかわらず、資料の採取と分析が望まれる。

筆者は都月坂1号墳、七つぐろ古墳群などの発掘調査にたずさわる機会があり、石材の問題に取り組んだが、それについて、多忙な研究活動のなかにもかかわらず、分析の労をいとわず、終始適切な教示を与えて本稿に導いていただいた妹尾護、曾根賢二両氏に深く感謝したい。

なお、第5・8節の岩石記載とその評価は妹尾護氏の検討、教示にもとづくものである。

本稿の執筆にあたっては近藤義郎先生から資料の提供はもとより、多大な教示、指導をいただいた。

また、秋山浩三、扇崎由、高井健司、平井勝、北條芳隆、吉留秀敏の各氏からはさまざまな教示、助力をいただいた。末筆ながらあつく御礼申し上げたい。

## 註

- 1) 後述のように安山岩とされた石材のうちいくつか（柳本大塚古墳、松岳山古墳など）は、玄武岩である。
- 2) 安山岩のほか片麻岩が用いられているとされる。両者がどのように用いられていたかはあきらかでない。
- 3) 楯津墳丘墓の石室、奥11号墳1号石室では底面に石が敷かれている。また、鑄物師谷1号墓の場合も棺の側板下端を浅く埋め込んだだけでは棺の固定は困難と考えられる。
- 4) 都出比呂志氏は弥生墳丘墓の竪穴式石室に納められる横断面U字形の棺の候補として、割竹形木棺ではなく加美遺跡のC類木棺に近いものを想定している（都出比呂志1986）。しかし加美遺跡のC類の木棺には棺材の側縁に孔や抉りをもつものがあり、転用材の可能性が指摘されており（森1985）、それを普遍的な存在と考えることには躊躇せざるをえない。
- 5) 岡山県総社市教育委員会 村上幸雄氏の教示による。
- 6) 後述のように、前期古墳の竪穴式石室においては、石室の壁面をなす石材と天井石など、部位によって石材を使いわけの例はしばしば見られるが、壁面に複数種の石材を混用することは稀である。壁面に2種の石材を用いる例としては桜井茶白山古墳の石室があるが、この場合は石室の大部分は安山岩で築かれており、石室上部にのみ花崗岩が用いられている。完全に混在して用いているのは椿井大塚山古墳のみである。
- 7) 楯築墳丘墓墳丘斜面に用いられた石材も同様な組成を示しており、その量は少ないが足守川東岸から運ばれたとみられる砂質岩ないし泥質岩や流紋岩類がみられる。
- 8) A12 03、Na2 0においても同様な結果が得られる。

- 9) 本墳では安山岩と花崗岩の角礫が混用されている。こうした使用状況は他の古墳では見られず、前述の吉備の弥生墳丘墓の場合と類似したありかたである。
- 10) 現在石室は埋め戻されており、石材を確認することはできなかった。
- 11) 分析をおこなっていないため、それが(奥田1986)にあるように讃岐のものかどうか決定しえない。
- 12) 吉留秀敏、井沢洋一両氏の教示による。
- 13) 吉留秀敏氏の教示による。
- 14) 室大墓古墳の石材については、紀ノ川流域から搬入された可能性が考えられる。

#### 補注

本論文発表の後、白石純氏の分析によって吉備の前期古墳の竪穴式石室石材の採取地は備讃瀬戸の豊島、中期古墳のそれは四国北岸であることが示された(白石1991)。したがって、石材の産出地にかかる部分は一部修正が必要となるが、考古学的な評価に関して変更はない。

## 第4章 特殊器台形埴輪に関する若干の考察

## 1 はじめに

吉備において成立した特殊器台形土器・特殊壺形土器は前方後円墳の成立とともに特殊器台形埴輪・特殊壺形埴輪に転化し、やがて円筒埴輪・朝顔形埴輪の成立をみる。

特殊器台形埴輪においては、かつて特殊器台形土器に見られた脚部が失なわれ、口縁部もきわめて矮小化したものとなりそこには大形の鋸歯文が施される。筒部には6条の突帯がめぐらされ、隔段に3段の文様帯をもつ。文様は透かし孔とヘラ描きの平行沈線によって構成され、蕨手文と斜行して入り組んだ直線の帯の表現からなるものが最も多い(図1-1)。

特殊器台形埴輪は、その特性から単に埴輪の研究、前期古墳編年の手がかりとなるにとどまらず、前方後円墳の成立、古墳祭祀の成立とその普及、また、前方後円墳成立期における畿内と吉備の関係といった問題を考えるうえでの重要な手がかりとなることは明らかである。筆者はかつて特殊器台形土器・特殊壺形土器について若干の検討を行なった(宇垣1981)。その中で特殊器台形埴輪・壺形埴輪についてもふれたが、そこでは特殊器台形土器・特殊壺形土器の検討に重点を置いたため、ふれることができなかった部分も多い。またそれ以後、徐々にではあるが、特殊器台形埴輪の資料も増加し、また、出土古墳についての知見も蓄積されてきた。ここでは特殊器台形埴輪・特殊壺形埴輪・壺形埴輪について、その編年・製作集団等を中心に分析を行なう。ただし、発掘資料はきわめて少なく、後述のように多くは表面採集によるものであるため、分析にたえる資料はきわめて限られる。したがって、まず、今までに集積することができた資料についてその提示を行ない、それをもとに分析を行なう。なお、名称の煩雑さを避けるため、ここでは、都出比呂志氏による埴輪編年のB様式(都出1979・1981)、川西宏幸氏による編年の1期(川西1978)、春成秀爾氏による編年のⅡ期(春成1977)の埴輪以降を円筒埴輪と呼び、それに先行し先述した特徴を有するものを特殊器台形埴輪と呼ぶ。また、特殊器台形埴輪に伴う壺形の埴輪のうち、肩部が強く張り、そこに2ないし3条の突帯をめぐらせるものを特殊壺形埴輪と呼び、岡山市都月坂1号墳出土資料に代表される肩部に突帯をもたないものを壺形埴輪と呼ぶ(図12-3)。

## 2 研究の現状

特殊器台形埴輪に関する研究は、都月坂1号墳の発掘調査(水内1959)にはじまり、弥生墳丘墓およびそれに伴う特殊器台形土器をはじめとする土器類の調査・研究が進展するなかで、その位置づけが明確化され、「埴輪の起源」においてその評価が示された。そこでは特殊器台形土器から特殊器台形埴輪への型式学的変化が示される一方、その性格の変遷についての考察

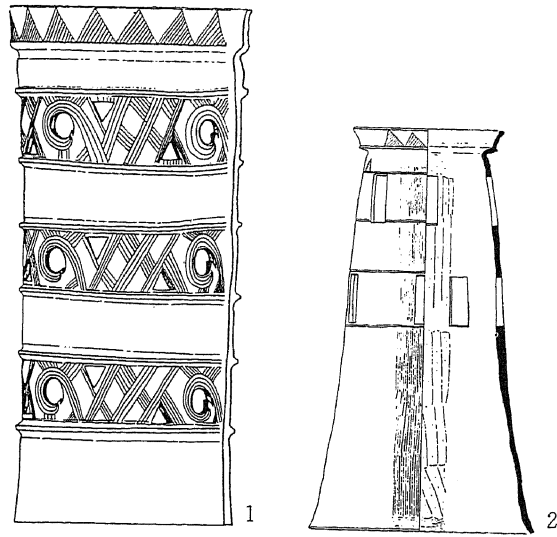


図1 特殊器台形埴輪 (S=1/12)

1. 都月坂1号墳 2. 神原神社古墳

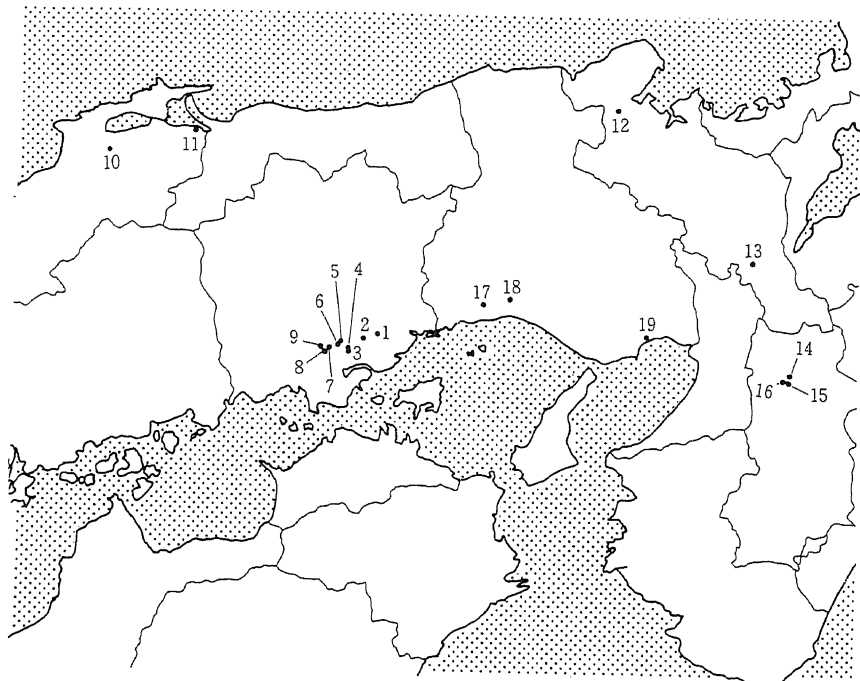


図2 特殊器台形埴輪出土古墳および関連古墳

1. 浦間茶白山古墳 2. 宍甘山王山古墳 3. 操山109号墳 4. 網浜茶白山古墳 5. 都月坂1号墳 6. 七つぐろ1号墳 7. 中山茶白山古墳 8. 伊能軒遺跡 9. 矢部大ぐる古墳 10. 神原神社古墳 11. 造山1号墳 12. 谷垣遺跡 13. 元稻荷古墳 14. 西殿塚古墳 15. 箸墓古墳 16. 纏向遺跡 17. 権現山51号墳 18. 丁瓢塚古墳 19. 処女塚古墳

がなされる。それによれば、埴輪は農耕祭祀供献具としての器台・壺が首長の呪的権威の発展の過程で特殊器台・特殊壺へ変化し、さらにそれが仮器的形象化をいちじるしくすすめられて成立したものととらえられ、そのことは共同体の飲食物供献儀礼が高度に抽象化され「首長権の継承者への永遠の供献・奉仕を意味する象徴的形骸に転じた」ことを示す（近藤・春成1967）と位置づけられた。

それ以後、資料の紹介・報告、またそれらの各地域における位置づけがなされる一方、都出比呂志氏（近藤・都出1971）、春成秀爾氏（春成1977）らによって特殊器台形埴輪から円筒埴輪への移行についての検討、前期古墳・埴輪編年上の位置づけがなされた。また、川西宏幸氏（川西1973）、橋本博文氏（橋本1981）らによって研究動向の整理、問題点の指摘が行なわれているが、特殊器台形埴輪に関する研究において、なお未解決あるいは不明確とみなされるいくつかの点がある。その主なものを取りまとめれば、それは、埴輪の多量配列の開始はどの段階であったのか、特殊器台形土器から円筒埴輪へ至る変遷のなかでその生産の画期がどこにあり、それは多量配列といかにかかわるのか、また、円筒埴輪は特殊器台形埴輪からどのような型式学的変化をとげて成立したのかという3点である。このうち、特殊器台形埴輪から円筒埴輪への変遷については、吉備、畿内ともに古式の円筒埴輪の資料がきわめて乏しいため、なお詳細な検討は行なえていない。

また、最近の研究として、春成秀爾氏による奈良県箸墓古墳出土資料の検討がある。氏は箸墓古墳から出土した特殊器台形埴輪文様の復原・分析を行ない、さらにそれと畿内・播磨・吉備の資料との対比を行なっている。氏によればこれらの資料のうち都月坂1号墳出土資料の文様が最も古式であり、さらに同墳ではすでに埴輪の多量配列がみられるとし、「円筒埴輪（ここで述べる特殊器台形埴輪・筆者）、そしてそれを大量に配列する方式の成立地は、吉備地方に求めざるをえない」と結論づけている（春成1984）。

### 3 特殊器台形埴輪を伴う古墳

#### (1) 分布（図2）

分析に先立ち、まず、特殊器台形埴輪を伴う古墳とその出土資料について提示しておく。

数多い前期古墳のなかで特殊器台・壺形埴輪を出土する古墳はきわめて少なく、備前に岡山市浦間茶臼山古墳、宍甘山王山古墳、網浜茶臼山古墳、操山109号墳号墳、七つぐろ1号墳の6基、備中では倉敷市矢部大ぐる古墳（春成1984）、伊能軒遺跡、岡山市中山茶臼山古墳（岡山市教委1975）の3基で、吉備全体で9基の古墳・遺跡が知られている（図2）。

吉備以外では播磨に兵庫県権現山51号墳（前方後方墳48m）（松本・今里・池田1984）が知られ、出雲には特殊壺形埴輪と「山陰型」特殊器台形埴輪（図1-2）をもつ島根県神原神社古墳（方35）（前島・松本1976）がある。そして大和では奈良県箸墓古墳（前方後円280）（中村・笠野1976）（奈良県立橿原考古学研究所編1981）（春成秀爾1984）、纏向遺跡（石野・関川ほか1976）、西殿塚古墳（前方後円219）（奈良県立橿原考古学研究所編1981）の3古墳・遺跡、山城に京都府元稲荷古墳（前方後円94）（近藤・都出1971）が知られている。

また、ここでは詳しくはふれないが、奈良県纏向遺跡においては通有の特殊器台形埴輪片の他に山陰型の特殊器台形埴輪（山陰型「特殊埴輪」）とされる破片が出土している。外面に多数の竹管文が施されており、鳥取県徳楽方墳出土資料（倉光1932）との関連においてこの名称が冠せられている。島根県造山1号墳（方60）（山本1970）、先述した神原神社古墳、京都府谷垣遺跡（埴輪棺）（杉原ほか1979）（田中1982）などの資料はその形態の共通性、分布等からみて、山陰型特殊器台形埴輪と呼ぶのが妥当であろうし、また、山陰地域でそれまで大形器台を墳墓に供献する例がまれなこと、神原神社古墳では特殊壺形埴輪を伴うことなどからみて、それらは吉備に起源をもつ特殊器台形埴輪の影響のもとに成立したとみるべきである。一方、竹管文を多数施す埴輪の例としては兵庫県処女塚古墳（前方後方約69）（神戸市教委1981）、丁瓢塚古墳（前方後円約98）（櫃本・松下1984）出土の埴輪があり、先の纏向遺跡出土資料はむしろこれらとの関係を考えるべきであろう。

さて、特殊器台形埴輪の分布を見た場合、それはきわめて偏在性があるものと捉えられられる。分布の中心は古備南部であるものの、かつての特殊器台形土器のような古備北部に至る分布を示さず、かわって備前南部を中心に大和におよぶ点的な分布を示している。また、その出土古墳も畿内では箸墓古墳、西殿塚古墳という前方後円墳出現期において最大規模の古墳であり、吉備の例にしても都月坂1号墳をのぞけば、以下にのべる浦間茶臼山古墳をはじめとして大形で卓越した墳丘・内部主体をもつ古墳が多く、小墳からの出土はない。このことは吉備と畿内の関係に限っていえば、吉備南部の首長連合が畿内の連合、なかでもその盟主といかなる形でかかわっていたかを物語るものと考えられる。

## (2) 吉備の特殊器台形埴輪出土古墳

これらの資料のうち、箸墓古墳、元稻荷古墳、権現山51号墳、矢部大ぐる古墳、都月坂1号墳、神原神社古墳の出土資料についてはすでに発表され、また春成秀爾氏による特殊器台形埴輪文様の分析（春成1984）に際して集成がなされているため割愛する。ここでは、分布の中心であり、また相互の比較を行なうことのできる吉備南部の資料を取りあげる（図3）。

以下、備前の特殊器台形埴輪出土古墳およびその資料について述べる。

### 浦間茶臼山古墳（岡山市浦間）

岡山県東部、吉井川西岸平野に張り出した低丘陵上に所在する大形の前方後円墳でバチ形に開く前方部を北東に向ける。吉備の最古式の古墳中最大の規模をもち、該期において畿外最大級の大きさである。全長138m、後円部径80mを測り、後円部3段、前方部2段の築成を示す。前方部は畑地化されているため墳丘の変形が著しいが奈良県西殿塚古墳と同様に、前方部のカーブにそった台形気味の方形壇をもつ可能性もある。後円部には墳丘主軸と直交して竪穴式石室が所在した。石室からは朱のほか鉄器・玉類・鏡等が出土したと伝えられるが、確実な出土遺物としては無茎定角式および有茎柳葉形の銅鏃のみである。

墳丘上で採集した埴輪は特殊器台形埴輪、特殊壺形埴輪であるが概して小破片、保存状態が不良なものが多い（図4・5）1～12は特殊壺形埴輪片で、1・3が口縁端部、4は口縁受部から外反して口縁端に続く部分である。6～9は胴部破片で、肩部に大ぶりの突帯をめぐらせている。突帯は特殊器台形埴輪のそれのように1回の粘土紐の貼り付けによって形成されるも

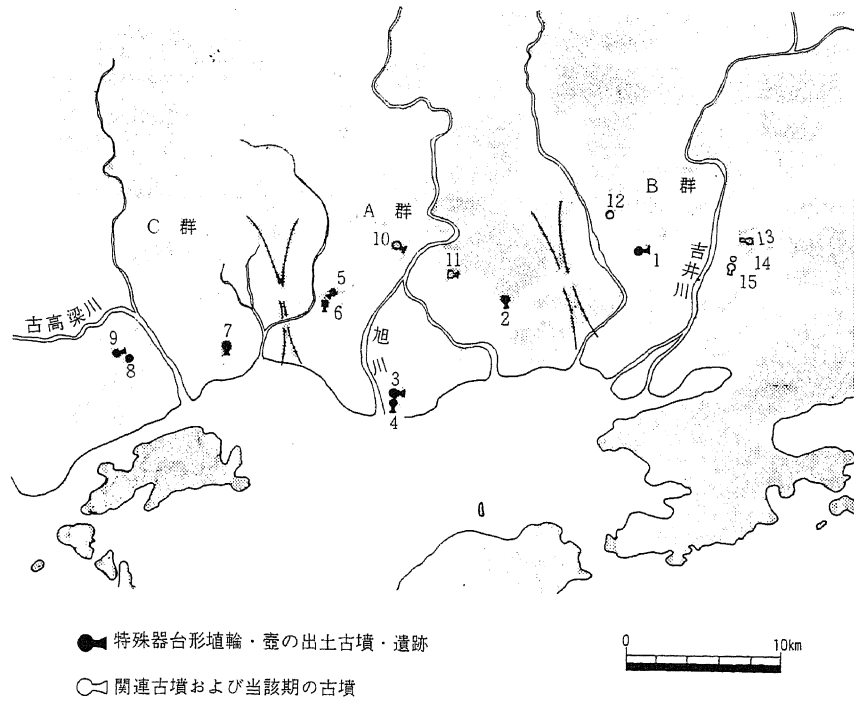


図3 吉備南部における特殊器台形埴輪出土古墳

1～9 図2参照

10. 片山古墳 11. 備前車塚古墳 12. 陣場山遺跡 13. 長尾山古墳 14. 新庄天神山古墳 15. 華光寺山古墳

のではなく、突帯の芯となるべき粘土紐を貼り付けた後、その上下に薄く粘土を貼り足すことにより形成されているものが多い。

器面調整に関しては、口縁部がナデ、胴部外面については不明であるが、内面上半部にはナデ、下半部には縦方向の強いユビナデが施されている。これらはすべて外面に丹が塗られていたと思われる。

13～34は特殊器台形埴輪で、13・14が口縁部片である他はすべて筒部片である。外面にはタテハケが施され、丹塗りが見られる。内面調整はタテハケあるいはナデで、部分的にヘラケズリも用いられている。

施される文様は大別して2種類ある。図示したのはそれぞれの復原図(図6)であるが、小破片からの復原であるため細部についてはあくまで現時点で想定できる復原案である。特殊器台形埴輪の文様復原を困難にしているのは、文様が特殊器台形土器文様の多くのように点対称図形とならないこと、そして同型式の文様どうしても個体差が大きく、どこまでが型式差でどこからが個体差であるかを判別するのが困難なことである。

さて、aは連続型の文様で、他の特殊器台形埴輪の文様と同じく蕨手文とその間に組み合う平行沈線帯によって構成される文様で、三角形と巴形の透かし孔を配している。右下側の三角形透かしの左辺部分の構成が不明であるため正確さを欠くものの、2つの蕨手文の間は右上がりの平行沈線帯を基調とし、それに左上がりの平行沈線帯が組み合っていると判断される。

bは分割型の文様であり、これに類するものは他の古墳においては知られない。文様は横方

向と縦方向の平行沈線帯を組み合わせたもので長方形の透かし孔をもつ。31はそのほぼ中央部分の破片と思われるものであるが、縦、横の平行沈線帯を井の字形に組み合わせ、その中に逆L字形の平行沈線帯を配している。このb類文様は箸墓古墳出土資料のうちⅡ類中段に施される複合斜線文（春成1984）、あるいは特殊器台形土器に見られる分割型文様とは全く異なった構成であり、伝統的な分割型文様から導き出されたものとするよりも、むしろ連続型文様の一部をもとに作成されたものと考えべき1)であろう。

#### 宋甘山王山古墳（岡山市宋甘）

岡山県の中央部を流れる旭川の下流東岸平野に張り出す小山塊上に位置する全長69mの前方後円墳で、前方部を南東に向ける。前方部はバチ形に開き、墳裾に接して3基の小方墳を伴っている。

特殊器台形埴輪（図7）は施文のないもので、他の資料と異なり口縁部はやや外傾している。外面調整はタテハケで丹塗りが施され、内面はナデ・ヘラケズリによって調整されている。透かし孔については三角形をなすもの以外は不明である。本資料は円筒埴輪によく似るが、明瞭な口縁部をもち、また口縁端は円筒埴輪の有段口縁のように稜をもたず、丸くおさめられていることから特殊器台形埴輪に含めることができると判断した。

壺形埴輪は図示しうるのは2の口縁部片のみで、他の部分については不明な点が多い。口縁部は大きく外反しており、受部の大きさに比してそれ以上がかなり大きいものになると思われる。

#### 操山109号墳（岡山市平井）

旭川下流平野南部に所在する操山丘陵の西端に所在する全長76mの前方後円墳で、前方部を南に向ける。現在、墓地および竹やぶとなっており、墳丘の損壊が著しいが、なお墳丘の形状をよくとどめている。後円部には竪穴式石室が所在するが、石室の規模等は不明である。石室の破壊の際に出土したであろう遺物については所伝が一切ない。

本墳は従来、埴輪をもたない古墳とされてきたが、ここに図示した特殊器台形埴輪・特殊壺形埴輪を伴うことが明らかになった（図8）。

1・2は特殊壺形埴輪で、1が断面台形の突帯をめぐらせる胴部片、2が胴部下端の穿孔部分の破片である。特殊器台形埴輪は3～7で、3が口縁部、4が胴部から口縁受部に移行する部分、5～7が筒部片である。このうち3の口縁部片にはしっかりした鋸歯文が施されるが、施文に先立ち内外面ともに縦方向の刷毛目が施されている。

文様をうかがうことが可能な資料は5～7の3点のみであるため文様全体を復原するにいたらないが、現在知られているいくつかの文様とはやや異なったものになる可能性が高い。6は、蕨手文の左側にくる三角形透かし孔の右側部分、7は2つの平行沈線帯が交差する部分、5は逆V字形となす平行沈線帯の一部であろう。

#### 網浜茶臼山古墳（岡山市赤坂南新町）

前述した操山109号墳に近接して所在する全長92mの前方後円墳で、前方部を東に向け竪穴式石室を内部主体とする。操山109号墳と同じく江戸時代以来、墳丘全体が墓地となっているため、墳丘、特に前方部の損壊が著しい。



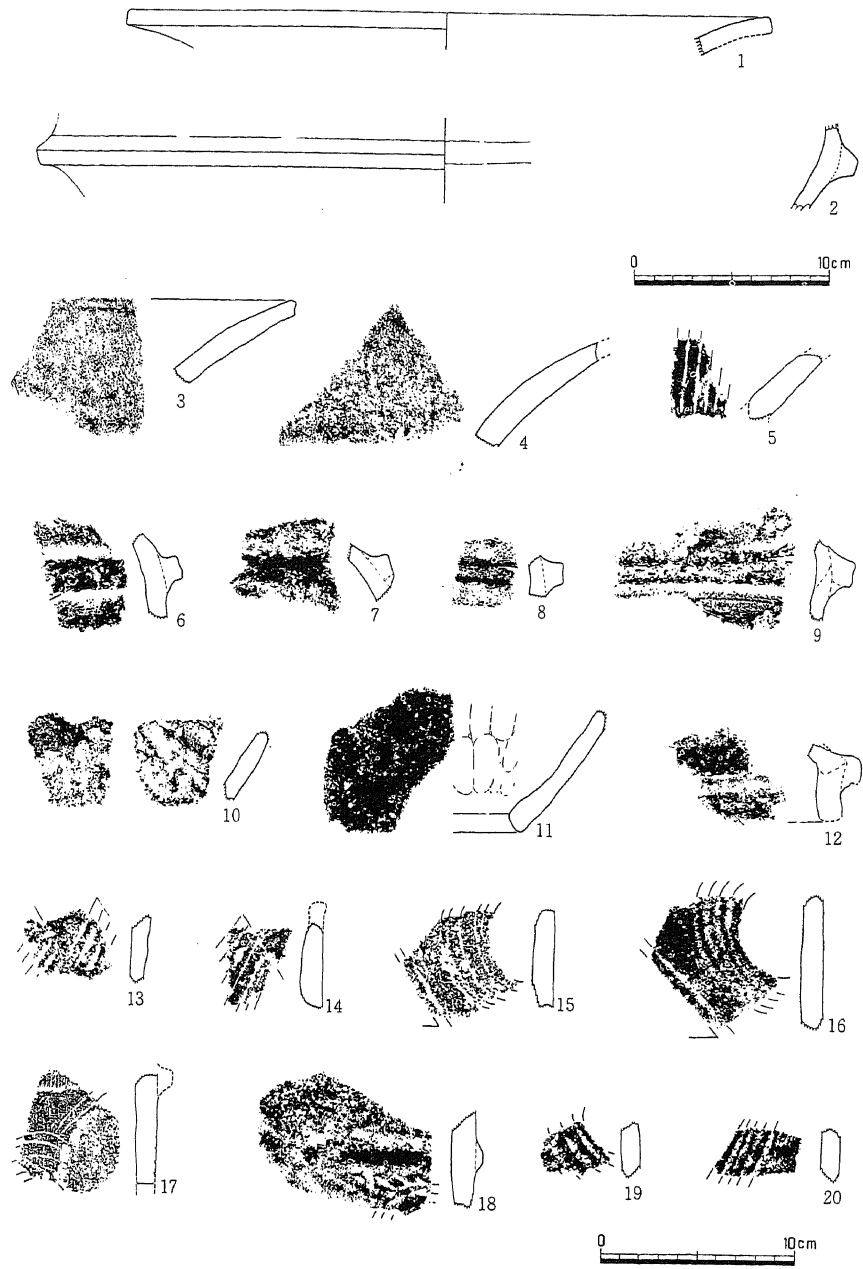


図4 浦間茶臼山古墳資料(1)

(1・2 : S=1/5 3~20 : S=1/4)

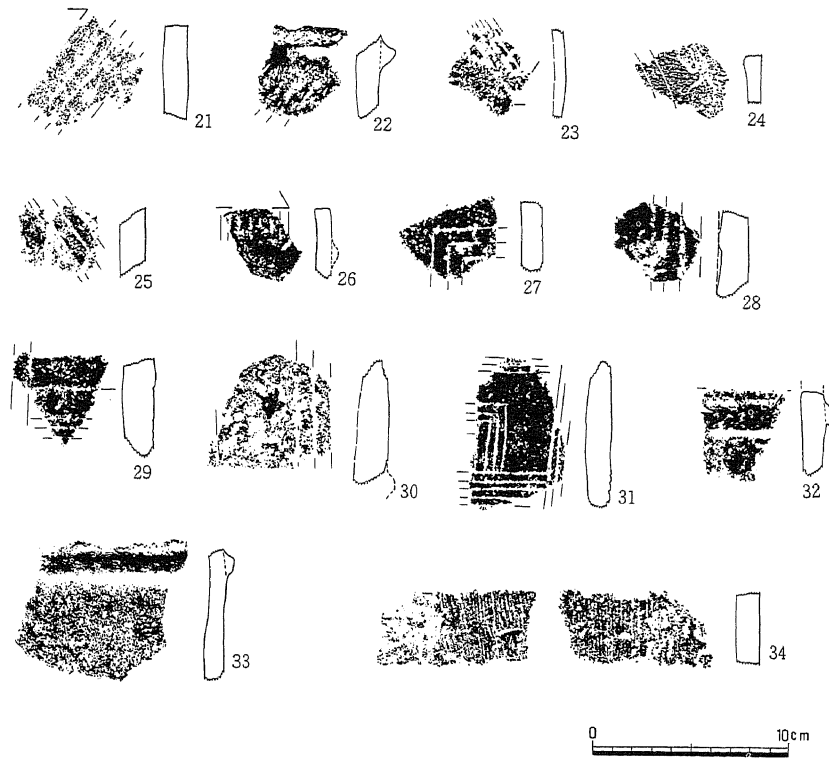


図5 浦間茶臼山古墳資料(2) (S=1/4)

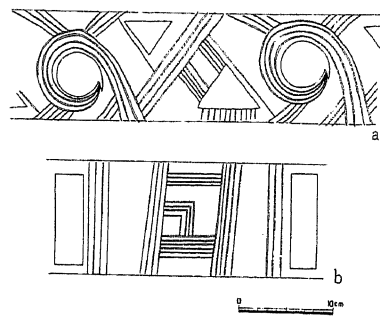


図6 浦間茶臼山古墳特殊器台形埴輪の文様 (S=1/8)

図9の1～4は特殊壺形埴輪で、1・2が口縁部、3・4が胴部片である。浦間茶白山古墳などの資料と同じく口縁部に鋸歯文の施されるものとそうでないものがある。肩部にめぐらされる突帯は比較的小さく、断面M字形をなす。胴部外面はナデ調整、内面には強いユビナデが施される。

特殊器台形埴輪については、口縁受部等も採集しているが、ここに示すのはいずれも筒部片である。外面はタテハケ、内面はタテハケののち部分的に横方向のヘラケズリが施される。文様(図10)は都月坂1号墳a類文様に類似したものになるようであるが、蕨手文はやや小さく、その一方、平行沈線帯は全体に幅広である。また、図9-9から2つの三角形透かし孔の間をすべて右上がり平行沈線で充填する文様の存在が考えられる。そのほかに16では特異な透かし孔の配置を示すが、どのような文様がくるのか不明である。

#### 都月坂1号墳(岡山市津高本町)

特殊器台形埴輪がはじめて確認され、都月型埴輪の名祖となった古墳である。

旭川下流西岸平野の北縁を東西にのびる半田山丘陵上に位置する全長33mの前方後方墳で、前方部を西に向ける。後方部には全長約4m、幅80～60cmの竪穴式石室があり、盗掘を受けていたが、鉄剣、鉄斧、碧玉製管玉が出土している。出土埴輪についてはすでに詳細な報告がなされているため、ここでは簡単にふれておく。

特殊器台形埴輪は大小2種類、器高約80cm、径約36cmの大形品(図1-1)と径約20cmで口縁部が外反して終わる小形品からなる。外面調整はタテハケ、内面調整はタテハケののちナデを基本とし基部内面のみ横方向のヘラケズリが施される。大形品の文様はa、b2種に分類される。a類は図1-1に示すように蕨手文とその間に充填される斜め方向の平行沈線帯によって構成される。b類は「斜め蕨手文が、重圏文とそれに接した1辺は弧線で他辺は直線となる山形の複数条線文に分解したもので、それから先はa類と同じ構図になるとおもわれる文様」とされている。実見によれば、蕨手文部分の左上方部にV字形をなす平行沈線帯がくることを特徴とし、その他はa類と同じ構図をとる文様とすることができる。

これに伴う壺形埴輪は発達した二重口縁部、中ぶくらみの頸部をもち、胴部は玉葱形を呈し底部には焼成前穿孔がなされている。外面調整はナデあるいは刷毛目、内面には強いユビナデが施され、底部穿孔部分の近くではヘラケズリが施される。なお、壺形埴輪では外面全体に、特殊器台形埴輪では基部を除く外面に丹塗りがなされている。

#### 七つぐろ1号墳(岡山市津島・笹ヶ瀬)

都月坂1号墳の南西約600m、同一の山塊から派生する尾根上に位置する全長45mの前方後方墳である。古墳の所在する南北方向の狭い尾根上には1号墳のほか小規模な方墳・円墳9基が連なっており、そのうちの2基(2・3号墳)については、本墳とともに岡山大学考古学研究室による調査がなされている(岡大七つぐろ古墳群調査団1982)。

2号墳は約8m×10mの方墳、3号墳は径13mの円墳で粘土槨を内部主体とするが、後世の攪乱、破壊が著しく副葬品等については不明である。

1号墳は前方部を南に向ける前方後方墳で、ゆるやかに下降する尾根上に築かれているため、前方部前面から見た墳丘は同規模の古墳と比較してみても非常に堂々とした感じを受ける。後

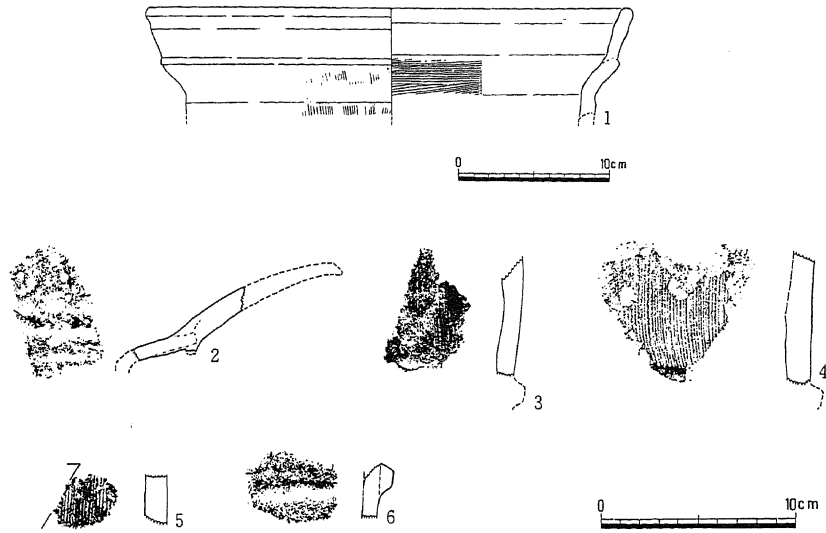


図7 央甘山王山古墳資料 (S=1/4)

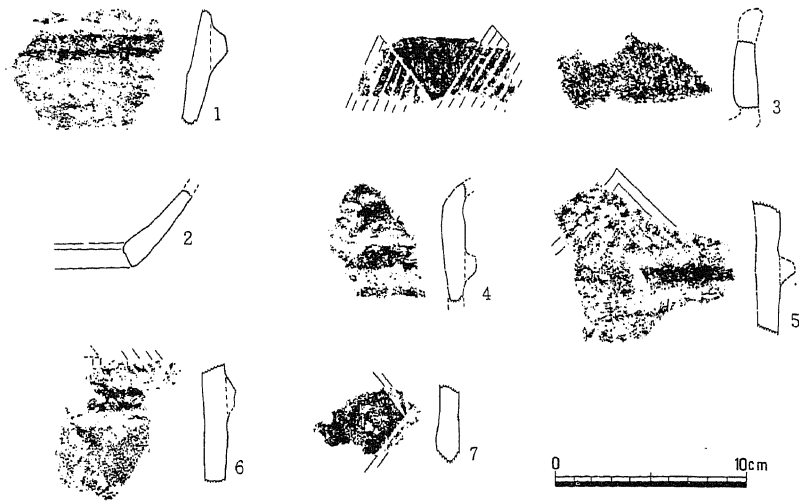


図8 操山109号墳資料 (S=1/4)

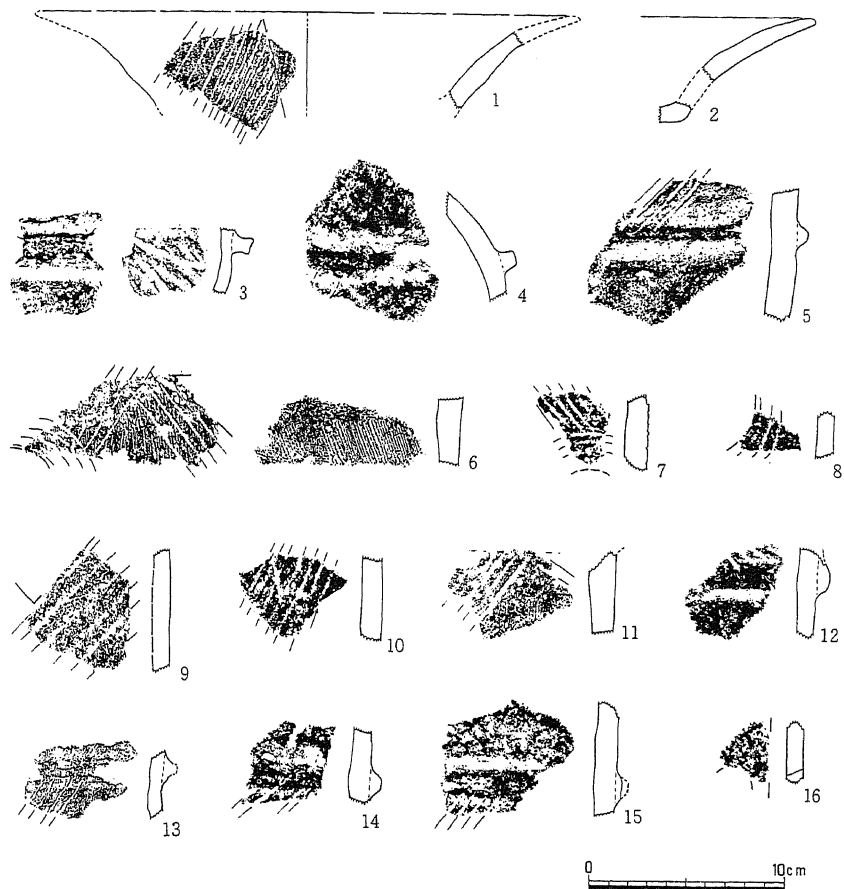


図9 網浜茶臼山古墳資料 (S=1/4)

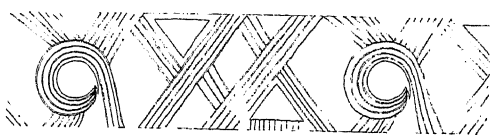


図10 網浜茶臼山古墳特殊器台形埴輪の文様 (S=1/8)

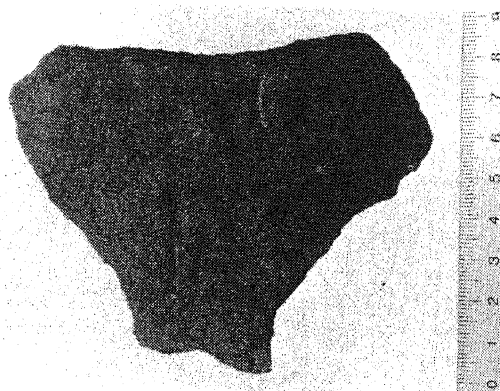


図11 操山109号墳特殊器台形埴輪 (内面)

方部には長さ5.2m、幅1～0.9m、高さ約1mの竪穴式石室が墳丘主軸に平行して構築されており、古く盗掘を受けていたが石室内からは鏡片・管玉が、棺外頭部側からは鉄斧・剣・刀子・鎌・ヤリガンナが出土している。また、前方部にも主軸に直交して小形の竪穴式石室が検出されたが副葬品については盗掘のため不明である。

埴輪は主に墳丘斜面から出土しており、都月b類の文様を施す特殊器台形埴輪と特殊壺形埴輪からなる。

特殊器台形埴輪を伴う吉備の古墳としては、これら以外に矢部大ぐろ古墳、伊能軒遺跡、中山茶臼山古墳がある。いずれも、楯築墳丘墓をはじめ大形の弥生時代墳丘墓が集中する足守川下流域に所在する古墳・遺跡である。

このうち中山茶臼山古墳は全長120mの大形前方後円墳であるが、現在陵墓として管理されている。また、矢部大ぐろ古墳は全長47mの前方後円墳であるが、かつて本墳から出土したと伝えられる資料が保管されているものの、現在墳丘には埴輪片は全く見られない。伊能軒遺跡では発掘調査により大形の溝状遺構が検出され、そこから特殊器台形埴輪数個体分が出土している<sup>2)</sup>。矢部大ぐろ古墳出土資料については春成秀爾氏により紹介がなされており、また中山茶臼山古墳は不明な点が多いためここでは割愛する。

#### 4 特殊器台形埴輪の製作集団—胎土の検討から—

特殊器台形埴輪の製作体制についての検討は、1つには埴輪生産の画期がどこにあるのかを考えるうえで重要な手がかりとなり、またもう1つには、資料をより限定して編年作業を行なうことを可能にする。

編年作業の前提という点に限ってこの問題を考えても、特殊器台形埴輪が特殊器台形土器の場合と同じく、一元的ないしそれに近い形での製作がなされ、配布されているのであれば、少なくとも吉備全域、あるいは特殊器台形埴輪をとりまとめて検討しても支障ない。一方、製作が各古墳ごと、つまりそれぞれの古墳を築造した集団ごとに行なわれていたとするならば、各資料の比較はより慎重を期さねばならないことになる。資料のグルーピングや製作集団の抽出にあたっては、文様、器形の特徴、内面調整等いくつかの分析視点が考えられるが、そのいずれについても資料が十分でなく、ここでは胎土の特徴に着目して分析を行なってゆく。

特殊器台形埴輪の胎土はそれまでの特殊器台形土器の胎土と全く異なったものである。特殊器台形土器の胎土が、おおむね暗褐色を呈し、土質はきわめて細かく、微細な石英・長石粒、風化して金色を呈する黒雲母粒、そして0.5mmから3mm大に及ぶ角閃石粒を含むものが一般的であるのに対し、特殊器台形埴輪の胎土は通有の古式の埴輪のそれにより近く、赤褐色～明褐色を呈し、石英、長石等の砂粒を含んでいる。ただし、吉備の古式の円筒埴輪の胎土と細かく比較した場合、特殊器台形埴輪の胎土は全般に細かく緻密であり、また、発色はやや明るく、全く同一といえるものではない。

これら特殊器台形埴輪の胎土を相互に比較検討した結果、これらに一定の差異を見出すことができ、資料のグルーピングが可能となった。

先に示した諸古墳のうち、操山109号墳の資料を例にあげれば、前述した含有物の他に径4～2mmの赤黒色を呈する粒を多量に含んでいる(図11)。破片により量の疎密はあるものの、5×5cmの範囲で10個内外を数えることができ、その含有量の多さと粒子の大きさは、それ以外の細礫、砂粒にくらべて非常にきわだったものであり、赤黒色という色調と相まって、非常に顕著な存在である。

この赤黒色粒子は不定形な塊状をなし、色調は全般に暗赤色～黒色を呈しており、ある程度の硬さをもっている。その組成は主に水酸化鉄とみられるが、蛍光X線分析によれば石英、斜長石の反応が認められ、そのことからやや塩基性の花崗岩質の岩石ないし風化土壌に由来する<sup>3)</sup>と判断される。

この赤黒色粒を含む胎土からなる特殊器台形埴輪は、先にあげた古墳のうち、操山109号墳のほか、都月坂1号墳、七つぐろ1号墳、宍甘山玉山古墳、そして粒子の含有量が少ないものの網浜茶臼山古墳の資料に限られており、浦間茶臼山古墳、伊能軒遺跡、矢部大ぐろ古墳、兵庫県権現山51号墳出土資料などには全く含まれていない。この胎土の共通する特殊器台形埴輪をもつ古墳はすべて旭川流域平野に所在しており、本平野の外の古墳にはこうした胎土をもつ資料は知られていない。特に、伊能軒遺跡出土資料をはじめとする足守川流域の資料では、かわって長石粒が目をはく存在となっている。

この赤黒色粒を多量に含有する胎土は、旭川流域平野の内外を問わず、この時期の土器には用いられておらず、また、特殊器台形埴輪に先立つ特殊器台形土器や、後の円筒埴輪にもほとんど見られないこと、その包含量がきわめて多いことなどからすれば、この赤黒色粒は胎土中に意図的に混入、あるいは、これを含む土が胎土として意識的に選択されたと考えることが可能である。

これらのことを勘案すれば、特殊器台形埴輪は地域的、時間的に限定された分布を示すものであり、そのことはこれらが特定の製作集団によって作られ、配布されたことを示していると判断することができよう。なお、こうした胎土の近似性はある製作集団の製作・配布によるものでなく、粘土の移動、つまり各集団により同一粘土の採取、あるいは調合が行なわれたと考えることもできようが、その場合、いかなる理由によってそれがなされたかを説明する明確な根拠を見出すことは困難である。したがって、特殊器台形埴輪においては、吉備南部の場合、旭川流域平野(図3-A群)、浦間茶臼山古墳の所在する吉井川流砂平野(図3-B群)、伊能軒遺跡等の所在する足守川流域平野(図3-C群)それぞれに製作集団が所在し、製作・配布がなされたと考えられる。

こうした特殊器台形埴輪の製作のあり方に対し、特殊器台形土器は胎土が共通しそれらが非常に広範な分布を示しており、先に述べたように胎土そのものも特殊器台形埴輪とは全く異なる。一方、円筒埴輪においては旭川流域平野においても先述した特徴の胎土を有する例はない。また、古式の円筒埴輪の例として、たとえば2基の前期古墳、備前市新庄天神山古墳、長船町花光寺山古墳の埴輪を取り上げれば、それらは時期的、地域的にきわめて近接したものであるにもかかわらず、胎土、製作手法ともに特殊器台形埴輪に見られるような共通性は見出せない。

これらのことからみれば、特殊器台形土器から円筒埴輪への変遷のなかで、生産体制の最大

の画期は特殊器台形土器から特殊器台形埴輪へ変化する時点であることはうたがいがなく、さらに円筒埴輪の成立時に、すなわち、特殊器台形埴輪の製作体系の消滅時に第2の画期を見出すことができると考えられる。

なお、旭川流域の5基の古墳でいえば、それらをどのような系譜として位置づけるかは議論の分かれるところであろうが、複数の系譜の古墳であることは確実であり、このことは、同一の製作集団の手になる特殊器台形埴輪を、ともに用いるという古墳相互の親縁性・結びつきをも示しているといえよう。

## 5 編年

前述のように、宍甘山王山古墳、操山109号墳、網浜茶臼山古墳、都月坂1号墳、七つぐろ1号墳の5基の古墳から出土する埴輪は、同一の集団によって作成されたとみなされるものであり、編年作業において製作集団差を念頭におく必要のないものである。したがって、まずこの一群の資料の検討を行ない、ついでそれらと他の古墳出土資料の対比を行なう。

先にも述べたがこれらの資料の多くは小破片であり、そこから復元できた文様は編年の大づかみな指標とはなるが、細かい検討は行ないにくい。一方、口縁部や基部等の形態、調整の比較も、その変化が乏しいうえに資料の不足を認めない。そのため、特殊器台形埴輪に伴う特殊壺形埴輪・壺形埴輪の分析をまず行なう。

### (1) 底部穿孔の系譜

特殊壺形埴輪・壺形埴輪の分析にあたっては、底部の穿孔部分の変化が1つの手がかりとなるため、まず、底部に穿孔をもつ壺形の埴輪の成立に至る過程を述べておく。

吉備において底部穿孔土器が数多く見られるのは弥生後期後半の墳墓遺跡である。後期前半については墳墓遺跡そのものの調査例が少ないため把握がむずかしいが、後期前半のいくつかの墳墓遺跡において葬送儀礼用土器の初期的な例が見られることや、集落の祭祀遺構と考えられる部分から出土する土器のいくつかに穿孔が見られることからすでに後期前半に底部穿孔が祭祀や葬送儀礼に際して用いられていた可能性は強い。後期後半の例はいずれも焼成後に鋭利な道具によって孔がうがたれるもので、穿孔の対象は壺形土器が中心であるが、高杯に施されることもある。

焼成の前に穿孔が施される土器の出現はそれよりもかなり遅れ、特殊器台第3型式（向木見型）の段階になってからである。特殊器台第3型式（向木見型）に伴う特殊壺形土器はきわめて薄い器壁をもつ。胴部内面に入念なヘラケズリが施されるのはもちろんであるが、しばしば胴部下半外面にもヘラケズリが施され、大形で発達した逆玉葱形の胴部をもつにもかかわらず、器厚数mmという非常に薄さに仕上げられている。

外面にヘラケズリが施されるものとしては、岡山県新見市西江遺跡出土資料（図12-1）（正岡・田仲・二宮1977）、赤磐市あたご山遺跡出土資料（狐塚1977）、岡山市生石神社墳丘墓出土資料4などがある。これらすべてに焼成前穿孔が施されているかどうかは、底部まで遺存している資料が少ないため不明であるが、焼成前穿孔が施されている資料を見ると、穿孔は内外



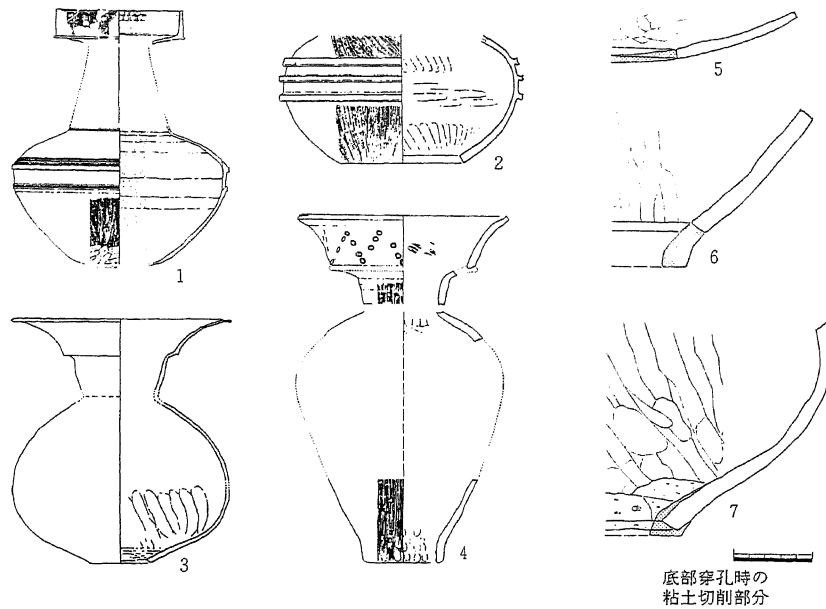


図12 焼成前穿孔の土器・埴輪

1 S=1/20 2・3・4 S=1/12 5・6・7 S=1/5

1. 特殊壺形土器 岡山県西江遺跡
2. 特殊壺形埴輪 奈良県箸墓古墳
3. 壺形埴輪 岡山県都月坂1号墳
4. 壺形埴輪 岡山県西山1号墳(54)
5. 特殊壺形土器の底部穿孔
6. 特殊壺形埴輪の底部穿孔
7. 壺形埴輪の底部穿孔(3・部分)

面の調整が終了して後に行なわれており、特殊器台形土器の文様帯の透かし孔と同じく、鋭利な工具によって切り取られている。そのため穿孔部分は断面が方形をなして終わっており、もし土器を平面上に置くならば、穿孔部分下側の角で器重をささえることになる(図12-5)。

こうした焼成前穿孔をもつ特殊壺形土器の出現は、特殊器台形土器・特殊壺形土器に代表される葬送儀礼用土器の儀器化が一層進み、特殊壺形土器の場合、容器としての機能と形態を捨て去り、儀器としての機能のみをはたすようになったことを示していると言えるであろうし、また、特殊壺形土器が地上に据え置かれることなく、特殊器台形土器の上のみで使用されるようになったことを示すとみられる。

## (2) 特殊壺形埴輪と壺形埴輪

こうした特殊壺形土器に後続する特殊壺形埴輪・壺形埴輪はどのように位置づけることができるであろうか。

前述した旭川流域平野の5基の古墳のうち、特殊壺形埴輪を伴うのは操山109号墳、網浜茶臼山古墳、七つぐろ1号墳の3基、壺形埴輪を伴うのは都月坂1号墳である。宍甘山王山古墳にも壺形の埴輪が存在するのは確実であるが、肩部の形状が不明であるため特殊壺形、壺形のいずれであるか決定できない。なお、両者がともに出土している古墳はない。

図12-3に示すように、特殊壺形埴輪は逆玉葱形をなす胴部、よく張った肩部にめぐらされる2、3条の突帯など、胴部に関しては特殊壺形土器の器形的特徴をよくとどめる一方、口縁部

は外反し、しばしば鋸歯文が施される。また、頸部は特殊壺形土器のそれと異なり、外に開き気味となる。このように特殊壺形埴輪は特殊壺形土器に類似する点、異なる点が相半ばしているように見受けられる。

これに対して都月坂1号墳出土資料に代表される壺形埴輪は、口縁部、頸部については特殊壺形埴輪と同様な形態をとる一方、胴部の形状は大きく異なっており、肩部に突帯をもたないのはもちろんであるが、胴部全体のプロポーシオンも玉葱形をなしている。すなわち、胴部中位ないしやや下方に最大径をもち、そのために特殊壺形土器、特殊壺形埴輪にくらべてずいぶん「なで肩」になっている。したがって、器形に関する限り、特殊壺形埴輪から壺形埴輪へという変化をみることができよう。

### (3) 穿孔部分の形状

特殊壺形埴輪の場合、胴下半部は、外面にはナデ、内面には縦方向のあらいユビナデが施されている。穿孔に際しては、器表にほぼ直交してヘラ状（刀子状）工具で切り穿たれるため、穿孔部分は特殊壺形土器のそれと同様、断面は方形に近く、胴下半部のカーブはそのまま穿孔部分に到達している（図12-6）。

それに対して都月坂1号墳の壺形埴輪では、調整にはさほどの差は見られないが、穿孔部分付近の形状がやや異なっている。すなわち、胴部最大径部分からほぼ球形気味に下降してのち、ゆるい外反気味のカーブをなして穿孔部分に至る（図12-7）。さらに、穿孔部分の断面は、穿孔面が器表に対して鈍角をなして交わるため、内面側はやや鋭角をなして突出した形となっている。内面側に穿孔部にそって施されるヘラケズリは、この内側へ突出する穿孔部分の端部をある程度削り落して器厚の極端な不均等をなくすることを目的としていると判断される。こうした点を勘案すれば、壺形埴輪はもともと底部を作り出さずに作成されており、その際にご厚く作った基部を製作終了段階でヘラケズリによって削いでいると思われる。

一方、特殊壺形埴輪では穿孔部の大きさから判断して、壺形埴輪と同様に底なしの壺として成形されたものと思われるが、製作時の基部を切り落して、特殊壺形土器の場合と同様に断面が方形気味の下端部を新たに作り出していると思われる。したがって穿孔部の調整についても特殊壺形埴輪のほうが人念かつ特殊壺形土器に近い形をとると判断でき、都月坂1号墳の壺形埴輪は特殊壺形埴輪に後出すると考えることができる。

ここで検討した資料は、第4節において述べたように同一の製作集団によって製作されたと考えられるものであり、以上の検討にもとづけば、弥生時代後期の特殊壺形土器を祖形として特殊壺形埴輪が成立し、その後に壺形埴輪が出現する<sup>5)</sup>と考えられ、特殊壺形埴輪と壺形埴輪が共存する（春成1984）とはみなしがたい。

### (4) 文様の検討・古墳の編年

この特殊壺形埴輪・壺形埴輪の型式学的関係をもとに、文様の検討と古墳の編年を行なう。特殊壺形埴輪を伴う特殊器台形埴輪のうち操山109号墳、七つぐろ1号墳出土資料では、その文様に蕨手文のほかに曲線表現が認められる。七つぐろ1号墳では、蕨手文左側にY字形をなす平行沈線帯を配する都月b類文様が主体をなし、それ以外の文様パターンはきわめて少ない。また、操山109号墳の資料においても先に図示したように逆V字形の曲線表現が認められる。な

お、網浜茶臼山古墳の資料では復原できたのは都月 a 類に類似した文様であるが、都月 b 類ないしそれに近い文様を含むか否かは不明である。

他方、壺形埴輪のみを伴う古墳、都月坂 1 号墳では文様は都月 a 類と b 類の 2 種があり、そのうち a 類が量的に卓越している。また、宋甘山王山古墳では文様は認められず、三角形等の透かし孔のみとなっている。

このように、文様についても先に想定した特殊壺形埴輪から壺形埴輪へという変遷に不都合な点はなく、大づかみに見れば、都月 b 類に代表される蕨手文の他に曲線表現を有する文様から都月 a 類の出現・卓越、そして文様の消失という流れをみることができる。ただし、これらの文様の基幹をなすモチーフが、蕨手文とその間に施される左下がりの沈線帯とそれに組み合わせる右下がりの沈線帯、という点では一貫しているといえる。

以上の諸点、また、特殊壺形埴輪の突帯の形状などから、ここにあげた 5 基の古墳の先後関係を検討すれば、

操山109号墳・七つぐろ 1 号墳



網浜茶臼山古墳



都月坂 1 号墳



宋甘山王山古墳

という組列を考えることができる。

この他の古墳の特殊器台形埴輪については、それに伴う壺形の埴輪の資料が欠けていたり、埴輪資料が少量にすぎることがあるなど、資料のばらつきが極端なため、網羅的な編年はここでは示さないが、たとえば、浦間茶臼山古墳、箸墓古墳はともに大きな突帯をもつ特殊壺形埴輪を伴っており特殊器台形埴輪の古い段階に位置づけられる。この 2 者では文様に蕨手文のほかに曲線表現は認められないが、それは製作集団の差によるものであろう。また、元稲荷古墳は都月坂 1 号墳よりもやや後出するとみなすのが適当である。

## 6 円筒埴輪の成立

### (1) 多量配列

それぞれの古墳でどれほどの量の特殊器台形埴輪が配列されていたかという問題は、多量配列 6) という円筒埴輪の重要な属性がいつ付加されたのかを考えるうえできわめて重要であるが、それを論ずることは容易でない。墳丘の全面調査がなされた例、あるいは個体数の算定が可能な調査例は都月坂 1 号墳、元稲荷古墳、七つぐろ 1 号墳の 3 例にすぎない。このうち、都月坂 1 号墳については調査団の一人春成秀爾氏によって、墳丘全体で 100 個体をこえる配列が想定されている（春成 1977）。また、元稲荷古墳では前方部が面的に調査されており、墳丘をめぐる埴輪列はなく、かわって前方部中央に特殊器台形埴輪 6、7 個体とほぼ同数の壺形埴輪を集中

配置した区画があることが明らかになっている（近藤・都出1971）。さらに、発掘調査によるものではないが、箸墓古墳においては埴輪等が採集された位置をもとに、特殊器台形埴輪・特殊壺形埴輪は後円部円形壇付近に、焼成前穿孔の壺形土器は前方部上に置かれていたと想定されている（白石・杉山1984）。

一方、吉備の古墳のうち、七つぐろ1号墳から出土した特殊器台形埴輪については近藤義郎・高井健司両氏による分析によって20～30個体分が出土していることが明らかになっている。それ以外の古墳では埴輪個体数は不明というほかはないが、たとえば規模において都月坂1号墳に数倍する浦間茶臼山古墳に都月坂1号墳なみの配列密度をあてはめれば、その個体数は相当なものになるであろう。しかしながら浦間茶臼山古墳に特殊形埴輪が存在することが判明したのはかなり新しいことで、それまでは埴輪をもたない古墳とされてきた。第3節に示したように、収集された資料も多いとはいいがたい。本例の場合、採集地点を考慮すれば、埴輪は後円部頂、前方部方形壇を中心に配列されていたと考えられる。こうした傾向は操山109号墳にしても同様で、筆者の採集にかかるまで埴輪をもたない古墳とみなされてきた。また、穴甘山王山古墳にしても同様で、過去に数片の埴輪片が採集されて以来、久しく埴輪の採集を聞かず、埴輪の存在がうたがわれかねないほどであった。

このように、発掘資料の少なさは否めないが、古備の特殊器台形埴輪出土古墳を概観した場合には、むしろ各古墳の配列個体数は必ずしも多くなく、多量配列すなわち埴輪による墳丘の圍繞はまだなされていない可能性が高い。

吉備以外の古墳、箸墓古墳、元稲荷古墳ともに吉備と同じく多量配列の例が見られないことから考えれば、多量配列の開始・成立は特殊器台形埴輪の後、円筒埴輪の成立に前後する時期であり、都出比呂志氏の指摘のように「普通円筒は、多量に配列することを契機に発生」した（近藤・都出1971）とみるべきであろう。

また、その場合、円筒埴輪成立の故地は必ずしも吉備と考える必要はなくなり、吉備の集団が積極的に介在した可能性は十分に考えられるが、前期古墳全体から見れば畿内をその成立地と考えることもまた可能であろう。

## (2) 古式の円筒埴輪

最後に、特殊器台形埴輪に後続して成立する円筒埴輪のうち古式のものについて簡単にふれておきたい。古式の円筒埴輪、川西宏幸氏の編年でⅠ期ないしⅡ期とされる資料も、特殊形埴輪と同じく分析にたえるものはきわめて少ないが、それらを概観すれば、器形、調整ともに非常に多様性を見せる。

内面調整にはナデ、ハケメ、ヘラケズリ等が用いられるが、その施し方は古墳によってかなりの差を示しており、それは外面調整についても同様である。

器形の点では外反気味に口縁部を収める通有の円筒埴輪の他に、特殊器台形埴輪の口縁部の形態をとどめ二重口縁ふうの口縁をなす群馬県朝子塚古墳（橋本1976）、奈良県メスリ山古墳（伊達ほか1977）、同小半坊塚古墳（置田1977）などの資料があり、逆ハ字形の口縁部を有する例もしばしば見受けられる。また、筒部に施文のある例としては大阪府玉手山9号墳（安村ほか1983）、奈良県東殿塚古墳、同燈籠山古墳（奈良県立橿原考古学研究所編1981）などの資

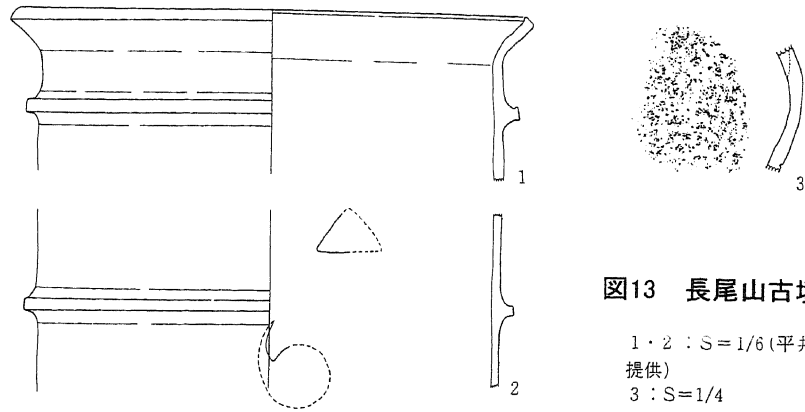


図13 長尾山古墳資料

1・2 : S=1/6 (平井勝氏提供)  
3 : S=1/4

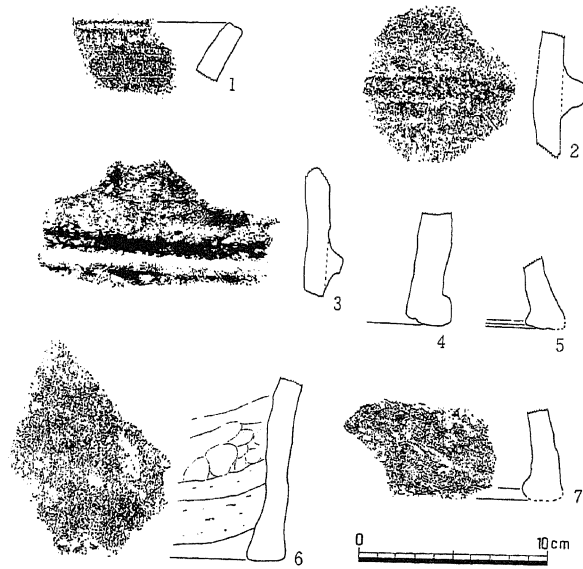


図14 花光寺山古墳埴輪 (S=1/4)

料がある。

吉備の資料に限ってみても瀬戸内市花光寺山古墳（梅原1937）出土資料（図14）は定形的な円筒埴輪の形をとるのに対し、備前市長尾山古墳出土資料（図13）では短いながら二重口縁ふうの口縁部を作り出し、巴形、三角形の透かし孔をもっている。また、岡山市陣場山遺跡円筒棺群には逆ハ字形の口縁部をもちそこに鋸歯文を施す例がある。

このように古い円筒埴輪のうちには、定形的ないしそれに近い形態をとるものの他に、特殊形埴輪に近い形態を示すもの、特殊器台形埴輪そのものの形をなお残すものなどがある。こうした様々な特徴をもつ円筒埴輪のうち、確実に通有の円筒埴輪との共存を示さない資料のいくつかは、特殊器台形埴輪から円筒埴輪への移行型式として整理することができるであろうが古式の埴輪資料がきわめて僅少な現状ではその作業は困難といわざるをえない。

また、施文、形態などの点で特殊器台形埴輪の特徴を残す資料のうち通有の円筒埴輪と共に樹立されるもの、その典型的な例として奈良県メスリ山古墳墳頂部出土資料がある。ここでは後円部頂の方形区画の要所に、施文こそもないが特殊器台形埴輪そのものの形をとる巨大な埴輪が用いられており、それには大形の高杯形埴輪が載せられていた。この例から判断すれば、定形的な円筒埴輪出現以後も、墳頂部等埴輪祭式の中核部において特殊器台形埴輪の伝統がなお遺存していたと思われるが、そうした例は、有文のものを含めてもきわめて少数である。

おそらくは、埴輪の普及、普遍化に伴う埴輪工人の編成が行なわれるなかで、特殊器台形埴輪の意義、伝統が伝えられた工人集団・造墓主体は少なかったことを示しているのであろう。

以上、器形、文様等から特殊器台形埴輪と円筒埴輪の関係についてふれてきたが、こうした点以外に、特殊器台形埴輪と円筒埴輪で異なる特徴を示すものとして、基部の内面調整がある。多くの特殊器台形埴輪資料では基部内面にヘラケズリが施されていることはすでに述べたが、円筒埴輪においては基部内面にはタテハケの他、粗いヘラケズリ、ユビナデ等が施されている。

特殊器台形埴輪においては比較的端正な横方向のヘラケズリが用いられているため器厚はきわめて均等なものとなっており、基部の断面はほぼ方形をなしている。それに対して円筒埴輪では、そうした調整を用いる例もいくつか知られるが、多くの資料では調整が内面下端まで十分に施されていないため、断面が台形気味になり、特に、基部内面下端が突出しているものが多く認められる（図14）。

おそらくは特殊器台形埴輪では器厚が不均等になることを避けるため、ある程度粘土を積み上げた段階でそれを反転させて内面にヘラケズリを施しているのに対し、円筒埴輪ではそうした工程を省略し、内側上方からの調整・整形によって器厚を均等化させることを専らとし、反転を行なう場合も基部への簡単なユビオサエを施す程度であったため、こうした差が生じたと思われる。こうした基部内面調整の簡略化は、文様の消失、口縁部の変化等とならんで、個々としての埴輪の質的な低下ともいふべき変化を示すものであるが、それと同時に多量配列を前提としての製作個体数の増加に際しての省力化を示すものでもあるといえよう。

## 7 おわりに

特殊器台形埴輪についていくつかの点から分析を試み、特殊器台形埴輪・特殊壺形埴輪の型式学的変化、その製作集団、円筒埴輪への移行等について論じた。特殊器台形埴輪から円筒埴輪への変遷のなかにあつて特殊器台形埴輪は特有の分布をもち、また他とは異なる体制で製作されたことを解明したが、なお、残された問題は多い。吉備南部の諸古墳のうち備前車塚古墳などの埴輪を伴わない古墳の位置づけ、最古式の円筒埴輪の検討など、今後さらに調査、研究の必要がある。

ここで用いた資料は多くが小片であり必ずしも十分な検討をおこなうことができたとは言いがたい。資料の蓄積をまってまってさらに論を充実させ修正していくものとする。

本橋の作成にあたっては近藤義郎先生から多大な御指導をいただいた。

また、曾根賢治、都出比呂志、福本明、志水豊章、平井勝、秋山浩三、乗岡実、高井健司、北條芳隆の各氏、岡山大学考古学研究室学生諸氏からは資料の収集・検討にあたって非常な御助力をいただいた。末筆ながらあつくお礼申し上げたい。

なお、資料収集に際しては昭和58年度科学研究費補助金（奨励研究A）を受けている。

## 註

- 1) 連続型文様を分断して分割型の文様配置とする例として岡山県総社市宮山遺跡出土特殊器台形土器の一部をあげることができる。
- 2) 倉敷市教育委員会福本明氏の教示による。
- 3) 分析にあたっては九州大学理学部曾根賢治氏の手をわずらわし、多くの教示をいただいた。
- 4) 岡山市門前所在、径約20mの弥生墳丘墓。
- 5) ここで述べた底部穿孔土器の変遷は特殊壺形土器・特殊壺形埴輪、および特殊器台形埴輪に伴う壺形埴輪の3者に限つてのことであり、香川県鶴尾神社4号墳出土の壺形埴輪など、他地域の資料すべてに普遍化しうるものではない。
- 6) ここでは埴輪の多量配列は、壇など主体部の周囲・墳丘の段などの部分に埴輪を圍繞させる、という意味で用いている。

## 第5章 前期古墳における刀剣副葬の地域性

## 1 はじめに

古墳の副葬品を構成する遺物の一つに鉄器類がある。そのうち最も普遍的に見られるのは刀子やヤリガンナであるが、刀・剣もそれに次いでよく見られる器種であり、鏡や石製腕飾類などに比べてはるかに多い出土量を示している。

岡山市東部に所在する備前車塚古墳は三角縁神獸鏡を主体とする13面の舶載鏡が出土した前方後方墳で、吉備を代表する前期古墳の一つとして取り扱われてきた。しかしながらこの古墳には特殊器台形埴輪や古銅輝石安山岩で構築された竪穴式石槨など、この時期の吉備の前方後円・後方墳に普遍的に見られる要素が欠落しており、また、逆に特殊器台形埴輪等をもつ他の古墳では三角縁神獸鏡をもつ例が判明していない点から、その特異性が指摘されてきた（宇垣1987(第3章)）（近藤1991）（松木1994）。この備前車塚古墳の鉄器は刀・剣・ヤリ・鏃・斧などからなるが、剣には木質が遺存しており（図4）、副葬時には剣身に鞘が装着されていたと考えられる。鞘を装着したとみられる刀剣は畿内の前期古墳資料では一般的に見られるが、吉備においては他にほとんど例がない。

本章ではこの問題を端緒として副葬時の刀剣のありかたについて検討をおこない、畿内とそれ以外の地域における相違、さらに儀礼の伝播について考えてみたい。刀剣は数多い副葬品のなかの一器種にすぎず、副葬品全体の配置・取り扱いを検討するのが望ましいことは言うまでもなく、鉄器類に限っても斧やヤリガンナの取り扱いと併せて論じるべきであるが、検討可能な資料に限られてくる一方、論が多岐にわたることになるため、ここでは武器を代表する刀剣に問題をしばった。なお、資料の性格上、多くを報文に依拠せざるをえなかったが、刀剣表面の状態について記載のないものがかかりあり、配置の状態が記されていない報告書も少なくない。そのため、今後さらに詳細な検討が必要となることをあらかじめ付言しておく。

## 2 研究史抄

前期古墳に副葬された刀剣に関する研究は、その性格・意義についての論考と、遺物としての刀剣、すなわち外装の復元や刀身についての型式学的な研究、さらに刀剣を含む副葬品がどのように配列されるかという副葬品配置に関する研究の3者に区分できる。刀剣の型式や外装に関しては論に直接関わらないため割愛することとし、ここでは副葬刀剣の性格に関する論考と副葬品配置についての研究の成果を簡単に整理しておく。

刀剣類の副葬は小古墳を除いて一般的であるためであろう、それについての評価がなされることはそれほど多くない。藤井治左衛門氏は美濃長塚古墳の報文のなかで出土の刀剣に関して、現行の葬送習俗を引いて「木棺を護るべく両側に刀を配した」との見解を示している（藤井19



29)。また、内藤政光・後藤守一両氏は静岡県松林山古墳の報告において出土刀剣について「意義は除魔にありとしても、強ち付会の説ともなるまい」と述べ、辟邪<sup>1)</sup>を目的としたものとする見解を示しており（内藤・後藤1939）、後藤氏は後にも改めてこの評価を示している（後藤1941）。末永雅雄氏は被葬者に添えて置かれたものは遺愛の品・死後の生活に必要なものとし、棺外に多量に配置された刀剣については「境界線をつくる如き」と述べ、その性格については被葬者の保護あるいは閉塞と、二つの可能性を示している（末永1941）。被葬者の保護、つまり辟邪と断定せず閉塞の可能性も考えたのは刀の刃が被葬者に向けられて副葬された例を考慮したものと思われる。

副葬刀剣の意義を主題とした論考としては泉森皎氏の論文がある。氏は弥生時代から古墳時代後期までの副葬刀剣について配置を中心に分析を行い、弥生時代の副葬刀剣は武器の力によって悪霊の侵入を防ぐものであり、前期古墳のそれは悪霊の侵入を防ぐという辟邪の役割に加えて権力の象徴という性格も見られるとの評価を示している（泉森1985）。また、最近では菱田哲郎氏（菱田1993）、小山田宏一氏（小山田1995）が副葬品の配置や品目を検討するなかで武器・武具の意義を論じているが、両氏ともそれは辟邪のためのものであったとする意見である。

小林行雄氏は早くに副葬品が棺内・棺外に区分でき、両者には配置の時間差が想定されることを示し（小林1941）、特に棺外に刀剣を中心とする多量の鉄器が配置されることを指摘した（小林1962）。副葬された刀剣の意義については、棺内のそれは被葬者を盛装させるものとの見解を示しているが、棺外のものについては埋葬儀式の参列者によって配置された可能性を想定しつつも、一定の儀礼として配置されたと述べるにとどめている（小林1959）。

一方、月の輪古墳の副葬品について評価を行った近藤義郎氏は、副葬品をその配置をもとに佩用品、使用品、奉獻品の3者に区分し、刀剣については被葬者に接して置かれたものを使用品、足側に置かれたものを首長をとりまく集団の主要構成員からの首長霊に対する奉獻品と考えた（近藤1960）。さらに、前期古墳の副葬品全般にわたって配置に関する検討を行った用田政晴氏も近藤氏の見解を引き継ぎ、副葬刀剣は棺内で被葬者に近接して置かれたものと、棺外ないし棺内でも離れて置かれたものに区分でき、前者は被葬者の使用品、後者は長さが不揃いであったり小形品が多く、下位の首長からの奉獻品であるとする評価を示している（用田1980）。

また、刀剣に限った論ではないが、全国の前期古墳の副葬品配置を分析した今尾文昭氏は副葬品の配列が石槨・粘土槨の構築にしたがってなされていることを示し、各地の古墳で棺内、棺外、石槨外という3段階の配列のいずれまでが行われたかについて検討を行った。近畿には石槨外、つまり第3段階までの配列を行うものが集中し、関東・東北の古墳では配列は棺内で終了するなど、執行された配置儀礼に地域的な相違が見られることを指摘した（今尾1984）。

以上のように、多量に副葬された刀剣についての評価は、それを辟邪のためのものとする後藤、泉森氏らの見解と、奉獻品とみる近藤、用田氏らの見解の二つに分かれるとしてよいだろう。また、今尾氏の作業は副葬品の配置から前期古墳の地域性を読み取ることができる点で重要である。

### 3 副葬の位置と方向

#### (1) 副葬の位置

刀剣配置の検討にあたり、まず棺内・棺外の配置について整理しておく。棺内に副葬された刀剣は使用品、あるいは佩用品とされるものであるが、畿内の古墳ではそれに該当する例はごく少数である（今尾1984、藤田1989、宮原1989）。大阪府弁天山C1号墳（図2-1）では棺内に副葬されるのは玉類・石製腕飾類・鏡で、刀剣はすべて棺外に置かれている（原口・西谷1967）し、大阪府紫金山古墳でも棺内副葬品は鏡と玉類が基本で、刀剣類は被葬者足下側に置かれた小刀がそれと推定される程度である（小野山ほか1993）。これは、京都府椿井大塚山古墳（図2-4）、大阪府真名井古墳、駒ヶ谷宮山古墳（図2-2）など畿内の多くの古墳に共通して認められる特徴である。畿内（摂津～大和）の古墳のうち刀剣が棺内から出土しているのは大阪府和泉黄金塚古墳東槨・西槨、同弁天山B2号墳東槨など時期が下がるものに限定されている。畿内、大和・河内・摂津の前期古墳では基本的な棺内副葬品の構成は鏡と玉類であるとみてよい。

一方、近江の前期古墳では棺外のほかに棺内にも刀剣を副葬するのが一般的である。滋賀県安土瓢箪山古墳（図2-6）では棺外に刀剣15点が配され、さらに棺内の被葬者頭付近と足付近に剣がそれぞれ1点置かれている（梅原1938）。雪野山古墳でも棺外には刀、剣、ヤリ4点が置かれ、棺内には被葬者の両側に剣と刀各1点、さらに足下側に刀と剣が副葬されている（都出編1990）。畿内のうち山城・淀川流域地域の古墳でもこれらと同様、棺内に剣を配置する例が認められる。京都府寺戸大塚古墳前方部石槨では棺内の被葬者体側位置から剣が出土しており、頭上側にも多量の刀剣が置かれていた（梅原1955）。このほか長法寺南原古墳でも棺内に剣が配置されていた可能性が指摘されている（都出・福永編1992）。これらの例を重視すれば、この地域は大和～摂津とは異なり、むしろ近江と同様の配置をとっている可能性が考えられる。

畿内以外の地域では棺内にも刀剣を副葬するのが一般的である。たとえば兵庫県権現山51号墳では5点の剣・ヤリ先はいずれも棺内からの出土であり（近藤編1991）、静岡県松林山古墳、島根県神原神社古墳（図2-10）などでも刀剣は基本的に棺内に副葬されている。吉備においても後述のように刀剣は棺内に置かれるのが一般的であり、岡山県用木1号墳第1主体（図2-9）では棺内足側に刀、頭上側に剣が置かれている（神原1975）。

以上のように刀剣の副葬位置に関しては、棺内に副葬を行わない畿内中央部と、棺内に刀剣を副葬するそれ以外の地域という区分が可能であり<sup>2)</sup>、葬送儀礼の中で刀剣の位置づけがそれぞれの地域で若干異なっていたとみてよいであろう。

なお、大分県免ヶ平古墳、佐賀県一貴山銚子塚古墳、静岡県三池平古墳など、畿内以外の地域で刀剣を棺外にのみ配置する例が点的に認められる（図1）。この配置がそれぞれの地域で独自に生み出されたとは考えにくく、畿内の配置・儀礼がもたらされた結果とみるべきであろう。吉備の資料ではこの配置の確実な資料はないが、備前車塚古墳がそれに該当する可能性が考えられる。盗掘後の聞き取りであるためどの程度正確であるか不明であるが、刀、剣、ヤ

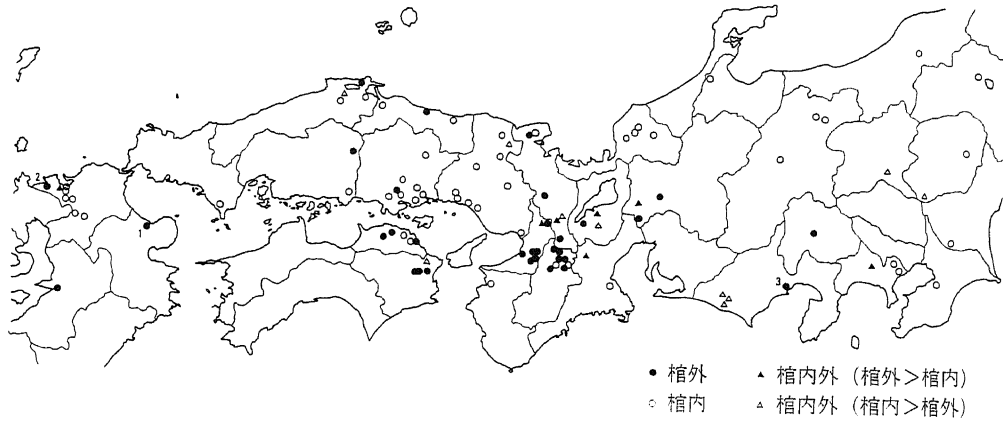


図1 棺外・棺内副葬の分布

1. 免ヶ平古墳 2. 一貴山鏡子塚古墳 3. 三池平古墳

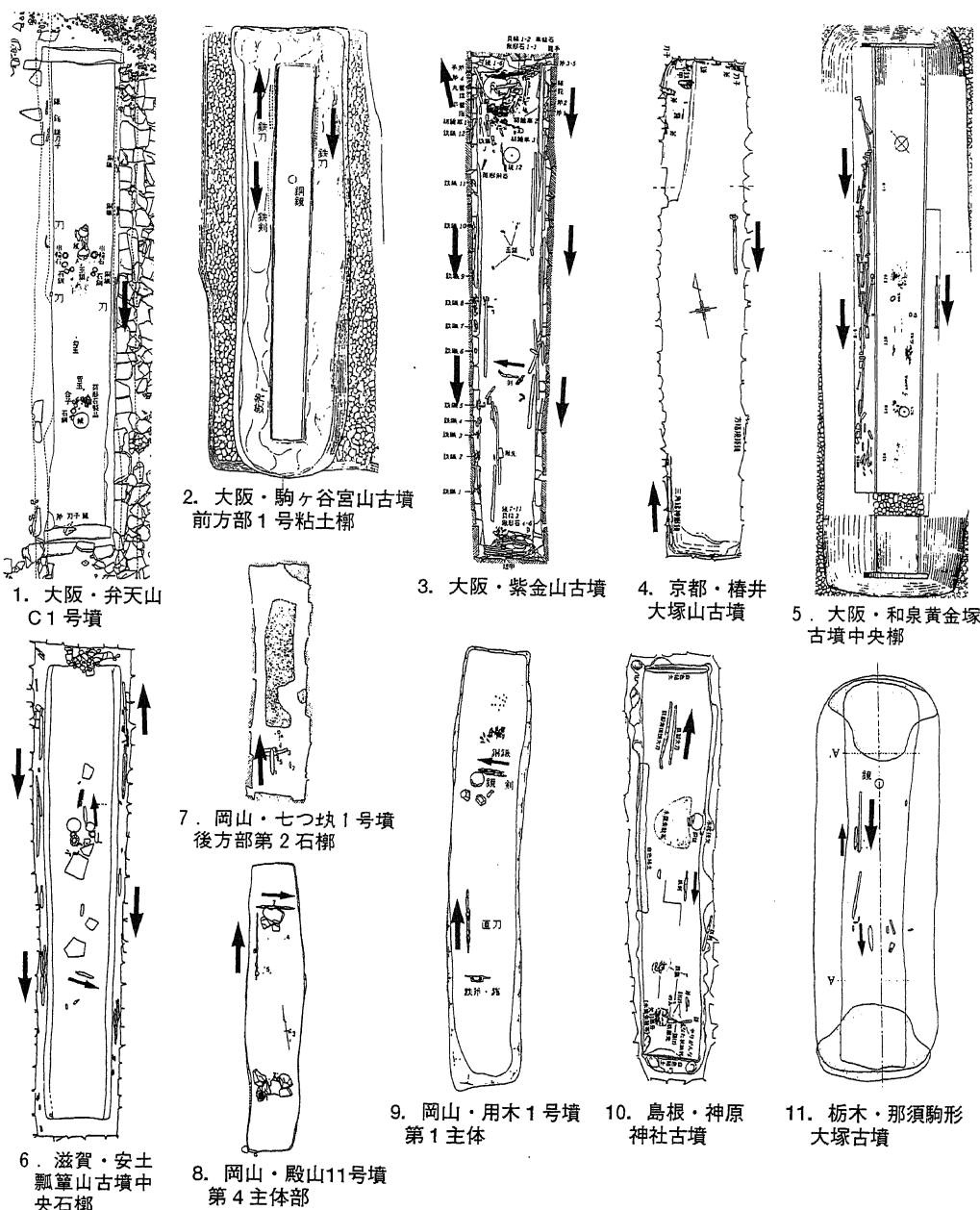


図2 刀剣の配置位置と副葬方向

(1・3・4・6・10・11=1/100, 2・7~9=1/80, 5=1/120)

リが頭側にコ字形に配置されていたようで（鎌木1962）、そのうちのヤリは棺外副葬品とみてよいようである。刀と剣は棺外か棺内か不明であるが、鏡の位置によって示される被葬者からかなり離れた所に置かれていたようで、棺外にのみ刀剣を配置する畿内の配置型式か、それに近い形になる可能性がある。

## (2) 配置方向

### a 吉備

配置方向に関する問題点を明確にするため、まず吉備南部地域の資料の整理をおこなう。

この地域の資料のうち浦間茶臼山古墳や七つぐろ1号墳後方部第1石室など首長墳の竪穴式石槨ではいずれも盗掘のため副葬品の原位置が失われており、検討可能な資料は用木1号墳第1主体（径31m）、七つぐろ1号墳後方部第2石槨<sup>3)</sup>、殿山11号墳第4主体（辺15m）などの中小古墳とならざるをえない。

用木1号墳第1主体（図2-9）は全長4.7mの割竹形木棺が埋納されたものであるが、剣3点が被葬者頭上付近に軸線に直交して置かれ、刀1点が被葬者の足側に置かれている。刀の切先は東の被葬者頭側に向いている。七つぐろ1号墳後方部第2主体（図2-7）は長さ2.5mの小規模な竪穴式石槨で、鉄器は石槨南端付近からまとまって出土している。これらは棺内遺物か棺外遺物か判然としないが、この部分に置かれた剣は切先が頭位と推定される北側に向いている（近藤・高井編1987）。殿山11号墳第4主体部（図2-8）は1棺に2体の埋葬を行なうものである。北枕の被葬者に刀剣が伴うものと考えられ、剣は被葬者頭上部分に軸線と直交して置かれ、刀は被葬者の頭から体部に添う形で切先を頭側に向けて置かれている（平井1982）。みそのお14号墳も殿山11号墳と同様に2体の埋葬と推定され、剣が切先を頭側に向けて体側に置かれているようである（椿編1993）。一方、七つぐろ7号墳では剣が被葬者体側に置かれており、切先は足側に向けられている（近藤・新納1989）。

首長墳の竪穴式石槨での例が不明であるものの、これらの例を見る限り吉備の前期古墳では刀剣は棺内の側縁あるいは小口側に置かれており、軸線と平行に置かれるものは副葬位置にかかわらず、切先が頭側に向けられるのが一般的であるとする事ができる。これを吉備の配置型式として設定できるかどうかは、さらに資料の蓄積を待たねばならないが、少なくとも切先を足側に向けることを原則とはしていないとみてよいだろう。なお、七つぐろ7号墳がこの傾向からはずれるが、この古墳は前期初頭の1号墳からかなり下った位置に築かれており、前期のなかでも時期が下がる可能性がある。

### b 畿内

では、畿内の古墳ではどうであろうか。大阪府駒ヶ谷宮山古墳前方部1号粘土槨（図2-2）を例にとれば、刀剣はすべて棺外に置かれており、粘土石槨北部（被葬者の頭側）に置かれた刀の切先は南北両方向に向けられ、中央（体側）側に置かれた剣の切先は南（足側）に向けられている。また、畿内から少しはずれるが、安土瓢箪山古墳中央石槨（図2-6）でも棺外の刀剣は駒ヶ谷宮山古墳とほぼ同様の配置を示しており、棺内には被葬者頭上部分に剣が北向きに置かれ、足下側では直交方向に置かれている。したがって、吉備と畿内では棺内・棺外を問わなければ被葬者の体に平行して置かれた刀剣の切先の方向は逆になるとすることができる。

刀剣の配置について用田政晴氏は「およそ遺骸の頭辺を境として、それより下に置かれた場合は棺内・棺外を問わず切先を足先の方向へ向け、頭辺より上部に置かれた場合は切先を頭の上部方向へ向けて置かれるのが一般的」とする（用田1980）。また、畿内の前期古墳で体側の刀剣の切先が足側に向けられることは早くから知られており、埋葬頭位の推定の手がかりとしている例も少なくない。畿内では用田氏の指摘のとおり多くの古墳で棺内・棺外ともに頭よりも下方に置かれた刀剣は切先を足側に向けて置かれており、以下では頭上側では切先を上側に、頭部以下では切先を足側方向に向けるものを正位とし、それらに反するものを逆位として記述する。

先に述べたように、畿内の古墳では棺内に刀剣を副葬する例は少数である。そうした例の一つである寺戸大塚古墳前方部石槨では棺外は正位の配置を示すのに対し棺内に置かれた刀剣は正・逆の配置を示している。

棺外に置かれる場合は、以下の4種の配置型式が認められる。

左右の側壁に添って置かれ、頭部付近で切先方向を変える〔正位配置〕を示す例が最も多く、これが基本的な形になるようである。刀剣の数が少ない場合は体側付近に数点が切先を足側に向けて置かれることが多い。頭上側に関しては配置はあまり厳密でないようで、最も北側に置かれたものが切先を頭上側（北側）に向ける程度となる例も多く見られる。

紫金山古墳（図2-3）の場合は北小口部にも剣を置いてコ字形の配置となる〔コ字形配置〕。西側では頭上側、足側の区別がなされるようであるが、東側では刀剣はすべて足側に向けられており、この配置の場合は切先の方向がそろうことが優先されるようである。

また、棺外足側に関して正位の配置原則からはずれるものに椿井大塚山古墳（図2-4）、奈良県メスリ山古墳、同大和天神山古墳がある。大和天神山古墳（伊達ほか1963）例は副葬品のみを木櫃に納めた施設と考えられているが、遺物の基本的な配置は通常の人体埋葬の場合と共通するとみてよいだろう。木櫃中央部に鏡とともに配置された刀剣は切先と茎尻が連続する配置となり、そのため西側の剣は切先が北側（逆位）に向いている。椿井大塚山古墳（梅原1965）では東壁に添って置かれた刀は正位、棺外西側（足下側左）に置かれた刀が逆位となり、メスリ山古墳（伊達編1977）でも同様の位置に置かれた刀剣5～6点が逆位になる。後2者では盗掘によって他の多くの刀剣の原位置が失われているため推定の域を出ないが、大和・山城の前期の早い段階の古墳では刀剣の切先方向を連続させて配置するため東側では正位、西側では逆位となるものがあつた可能性が考えられる〔連続配置〕。この場合でも、メスリ山古墳副室の刀剣は切先を足側である南側に向けており、基本となる切先の方向として認識されていたものと思われる。

なお、和泉黄金塚中央槨では刀剣の切先はすべて足側に向けられている〔足方向配置〕。前期末からこの配置が増加し中期には副葬位置にかかわらず切先を足下側に向けるのが一般的となるようで、大阪府西小山古墳のような正位配置の例は少数である。

以上のように畿内の前期古墳では逆位の例は少数であり、正位配置の原則がよく徹底していたと考えてよい。頭頂付近を境として切先の向きを変える正位配置は、頭部を中心として放射状に切先を向けることを理念としつつ長方形の竪穴式石槨に刀剣を配し、刀剣による「線」を

形成したものと考えられ、コ字形配置や連続配置も刀剣による圍繞を企図したものと推定できよう。こうした規則的な配置は副葬刀剣の機能が辟邪にあることを示していると考ええる。

#### c. その他の地域

上記のように吉備と畿内では刀剣の配置に相違が見られるが、他の地域はどうであろうか。以下、西日本各地域を中心に配置方向について整理しておく。

北部九州の古墳は基本的に正位配置を示しており、畿内のそれと大きく変わるところはない。大分県免ヶ平古墳は側壁添いの正位配置、福岡県一貴山銚子塚古墳、熊本県向野田古墳はコ字形の配置であり、畿内の配置を忠実に受容しているとみられる。なお、一貴山銚子塚古墳では被葬者右側（北側）の刀剣配置は逆位を基本としており、連続配置の要素をまじえたとみられる。

西部瀬戸内地域では検討材料が少ないが、国森古墳では棺内の体側と足下側に剣が置かれており（乗安ほか1988）、体側に置かれたものが逆位となる。山陰地域では島根県神原神社古墳、寺床1号墳第1主体、奥才14号墳第1主体、鳥取県石州府29号墳第2主体などの配置からみて正位が基本となるようである。

播磨の古墳については兵庫県伊和中山1号墳、竜山5号墳、御旅山3号墳など多くが正位の配置であるが、権現山51号墳では棺内頭上側に置かれたヤリ先が被葬者側に切先を向けた逆位になっており、頭の両側に置かれた剣・ヤリ先も切先方向が別々（正・逆）になっている。

四国は良好な資料が少なく、配置の傾向を把握することは困難である。香川県高松茶白山古墳第1石槨は2体の被葬者を中央に向き合わせて埋葬している（松本1983）。副葬品はおもに東側の被葬者に伴うようであるが刀や剣は切先が頭側に向いており逆位配置となる。また、香川県奥3号墳（古瀬1985）は小口幅が広がる西側を埋葬頭位と見るならば剣は頭上側に置かれていることになる。切先が斜めに被葬者側に向いており、本来の位置であるとするなら逆位としてよいが、軸線に直交して置かれたものが動いている可能性もある。正位配置の例としては香川県石塚山2号墳第1主体、徳島県蓮華谷Ⅱ2号墳などがあり、正、逆位の配置が混在するようである。

北陸の資料では福井県山ヶ鼻6号墳は正位、新潟県保内山王山11号では逆位となる。富山県谷内16号墳も棺幅の広がる東側が埋葬頭位とみられ、逆位となる。

東海・中部地方では新豊院山D2号墳ではすべて正位であり、岐阜県円満寺山古墳も石槨の崩壊によって副葬品がかなり動いているが正位とみてよいように思われる。静岡県赤門上古墳、長野県弘法山古墳も正位である。松林山古墳で棺内足側にまとめて置かれた剣が逆位となる程度であり、この地域はほぼ正位でまとまるようである。

栃木県山王寺大柁塚古墳では正位、栃木県那須駒形大塚古墳、群馬県朝倉2号墳、神奈川県吾妻坂古墳などでは正位が基本となるものの、逆位に置かれるものを含んでいる。神奈川県白山古墳木炭槨ではすべて逆位、虚空蔵山古墳も逆位となるようで、関東・東北の古墳では正・逆位が混在するものが多数を占めるようである。

以上のように、刀剣の配置は正位が主流を占めており、畿内は基本的に正位、また、北部九州、東海・中部もその原則に従っている。一方、吉備はそれと逆になり、中四国の一部、北陸、

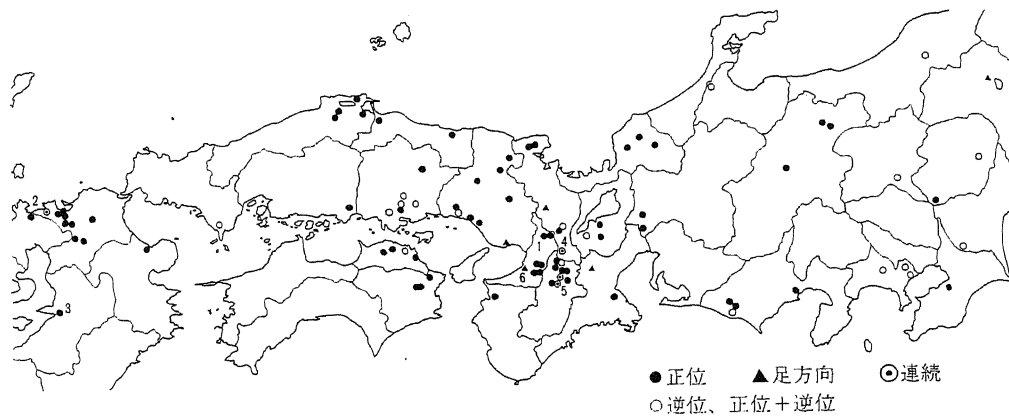


図3 正位・逆位配置の分布

1. 紫金山古墳 2. 一貫山鈍子塚古墳 3. 向野田古墳  
4. 椿井大塚山古墳 5. メスリ山古墳 6. 和泉黄金塚古墳

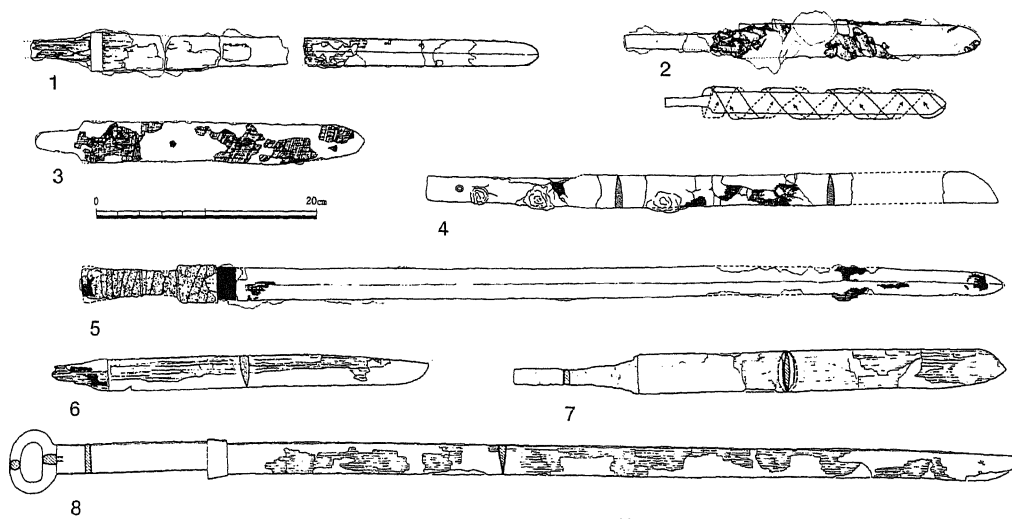


図4 副葬刀剣の「外装」

1. 備前車塚古墳 (鞘) 2. 石州府29号墳 (布) 3. 七つ埴1号墳後方部第2石槨 (布)  
4. 用木1号墳 (布) 5. 権現山51号墳 (抜) 6. 真名井古墳 (鞘)  
7・8. 椿井大塚山古墳 (鞘)

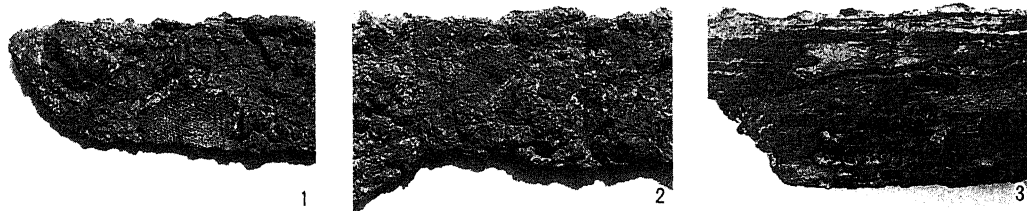


図5 刀剣表面の状態

- 1・2. 用木12号墳 (布痕跡) 3. 宿寺山古墳 (鞍痕跡) (中期)

関東などの古墳にも逆位になるものが含まれている（図3）。正位の刀剣配置は、その分布状態からみて畿内で成立した配置様式とみられ、被葬者の頭部を重視しそれを刀剣によって護るという辟邪思想に基づいたものと考えられる。そして、正位配置の分布のばらつきは、各地域が畿内の儀礼・祭祀をどの程度正確に受容したかを示すものとしてよいだろう。

#### 4 副葬状態

続いて刀剣の副葬状態＝「外装」の検討にうつる。冒頭に示したように吉備では出土刀剣に木質が遺存する資料はきわめて稀であり、布の痕跡が認められる例が一般的である。一方、畿内の資料では基本的に木質の遺存が認められ、布痕跡が認められる例はごく少数である。

以下では刀剣の身部に重点を置き、この部分に軸線と平行する木質が遺存する場合にはA－鞘に入れて副葬されたと推定し、刀身に布の痕跡が見られる例は布製の鞘のようなものは実用上考えにくいことから、B－鞘から出して布4で巻かれて副葬されたと判断する。この2者以外に副葬刀剣の状態として、C－抜身ないし刀身状態で布に巻かず副葬したものがある。

副葬刀剣の「外装」はこの3者のいずれかに分類できるが、当然のことながら刀剣の遺存状態は古墳によって、あるいは位置によって大きく異なっており、劣化が著しいものは外装に関して不明とせざるをえず、特にそうしたものが数点しか出土していない例は評価を保留せざるをえなかった。

A－鞘入りの場合は、木質が残る個体が全体の過半数を占めることが多く、残余の不明個体も本来鞘に入っていた可能性が強いとみてよいように思われる。

問題となるのは布痕跡の例であり、この場合は資料全体では不明個体が占める比率が高い。当然、すべての個体に布痕跡が遺存するとは考えにくく、不明個体のなかに本来は布で巻かれていたものがあつた可能性が考えられるが、すべてがBであるのか、B＋Cであるのか明確でない場合が多い。また、両面に布が巻き付けられたことが報告書に記載されている場合は問題なくBであるが、多くの場合布の付着状態についての記載がなく、Cが布の上5)に置かれたものが含まれているとみてよいであろう。したがって布痕跡が見られる個体を含む資料はB、B＋C、布の上に置かれたCの三つ可能性をもつことになるが、BとCは鞘から出されているという点で共通しており、さらにBはCの入念な形と思われるため、ここではBとCはほぼ同様な性格をもつものとして取り扱い、布巻き・抜身と呼ぶ6)。可能性としてはA＋Bという構成であつてAが腐朽していることも考えられるが、この構成はごく少数であることや木の鞘が先に滅失した可能性は低いと考えられ、検討から除外しておく。

なお、Cつまり単に抜身ないし刀身状態で副葬されたもののみで構成されるとも見える資料が見受けられたが、保存状態の悪いAないしBとの区別が困難で、資料から除外せざるをえなかった。保存状態が良いものは別として、Cについては発掘調査時に認定されない限り保存処理後の判断はほぼ不可能と思われる。

以下、各地域ごとに副葬刀剣について整理をおこなう。

##### a 吉備



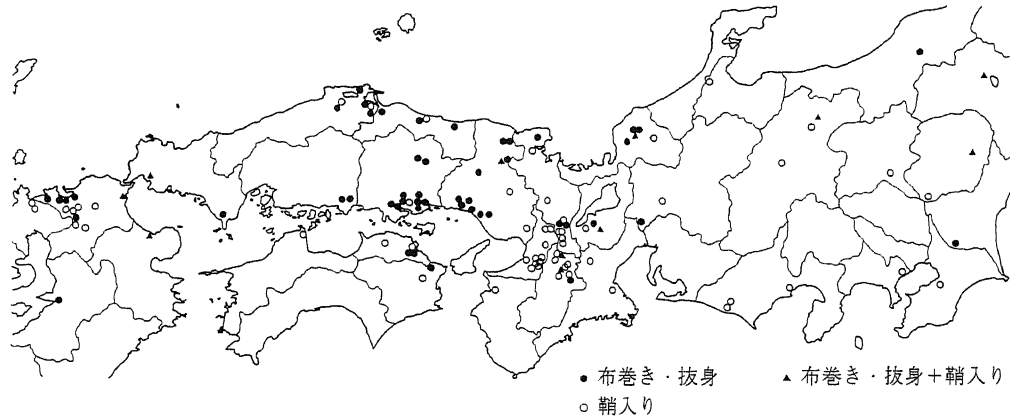


図6 鞘入り、布巻き・拔身副葬の分布

表1 備前の前期古墳の諸要素

古墳名	規模 (m)	墳形			頭位	柳長さ	排水溝	古銅 石安山岩	特殊器 台形埴輪	斜縁・ 平縁鏡	三角縁 神獸鏡	布巻き・ 拔身刀剣	鞘入り 刀剣
		後円	後方	円									
浦間茶臼山	138	○			北	6.8	○?	○	○	○		○	
網浜茶臼山	92	○			?	—		○	○				
操山109号	76	○			北?	—		○	○				
穴甘山王山	69	○			?	—		○	○				
備前車塚	48		○		北	5.9	○?			○	○		○
七つ坑1号	45		○		北	5.3	○	○	○			○	
用木3号	42	○			北	5.7	×			○			
一宮天神山1号	35			○	東	5.5	×				○	?	
都月坂1号	32		○		北	約4			○			?	
用木1号	30			○	東	4.7	×			○		○	
七つ坑5号	25		○		東	3.6	×						
楯原1号	16			○	東	3.2	×			○			

表2 出雲の前期古墳の諸要素

古墳名	大成	造山1号	神原神社	造山3号	松本1号	寺床1号	椿谷	奥才14号
墳形	方	方	方	方	後方	方	方	円
規模(m)	58	60	35	40	50	28	25	18
山陰型特殊器台形埴輪	○	○	○					
北頭位	○	○	○	○				
鞘入り刀剣	○	?	○					
三角縁神獸鏡	○	○	○					
東西頭位					○	○	○	○
布巻き・拔身刀剣					○	○	○	○
斜縁・平縁鏡				○	○	○	?	○

ここでは前期前半の資料として、まず浦間茶臼山古墳出土資料を取り上げる。浦間茶臼山古墳では発掘調査によって刀・剣の破片61点が出土しており、個体数にして刀2以上、剣約20と推定されている（近藤・新納編1991）。茎破片では木質が遺存するものが多く、基本的に柄が装着されていたと考えられる。身の破片で木質が残るものはなく、5点の破片に布痕が遺存する。また、刀2、剣3破片がそれぞれ銹着しているが、鞘がない状態でこれらが重なり合っていたことを示す可能性も考えられる。

用木1号墳では剣3点と刀1点が出土しており、剣の外表については不明である。刀は布痕跡が刀身だけでなく茎にも認められ（図4-4）、刀身を布で巻いて副葬したものである。また、七つぐろ1号墳後方部第2石槨出土の剣（図4-3）も関付近まで布痕跡が見られる一方で茎には木質が遺存しておらず、やはり柄もはずして副葬されたとみてよい。

このほかに吉備の前期古墳出土の刀剣資料として花光寺山古墳、殿山11号墳第4主体出土資料がある。いずれも身部に布の痕跡が認められるものを含んでおり、前者では茎に木質が残るものと布痕跡が残るものがある。これらの資料から、吉備の前期古墳では布巻き・抜身で刀剣を副葬するのが基本であることができ、それから逸脱する資料はわずかに備前車塚古墳出土の剣（図4-1）のみである。

#### b 畿内

畿内の古墳に副葬された刀剣は表面に木質が見られるものが一般的である。たとえば椿井大塚山古墳では図の示された9個体中7個体、大阪府和泉黄金塚古墳東槨では出土の6個体すべてに木質が残っており、保存状態が良くない京都府平尾城山古墳竪穴式石槨でも出土刀剣の身部破片30点のうち9点に木質の遺存が認められる（近藤編1990）。木質の遺存する個体でも刀身全体にそれが残ることはまれであることを考えれば、木質の遺存しない個体も銹化の過程で木質が残らなかったり、表面の剥脱が進行したためと推定され、この地域では刀剣は基本的に鞘に収めて副葬されたと考えてよいだろう。

なお、この地域の資料のうち布痕跡の見られる刀剣が出土しているのは京都府元稲荷古墳、長法寺南原古墳、奈良県佐紀猫塚古墳、大和天神山古墳、見田大沢3号墳の5例である。これらのうち大和天神山古墳では鞘入りと布巻きの両者が共存する。佐紀猫塚古墳では鞘入り刀剣も認められるが布巻き・抜身個体の量が上回っており、畿内の古墳のなかでは特異な存在である。長法寺南原古墳も伴出の刀は鞘入りであるかどうか不明であり（都出・福永編1992）、鞘入り刀剣を含まない構成となる可能性もある。

#### c 九州

布巻き・抜身刀剣をもつ古墳と鞘入り刀剣をもつ古墳とが相半ばする。布痕跡のある刀剣が主体を占める例として著名なのは一貴山銚子塚古墳であるが、それ以外に福岡県若八幡宮古墳、津古生掛古墳、名島古墳、熊本県向野田古墳などがあり、一方の鞘入り刀剣をもつ古墳としては福岡県神蔵古墳、三国の鼻1号墳、経塚山古墳などがある。これらのうち若八幡宮古墳、神蔵古墳など、双方の古墳にまたがって三角縁神獸鏡が出土しており、副葬品の構成や墳形などからみても両者を時間的あるいは地域的な差としてとらえることはことは困難であって、両者が北部九州地域のなかに混在するとみてよい。

この地域の古墳に関しては北條芳隆氏が副葬品配置、棺槨型式、埋葬頭位の3要素による分析・検討を行っており（北條1990）、さらにそれについての意見が吉留秀敏氏によって示されている（吉留1991）。両氏の作業は北部九州の首長間の関係を多方面から検討するものであるが、それによれば、この地域の首長墳は埋葬頭位を南北の正方位から45°振れた方位を軸線の基本とするもの（以下、北東・北西主軸と呼ぶ）と東西の正方位を指向するもの（以下、東西主軸）とに二分でき、前者が大多数、後者が少数派であって前期を通じて前者のグループに最有力首長墳が認められるとする。また、棺槨型式の相違は首長墳間の階層性を示すものであり、その変遷は北部九州の地域性の顕在化を示すものであるとする見解が示されている。したがって、この地域の首長墳を大別する要素となるのは主体部の主軸方向とみてよく、それらを具体的に示せば前者、つまり北東・東西主軸は一貴山銚子塚古墳、神蔵古墳、三国の鼻1号墳、佐賀県谷口古墳、大分県石塚山古墳などであり、後者の東西主軸として若八幡宮古墳、妙法寺2号墳、津古生掛古墳、大分県免ヶ平古墳などがある。

この分類と布巻き・拔身、鞘入りという副葬刀剣の区分とを対比させてみるならば、鞘入り刀剣のみをもつ古墳は神蔵古墳以下の北東・北西主軸型、布巻き・拔身刀剣をもつのは若八幡宮古墳以下の東西主軸型の古墳であり、副葬刀剣の状態と埋葬頭位の軸線方向にもとづく分類はほぼ合致するとみてよい。

この対応関係からはずれるのは一貴山銚子塚古墳、石塚山古墳、免ヶ平古墳の3基である。免ヶ平古墳では布巻き・拔身、鞘入りの両者が出土しており、石塚山古墳も両者がともに出土しているようである（長嶺編1996）。これまで示してきたように両者が共存する例はきわめて稀であるが、同様の例は後述の周防にも認められる。この2基は北部九州とはいえ周防灘の沿岸に築かれた古墳であり、刀剣の取り扱いからは北部九州から分離し周防灘西岸地域として取り扱うべきであろう。一方、一貴山銚子塚古墳は墳丘全長103mと北部九州の4期Ⅶの首長墳のなかで最大の墳丘規模を有しており、この時期の最有力首長墳である。出土刀剣13点のほぼすべてが布巻きで、確実な鞘入りは認められず、北東・北西主軸型のなかではきわめて特異な存在である。葬送儀礼の諸要素のうち刀剣取り扱い手法に関しては東西主軸型のものを取り入れたか、あるいは被葬者の出自が東西主軸型の首長系譜であったためと考えられる。

#### d 西日本各地

**周防** 中国地方の西端、北部九州に近接する周防の前期古墳で鉄器の詳細が判明しているのは山口県国森古墳と長光寺山古墳である。国森古墳出土の剣は拔身と考えられ、ヤリには一部に布痕跡が認められる。一方、長光寺山古墳は乱掘が著しく、配置はもとより2つの竪穴式石槨のうちのいずれに帰属するかすら明確でないものが資料の大半を占めるが、出土の刀剣破片は木質の付着するものが8点、布痕跡が見られるものが13点と相半ばしており、両者がともに副葬されていた可能性が考えられる。また、竹島古墳の刀剣は「木の理のつけるがあり、布の目のつけるがあり」という不明確な記録しかないが（島田1926）、後者が柄巻きのことを記しているのではないとするならば鞘入りと布巻き・拔身の共伴例に加えることができる。前記のように周防灘の対岸に位置する石塚山古墳、免ヶ平古墳でも両者を認めることができ、周防灘北岸地域にこの副葬方式が移入された可能性が考えられる。

**出雲・伯耆** 布巻きないし抜身で副葬する一群と鞘入りの一群に区分できる。

鞘入りの状態で刀剣の副葬を行っている例として神原神社古墳、大成古墳、馬山4号墳などがあり、布巻き・抜身の一群として松本1号墳、寺床1号墳、椿谷古墳、奥才14号墳、石州府29号墳（松本1985）などがあり、判明している資料数は前者が3例、後者が7例となり、布巻き・抜身が一般的な地域に鞘入りで副葬するものが点在するとみてよい。

**播磨・但馬** 播磨は吉備の東側に隣接する地域である。この地域の前期古墳のうち、前期初頭に位置付けられるものに権現山51号墳がある。この古墳では刀剣の出土は剣1点のみであり他に柄を折り取ったとみられるヤリ先4点が出土している。ヤリ先のうち2点は布痕跡が見られるもので、1点は鞘をもつ。剣は抜身で布の上に置かれたと推定されている（図4-5）8）。これ以外に、伊和中山古墳、竜山5号墳、天坊山古墳、松田山古墳などの刀剣は布巻き・抜身であり、基本的にこの地域の古墳は吉備と同様な様相を示すとみてよい。

また、兵庫県北部・但馬地域の資料としては森尾古墳、城の山古墳、カチヤ古墳、柿坪中山3号墳などがあるがいずれの資料も布巻き・抜身で、鞘入りは認められない。

**四国** 香川県奥3号墳、奥14号、徳島県蓮華谷Ⅱ2号墳が布巻き・抜身であり、愛媛県相の谷1号墳では鞘入りが出土している。検討可能な資料が十分になく傾向の把握が困難であるが、阿波・讃岐は吉備と同様、伊予は北部九州ないし周防と同じ様相となる可能性が考えられる。

**近江・美濃** 近江の資料のうち北谷11号墳では出土の剣はいずれも鞘入りとみられるが、雪野山古墳の刀剣は鞘入りと布巻きで構成されている9）。一方、大岩山古墳の剣は布巻き・抜身である。美濃の資料のうち刀剣の状態が判明している円満寺山古墳では大部分が布巻きである。

#### e 東日本

**北陸** この地域の資料のうち福井県竜ヶ岡古墳、富山県国分尼塚1号墳などが布巻き・抜身、新潟県保内三王山古墳の剣は抜身かと思われる。一方、福井県山ヶ鼻6号墳、富山県谷内16号墳は鞘入り、安保山2号墳では両者が共伴している。これらの例からすれば北陸地域では布巻き・抜身と鞘入りが混在した分布を示し、前者がやや優勢となるようである。

**東海・甲信** 比較的まとまった資料が見られるのは静岡県で、松林山古墳、新豊院山D2号墳、三池平古墳、赤門上古墳などが所在する。このうち赤門上古墳の刀剣はよくわからないが、他の3基の刀剣はいずれも鞘入りである。長野県弘法山古墳、森將軍塚古墳の剣も鞘に収められており、この地域は基本的に鞘入りで副葬されている。ただし、径16mの小円墳、大星山3号墳では第1主体から鞘入りの剣が、第2主体から布巻きの剣が出土しており、下位の埋葬では布巻き・抜身で副葬されている可能性がある。

**関東・東北** 栃木県那須駒形大塚古墳の刀剣は鞘入り、布巻き・抜身の両者が見られ、茨城県桜山古墳は布巻き・抜身である。山王寺大柵塚古墳、千葉県根田6号墳は鞘入り、加瀬白山古墳も鞘入りのようである。福島県会津大塚山古墳の刀剣は基本的に鞘入りであるが、布巻き・抜身1点を含んでいる。資料数が少ないが、この地域も両者が混在するとみてよいだろう。

以上のように刀剣を鞘に入れて副葬するのは畿内・北部九州・東海、布巻き・抜身で副葬するのが吉備のほか、山陰、北陸、九州の一部などであり、1古墳で両者が共存するのは周防灘沿岸地域のほかには畿内の大和天神山古墳などの数例にすぎない。

鞘に収められた刀剣は完全な武器の形であり、その副葬は武威による辟邪を期すものと考えられる。もう一方の鞘、さらには柄までもはずしての副葬は武器としては不完全な形である。鞘から出すことは刃を顕示することであるが、それは刃の機能を解き放った形であり刃自体による辟邪を期したものと考えられる。したがって、同じ辟邪という呪的機能を期待されて副葬されるにしても、両者の思想にはかなりの相違があると考えられる。

## 5 弥生時代の副葬刀剣

この副葬刀剣の二つの取扱い方を考える際に問題となるのが、先行する弥生時代の刀剣の副葬状態であるが、後期の資料は未報告のものが多く、また、後期末か古墳時代前期か明確でないものがかなりあるため、今後の課題とせざるをえない部分が少なくない。

これまで再三にわたって指摘されているように弥生時代、特に後期の墳墓で刀剣が副葬された例は少数であり、刀剣の副葬は一般的でなかったとみられる。

九州の弥生時代中期の甕棺墓に副葬された刀剣類は鞘に収められたものもまれに見られるが、布巻き・抜身が主体を占める<sup>10)</sup>。後期の資料は佐賀県二塚山遺跡、三津永田遺跡、島根県西谷3号墓第4主体、宮山4号墳丘墓、鳥取県宮内墳丘墓群、兵庫県半田山1号墓、内場山墳丘墓、立石遺跡、大阪府中宮ドンバ遺跡、京都府左坂墳墓群、帯城墳墓群、千葉県神門5号墓・4号墓など各地に広がっており、吉備では楯築墳丘墓、女男岩墳丘墓、みそのお42号墓などの資料がある。後期のなかでも後半期の資料は吉備と兵庫県北部～京都府北部に分布が集中するようである。副葬時の状態については布巻き・抜身と鞘入りの両者が認められるが、前者が優勢である。京都府帯城墳墓群（岡田ほか1987）の場合、布巻き・抜身2点、抜身？2点、鞘入りの可能性のあるもの1点という構成になっており、出土状態や棺の規模もそれらの間で特に相違は認められず、鞘入りと布巻き・抜身の間に差を見出しがたい。なお、鞘入り刀剣を出土した墳墓には楯築墳丘墓、女男岩墳丘墓、西谷3号墓第4主体、宮山4号墓、神門4号墓など大形の墳丘墓が含まれており、鞘入り刀剣の副葬が首長墳の儀礼として広がった可能性が考えられる。

副葬の位置は棺内であることが多い。切先の方は足側に向く場合と頭側に向く場合の両者があり、特に定まっていない。

弥生時代の副葬刀剣と前期古墳のそれを対比した場合、その差は明瞭である。先に示したように畿内の前期古墳の場合、棺外に武器による辟邪の線を構成することに主要な目的があったと理解されるが、そうした配置の萌芽を弥生時代墳墓の資料に見出すことは困難であり、前方後円墳成立時に弥生時代の刀剣による辟邪思想を飛躍的に発展させることによって創出された儀礼と考えられ、そうした質的な変化にあたっては大陸から新たな思想が導入されたものと考えられる。また、布巻き・抜身の一群はおおむね弥生時代の伝統的な儀礼を引き継いだものとみてよいだろう<sup>11)</sup>。なお、吉備の場合、弥生時代の副葬刀剣は楯築墳丘墓、女男岩墳丘墓、みそのお42号墓の3例が鞘入り、便木山遺跡第26主体など他は不明とせざるをえない資料であり、布巻きの資料が確認されていない。備前中枢部での様相が判明していない現在、資料の増

加を待つほかはないが、少なくとも楯築墳丘墓に代表される備中地域の鞘入りの副葬法がこの地域の前方後円墳に継承されなかった可能性が考えられる。

## 6 副葬刀剣の少数派と多数派

前節までの検討において、畿内では刀剣を鞘に収めた状態で棺外に正位方向に置いて副葬するという定式が成立していたとみられること、他の地域はその受容の度合いに大きな差が見られることを示すことができ、特に鞘入り、布巻き・抜身という二つの刀剣副葬方法はその差を明確に示すものと考えた。

畿内を含めた各地域はそれぞれ一定の地域性を認めることができ、それは畿内型の刀剣副葬法の受容の程度に応じて形成されたものと考えられるが、すべての古墳が同様のあり方を示す地域はむしろ少なく、異なる方法を採用する古墳が少数派として存在する場合が多い。以下ではこの少数派の評価を試みる。

両者が混在に近い形をとる北部九州については先に示したように埋葬頭位による区分とほぼ対応している。それ以外に吉備の備前車塚古墳、出雲では神原神社古墳・大成古墳があり、畿内の資料では元稲荷古墳、長法寺南原古墳、大和天神山古墳、佐紀猫塚古墳、見田大沢3号墳がある。辟邪という葬送儀礼の根幹に関わる刀剣の副葬方法がそれぞれの古墳で任意に創出されたと考えることは困難であり、第一に考えられるのは、他地域の儀礼を採用した結果こうした少数派が生じた可能性である。

### a 吉備

吉備南部の首長墳の場合、冒頭に示したように二つの共通項がある。一つは特殊器台形埴輪の使用、もう一つは古銅輝石安山岩を竪穴式石槨の構築石材として使用することである（第3章）。また、先に示したように浦間茶臼山古墳、七つぐろ1号墳など、こうした要素をもつ古墳に布巻きの刀剣が見られることからすれば、布巻き・抜身刀剣も首長墳に限ってのものではないが共通する要素とみてよい。

それに対して備前車塚古墳では特殊器台形埴輪、古銅輝石安山岩の2者がなく、出土の剣は身部に木質が遺存しており刀剣類に関しても明瞭な相違を示している。この備前車塚古墳を著名なものとしているのは出土の11面の三角縁神獣鏡であるが、一方の特殊器台形埴輪・古銅輝石安山岩をもつ一群では浦間茶臼山古墳が獣帯鏡、七つぐろ1号墳では方格規矩鏡と夔鳳鏡であり、三角縁神獣鏡の出土を見ていない。これらでは盗掘が著しいため確証を得ることができないが、備前車塚古墳と同様の鏡種構成であったとすれば三角縁神獣鏡の破片が遺存するのが自然であろうから、三角縁神獣鏡を欠く構成であった可能性が強いと思われる。また、これらの古墳に共通する玉類が備前車塚古墳からは出土していない。

備前地域の前期古墳の属性を整理したのが表1である。備前車塚古墳は埋葬頭位が北向き、墳丘の築造企画が箸墓古墳の相似形〈箸墓類型〉（北條1986）で、中小規模の首長墳は前方後方墳となるという墳丘規模・墳形による階層性の枠内には収まっているが、それ以外はすべての要素が異なっており、三角縁神獣鏡と鞘入り刀剣の二者はこの古墳に限っての要素となって

いる。三角縁神獸鏡、鞘入り刀剣の二者はともに分布の中心が畿内にあることからすれば、これらはセットになって畿内から伝えられたとみてよいであろう。特殊器台形埴輪や古銅輝石安山岩の使用、つまり、祭祀や埋葬施設の共通性は浦間茶臼山古墳の被葬者を頂点とする首長間の連合関係を具体的に表示するものと考えるが、それらを欠く備前車塚古墳の被葬者は、それに加わらず畿内の首長と直接の関係を結び、そのため多量の三角縁神獸鏡を入手し、あわせて畿内型の刀剣配置儀礼を受容した可能性を考えてよいだろう<sup>12)</sup>。三角縁神獸鏡の多量副葬・玉類の欠落という点はまさに椿井大塚山古墳と共通する特徴である。

#### b 出雲

この備前車塚古墳と同様に鞘入り刀剣が少数派となる例として出雲の大成古墳、神原神社古墳がある。前者は前期初頭の大方墳で、その時期の出雲の最有力墳、後者も大形の方墳である点が備前車塚古墳の場合とは異なっている。これらとの対比のためほぼ同時期の布巻き・拔身刀剣をもつ首長墳として寺床1号墳、やや時期が下がるが松本1号墳を取り上げる。

表2に示すように、松本1号墳・寺床1号墳と神原神社古墳・大成古墳の間では諸要素の多くで顕著な相違を示している。副葬品では松本1号墳、寺床1号墳に副葬された鏡がそれぞれ斜縁獸帯鏡、斜縁二神二獸鏡であるのに対し、神原神社古墳・大成古墳の2基では三角縁神獸鏡が出土している。また、前者ではいずれも玉類が伴っているのに対して、後者のうち神原神社古墳では玉類が出土しておらず、大成古墳もその可能性が強い<sup>13)</sup>。埋葬頭位についても松本1号墳・寺床1号墳が東西主軸をとるのに対して後2者は南北主軸をとっている。鉄器の詳細が不明であるため取り上げなかった造山1号墳は大成古墳に続いて築造された大首長墳であるが、この古墳および大成古墳、神原神社古墳の3基からは山陰型特殊器台形埴輪が出土しており、出雲では最も上位の階層の古墳のみがこれを用い、祭祀を共有しているとみることができる。墳形が方形を基本とする点でこの地域の共通性を表示しているが、大首長は北頭位や三角縁神獸鏡、山陰型特殊器台形埴輪といった要素を独占的に保有し、下位の首長墳との格差を示していると言えよう。鞘入り刀剣もそうした要素の一つとしてとらえることができると考えられ、これらの要素の多くが畿内系であることからすれば、最上位の首長のみが畿内の儀礼を受容し、それを以て格差の表示としている可能性が考えられ、吉備の場合とは異なる様相を示すとみられる。

なお、ここで上位の首長が北頭位、下位の首長が東西頭位となる可能性を示したが、この問題を少し整理しておく。ここで問題となるのは全長50mの前方後方墳、松本1号墳である。墳丘から言えば前後する時期の造山1号墳（方墳・辺60m）、造山3号墳（方墳・辺約45m）と遜色のない規模であるが、主体部が粘土床木棺で排水溝がなく、副葬品も墳丘規模の割には貧弱と言わざるをえず、造山1・3号墳の下位に位置づけることができると考える。

この北・東西頭位の問題に関して参考となるのが備前の前期古墳である。この地域の前期古墳の埋葬頭位に関しては北條芳隆氏の詳細な検討があり、北頭位が主流を占めることが明確になっている（北條1987）が、少数派として東に埋葬頭位をとるものが存在する。たとえば用木古墳群では全長42mの前方後円墳である3号墳のみが北頭位をとり、径32mの円墳である1号墳や径18mの2号墳は東頭位となる。表1に示すように、截然としたものではないが、墳丘規

模30m以上が北頭位、それ以下が東頭位という関係になるとみてよく、首長間の格式の差として理解できる14)。

先に示したように北部九州の場合も北東・南西主軸一鞘入り、東西主軸一布巻き・拔身という区分が可能である。この埋葬頭位と副葬刀剣の対応関係は出雲・伯耆でのあり方とほぼ同様であり、さらに前者に一貫して最大規模墳がみられることからすれば、両者は出自の差を示すものではなく階層差ないし格付けの差としてとらえることが可能ではないかと思われる。

#### c 畿内

畿内の少数派、布巻き・拔身刀剣をもつ古墳のうち見田大沢3号墳は大和の中心部からは少し離れた宇陀地域の小古墳である。この古墳は主体部が大規模な攪乱を受けており他の副葬品やその配置は不明であるが、前後して築かれた2号墳からはく字形に曲がったヤリガンナや破損した管玉が出土している。これらは破壊供献された可能性が考えられ15)、3号墳の布巻き

の剣も畿内型の刀剣配置儀礼が普及する以前の儀礼が小古墳に残った可能性を考えておきたい。一方、佐紀猫塚古墳は出土の8点の刀のうち身部に布痕跡を残すものが4点で、残りの4点には鞘の痕跡が認められず、19点の剣も鞘入りとみられるものが2点、布痕跡が見られるもの2点という組成となっている。また、乱掘のため埋葬頭位が不明であるものの南側壁側では刀と剣が切先方向を逆にして配置されること(正・逆位)や、主体部の軸線が東西方向を取ることなど畿内の古墳のなかでは異質な要素を指摘でき、被葬者の出自が畿内以外であった可能性が考えられる。

問題となるのは大和天神山古墳と元稲荷古墳、長法寺南原古墳などの前期の大形古墳である。このうちの大和天神山古墳は特殊器台を伴う箸墓古墳、西殿塚古墳を含む大和・柳本古墳群の一角に所在する古墳であり、注目すべき資料ではあるものの、副葬品のみを収めたとみられる石槨からの出土であり、中山大塚古墳や下池山古墳など、この地域の他の古墳資料の報告を待って評価を行わざるをえない。またもう一方の元稲荷古墳と長法寺南原古墳は山城、向日市域の古墳である。このうち元稲荷古墳は特殊器台形埴輪を伴う古墳であり、吉備との関係を考えることも不可能ではないと思われる。いずれにせよ先に述べたように寺戸大塚古墳、長方寺南原古墳などこの地域の前期古墳は、刀剣の配置が完全な畿内型ではなく、儀礼に独自性をもっていたと考えられる。元稲荷古墳が全長93mと大形でありながら前方後方墳という格が下の墳形(都出1989)をとる理由もそこにあるのではないだろうか。

## 7. 儀礼の斉一化

上記のように吉備の前期古墳では刀剣の配置、「外装」の両者ともに強い独自性が認められるが、中期の初頭にこの独自性は失われる。金蔵山古墳中央石槨は盗掘のため副葬品の配置は不明であるが、出土の刀剣は鞘入りと布巻き・拔身の両者が認められる。前者が2点、後者が1点で鞘入りの比率が高くなる。続いて構築された南石槨では出土刀剣はすべて鞘入りで配置も正位となっており、金蔵山古墳に続く時期の旗振台古墳、月の輪古墳なども同様の配置で鞘入りであることからすれば、金蔵山古墳中央石槨の刀が布巻き・拔身の最後の資料となるようで



ある。

吉備の首長墳では中期初頭に畿内型の刀剣配置儀礼を受容すると考えられるが、こうした動きは吉備のみの現象ではないようである。出雲では良好な資料がないが、讃岐では快天山古墳（3期）や岩崎山4号墳（4期）などの刀剣は基本的に鞘入りであり、吉備にやや先だって儀礼の変換がなされたとみてよく、前期末から中期初頭にかけて畿内型の刀剣配置儀礼が全国的に貫徹されると考えられる<sup>16)</sup>。

## 8 おわりに

以上、副葬刀剣について位置、配置方向、「外装」の3点を中心に分析を行った。明らかにできなかった部分も少なくないが、古墳時代前期には武器―刀剣の取り扱いに大きな地域性があることを示すことができた。畿内の古墳において最も整った配置・取り扱い型式が認められ、それと対極的な様相を示すのが吉備の古墳である。これは葬送儀礼の細部の問題ではあるが、辟邪というある意味では儀礼の最も基本的な部分において地域性があることを示すものと言える。主体部の頭位方向や墳形・箸墓類型の普及などからは畿内と吉備の緊密な関係が指摘され、また、筆者もそれを指摘してきたが、この点からは両地域の一体性は全くうかがうことができず、吉備の独自性を確認することとなった。逆に墳形において特に親縁関係を見出せない北部九州や東海・中部の古墳が畿内の儀礼をよく受容しており、畿内と地方の関係が単純でなかったことを示している。

多数派・少数派のいずれに属するかは一様ではないが、多くの地域において畿内型の儀礼を採用した古墳とそうでない古墳が混在する様相が認められ、出雲や北部九州では首長間の階層関係を反映したもの、吉備の場合は大和の首長との関係の差違を示すものと考えた。畿内の首長と地方の首長の関係は個別の直接的な関係をむすぶ場合と、首長連合間の関係の2つの形があると考えられるが、これらはその具体的な例とみてよい。畿内型の刀剣副葬儀礼の伝播は畿内と地方の交渉によって生じるが、それぞれの地方における受容の多様なあり方は、畿内政権のそれぞれの地方に対する勢力伸長の指向の強弱と地方における首長間の関係という2つの要素によって、さまざまな形の関係が生じたことを示すと考えられる。

小古墳の資料を含めての整理は容易ではないが、副葬刀剣の様相と埋葬頭位の相違を併せた整理によって畿内と地方の首長の関係・交渉をより明確にすることが可能と思われる。

本稿は備前車塚古墳、調査時から気になっていた楯築墳丘墓の剣を端緒とし、おもに備前車塚古墳の評価を試みるために行った作業であり、一部を1995年に埋蔵文化財研究会において報告した。十分な分析・検討を行えていないが、副葬刀剣の配置や表面の状態の重要性を喚起する意味を含めて、稿をまとめたものである。

紙幅の関係で文献を大幅に割愛したが、ご寛恕いただきたい。

本稿の作成にあたっては都出比呂志、吉留秀敏両氏から多くの助言をいただき、資料の収集にあたっては秋山浩三、家田淳一、大谷晃二、松木武彦、勝瀬利栄、春成秀爾、北條芳隆、用

田政晴、渡辺貞幸の各氏および岡山県山陽町教育委員会から多大な援助をいただいた。深く感謝の意を表したい。

註

- 1) 第1章でふれたが、ここでは被葬者の身体あるいは霊に邪悪なものがとりつくことを防ぐという意味でこの語を用いる。
- 2) 図1のうち北部九州や吉備では小古墳の例を含めたため棺内副葬の例がやや多くなっている。大和でも磐余池の内古墳群、見田大沢4号墳などの小古墳では棺内に刀剣の副葬を行っており、首長墳と小墳では執行された儀礼に相違があると考えられる。
- 3) 以下、石室は石槨と呼び換える。他の古墳についても同様である
- 4) 基本的に絹布であることが明らかになっている（布目1988）
- 5) 副葬品配置のために敷かれた布と、被葬者の衣服の2者が想定できる。
- 6) Bであることが確実な資料については布巻きと呼ぶ。
- 7) 時期区分は（広瀬1991）（近藤編『前方後円墳集成』）による。
- 8) 身部の一部に黒漆が付着しており、鞘があったとする見解と、他の遺物のものが付着したとする見解の両者が報告書には示されているが、後者が妥当と考える。（近藤ほか1991）
- 9) 安土瓢箪山古墳では出土の17点の刀剣のうち鞘入りは1点のみで他は不明と、鞘入り個体の比率が極端に低く、雪野山古墳と同様、鞘入り+抜身である可能性が考えられる。
- 10) 弥生時代の刀剣のうち素環頭鉄刀については今尾文昭氏の分析がある（今尾1982）。氏は抜身の状態（布巻き・抜身）で副葬されたものが多いことを指摘し、大陸から抜身に近い状態で搬入され、それがそのまま副葬された可能性を考えている。
- 11) 弥生時代後期後半に鉄器の破壊供献・副葬儀礼が出現し、後期末には各地域に波及する。古墳時代前期の資料に関しては布巻き・抜身グループではしばしば破壊副葬鉄器が伴っており、その儀礼が継続して行われているとみられるのに対し、鞘入りグループでは基本的に認められない。
- 12) 浦間茶臼山古墳の被葬者を長とする吉備の首長連合と畿内の首長連合の関係は吉備における箸墓類型の広範な波及、箸墓古墳や西殿塚古墳における特殊器台・特殊器台形埴輪の受容、また、ここで示した副葬刀剣の様相などからみて、比較的対等で相互の独自性を保持したものであったと考える。
- 13) 1991年に石槨の再調査が実施されたが、その際にも玉類は出土していない。（本村ほか1992）
- 14) 備中の殿山11号墳のように小古墳で北頭位をもつ例が、今後検出される可能性も考えられる。
- 15) 報告書ではヤリガンナの屈曲は土圧による変形とする。
- 16) 中期後半の山口県朝田墳墓群3号円形周溝墓では布巻きの剣が副葬されており、小古墳ではこの儀礼が継続した可能性がある。吉備においても後期古墳で抜身の刀を副葬する例（美作市川戸2号墳）がある。

第6章 吉備南部における古墳時代前半期小墳の埋葬頭位

1 はじめに

吉備の前期古墳の埋葬頭位についてはこれまでに多くの論考が示されている。

吉備・大和の前期古墳は北に埋葬頭位をとり、それは中国からの北枕思想の波及を示すとす  
る都出比呂志氏の論（都出1979・1986）があり、それを受けてさらに詳細な分析を試みた北條  
芳隆氏の論がある（北條1987）。これ以降、以下に示すように個別の古墳・遺跡の評価のなか  
で埋葬頭位の検討がなされることも多い。筆者も第5章に示すように、吉備および西日本の前  
期古墳の検討において、上位の首長墳は北頭位をとり下位の首長墳は東頭位をとるとの見解を  
示した。また、倉林眞砂斗氏は美作を中心に吉備の前期古墳の埋葬頭位を検討し、中小墳では  
東頭位が優勢であるとの指摘をおこなった（倉林1997）。

本章では各氏の分析に導かれつつ東頭位と北頭位の問題を中心に小墳の埋葬頭位の検討をお  
こない、あわせてこれに関してしばしば議論の対象となる殿山古墳群の位置づけを試みたい。

なお、資料が少なくない数にのぼるため、ここでは吉備南部地域の古墳時代前半期の小墳を  
中心に作業を行った。

これまでに提示された埋葬頭位に関する論考は以下のとおりであり 1)、柴田1994・尾上1996  
が弥生時代後期の木棺墓群、他は前期古墳を取り扱ったものである。

都出比呂志 1986『竪穴式石室の地域性の研究』大阪大学文学部

北條芳隆 1987「墳丘と方位からみた七つぐろ1号墳の位置」『七つぐろ古墳群』七つぐろ  
古墳群発掘調査団、pp. 95-109

龜山行雄 1994「郷境墳墓群 埋葬施設について」『山陽自動車道建設に伴う発掘調査』8  
岡山県埋蔵文化財発掘調査報告89、pp56-57

柴田英樹 1994「甫崎天神山遺跡 土壙墓の主軸方向と頭位について」『山陽自動車道建設  
に伴う発掘調査』8 岡山県埋蔵文化財発掘調査報告89、pp825-829

尾上元規 1996「土壙墓群について－芋岡山遺跡との比較－」『中池ノ内遺跡』岡山県埋蔵  
文化財発掘調査報告108、pp27-28

宇垣匡雅 1997「前期古墳における刀剣副葬の地域性」『考古学研究』第44巻第1号、pp. 7  
2-92

倉林眞砂斗 1997「竪穴式石槨の特色と問題点」『日上天王山古墳』津山市埋蔵文化財発掘  
調査報告第60集、pp. 112-121

草原孝典 1999「埋葬頭位からみた長坂古墳群」『長坂古墳群』岡山市教育委員会、pp. 40-  
49

乗岡 実 1999「箱式石棺」『宗形神社古墳』岡山市教育委員会、pp20-22

北條芳隆 2000「前方後円（方）墳誕生の経緯」『古墳時代像を見なおす－成立過程と社会

変革一』青木書店、pp.109-122

## 2 前期古墳の埋葬頭位

埋葬頭位はA：基本となる方向、B：墳丘主軸との関係、C：埋葬間の序列の、3要素によって決定される。

### 首長墳

北條芳隆氏の検討のとおり前期の前方後円（方）墳は墳丘主軸に平行ないし直交して北に埋葬頭位をとる（図2-1）（北條1987）。

A1「頭位方向（北）」とB「墳丘主軸に対する平行・直交」という二つの原則にもとづいて主体部軸線が決定されるのが基本であるが、矢部大ぐる古墳のようにA1のみによって墳丘主軸を決定し、墳丘軸線に対して頭位が斜交する例もある。また、従属的な埋葬は、C「上位一主埋葬と同頭位、下位一主埋葬に直交」という序列原則にもとづいている（倉林1997・草原1999）。

### 小墳

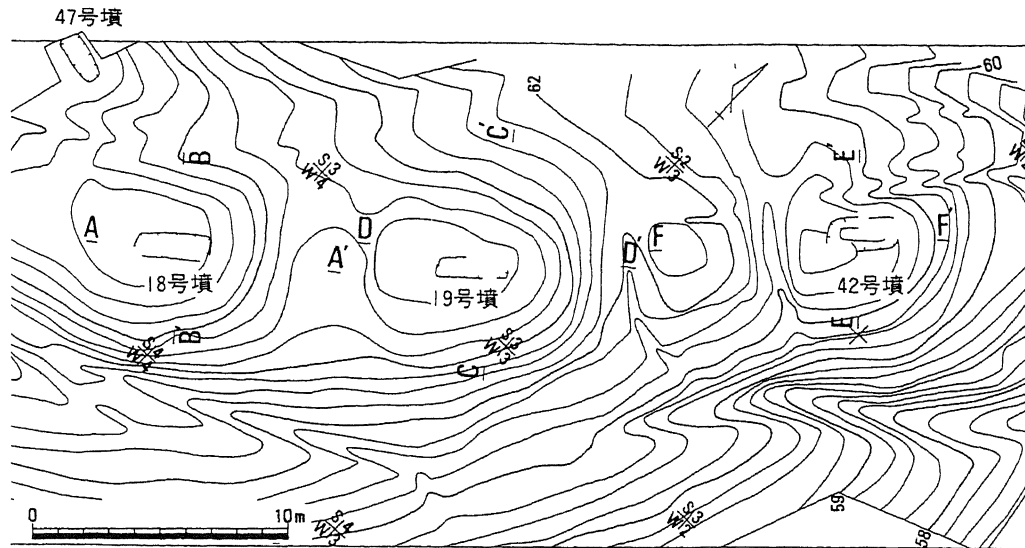
さて、一方の小墳である。複数の埋葬施設をもつ一辺10m前後の小規模低平な方墳で、それが尾根上に継続して築かれている例が多い2)。

同一墳丘に設けられた埋葬間にはC「上位から順に、主埋葬の頭位>主埋葬頭位の逆方向>直交方向」という序列が存在することが指摘されている（倉林1997・草原1999）。したがって検討すべきは主埋葬の頭位であるが、これはB「墳丘主軸に対する平行・直交」に規定されていることは明白であり、尾根上に小墳群が形成される吉備南部にあつては墳丘主軸はほぼ尾根線に規定されることになる。

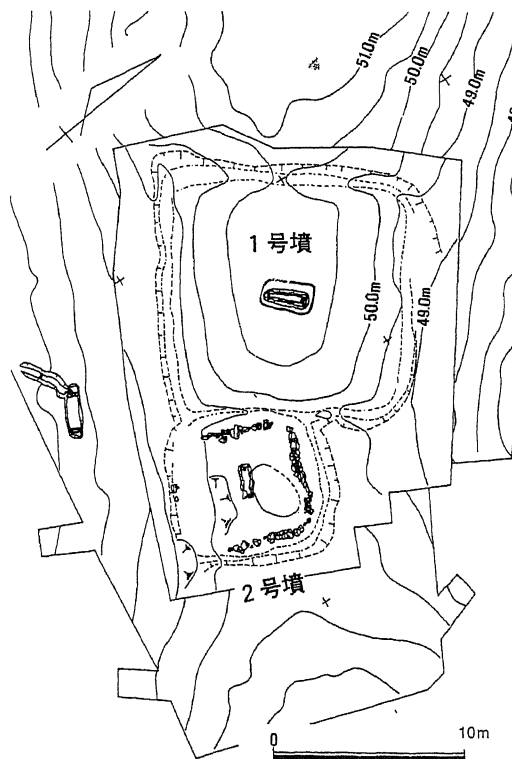
小墳の埋葬頭位はこのBC二つの原則によって規定され、全体としてはまとまりを欠くとの印象があるが、そうではなく、図2-2・3に示すように3)東を中心に北東～南東の間に散布が最も集中しており、東頭位（A2）が優勢であると言える。細かく見れば北東・南東という東から若干ずれる群、ほぼ東をとるグループ、そしてそれらとは別に北、南をとるものに区分できる。

主流を占める北東・南東頭位と、その中間である東頭位の関係であるが、前者は本来の埋葬頭位であるA2「頭位方向（東）」がB「墳丘主軸」との関係において若干方位が振れた結果である可能性が考えられ4)、Bが少なくない比重をもっていたことがうかがわれる。また、墳丘に対して比較的尾根幅が広く墳丘主軸を工夫することによってほぼ東方向をとることが可能な場合でもそれは試みられておらず、小墳の埋葬頭位はだいたい東、北東～南東の間でよいという、前方後円墳のそれにくらべてより大まかなものでもあったとみるべきだろう。それらのなかにあつて、墳丘主軸に斜交して東頭位をとる塚の上1号墳（図1-3）は埋葬頭位A2を優先させる珍しい例である。

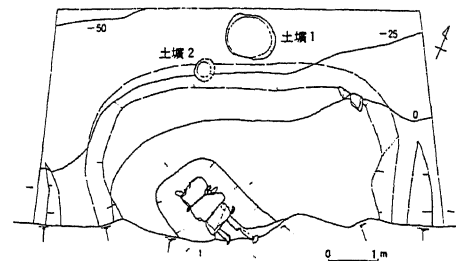
一方、より正しく東を指向する一群のなかには檜原1号墳、宗形神社古墳などが含まれる。これらは墳丘主軸をもたない円墳であるという点で共通しており、それゆえ東を指向したとい



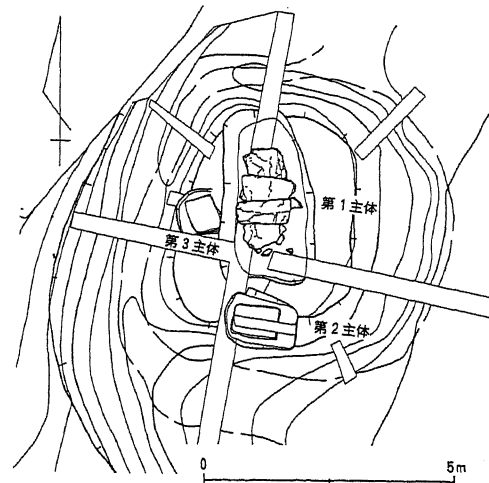
1. 矢部B古墳群 (1/300)



2. 前山古墳群 (1/400)



3. 塚の上1号墳 (1/150)

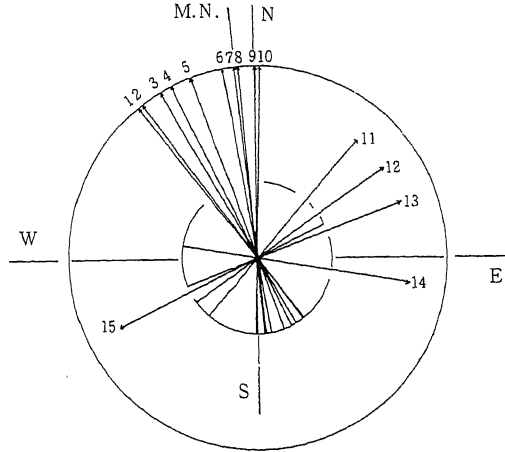


4. 兔登木21号墳 (1/150)

図1 前半期小墳の諸例

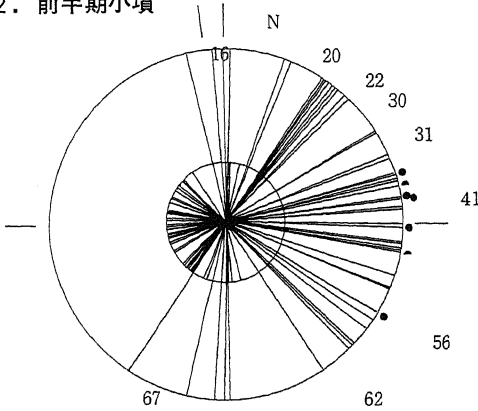
1. 前方後円(方)墳

(北條1987)



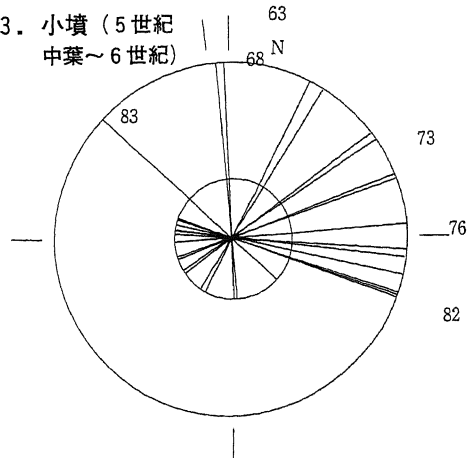
- |            |               |
|------------|---------------|
| 1. 新庄天神山古墳 | 8. 一宮天神山古墳A主体 |
| 2. 用木3号墳   | 9. 正仙塚古墳      |
| 3. 鶴山丸山古墳  | 10. 湯迫車塚古墳    |
| 4. 矢部大坑古墳  | 11. 禰原寺山古墳    |
| 5. 都月坂1号墳  | 12. 月の輪古墳     |
| 6. 七つ坑1号墳  | 13. 金藏山古墳中央石室 |
| 7. 花光寺山古墳  | 14. 七つ坑5号墳    |
|            | 15. 久米三成古墳    |

2. 前半期小墳



- |                 |                  |
|-----------------|------------------|
| 16. 菟登木21号墳第1主体 | 43. 用木7号墳        |
| 17. 四辻7号墳       | 44. 宇月原古墳        |
| 18. 広浜古墳        | 45. 長砂8号墳        |
| 19. 郷境3号墳       | 46. 七つ坑7号墳       |
| 20. 上林江崎古墳      | 47. 小寺1号墳        |
| 21. 用木16号墳石棺    | 48. 塚の上1号墳       |
| 22. 伊予部山2号墳     | 49. 牛飼山1号墳第2主体   |
| 23. 前山1号墳       | 50. 郷境4号墳        |
| 24. 樽見1号墳       | 51. 矢部B44号墳      |
| 25. 矢部A10号墳     | 52. 長坂3号墳A埋葬     |
| 26. 郷境5号墳       | 53. 用木4号墳第1主体    |
| 27. 矢部B19号墳     | 54. 前山2号墳        |
| 28. 用木5号墳第1主体   | 55. 芋岡山1号墳       |
| 29. 高本2号第1主体    | 56. 浅川3号墳        |
| 30. 矢部B42号墳     | 57. 長坂1号墳箱式石棺    |
| 31. 矢部A57号墳     | 58. 長坂2号墳        |
| 32. 矢部B18号墳     | 59. 芋岡山2号墳       |
| 33. 用木8号墳       | 60. 茂平1号墳        |
| 34. 用木12号墳      | 61. 用木15号墳       |
| 35. 岩崎山4号墳      | 62. 長砂10号墳第1主体   |
| 36. 用木11号墳      | 63. 矢部B43号墳      |
| 37. 用木1号墳第1主体   | 64. 矢部堀越X301箱式石棺 |
| 38. 小山ヶ谷古墳      | 65. 甫崎天神山1号墳第1主体 |
| 39. 長砂4号墳       | 66. 甫崎天神山5号墳第1主体 |
| 40. 宗形神社古墳      | 67. 浅川2号墳        |
| 41. 禰原1号墳       |                  |
| 42. 用木2号墳第1主体   |                  |

3. 小墳(5世紀  
中葉~6世紀)



- |                  |
|------------------|
| 68. 中山6号墳第1主体    |
| 69. 西山26号墳       |
| 70. 法蓮22号墳       |
| 71. 法蓮23号墳       |
| 72. 四辻1号墳        |
| 73. 秦金子3号墳       |
| 74. 秦金子1号墳       |
| 75. 甫崎天神山6号墳第1主体 |
| 76. 法蓮40号墳       |
| 77. 牛飼山2号墳       |
| 78. 後池内古墳        |
| 79. 寺山8号墳        |
| 80. 寺山7号墳        |
| 81. 矢部B47号墳      |
| 82. 高本5号墳        |
| 83. 高本5号墳        |

図2 前半期古墳の頭位

う理解が可能であるが、これらはそれぞれ堅穴式石室や入念な構造の箱式石棺といった小墳の通例とは異なる埋葬施設を採用し、鏡・玉類・鉄器を副葬する（図2・4では鏡を副葬する古墳は●、破鏡は半円で示す）。また、参考までに図2-2に含めた用木1号墳は径30mの円墳で首長墳と考える。つまり、これらは一般の小墳よりも上位とみることができ、墳形・副葬品といった要素とともに埋葬頭位の点でも小墳との格差を表示していると考えられる。

以上の理解において問題となるのは東頭位から逸脱する少数派、南頭位と北頭位の存在である。南頭位を構成するのは甫崎天神山1号墳、浅川2号墳など5例であるが、これらのうち2例は北斜面あるいは北に下降する尾根に設けられているという共通点をもつ<sup>5)</sup>。これらは尾根線に直交して東頭位をとることも可能であるがそれはおこなっておらず、この立地の場合は東頭位の原則は必ずしも適用されず、頭位を高所に向けるという別の原則が用いられている可能性が考えられるが、北東・南東頭位に南頭位が混在する例である矢部B古墳群では、南頭位は群中で最も規模が小さく墳丘規模すら明確でない矢部B43号墳で用いられていることや、上記の北尾根を選地する古墳はきわめてまれでそれが古墳築造の適地とされていなかった可能性が強いことなどからみて、南頭位は群全体に原則Cが適用された結果生じたとみてよいだろう。すなわち、南頭位は東頭位の群よりも下位の小墳の頭位であった可能性を考えるべきである。

一方、北頭位を採用するのは七つぐろ3号墳、殿山8～11号墳（図4-1）、郷境3号墳などである。すでに指摘されているとおり（亀山1994）、この頭位は前方後円墳の埋葬頭位の影響下に出現したとみられ、たとえば七つぐろ3号墳は小円墳とはいえ、前方後方墳である1号墳の前面に所在し、埋葬施設に粘土を多用し赤色顔料も十分に用いられたとみられるなど<sup>6)</sup>、首長墳と密接な関係にあるとみてよい。また、殿山8～11号は継続的に築造された辺10～15mの方墳群で、埋葬施設が木棺や箱式石棺である点は他の小墳と同一ではあるものの、鏡や玉類、鉄刀など豊富な副葬品をそれぞれの埋葬に伴っており、通常の小墳と同列に、あるいは小墳の代表例として扱うべきではないと考える。また同様に郷境3号墳も該期にはまれな葺石をもち鉄剣以外に鑿頭式鉄鏃などを副葬しており、殿山古墳群と同様に位置づけることが可能である。

これら以外に兎登木21号墳のように北頭位をもつ小墳が存在することも確かであり、これを前方後円墳の埋葬頭位が波及した例とみることが可能ではあるが、辺6mという墳丘規模の小ささからすればむしろこれは先の南頭位と同様に東頭位の直交方向としてこの頭位が選択されたと考えられるべきだろう。

なお、注目すべきはこれら北頭位の小墳のうち確実に前期に位置づけることができるのは備前では七つぐろ3号墳1例のみで、他はいずれも備中の古墳である点である。このことについては後にまとめて整理を試みるが、小墳の様相が備前と備中で若干異なることを示すと考える。

### 3 東頭位の伝統

以上のように前期古墳の埋葬頭位は墳丘主軸に半ば規定されつつそれぞれが基本とする方位をもつことは明らかで、吉備のうち東部の備前地域の資料を整理すれば

#### I. 前方後円・後方墳 ー北頭位（首長）

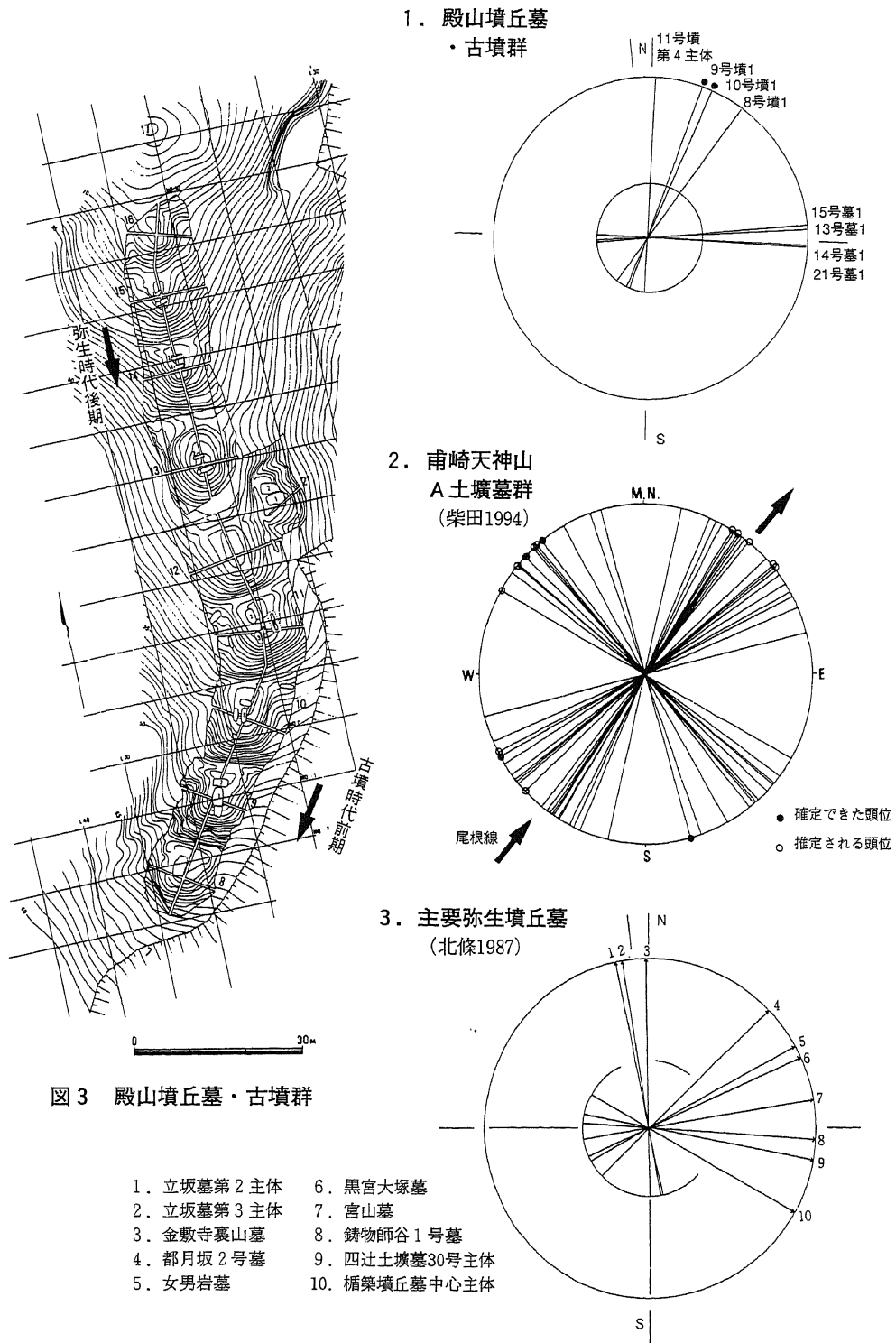


図3 殿山墳丘墓・古墳群

図4 弥生墳墓・前半期古墳の頭位



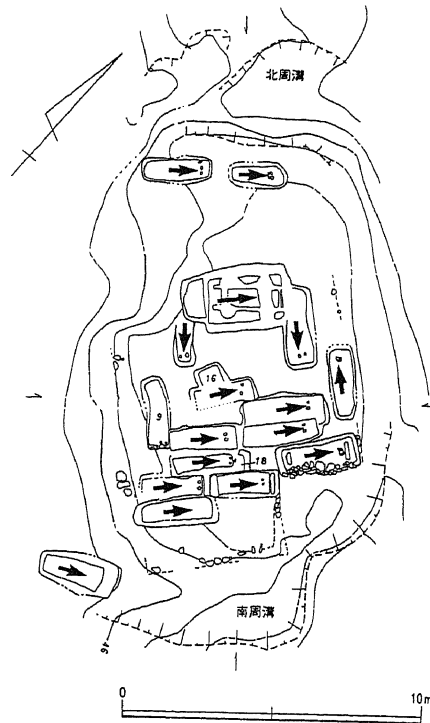


図5 すりばち池南1号墳丘墓の埋葬頭位

- Ⅱ. 小前方後方墳・円墳—東頭位 (小首長)
- Ⅲ. 小方墳 —東頭位 (有力世帯家長)

という階層を構成するとみられる。

注目されるのは小墳の頭位方向に首長墳の「頭位方向(北)」がほとんど影響を及ぼしていない点で、吉備の古墳の大多数は東頭位を基本とするとと言える。

これに先行する弥生時代後期の埋葬頭位についてはいくつかの検討作業がある。後期前半の甬崎天神山遺跡木棺・土坑墓群の分析では尾根線に対して平行・直交に各埋葬が配置されるが(図4-2)、いずれかの方位が卓越するという原則は見出せない。またこの遺跡では斜面に対して直交するものは頭位を高所側に、平行するものでは東頭位がやや優勢となっており(柴田1994)、後者は東頭位卓越の萌芽の可能性がある。一方、後期後半の主要な弥生墳丘墓は東頭位をとることが指摘されており(図4-3)(北條1987)、後期後葉～末の殿山16～12号墓も東頭位をとる(図4-1)。また、図5に示すように弥生時代後期末のすりばち池南1号墓においても東頭位の優勢を見ることができる。

したがって弥生時代後期のなかで東頭位が卓越してくる過程はなお資料の分析が必要であるが、少なくとも後期後半以降、これが主要な頭位として波及し、それが古墳時代に継続したとみてよいだろう。

検討をおこなった小墳の多くは遺物を伴っておらず古墳時代前半期という枠でくくられるをえず、中期前半の資料を含む。TK73型式以降の須恵器あるいはそれに対応する埴輪を伴う資料は別に図2-3として示したが、それらも同様に東頭位をとる。つまり弥生時代後期後半から横

穴式石室導入までの間、吉備南部では東が主たる埋葬頭位であったとみることができ、中期初頭～前半の金蔵山古墳や月の輪古墳といった首長墳の埋葬頭位が東になるのは北頭位の原則が重視されなくなり、吉備一般の埋葬頭位へ回帰した結果と考える。北頭位は古墳時代前期の首長墳とごく一部の小墳、下って7世紀代の古墳にのみ採用されたと言ってよい。

#### 4 備前と備中

第2節で指摘したように埋葬頭位に関して備前と備中で若干の相違が認められる。それを再度記せば、備中の首長墳矢部大ぐる古墳では埋葬頭位は方位のみに規定され墳丘主軸を考慮していないこと、小墳で北頭位を採用するものがいくつか認められるという2点である。つまり北頭位の波及が備前の場合よりも強い可能性がある。

また、これは今後の検討課題でもあるが、前述のように備前では前期（2・3期）段階に前方後円墳－円墳－小方墳という階層序列を想定できるのに対し、現状では備中にそれが適用できるかどうか明確でない。確かに前半期に位置づけられる円墳は遺跡分布図に多数存在するが、それが前期にまでさかのぼるかどうか必ずしも明確ではないのが実状と言える。発掘資料のなかで前期の円墳とされる資料のうち、総社市高本2号墳は尾根上方側の溝は直線的に尾根と交差しており方墳の可能性を考えても問題ないとみられるし、矢部B42号墳は流出のため墳形自体が明確ではなく、確実な円墳は多量の滑石製白玉・勾玉から5世紀前半とされる長砂10号墳となる。その一方、先に述べたように小方墳群である殿山古墳群は副葬品の内容はほぼⅡ群に相当すると言える。備中の前期古墳はⅠ．前方後円・後方墳、Ⅱ・Ⅲ．小方墳という階層をとり、備前の場合とは異なる可能性が考えられる。

#### 5 おわりに

以上、先学の検討に導かれながら小墳の埋葬頭位の整理を行い、それが東頭位という原則に基づくことを示し、他の埋葬頭位と階層関係にあることを述べた。

首長墳の頭位すらそれに回帰してくることは、北頭位が前期首長墳の儀礼の一つとして創出されたものであり、吉備には根付かなかった、広がりをもたなかったこと、そして、東頭位の伝統が強固であったことを示すとみてよい。換言すれば、そこに古墳時代の北頭位の性格が現れているとみられる。

この東頭位の広がりについて小論では検討する余裕がなかったが、美作の有本古墳群がその典型的な姿を示しており、さらに、出雲の奥才古墳群においても東頭位にまとまることが指摘されている（三宅ほか1985）ことなどからすれば、東頭位の採用は吉備にとどまるものではなく西日本に広範な広がりをもつ可能性が強い。

#### 註

1) 美作は検討の対象から除いたが、この地域の古墳の埋葬頭位については倉林1997のほか、行田1991、

安川1992、小郷1997、君島2000などがある。前2者は古式群集墳、後2者は前期古墳について論じている。

- 2) 図1の方位は1が真北、他は磁北である。
- 3) 1体埋葬の場合は枕石によって頭位を判断できるが、前半期の小墳では1棺2体の埋葬がなされることがきわめて多い。ここでは墓壙幅の広狭・棺の構造（天井石の大小など）・副葬品の配置状況などから主埋葬の頭位を判断できるもののみを記載した。主頭位不明のものを加えれば、東西軸の例はさらに多くなる。
- 4) A2「頭位方向（東）」は北に対して東50°から120°までの幅をもつ。これらのうち北東方向はデータにまとまりが見られ、これが有意な差である可能性が考えられるものの、時期や古墳群間の差としてとらえることがむずかしく、現状では尾根線方位による軸線の振れと考えておく。
- 5) 甫崎天神山5号墳は山頂の西端に所在するが南頭位をとる。北尾根に所在する1号墳に後続して築かれており、甫崎天神山古墳群では南頭位が継続して採用された可能性が考えられる。
- 6) 埋葬部分が大破・消滅しており副葬品は不明である。破壊坑南壁に埋葬施設の一部が遺存しており、埋葬施設は南北主軸であったと推定できる。なお、軸線を出すことが不可能であるため図2-2には示していない。
- 7) これらを11～8号墳と同時期の前半期古墳とみる見解がある（草原1999）。21号墳についてはそれが妥当と考えるが、他は伴出土器は少ないもののあえて年代を下げる根拠は十分とは言えず、報告書の評価にしたがう。

## 第7章 吉備の中期古墳の動態－使用石材の検討から－

## 1 はじめに

第3章では吉備および畿内の弥生墳丘墓・前期古墳の竪穴式石室について、使用石材の分析を中心に比較検討をおこない、それぞれの特色の指摘と評価をおこなった。吉備の前期前半の古墳の竪穴式石室には香川県北部産の古銅輝石安山岩<sup>1)</sup>が使用されていることを示し、その使用は浦間茶臼山古墳、網浜茶臼山古墳など、首長墳に限られていることを明らかにした。瀬戸内海島嶼部に産出する古銅輝石安山岩の入手は容易なことではなかったと推定され、副葬品、墳丘規模等とともに使用石材が、その古墳の位置付け、古墳間の政治的関係を検討するうえで重要な手掛かりとなると考えた。

しかしながら、そこでは弥生墳丘墓、前期古墳の竪穴式石室の使用石材の検討に重点を置いたため、吉備の中期古墳については、岡山市千足古墳など一部の古墳において、ふたたび古銅輝石安山岩が用いられていることを述べたにとどまり、十分な検討はおこなっていない。本章では、若干の資料を加えて吉備の中期古墳の使用石材について検討をおこない、使用石材の分析をつうじて該期の古墳の動態の検討を試みる。

## 2 研究史と問題の所在

古墳時代中期には吉備南部平野を中心に多数の古墳が築かれる。その代表となるのは墳丘全長350mと、畿外最大の規模をもつ造山古墳であり、それにつづく規模の巨大古墳として作山古墳(286m)、両宮山古墳(206)がある。この3基の巨大古墳以外にも佐古田堂山古墳(148)、小盛山古墳(105)、小造山古墳(133)、宿寺山古墳(114)など、墳丘全長が100mをこえる大形古墳が築かれている。

造山古墳、作山古墳、両宮山古墳という吉備の3大巨墳、そしてそれらに続く規模の古墳については西川宏、春成秀爾、葛原克人の3氏によって検討がおこなわれており、また、そのほかに墳丘の築造企画や使用石材に関してもいくつかの見解が示されている。まず最初に、これまでに示された見解、評価について概観しておく。

吉備の巨大古墳について最初に検討をおこなったのは西川宏氏である。氏は吉備南部を10の地域に区分し、それぞれの地域の主要古墳の分析から、それらが水系ごとに形成された地域的政治集団によって築かれたものと考え、さらに造山古墳、作山古墳などの巨大古墳はそうした地域的政治集団の首長によって構成された連合体(部族連合)の長の墓として築かれたとの見解を示した。そして、墳丘の特徴などから造山古墳→作山古墳→両宮山古墳の順で築造されたとし、首長連合の大首長権は1地域に固定されたものではなく、輪番的に継承されたものであるとの見解を提示した(西川1964・1975)。これ以後、吉備の中期古墳の研究は氏の評価をも

とに進められていくことになる。

つづいて春成秀爾氏は上記の3大古墳のほか、宿寺山古墳、榊山古墳(60)、新庄上車塚古墳(55)、さらに備前中部・赤磐市に所在する朱千駄古墳(85)、小山古墳(54)、森山古墳(82)などについて、埴輪を中心に検討をおこない、その編年案を示した。すなわち、

(備中) 造山→作山→榊山・寺山→新庄上車塚

(備前) 朱千駄・森山→小山

という築造順を提示し、また、造山古墳の埴輪資料に窖窯焼成のものが混在することを指摘して、造山古墳の築造時期を日本における須恵器生産の開始期のころとする見解を示した(春成1983)。両宮山古墳の時期については、埴輪が伴っていないため厳密な位置付けが困難であり、周辺古墳との関係から5世紀の中葉から後葉と述べるにとどめている。そして、備前、備中両地域の首長墳の比較検討をもとに、それぞれの地域の特色、独自性の指摘をおこない、造山→作山→両宮山という大首長権の移動ではなく、作山と両宮山はそれぞれ備前・備中の併立する2大首長であった可能性を想定した(春成1982)。

また、吉備の3基の巨大古墳の検討をおこなった葛原克人氏は、造山→作山→両宮山という築造順を示し、それぞれの古墳の検討をおこなった(葛原1987)。そしてこの3基の古墳が小形化してゆく状況を吉備政権の畿内政権に対する服属ととらえ、また、備前、備中という2地域への分解ととらえている。そしてその論考のなかで、造山古墳の築造年代については5世紀の第1四半期と比較的古く見積もり、春成秀爾氏の指摘した窖窯焼成の埴輪については「副次的、後次的祭祀に伴うもの」と述べて、異なる見解を示している。また、両宮山古墳についてはその築造時期を、周濠をもつ点や周辺に中小規模の古墳を伴う点が共通することなどから宿寺山古墳と同時期とする考えを示している。

以上、先学の研究を概観したが、3氏の意見にはいくつかの重要な点で相違がある。1つは造山古墳の築造年代をいずれに置くかという点である。このことは吉備と大和・河内の関係、具体的には大王墳との併行関係を考えるうえできわめて重要な問題であり、それは本墳出土の窖窯焼成の埴輪をどう評価するかにかかっている。またもう1点は、両宮山古墳をどう位置付けるか、すなわち、作山古墳と両宮山古墳との時間的關係をどのように想定するかという問題である。ただし、この点については、前述のように両宮山古墳には埴輪が本来配列されていなかったと考えられ、年代検討の手掛かりは少なく、編年上の厳密な位置付けはかなり困難であると言わざるをえない。

一方、墳形に関しては、西川宏(西川1975)、春成秀爾(春成1983)、上田宏範(上田1984)、石部正志・田中英夫・堀田啓一・宮川徭(石部・田中・堀田・宮川1991)、新納泉(新納1992)氏らによって研究がなされている。それぞれの論考において用いられた測量図の精度が異なるため分析結果に差が生じているようであるが、各古墳について同規模・同形墳の存在が指摘されている。ここではその検討結果のみを記すが、造山古墳については百舌鳥古墳群の石津丘古墳に似るとする見解(西川、上田、新納)とコナベ古墳に似るとする見解があり(春成、石部ほか)、両宮山古墳については百舌鳥御廟山古墳に似るとする見解(春成、上田)のほか、軽里前之山古墳に似るとする見解(石部ほか)がある。また、作山古墳については同墳形な

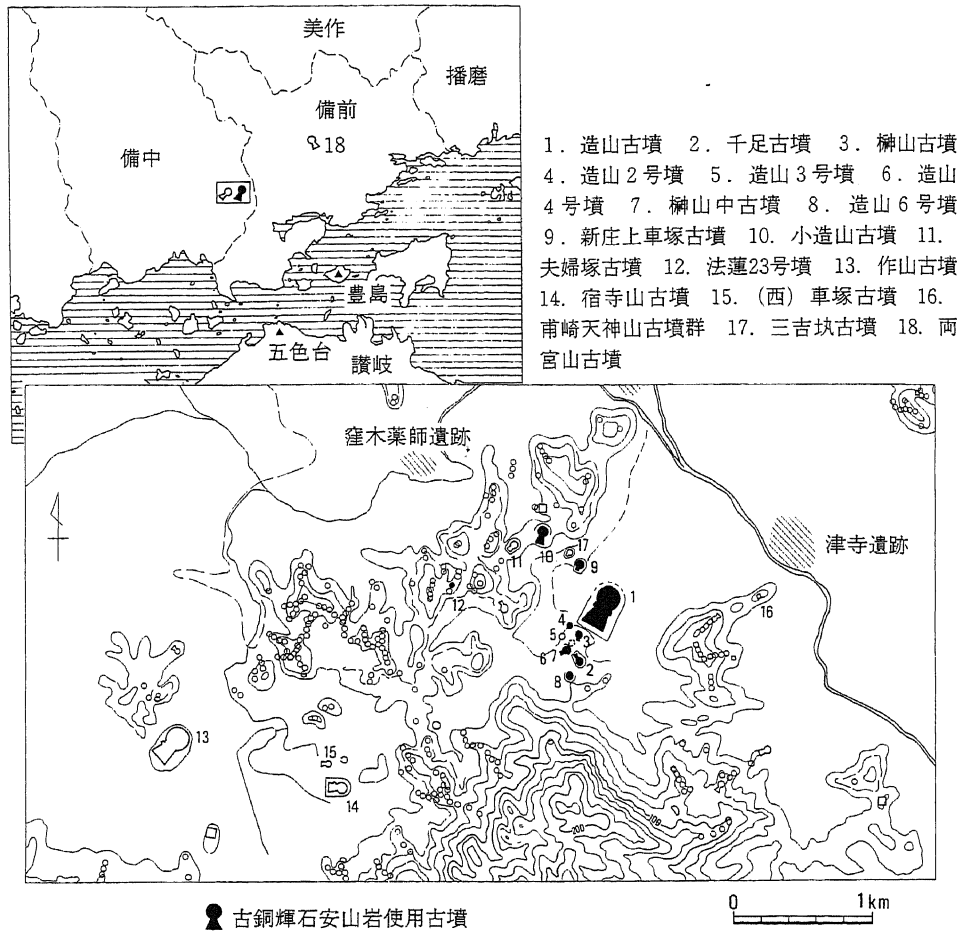


図1 造山・作山古墳群分布図

表1 古銅輝石安山岩使用古墳

	古墳名	所在地	墳形	規模(全長)	埴輪	副葬品	備考
1	造山古墳	岡山市新庄下	前方後円墳	全長350m	有黒斑 無黒斑	不明	石材は後円部裾で確認
2	櫛山古墳	岡山市新庄下	帆立貝式	復元全長55m	無黒斑 陶質土器 初期須恵器	変形三神三獣鏡、刀剣多数、鉄斧、馬形帯鉤6、碧玉製卵形玉2、銅鈴、銅製竜文金具2、砥石	竪穴式石室か 材は墳丘北方に散布
3	造山2号墳	岡山市新庄下	円墳	径27m	有黒斑 無黒斑	不明	図2 蓋石出土
4	造山4号墳	岡山市新庄下	帆立貝式	径34m以上		不明	
5	千足古墳	岡山市新庄下	帆立貝式	75m	無黒斑	半円方形帯五獣鏡、玉、鉄鏃、変形五獣鏡、巴形銅器12、鉄刀、鉄斧、革綴短甲	第一主体—初期横穴式石室、第二主体—粘土槨
6	造山6号墳	岡山市新庄下	帆立貝式 or円墳	径30m以上		不明	石材の散布量が多い
7	新庄上車塚古墳	岡山市新庄上	帆立貝式	推定全長55m	無黒斑	不明	周堀の存在が推定される。造山前方部所在石棺出土古墳とも伝える
8	小造山古墳	岡山市新庄上他	前方後円墳	全長133m	無黒斑 有黒斑	不明	
9	法蓮23号墳	総社市下林	円墳	径10m	埴輪なし 須恵器甕 ほか	刀子	石材は墳裾の石蓋土壇に使用
10	一本松古墳	岡山市北方	前方後円墳	全長66m	なし	槍、鉄槌、鉄鉗、小札鋸留眉庇付冑、帯金具付き短甲	竪穴式石室(全長約5m、幅90cm)

し（春成）、仲津山古墳（上田）、渋谷向山古墳築造企画（石部ほか）と評価はかなりが分かれている。

なお、石槨石材の分析は筆者のほかにも奥田尚、白石純氏によってそれぞれ行われている。奥田氏は吉備南部の古墳の竪穴式石槨に用いられた安山岩は備讃諸島の豊島から搬入されたと推定しており（奥田1990）、白石氏は分析結果から古墳時代前期の石材は豊島、中期の石材は大部分が四国の五色台地域から搬入されたとする見解を提示している（白石1991）。

### 3 使用石材

吉備の前期古墳の竪穴式石室に使用された石材は、古銅輝石安山岩およびカンラン石古銅輝石安山岩と、それ以外の石材とに大別することができ、多くの場合、後者は古墳の付近で採集がなされている。それに対して古銅輝石安山岩等は四国ないし瀬戸内海島嶼部から搬入されたものであり、他の石材とは異なる意味をもつものであったと考えてよい。

現在知られている古銅輝石安山岩等を用いる中期古墳は以下に示す12基であるが、造山古墳については以下に示すように確定はしていない。このほかにも岡山市大崎下西古墳からの出土も報じられており、同じく中期の古墳であるなら13基となる。

#### 造山古墳

このうち造山古墳においては後円部裾において石材の存在を確認しているだけであり確実な資料とは言いがたい。しかしながら周辺の古墳における使用状況から、主体部に古銅輝石安山岩が用いられている可能性は高いとみてよいであろう。

#### 榊山古墳

発掘の際の記録が明確でないため、主体部は粘土槨とも石槨とも判断できないが、水没した発掘場に浮かんだ木棺片が採集されており（和田1919）、粘土槨や木棺直葬などよりも竪穴式石槨のほうが木棺が遺存する例が多いことからすれば、竪穴式石槨であった可能性も考えられる。古墳北側の畑に石材が散布しており、榊山古墳の主体部に用いられていたものが持ち出されたものか、別に削平された小古墳があり、それに用いられていたものかのいずれかとみられるが、ここでは前者の可能性を考えておく。

#### 造山2号墳

図2に示す竪穴式石槨蓋石は、現在造山古墳前方部頂に置かれているものであり、表面には赤色顔料が良好に遺存している。かつて造山2号墳から複数出土し地元で保管されてきたうちの1枚であるが、他の所在は不明である。墳丘は現在辺20mの方墳状をなしているが、古い記録では円墳と記されており（永山1930）、円墳であったと考えたほうが良いようである。

#### 造山4号墳

現状は径34mの円墳状をなす。明治時代の切り図などから短い前方部が西側にとりつく可能性が考えられたが、最近確認調査が実施され、帆立貝形古墳であることが確実にされた。

墳丘周辺の水田や墳丘裾部に古銅輝石安山岩の小片が存在することからみて、本墳の内部主体は古銅輝石安山岩を用いたものであったと判断できる。



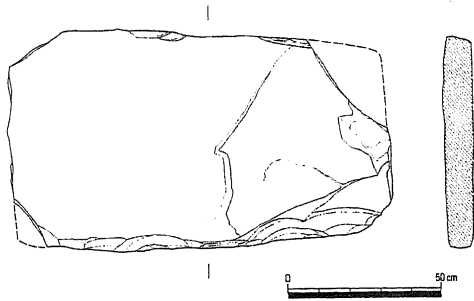


図2 造山2号墳竪穴式石槨  
蓋石 (S=1/25)

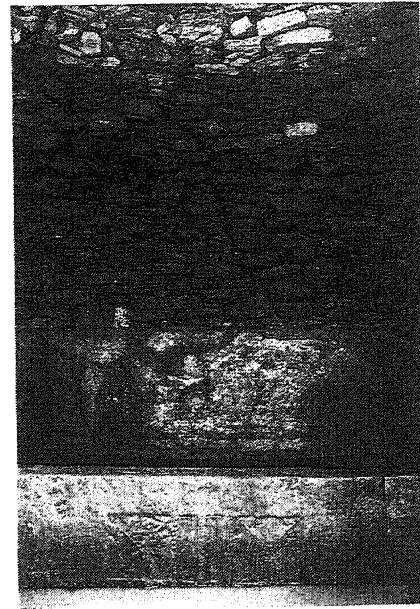


図3 千足古墳石室

#### 千足古墳

造山古墳の南西250 mに位置する全長75mの帆立貝形古墳。墳丘には古式の横穴式石室が築かれており、そのほかに第2埋葬として粘土槨が設けられていたと伝えられる。

横穴式石室は玄室の長さ3.45m、幅2.41～2.83m、高さ2.66mを測り、壁面は強い持ち送りをもつ。石室壁面は古銅輝石安山岩の角礫、亜角礫によって築かれており、3枚の天井石は縁辺を加工した古銅輝石安山岩の板石である。石室内に設けられた砂岩製の石障は直弧文が刻まれていることでよく知られているが、それ以外にも玄室の四周、棺床、玄門、玄門閉塞などに大小あわせて16枚の板状石材が用いられており、このうち3枚が古銅輝石安山岩、残りが砂岩である。

#### 造山6号墳

千足古墳の南50mに所在する。現状は径30mの円墳であるが、もとは短い前方部が存在した可能性がある。

主体部の構造は不明であるが墳丘上に古銅輝石安山岩の扁平な角礫が散布しており、墳丘外でも大量の古銅輝石安山岩の角礫、亜角礫を見ることができ、石材を多量に用いた主体部であったことをうかがわせる。石材は最大のもので長さ30cm、幅10cm以上、厚さ10cmを測り、長さ18～12cm、厚さ7～4cm程度のもので主体をなし、割って形を整えたとみられるものも認められる。

#### 小造山古墳

造山古墳北側の標高25mの低丘陵上に築かれた全長133 mの3段築成の前方後円墳で、後円部径85m、前方部幅90mを測る。ゆるやかに下降する丘陵上に築かれており、前方部を山麓の方向、南に向け、後円部側から両くびれ部にかけては幅15mの周濠をもつ。

造山古墳に先行する首長墳とされてきたが、埴輪の特徴や墳形からみて、造山古墳に続く首

長墳であることが明らかである。

後円部中央に掘られた盗掘墳には石材は見られないが、前方部前端にある墓地内に古銅輝石安山岩の割石、垂角礫が用いられている。他の古墳から持ち込まれた石材の可能性も否定はできないが、他の石材とともに用いられており、本墳に伴うものとみてさしつかえないと考える。

#### 新庄上車塚古墳

造山古墳の北西400 mに位置する帆立貝形古墳である。墳丘は明治初年ごろに低地の埋め立てのために掘り崩されており、現在は水田の畦畔から古墳の形状をうかがうことができるにすぎない。南西方向に前方部を想定し、全長120 m以上の前方後円墳と見る説もあるが、北からのびる丘陵の先端に築かれた古墳であるため、前方部を南西に想定すれば前方部は丘陵の外へ出てしまうことになり、畦畔線からも大きな前方部の存在を考えることは困難である。

畦畔線から判断して後円部径約45mで長さ10m程度の短い前方部をもち、周囲に幅10mの周濠をもつと推定できる。造山古墳前方部上に置かれた阿蘇溶結凝灰岩製の刳抜式長持形石棺は本墳から出土したとも伝えられるが、この石棺の帰属、および石棺については稿を改めて論じることとする。周堀部分にそって流れる用水路の中から古銅輝石安山岩の板状石材を採集しており、本墳の埋葬が古銅輝石安山岩を用いた竪穴式石室であったことは確実である。

#### 法蓮23号墳

小造山古墳の西側の尾根上に形成された小墳群のうちの1基。径約10m、高さ40cmの小円墳で、組合せ式木棺を中心主体とし、周溝の外側に3基の石蓋土壇と1基の箱式石棺が配されていた。蓋石土壇のうち2基に用いられた石材は花崗岩であったが、残りの1基には古銅輝石安山岩の角礫と割石が用いられていた。石材は小口に1枚、蓋に4枚が用いられており、石蓋の間の空隙をふさぐためさらに小さい石材が配されている。蓋に用いられた石材のうち最も大きいものは長さ53cm、幅27cm、厚さ8cmを測り、この時期の竪穴式石室に用いられている石材と比較して長さがやや上回っているが、他のものは竪穴式石室の石材と同様な大きさである。

本墳には埴輪は伴っていないが、周溝内からTK216 型式の須恵器甕、土師器高杯、鉄鎌が、上述の蓋石土壇からは刀子が出土している（村上1985）。

#### 甫崎天神山古墳群

造山古墳の東側に所在する低丘陵上に所在する古墳時代前期から後期にかけての古墳群であるが、城郭遺跡と重複しているため丘陵はかなりの削平を受けており、丘陵縁辺に位置する古墳しか遺存していない。検出された4基の前半期古墳はいずれも小規模な方墳である。丘陵斜面の流土中から古銅輝石安山岩の破片が出土しており、この石材を使用した古墳が存在していたと推定できる。

なお、これらの前半期古墳のうちの1基、5号墳は大形の円筒埴輪棺を中心主体とする小規模な方墳である。

#### 前池内古墳群

上記の甫崎天神山古墳群の南西1kmの尾根上に位置する、古墳時代中期から後期にかけての古墳群である。そのうち中期の古墳はいずれも墳丘が削平されており、主体部の構造などは明らかでないが、検出された周溝のうちの1本から、埴輪とともにかなりの量の古銅輝石安山岩

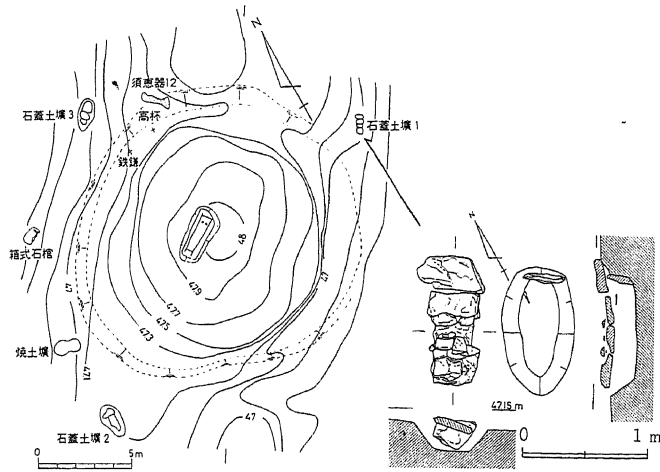


図4 法蓮23号墳・石蓋土墳1 (S=1/400・60)

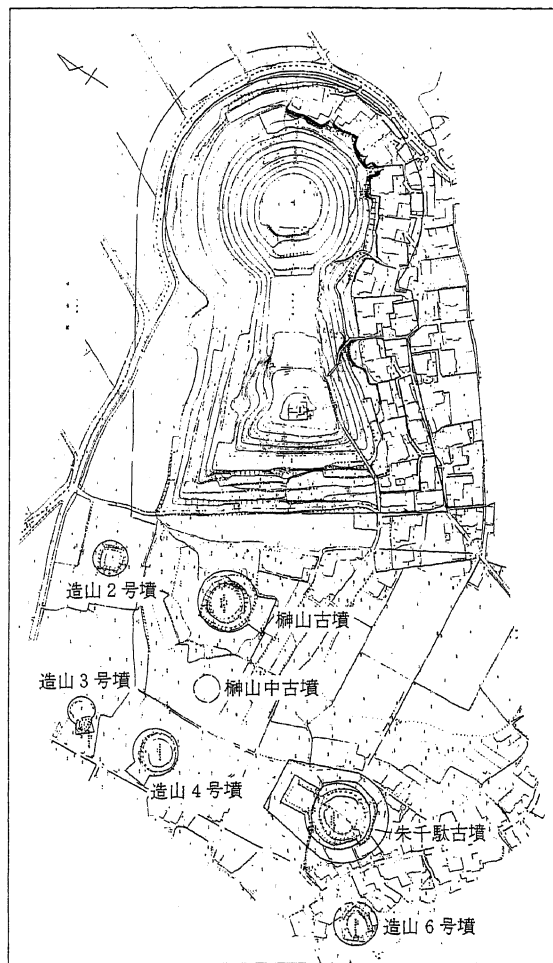
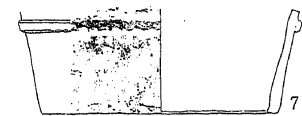
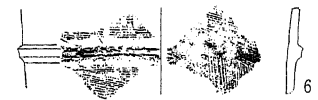
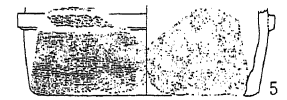
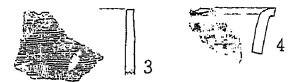
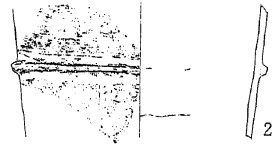
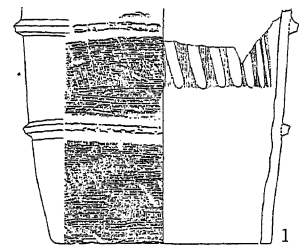


図5 造山古墳および周辺の中規模古墳  
(S=1/6000)



0 20 cm

図6 各古墳の埴輪 (S=1/10)

- 1. 造山古墳 2. 造山古墳前方部
- 3~5. 作山古墳 6、7. 宿寺山古墳
- (1、3、5 註4 b文献から)

の板状石材が出土しており、主体部に用いられていた石材が流入したと推定される。

#### 一本松古墳

岡山市街地北側に所在する半田山丘陵の尾根上に位置する前方後円墳。全長66m、後円部径43mを測り、前方部は低く短い。後円部には墳丘主軸に平行して築かれた全長約5m、幅90cmの竪穴式石室が築かれている。使用石材はすべて古銅輝石安山岩であり、垂角礫と割石が用いられている。本墳出土と伝えられる資料が東京国立博物館に所蔵されており、槍、鉄槌、鉄鉗、小札鋌留眉庇付冑、帯金具付き短甲片などがある。

### 4 造山古墳とその年代

埋葬施設に古銅輝石安山岩を用いる中期古墳の分布を示したのが図1であるが、これからも明らかなように、一本松古墳以外の古墳は足守側西岸平野の一角、すなわち造山古墳の周辺地域に集中して分布している。特に、千足古墳をはじめとする造山古墳前方部南側に所在する中規模古墳群においては基本的に古銅輝石安山岩が使用されており、造山古墳自体も使用の可能性が高い。

古銅輝石安山岩を使用する古墳の評価にあたって、まず、造山古墳について若干の検討を行っておく。

#### (1) 規模

造山古墳は全長350m、後円部径205m、前方部長171mを測り、大阪府石津丘古墳について全国第4位の規模をもつ巨大古墳である。北東にのびる低丘陵を利用して築かれた古墳であり、前方部前面の堀切り状の掘削によって丘陵と墳丘の分離がなされている。

墳丘東側から前方部南角部の外方にかけては水田の畦畔から墳丘をとりまく区画の存在が明瞭に認められ、さらに、葛原克人氏によって指摘されているように、後円部北側から西くびれ部にかけては、区画整理によって現在は失われているものの、かつては墳丘をとりまく2重の畦畔線が存在していたことが、明治期の切り図から明らかである(葛原1987)。この畦畔線は後円部東側に現存する弧状の畦畔線、前方部西側に遺存する畦畔線に続くとみられ、墳丘全体を盾形にとりまく区画が存在していたと考えてよい。ただし、現在の埋没面(水田面)が前方部側と後円部側で3.5mの比高差をもっており、かなり傾斜したものであったと考えられる。また、その幅からみてかなり浅いものであったと推定され、特に後円部周辺では濠というよりもテラス・周庭帯状になっていたと考えられる。その幅は後円部南東部分で25mと、同時期の畿内の前方後円墳の濠幅にくらべてかなり狭いものになっているが、地形の傾斜のため広い面積をとることができなかつたとみられる。

なお「周濠」の前方部側外側線は前方部前面の残丘部分で屈曲を示し、さらに残丘の西側部分ではそれが墳丘側にかなり接近する。前方部隅角で意図的に濠幅を狭めたのか、丘陵の切断がむずかしいため幅が狭くなったのか、いずれとも判断しがたい。

#### (2) 埴輪

本墳の築造時期については、第2節においてふれたように、2つの意見がある。繰り返して

述べれば、1つは本墳出土埴輪資料のなかに審窯焼成のものが存在することを指摘し、本墳の築造をその時期と考える春成秀爾氏の見解（春成1983）があり、もう1つは審窯焼成の埴輪資料は副次的なものと考え、築造時期を審窯焼成の埴輪の導入以前と考える葛原克人氏（葛原1987）、島崎東氏（島崎1992）の見解である。以下、この問題についての検討をおこなう。

埴輪は（図6-1・2）基部径30cm前後で、突帯は比較的細くその断面はM字状をなすものが多い。外面調整はタテハケののち2次調整にヨコハケが施される。このヨコハケは明瞭な休止痕跡はもたないが、かなりの長さにわたって器表を離れることなく施されており、部分的に弱い休止痕跡が認められる。内面調整はナデないしタテハケである。本墳出土埴輪の大部分は、有黒班のいわゆる野焼きによると判断されるが、そのほかに無黒班の審窯焼成の破片も少量認められる。両者は内外面の調整など焼成以外の点では特に差異はないようである。

野焼きの破片が墳丘全域に分布していることは言うまでもないが、審窯焼成の埴輪も破片数は少ないけれども、後円部斜面、くびれ部を含めて墳丘全域に分布しており、とりわけ前方部上の方形壇部分において、その比率が高くなる。これらのうち、前方部方形壇部分の審窯焼成埴輪については、それが前方部埋葬に伴うものである可能性が強い。したがって造山古墳の時期に関して問題となるのは後円部、くびれ部などに分布する審窯焼成の埴輪である。

後円部における審窯焼成の埴輪の存在については、2つの解釈が可能である。1つは、後円部に第2埋葬があり、それに伴って追加配列されたと考えられることであり、もう1つは、本来両者は混在して配列されていたと考えることである。この2つのいずれであるかは発掘調査によらなければ決定はできないが、吉備においては作山古墳、倉敷市西の平古墳（新東・伊藤・間壁1974）や前述の造山4号墳など、審窯焼成の埴輪と野焼きの埴輪が混在する例がある程度存在している。また、岡山市甫崎天神山5号墳において棺体には野焼きの特製円筒棺を用い、小口部の蓋に審窯焼成の埴輪を用いた円筒埴輪棺が検出されている（宇垣ほか1988）。こうした例からみて、吉備における審窯焼成技術の導入期、つまり、川西編年（川西1978）Ⅳ期前半・6期（広瀬1991）には野焼きと審窯焼成が截然と変換したのではなく、両者が一定の期間併用され、徐々に後者の比率が増大していったと推定できる<sup>2)</sup>。したがって、造山古墳の審窯焼成の埴輪を、あえて新しいものとして分離する必要はなく、本墳の築造時期は川西編年Ⅳ期と考えるべきであり、2種類の焼成技法の埴輪を出土する古墳のなかで審窯焼成の埴輪の比率が最も低いことからみて、そのなかでも最も古い段階に位置づけられると考える<sup>3)</sup>。埴輪から導かれる年代や墳丘規模、立面形の近似（新納1992）などから判断すれば、造山古墳は百舌鳥古墳群の石津丘古墳をモデルとし、それと同形同規模に築造することを企図した古墳として理解できるのではないだろうか。

### (3) 周辺の古墳との関係

さて、この造山古墳と周辺に分布する中規模古墳の先後関係であるが、造山古墳前方部前面に所在する6基（かつては少なくとも7基存在したようであるが、1基は消滅）の古墳のうち、造山3号墳、6号墳以外の古墳の埴輪が明らかになっている。このうち、野焼きの埴輪が主体を占め、審窯焼成の埴輪を少量含むのが千足古墳、野焼きと審窯焼成の埴輪が混在すると推定されるのが造山2号墳、同4号墳の2基である。榊山古墳には基本的に審窯焼成の埴輪が伴っ

ているが野焼きのものが少量伴う可能性もある。

これらのことからみて造山古墳の南側に位置する中規模古墳は造山古墳の築造と同時に千足古墳と削平された古墳（榊山中古墳4）が築かれ、その後継続的に他の古墳の築造がおこなわれたと考えられる。こうした築造状況や、これらの古墳が全長70～40mと該期の吉備の中規模の首長墳に匹敵する大きさでありながら帆立貝形古墳、あるいは円墳という墳形をとることなどからみて、畿内の巨大古墳の周辺にみられる陪塚と同じ性格のものと考えてよい。いわゆる陪塚については田中和弘氏によって詳細な検討がなされ、併設型、独立型、系列型の3類型が設定されている（田中1986）5）。造山古墳での例は計画的配列を示していない点を重視すれば独立型ということになるだろうが、前方部前面の丘陵上にまとまって分布しており、大きくは併設型として考えたほうがよい。

ただし、これら造山古墳周辺の中規模古墳を古市古墳群や百舌鳥古墳群などの巨大古墳に随伴する小墳（陪塚）と比較した場合、ある程度の時期幅をもって築造がなされている、方墳が認められず帆立貝形古墳の比率が高い、また、古市古墳群の内部主体が判明している併設型・独立型小墳（陪塚）においては石棺を用いている場合をのぞいて粘土槨あるいは木棺の直葬が採用されているのに対し、造山古墳の例ではここに述べるように基本的に竪穴式石槨が使用されている、といった点を指摘することができる。計画的な配置が見られないこと、つまり空間的な従属性が弱く、主体部に粘土槨や木棺直葬が用いられていないことを重視すれば、これら中規模古墳と主墳の被葬者間の関係は、畿内の巨大古墳の場合よりも従属の度合いが低かった可能性が考えられる。

## 5 古銅輝石安山岩の再搬入

吉備のIV期前半の古墳のうち古銅輝石安山岩を使用するのは、確認した限り、ここに示した造山古墳に随伴する中規模古墳にほぼ限られる。もとより、この石材が併設された古墳の被葬者によって独自に搬入されたとは考えがたく、造山古墳に随伴する古墳であるがゆえに使用されたのであり、大首長との親縁性・同族性<sup>6)</sup>を表示するものとして大首長・造山古墳の被葬者から与えられたと考えられる。

造山古墳に先行する中期の首長墳で竪穴式石室の使用石材を確認できる例は多くないため、前期末に位置付けられるものを含めて検討を行っても、そのいずれもが古銅輝石安山岩は使用されていない。たとえば金蔵山古墳（162m）では流紋岩類が搬入、使用されており、神宮寺山古墳（158）では花崗岩が用いられている。

吉備においては前期前半に浦間茶白山古墳をはじめとする首長墳で広範に古銅輝石安山岩が用いられるが、それ以後は前期後半の数基の古墳に用いられるものの、基本的にその使用は認められない。そして、ここに示したように中期中葉に造山古墳の築造を契機として古銅輝石安山岩の搬入が再開される。巨大古墳、造山古墳の築造は、吉備の諸集団を専制的に統括し、その労働力を投入することによってはじめて可能となったであろうと推定されるが、古銅輝石安山岩の搬入もそうした強大な権力の成立によって可能となったと推定され、墳丘の規模とともに

に造山古墳の卓越性を示すものといえよう。

## 6 中期古墳の変遷

### (1) 備前・備中の巨大古墳

造山古墳前面の中規模古墳（陪塚）では、造山古墳の築造後に築かれたものにも古銅輝石安山岩が使用されていることが、審窯焼成埴輪の比率が高い造山古墳4号墳の例からみても明らかである。そして新庄上車塚古墳や小造山古墳など、造山古墳に併設された古墳以外にも、この石材が用いられる。これらの古墳における使用の意味の検討のため、また、この石材を用いる古墳が吉備の中期古墳のなかでいかなる位置を占めるかを明らかにするために、吉備の中期古墳の変遷について検討を加える。

造山古墳の築造以後、吉備南部に点在する古墳群のうち、2つの古墳群において全長100mをこえる大形古墳・巨大古墳の築造がおこなわれる。まず第1は造山古墳の所在する足守川西岸地域の古墳群であり、ここでは造山古墳に続いて小造山古墳が築造される。また、造山古墳西方の高梁川分流南岸地域においては作山古墳、それに続いて宿寺山古墳が築かれる。この高梁川分流南岸地域の古墳群と足守川西岸地域の古墳群は区分して扱われることが多いが、東西3km程度の範囲であり、後述のように相互に密接な関係を有すると考えられるため、ここでは造山・作山古墳群として一括してとらえ、その中の西群・東群として扱う。

そして、造山・作山古墳群が備中南部に築かれているのに対し、備前南部においては砂川中流域平野に両宮山古墳を中心とする古墳群が築かれている。

#### a 造山・作山古墳群〈東群〉

造山古墳に続いて築造される首長墳は小造山古墳である。この古墳の埴輪の3割程度が野焼きであり、その比率は後述の作山古墳とさほど変わらないが、審窯焼成の埴輪のなかには薄手で須恵質のものが含まれており、作山古墳よりも後出すると考えてよい。小造山古墳の前方部前面には小墳丘状地形が認められるが、畑の造成による地形の改変が著しいため、併設された古墳（陪塚）の有無については不明とせざるをえない。しかし、ある程度の規模をもつ古墳が所在していたとは考えにくい状況である。この小造山古墳に続いて築かれるのは新庄上車塚古墳である。この古墳の埴輪は墳丘が掘削された際に採集された1個体以外には小破片しかないが、審窯焼成であり、かなり小形化していることからすればIV期の後半のなかでも新しく、榊山古墳よりも後出すると推定される。小造山古墳の後、IV期末のこの地域には前方後円墳が築かれず、原1号墳や小山古墳など全長40～30mの帆立貝形古墳や円墳が散在的に築かれるようになり、それらのなかで最大の規模をもつのが新庄上車塚古墳であることからすれば、小造山古墳に続く首長墳である可能性が強い。

新庄上車塚古墳に続いて築かれた首長墳と推定できるのは全長45mの帆立貝形古墳、夫婦塚古墳である。本墳においてはB種ヨコハケを施す埴輪とともに粗いタテハケのみを施す埴輪が混在して用いられているようであり、V期前半（8期）に位置付けられる。後円部には長さ3.5mの竪穴式石室が築かれているが、その石材は花崗岩の角礫である。

## b 造山・作山古墳群&lt;西群&gt;

造山古墳の位置する足守川東岸平野の西側に広がる平野に所在する古墳群であり、両者は分水をなす低い丘陵によって区切られている。この地域において最初に築かれる巨大古墳は全長286 mの作山古墳である。作山古墳は低丘陵を掘削、加工して築かれた古墳であり、古墳の周辺には幅20mの周庭状の平坦面が取りまいているが、周濠の痕跡は認められない。また、造山古墳と比較した場合、周辺に併設型の中小墳（陪塚）が築かれていない点が異なっている。埴輪のうち全体の5割程度が審窯焼成であり、残りがいわゆる埴質の焼成である。埴輪の特徴からみてIV期の前半に位置付けられる。

これに続いて築かれるのは全長114 mの宿寺山古墳である。墳丘はすべて盛土からなり、周囲には盾形の周濠がめぐり、周濠の長さ167 m、幅125 mを測る。後円部、前方部にそれぞれ竪穴式石室が設けられており、このうち梅原末治氏（梅原1925）、森本六爾氏（森本1926）らによって調査された後円部石室は花崗岩の角礫によって築かれており、長さ3.75m、幅1.68mを測り、盤竜鏡、刀剣、鉄鏃、ガラス小玉が出土している。また、この石室からとも後円部第2石室からの出土とも伝えられる資料として変形四神四獣鏡、金製釵などがある。宿寺山古墳の埴輪は基部には1次調整のタテハケ、第2段目以上にB種ヨコハケが施され、すべて審窯焼成であり、IV期後半に位置付けられる。また、宿寺山古墳の北側には車塚と呼ばれる2基の古墳が築かれている。1基は墳形が不明であるが、もう1基は全長30mの小規模な帆立貝形古墳であり、その規模や位置からみて宿寺山古墳に併設された陪塚と考えられる。

なお、墳丘の全周に周濠をめぐらせる古墳は、宿寺山古墳のほか、先に述べた新庄上車塚古墳、後述の両宮山古墳などがある。いずれもIV期後半の古墳であり、周濠は吉備ではこの時期に普及するようである。

## c 砂川中流域平野の古墳

この地域には両宮山古墳を含めて5基の前方後円墳、帆立貝形古墳が築かれる。このうち最大の墳丘を有するのは両宮山古墳であり、全長206m、後円部径116mを測り、周囲に周濠・周堤をめぐらせている。周堤の外側には2基の帆立貝形古墳が築かれており、配置状況からみて、それらは両宮山古墳に併設されたものと考えられる。両宮山古墳には埴輪が伴っていないため年代の推定が困難であるが、前方部前面に築かれた森山古墳（帆立貝形82）にはIV基後半の埴輪が伴い、周堤北側の和田茶臼山古墳<sup>8)</sup>では比較的古式の須恵器片が採集されていることからみて、それらと同様にIV期後半の築造と考えられる。この時期には他に朱千駄古墳（85）があり、竜山石製の長持形石棺を内部主体とし、副葬品として神人歌舞画像鏡、小玉多数、蛇行状鉄器などが知られている。

これらに続いて小山古墳（54）が築かれる。内部主体は阿蘇溶結凝灰岩製の刳抜式の冢形石棺である。この古墳においてはB種ヨコハケを施す埴輪と粗いタテハケのみを施す埴輪の両者が採集されており、V期前半に位置付けられる。

この地域の首長墳系列の最後に築かれるのは川西編年V期の埴輪を出土する全長47mの前方後円墳、廻り山古墳であり、大きく広がった前方部を北に向ける。

## (2) 首長墳の動態



	備中 造山・作山古墳群<東群>	同<西群>	備前 砂川中流域古墳群
IV期前半	<p>1 造山古墳 2 3 4 5 6</p>	<p>7 作山古墳</p>	
IV期後半	<p>8 小造山古墳 9 10 11</p> <p>12 新庄上車場古墳</p>	<p>13 宿寺山古墳 14</p>	<p>15 両宮山古墳 16 17 18 19 朱千駄古墳</p>
V期前半	<p>20 夫婦塚古墳</p>		<p>21 小山古墳</p>

○ - 古銅輝石安山岩使用

図7 吉備の中期古墳の変遷

2. 千足古墳 3. 榑山中古墳 4. 造山3号墳 5. 造山2号墳  
6. 造山6号墳 9. 三吉坊古墳 10. 造山4号墳 11. 榑山古墳  
14. (西)車塚古墳 16. 正免古墳 17. 茶白山古墳 18. 西もり山古墳

以上、吉備南部の主要な地域の首長墳の変遷を述べた。それを示したのが図7であるが、それらをもとに、この地域を中心とする吉備南部の首長墳の変遷について、若干の整理をおこなっておく。

まず問題となるのは備中における2つの古墳群の関係である。この2つの古墳群の関係が十分に検討されたことはなかったが、ここでの検討から明らかなように、東群：造山古墳→小造山古墳→新庄上車塚古墳→夫婦塚古墳、西群：作山古墳→宿寺山古墳という築造順を示している。そしてこの両地域における古墳の築造は完全に平行しておこなわれたのではなく、相互に若干の時期差を持って築かれており、両地域に交互に古墳の築造がなされたと考えられる。つまり、造山古墳以下の足守川西岸地域の首長墳と作山古墳以下の高梁川分流南岸地域の首長墳は地域を交替しながら順に築かれたとみることができる。

こうした築造状況からは、1つの造墓主体が両地域にまたがって前方後円墳を築いたと考えることも可能ではあるが、両地域の古墳どうしを比較した場合、若干の差を認めることができる。造山古墳が全長350 mを測り、周濠、併設型古墳（陪塚）をもつのに対し、作山古墳は墳丘全長286 mで周濠や中小墳を伴っていない。また、小造山古墳が全長133 mを測るのに対し、宿寺山古墳の全長は114 mである。いずれも卓越した規模であるとはいえ、若干の格差が認められることからすれば、これら2つの古墳群の造営主体は別のものであった可能性が考えられる。足守川西岸平野と高梁川分流域平野をそれぞれの基盤とするの2つの首長系譜によって備中南部地域の首長権が保持され、この古墳群が形成されているものと考えられる。そして、墳丘規模の差を重視すれば、この2地域のうち足守川西岸平野に基盤をおく首長が造山古墳の造営以後も優勢であり、中核的な存在であったと考えられる。

一方、砂川流域平野に築かれた両宮山古墳は備中の2地域と、どのような関係にあると考えられるだろうか。前記のように両宮山古墳の年代は墳形以外には手掛かりがなく、厳密な位置付けはできないが、併設された中小墳の年代からⅣ期後半と考えられる。同時期の備中の首長墳として宿寺山古墳があるが、それと比較した場合、両宮山古墳の優位はうたがないが、造山古墳や作山古墳が該期の古墳に示したような圧倒的な規模の差を見せておらず、吉備南部の大首長権が作山古墳から両宮山古墳の被葬者に移動したとみるよりも、春成秀爾氏や葛原克人氏が述べたように、備中、備前両地域にそれぞれ政治的なまとまりが成立し、備前地域の大首長墳として成立したのが両宮山古墳であったと考えられる。

Ⅳ期後半からⅤ期前半にかけて、吉備では全般に古墳の築造が活発化する。なかでも備前では前期前半以来系譜的な首長墳の築造を示しながら、Ⅲ期からⅣ期前半にかけてそれが中断していた邑久地域において全長81mの前方後円墳、築山古墳が築かれる。また、備中地域においても小田川下流域に全長60mの帆立貝形古墳、天狗山古墳が築かれ、西部の長福寺裏山古墳群もこの時期に形成されているとみられるなど、各地域ごとの首長墳の築造が顕著となってくる。

それ以前のⅣ期前半においては、吉備南部では牛窓湾の黒島古墳を除いて、ほとんど前方後円墳が築かれておらず、造山古墳のみが突出した存在である。おそらくこの時期に吉備南部地域の首長連合のなかで足守川流域を基盤とする集団の首長が最高首長としてきわめて卓越した存在となり、造山古墳の造営をおこなう一方で他の首長に対してきわめて強い規制をおこなっ

た結果、首長墳系列の一時的な断絶、あるいは首長墳域の移動といったことが生じたのではないかと考えられる。そして、足守川流域平野の集団を基盤とする首長の力が低下し、その規制が弱まるとともに、それぞれの地域においてふたたび前方後円墳の造営がおこなわれると考えられる。この足守川地域の首長による規制が弱まる過程で、おそらくそれには畿内政権の介在があったであろうが、備前地域が分立し、この地域の首長連合の最高首長の墓として両宮山古墳が出現した可能性が考えられる。両宮山古墳と平行する備中の古墳が宿寺山古墳であるとするれば前者が全長206 m、後者が全長114 mであり、両地域の並立とはいえ備前地域が優勢となるようである。

### (3) 造山古墳以後の石材使用状況

以上に示した吉備の中期古墳の変遷のなかで、古銅輝石安山岩はどのように位置付けられ、また、いかなる意味をもつのか。

古銅輝石安山岩はきわめて特色のある分布を示している。前述のように、古銅輝石安山岩はIV期前半の段階に造山古墳に併設された中規模古墳（陪塚）に搬入がなされており、おそらくその再搬入の契機となったのは造山古墳の造営であったと考えられ、それ以後も足守川西岸地域の古墳群に集中的に搬入されており、前述した一本松古墳<sup>9)</sup>を除けば、他の地域には持ち込まれていない。つまり、造山古墳の周辺地域においてのみ古銅輝石安山岩の使用がなされ、それが継続されたと考えられる。古銅輝石安山岩の搬入が容易でないことは繰り返し述べたところであるが、それが継続して行われていることは、この地域の首長がなお卓越した地位を占めていたことを示している。前述のように小造山古墳は墳丘全長133 mを測り、備前の両宮山古墳よりは小規模ではあるが、宿寺山古墳をうわまわる規模をもち、IV期後半で備中最大の古墳である。おそらく、足守川西岸平野の首長が吉備全体の首長連合の長から備中地域の首長連合の長へとその地位を弱めながらも、なお他の首長が比肩できない位置を占めており、その地位、そして造山古墳被葬者の後継であることを表示するものとして古銅輝石安山岩の搬入がなされたものと思われる。こうした古銅輝石安山岩の搬入が終了するのはIV期末であり、それと軌を一にしてこの地域における大形の首長墳の築造が停止する。V期前半のこの地域の首長墳である夫婦塚古墳は墳丘全長45mの帆立貝形古墳であり、他の地域の首長墳と同等の大きさとなっており、この時期にはすでに備中地域の首長連合の長としての地位は失われていたと思われる。

また、こうした首長墳以外に古銅輝石安山岩を用いる古墳として、法蓮23号墳などの小古墳がある。いずれも足守川西岸の古墳であり、その築造時期もこの地域の首長墳に古銅輝石安山岩が搬入される時期に限られている。この時期、この地域には多数の小規模古墳が築かれている。これらの古墳は造山古墳に随伴する千足古墳以下の中小規模墳とは当然異なった位置付けではあろうが、やはりこの地域の首長の権力機構の末端に位置するものであったと考えられる。そして、それらのうちの一部に従属関係の表示として古銅輝石安山岩が与えられたと考えられ、それはまた、大首長とのつながりを示し、他の小墳に対する優位を表示するものであったと思われる。

## 7 おわりに

以上のように古墳時代中期の吉備においては造山古墳の築造を契機として古銅輝石安山岩の搬入が再開される。その搬入は造山古墳に随伴する中規模古墳（陪塚）、造山古墳に続いて築造される足守川西岸地域の首長墳、そしてこの地域のいくつかの小墳に限られており、吉備南部の首長墳に広がりを示す古墳時代前期前半のありかたとはかなり異なる。

前期前半にはその分布のあり方から古銅輝石安山岩が吉備南部の首長間の紐帯を表示するものとして用いられていたと考えられるのに対し、一地域の古墳群にのみ搬入がなされる中期の状況からは、古銅輝石安山岩が他の地域の古墳に対する卓越を表示するものであったと考えることができ、そのことは、古墳時代中期の吉備の首長間の関係が、同族的な連合体としての性格を失い、最高首長が他の追隨を許さない卓越した存在となったことを示していると思われる。

そして、中期末に足守川西岸平野における大形古墳の築造が停止し、その時期に吉備の首長間関係に大きな変動があったと考えられるが、同時に古銅輝石安山岩の搬入が停止しふたたびその搬入がなされることはない。このことから古銅輝石安山岩が単なる石室構築材料としての意味をこえて、その使用が権威と卓越性を示すものであったと考えられる。

この古銅輝石安山岩に見られる特殊性・政治的な性格は、吉備において見られる特異な現象ではなく、むしろ石室石材・石棺全般に内包されたものであって、それが石材搬入に困難な条件をもつ吉備において顕著な現れ方をしているものと考えられる。

本章は「竪穴式石室の研究 -使用石材の分析から-」（第3章）の補完を目的として吉備の中期古墳の石材を中心に検討をおこない、該期の古墳の評価を試みたものである。

論旨の関係から吉備の中期古墳のうち巨大古墳とその周辺の首長墳の検討が中心となり、中小の首長墳はあまりふれる余裕がなく、古墳時代中期の吉備の理解には不十分との感が強いが、それらについては先学の検討を参照願いたい。

本稿に記載は行っていないが、石材の分析・検討に妹尾護氏をわずらわせ、多くの教示をいただいた。また、亀山行雄氏からは写真図版の提供を得た。北條芳隆、秋山浩三、天野末喜、乗岡実の諸氏からは多くの教示、助言をいただいた。

## 註

- 1) 石材についてサヌキトイドと呼ぶ意見もあるが、サヌキトイドは古銅輝石を含む玄武岩および安山岩の総称である。本稿では岩石名を確定しているのでそれは用いない。
- 2) ここでは野焼きと窖窯焼成の混用比率、基部外面のヨコハケ調整の有無、径の大きさ等を指標としてIV期を前半・後半に区分している。それについて須臾器や副葬品からの検証は困難であり、IV期前半と6期が厳密に対応するかどうかは不明である。
- 3) 仮に後円部第2主体の存在を想定するにしても、築造時期は第2主体や前方部主体の構築時期であるIV期から、さほどさかのぼるものではないだろう。

- 4) 永山卯三郎氏が榊山中丘とした古墳である（永山1930）。削平の際に押し出されたとみられる埴輪はいずれも有黒斑である。
- 5) なお、文中で述べたように「小古墳」と呼びかねる規模のものを含んでいるため、ここでは中規模とした。
- 6) 第9章で述べるが、これら陪塚の被葬者は主墳被葬者の近親者を基本とすると考えている。
- 7) 適当な地域名称がないため、仮にこの名称を用いる。都窪古墳群と呼ぶことも可能であるが、難読名称である。
- 8) 現状は円墳状をなすが、名称から帆立貝形古墳ないし前方後円墳と考えている。
- 9) 白石純氏の分析によれば、一本松古墳の石材は足守川流域の古墳の石材と若干異なるとの結果が示されており（白石1991）、独自に搬入がなされた可能性も考えられる。

## 第8章 周濠の地方伝播に関する一試論

## 1 はじめに

倉敷市真備町天狗山古墳は底面幅3mの周濠と基底部幅9m、高さ2mの周堤を伴う。全長60m、高さ9mの墳丘を深い周濠と高い周堤が取り巻いており、岡山県下でも屈指の保存状態の良さと威容を示す古墳と言ってよい。

周堤は基本的に地山の削り出しによって形成されるが、地形が低くなる前方部側は盛土によって構築される。周濠も大部分が地山の岩盤を掘削して形成されているが、尾根が狭くなる前方部西側では周濠底面まで盛土が見られ、全周する周濠と周堤を形成するために大規模な造成、盛り土作業がなされたことを示している。底面は前方部前端側にむかって傾斜ををもち、地形の傾きを考慮すれば水平に近いと言って良い。

周濠には0.5～1mの暗褐色土が堆積している。下部の堆積土は粘質をもつとはいえ粘土層や有機質層ではなく、滞水状況ではなかったことを示している。これは山頂という古墳の立地からすれば当然なことであり、降雨後に浅く水が溜まる程度で、常には空壕の状態であったと判断される。

天狗山古墳はきわめて整った周濠と周堤をもつが、こうした例は吉備にあつてはごく少数、まれな存在である。本章では吉備の古墳の構成要素のなかにどのように周濠そして周堤が採用されていくのか、またそれはどのような意味をもつのかを考えてみたい。なお、中期の古墳において周濠と周堤は基本的に一体のものと考えられるが、周堤は天狗山古墳のようによほど遺存状態が良い、あるいは両宮山古墳のように巨大な規模をもつ場合には確認できるものの、幅や高さを確認できるほどの残存状態にないこともあり、また、発掘調査例も少ないため、ここではおもに周濠を検討の対象とする。

## 2 資料の問題点と研究の課題

周濠は、中期の古墳、なかでも巨大古墳では基本的な属性の一つである。しかしながら、墳丘の築造企画を検討する際などに要素の一つとして取り上げられることはあるものの、それ以上に検討の対象となることは少ない。これは巨大古墳の周濠の多くが陵墓の範囲に含まれるため、また、常時湛えられた水のために観察がむずかしいこと、そしてそれ以上に、幕末の修陵、その対象とならなかつた場合でも溜池として利用される過程である程度の改変や浸食を生じており、測量図から得られる平面形をそのまま検討材料とはしがたいことによる。また、もう一つの問題点は、周濠が比較的浅かつた場合、しばしば完全に埋没し、あるいは埋め立てられていることであり、地表に畦畔として痕跡が残れば良い方で場合によってはそれすら残さず、確認調査によってはじめてその存在が明らかになることも少なくない。

こうした資料化のむずかしさが周濠の比較検討の妨げとなっており、総括的な研究は比較的少ない。白石太一郎氏は巨大古墳の周濠資料の検討を行いその変遷過程を示し、さらに周濠の意義を論じた（白石1983）。また、一瀬和夫氏は、その後蓄積された資料をもとに周濠を含む外域施設に新たな要素が付加されていく過程を整理し、変遷の諸段階を設定した（一瀬1992）。両氏の論はともに畿内中枢の資料を用いたのものであるが、畿外に点在する周濠をもつ古墳にも注意がはらわれている。白石氏は畿内からの伝播であることを示唆することとどめるが、一瀬氏はそれらが畿内からの影響のもとに築かれたとする評価を示している。

なお、ここで述べる古墳の「ほり」をどう呼ぶかについては、いくつかの提言がなされている。小林行雄氏は周濠と呼ぶ（小林1959）のに対し、白石氏は水をたたえた「ほり」を周濠、「からぼり」あるいは溝状をなすものを周溝とするとした。一方、茂木雅博氏は後世の改変によって「からぼり」が濠に改変された可能性を指摘し、基本は隍（からぼり）であるとした（茂木1992）。「ほり」が水ぼりであったか「からぼり」であったかは、周濠の機能や古墳の景観を考えるうえで重要な意味をもつことは言うまでもないが、現状において多くの資料を弁別することはほぼ不可能であろう。畿内を中心に、当初は水ぼりであったことが確認された資料が増加しつつあり、一方で天狗山古墳のように水ぼりとなることは企図されなかったとみられる資料も少なくない。水ぼりになるかどうかは地下水位の高さあるいは周囲からの水の流入量に係ると理解するならば、築造時の選地がそれを決する要素であって、形状など他の要素からの区分はきわめてむずかしいことになる。実際、両宮山古墳の外濠は水がたまっていとみられる箇所と、そうでない箇所からなる。そのため、ここでは水ぼりと「からぼり」の区分は行わず一括して周濠と呼ぶ<sup>1)</sup>。

さて、吉備の古墳に限って述べるなら、巨大古墳、造山古墳と両宮山古墳の対照的な景観、墳丘が平地に屹立する造山古墳と水濠をめぐる両宮山古墳の対比から、周濠をもつ古墳とそうでない古墳が中期に混在することは早くから注意を引いてきた。ただし、畿内の巨大古墳と同様の景観をもつ両宮山古墳が卓抜した存在であるため、ややもすればこの古墳の特異性として取り扱われがちであったと言える。

### 3 吉備の古墳の周濠

#### (1) 前期

検討にあたり、吉備の古墳において周濠がどのように採用されているかを整理する。

吉備を代表する前期古墳として、浦間茶臼山古墳、備前車塚古墳、七つぐろ1号墳などがある。このうち墳丘・墳端の発掘調査が実施された七つぐろ1号墳を例にあげれば、墳丘が細い尾根の上面いっぱい築かれているため周濠がめぐる余地は全くなく、本来、周濠をもつことが企図されていなかったと考えてよい。これは他の1期の古墳についても同様であり、尾根を切断して墳丘を形成したため尾根側に幅の広い溝状の掘削が認められる操山109号墳のような例はあるが、それが周濠となって墳丘をとりまく例は認められず、吉備の前期古墳の構成要素のなかに周濠はなかったとみてよい。

この状況は4期まで変わらない。4期を代表する古墳に金蔵山古墳があるが、尾根稜線側で若干の掘り込みを設けて墳端を下げ、墳端の高さの調整を試みている可能性があるが、周濠はない。一方、同時期の神宮寺山古墳は沖積平野の微高地を利用して築かれた古墳であり、周濠の存在が想定されたこともあるが明確な根拠はなく、周濠はなかったと考えられる。

## (2) 中・後期

吉備の古墳が周濠を伴うのは中期、5期以降である。それを時期別に示せば、以下のようになる。

5期 小盛山古墳105m

6期 造山古墳350 千足古墳75 造山4号墳55 造山2号墳

7期 小造山古墳133 宿寺山古墳114 双つ塚古墳60 両宮山古墳206 森山古墳82

8期 夫婦塚古墳45 天狗山古墳60 仙人塚43 東塚50 和田茶臼山古墳55

朱千駄古墳85 小山古墳54 築山古墳81 牛文茶臼山古墳48 鹿歩山古墳81

十六夜山古墳 60

**5期** 5期の小盛山古墳が周濠をもつ古墳として最も早い資料となり、6期の造山以下の古墳がこれに続く。小盛山古墳は全長105mにおよぶ大形の帆立貝形古墳であるが、周濠は底面幅8m前後と狭い。墳丘と東側の丘陵の間の周濠はかなりの部分が溜池となっており、西の平野側は弧状に畑がとりまいていいる。山側にあたる東半部には周濠がめぐり西半にはそれに続く地割りがあつたと推定できるが、西半まで完周する濠であつた可能性は低く、その側では掘り込みをもたず周庭状になっていたと推定される（草原1996）2）。

**6期** 造山古墳および周辺の陪塚がこの期の資料である。造山古墳では墳丘をとりまく盾形の地割りをみることができ、前方部側は大規模な堀切状の掘削が想定されるものの後円部側に周堤を想定することはむずかしい。前方部前端と後円部後端側では3.5mの高低差がある。これは現水田面の高さであつて周濠底面を直接示すものではないが、この傾斜からは同一水面の水濠を想定することはむずかしく、後円部側は上記の小盛山古墳と同様に周庭状になる可能性が考えられる。これは、部分的ではあるが発掘調査が実施された造山4号墳においても同様であり、周濠は後円部をとりまくものの、前方部側は掘り放した形状あるいは周濠はそこまでは及んでないかのいずれかと想定されている（安川1998）。また、古墳周囲の形状から周濠の存在を想定することができる千足古墳の場合、推定される周濠はかなり幅が狭いものであつたとみられる。

以上のように、5・6期には周濠は設けられるものの同一水面を形成しうるような濠はないか稀であり、多くが完周しないものであつたとみられる。またこの時期、周濠をもつ例は造山古墳とそれに随伴する中規模古墳（陪塚）に限られ、周濠をもたない古墳のほうがむしろ多い。大形古墳では推定6期の佐古田堂山古墳、中規模古墳としては黒島古墳、一本松古墳、随庵古墳などがそうした例である。このことは造山古墳群の卓越を示す事象と言えるが、それだけでなく、陪塚に主墳と同様の卓越した要素が与えられたことを示している。同様の事象はともに二重周濠をもつ主墳・両宮山古墳と陪塚・和田茶臼山古墳においても認められ、主墳と陪塚の関係を考える上で重要な手がかりになると考える。なお、備前地域に大形古墳の築造がなされ



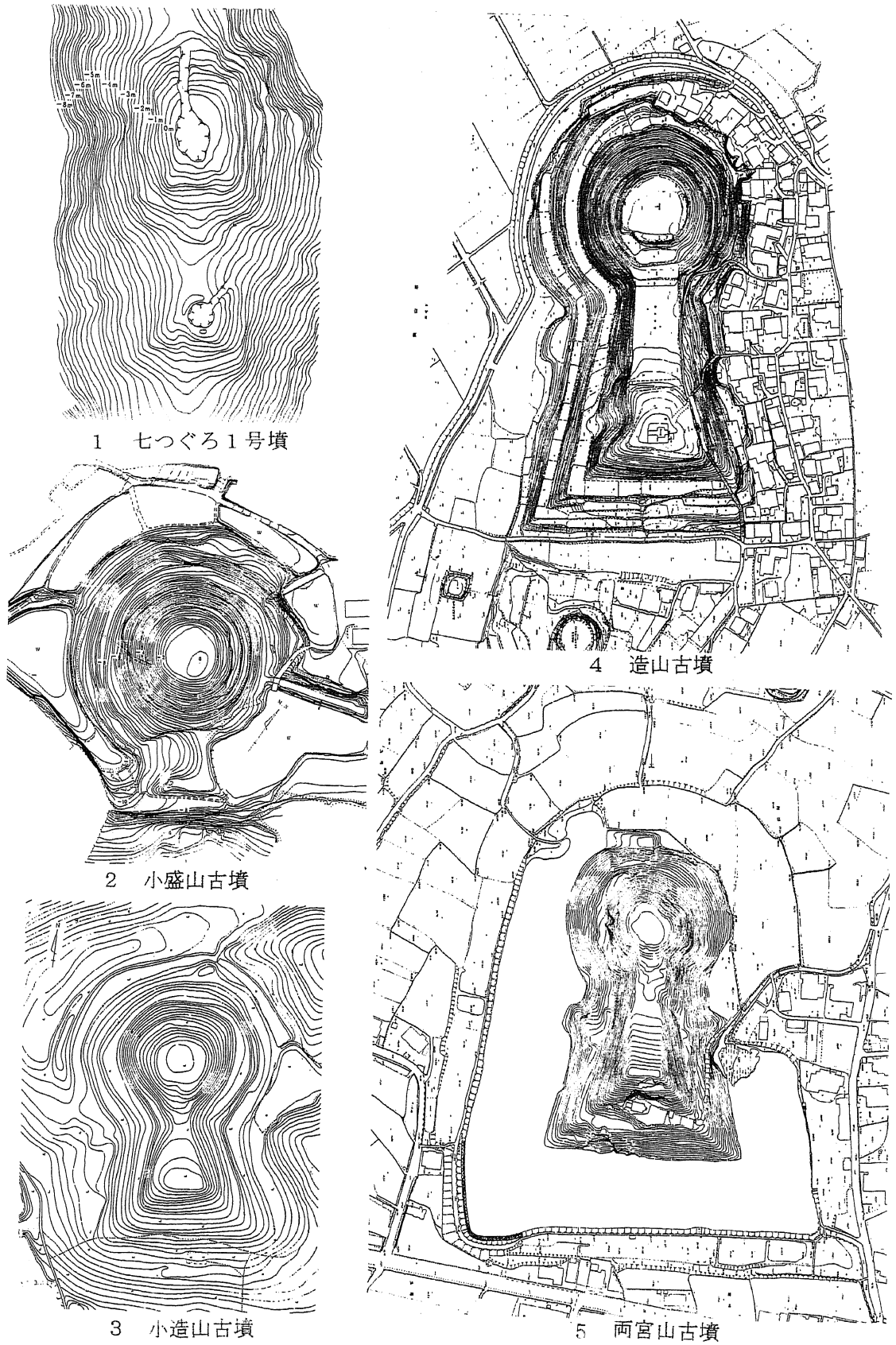
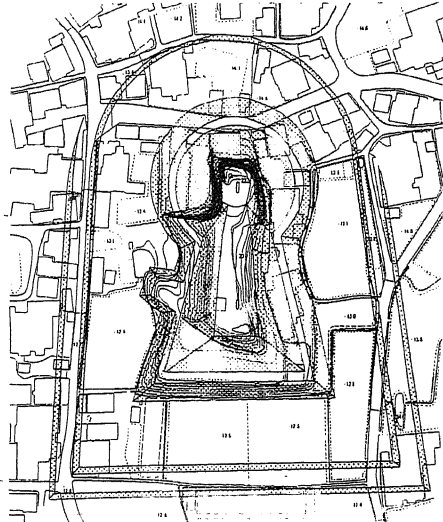
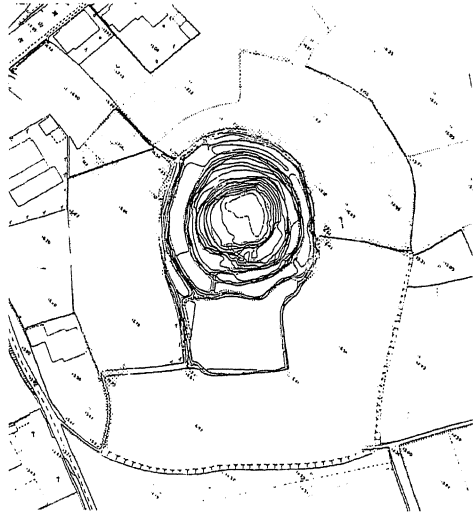


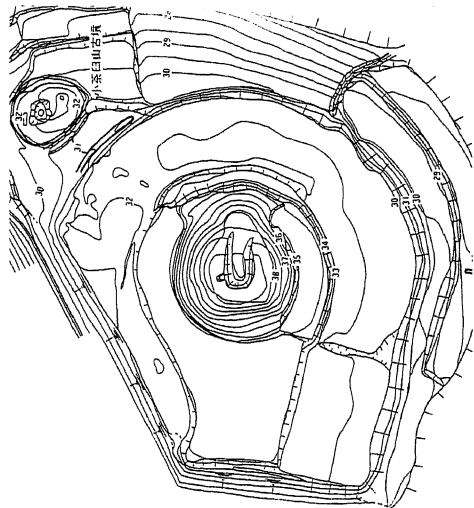
図1 吉備の古墳の周濠(1)



6 宿寺山古墳



7 森山古墳



8 牛文茶白山古墳

図2 吉備の古墳の周濠(2)

るのは次の7期からで、それまでは周濠をもつ古墳は築かれていないため、図3に示した備前の該期は空白となる。

7期 6期に見られた地域的な偏りが見られなくなり、備中南部の小造山古墳、宿寺山古墳、備中南部西部の双塚古墳、備前の両宮山古墳と、吉備南部全地域において周濠をもつ古墳が築かれる。これらのうち、小造山古墳は上記6期の例と同じく周濠は完周せず前方部側が開くのに対し、他の4基はいずれも完周する周濠をもつ。埴輪から小造山古墳は宿寺山古墳よりも先行するとみてよく、両宮山古墳も7期のなかでも新しい段階に位置付けられる可能性が強い。これらのことから、古い形態の周濠をもつ小造山古墳は他の3基に先行すると推定できる。後述のように続く8期の周濠は完周を基本としており、周濠形状の転換はこの期のなかでなされると判断する。

両宮山古墳に代表される新しい様相の周濠は幅が前時期のものにくらべて広く、完周し、底面の高低差も小さいとみられる。この期の資料のうち両宮山古墳のそれは現在水をたたえるが、地形が下降する前方部側には高さ2.5mの周堤が設けられており、水濠となるよう設計されたとみてよい。また宿寺山古墳も残存する周堤は水田面から約1mと高く、本来水濠であったものが埋没しているとみられる。6期の資料では周堤をもつ確実な事例が認められないのに対し、周濠が完周しない小造山古墳例でも周濠外側には周堤が設けられており、両宮山古墳以下の3基は規模の大きな周堤を伴う。6期における様相が明確でないため断定はできないが、遺構として残る規模の周堤はこの時期にはじまる可能性がある。

なお、両宮山古墳の確認調査等によって二重周濠は7期に出現し、8期に増加することが明らかになっている。

8期 周濠は主要な首長墳において一般化する。その代表となるのが天狗山古墳であり、鹿歩山古墳

も同様に山頂に立地しながら幅の広い周濠と高い周堤をもつ。

なお、先に示した古墳のいくつかは周濠が想定されていなかった資料であるため、若干説明を加えておく。高月地域の朱千駄古墳は墳丘および周辺の改変が著しいが、山麓に築かれた前方後円墳で東西に主軸をとる。墳丘南側には池が設けられるほか前方部前面側が一段低くなっており、本来は周濠がめぐっていたとみられる。ただし古墳が山麓斜面に位置するため、周濠底面はかなり斜めになる可能性が強い。また、小山古墳は舌状の張り出しを利用して築かれた古墳で南北に主軸をとる。現在は北側の後円部後端に周濠の痕跡を残すのみであるが、畦畔の形状から墳丘をとりまく周濠と周堤の存在を推定できる。その他、牛文茶臼山古墳は墳丘周辺に周庭帯状に畑がめぐるがこれは周溝と周堤が畑の造成により一体となったものと考えられる。

7期以降、吉備南部においては各地域ごとに首長墳の築造が再開されるが、8期にはそれはさらに活発化する。帆立貝形古墳を含めて多数の首長墳の築造がなされ（第11章）、そのほぼすべてに周濠・周堤を伴う。この時期、小墳において埴輪の使用が活発となり、首長墳に限定されていた要素の一部が下位に導入されると評価できる（第12章）が、小墳においても浅い周溝を設けることが一般化する。丘陵上に築かれる場合は一部が途切れたり半周程度になることも少なくないが、完周するものも認められ、周溝の広範な普及を示す。

**9期** 発掘調査によって墳丘の詳細が確認された資料は9期でも後半に限られ、その前半期—MT15型式段階の様相がやや不明確ではあるが、周濠の消滅がこの期の特徴となる。

この期の後半の資料としては二万大塚古墳、斎富2号墳があり、ともに周濠を伴わないことが確認されている。一方、この期の前半段階と推定されるものとして波歌山古墳、船山古墳、廻り山古墳がある。波歌山古墳は発掘調査を経ずに消滅したため確実ではないものの、測量図から少なくとも規模の大きな周濠はなかったと言えるし、船山古墳も周濠は伴わないとみてよい。廻り山古墳は墳裾にやや広い畑がめぐっており周濠の想定が可能ではあるが、その場合でも地形から幅の広い周濠を想定することはむずかしい。この期の資料で確実に周濠をもつ例は認められず、周濠の採用は8期の盛行の後、急速に衰退するとみられる。

これ以降の資料として、10期の箭田大塚古墳がある。大形の円墳で周囲に周濠をめぐらせるが、同時期の前方後円墳、備中こうもり塚古墳や江崎古墳には周濠は設けられておらず、本例は後期の群集墳において山側に設けられる周濠を大規模化したものと考えられるが、この相違は前方後円墳と円墳の差を示すものでもあろう。

### (3)周濠の変遷

以上、吉備南部の首長墳について周濠の採用状況を概観した。

一般的な存在と見られがちな周濠は5～8期に限定されたものである。その形状とあり方は7期のなかで変化しており、そこを画期として前半と後半に区分することができる。前半期（5～7期前半）には3段築成で大形の墳丘をもつ大首長墳およびそれに随伴する中規模古墳・陪塚に採用される。周濠が完周する例はほとんどなく、一部がテラス状になると想定されるものが主体を占め、完周する周濠を構築することが企図されていなかったか、それを考慮した選地がなされていなかった可能性がある。一方、後半期（7期後半～8期）には完周する周濠が首長墳において広く採用され、二重周濠をもつものも現れる。そして、この盛行の後、周濠は

吉備南部においては急速に採用を停止する。

この出現・消滅過程から明らかなように吉備の古墳にとって周濠は後出の要素である。吉備における周濠の変遷は、周濠の「発展・改良」を示すかに見えるが、同時期の畿内の古墳の周濠はすでに完成の域に達していることからすれば、それは、吉備に周濠が完成された形でもたらされたのではなく、少なくとも二段階にわたる形で導入がなされたことを示すと言える。

#### 4 周濠の地方伝播

##### (1) 各地の様相

以下に示すように、前方後円墳の成立以来一貫して周濠を設け、それを整備し型式として整えていくのは大和、後には河内地域である。墳丘に次ぐ、後には墳丘を凌駕する面積をもつ周濠は、主体部の隔絶のための装置の一つとしてはじまり、後には古墳を人為的な景観として視覚的に表示する施設として展開すると考えるが、古墳の多くの構成要素のなかでも常に重要な位置を占め、その存続期間はきわめて長い。その周濠が大和に起源をもち、新たな要素として各地域の古墳に付加されると整理できるとすれば、それは、きわめて単純に述べれば、各地域の古墳が、少なくとも見かけの上で「畿内型古墳」化する過程を示すものと言ってよいだろう。

小地域の区分、また、地域ごとの古墳の階層構造などを十分に把握することはかなりむずかしいため概略とせざるをえないが、いくつかの地域を抽出し周濠の「伝播」の様相を概観する。  
**大和** 1期を代表する巨大古墳・箸墓古墳は、その全体像はなお明確ではないものの周濠を伴うことが明らかになっており、3期の行燈山古墳、渋谷向山古墳には渡り土手で区切られた階段状の周濠が設けられる。4期の宝来山古墳で周濠は水平となり、古市古墳群よりも一時期遅れるが5期には市庭古墳に二重周濠が採用される。以後も佐紀古墳群、馬見古墳群を中心に周濠をもつ巨大古墳の築造は継続し、この状況は10期の平田梅山古墳まで継続する。前方後円墳の出現から消滅まで一貫して周濠が採用されているわけであり、こうした地域は大和に限られる。

**河内・和泉** 和泉における周濠の出現は3期の摩湯山古墳と早いですが、河内はそれよりも遅れる。河内では玉手山古墳群、松岳山古墳など3期までの主要古墳は丘陵上に設けられ、周濠をもたない。続く4期には古市古墳群の築造が開始され、津堂城山古墳が築造される。よく知られるように津堂城山古墳には広大な内濠が設けられるだけでなく、中堤と外濠が設けられ、新たに二重周濠が創出される。以後、6期の誉田山古墳、7期の大仙古墳などの大王墳には二ないし三重の、それに次ぐ規模の大形墳には二重あるいは一重の周濠が設けられ、それをとりまく「陪塚」にも周濠が設けられて百舌鳥、古市古墳群の景観を形成する。この周濠の盛行は7期のニサンザイ古墳、8期の岡ミサンザイ古墳を経て9期の河内大塚古墳まで継続する。

それまで周濠の伝統がなかった河内に古市古墳群が出現し、そこに他地域にさきがけて二重周濠が出現することは、古市古墳群の淵源が大和にあること、そして新たにこの古墳群が古墳形態を更新しそれを発信する舞台となったことを示すといつてよい。

**播磨** 東部の加古川流域では導入が早く、日岡古墳群で3期に出現するのに対し、揖保川流域

	1期	2期	3期	4期	5期	6期	7期	8期	9期	10期
日向					■	■	■	■	■	■
肥後					■	■	■	■		
筑後					■	■	■	■		
筑前	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■
豊前	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■
出雲							■	■	■	■
備中					■	■	■	■	■	■
美作					■	■	■	■	■	■
備前					■	■	■	■	■	■
讃岐					■	■	■	■	■	■
播磨(東部)								■	■	■
播磨(西部)			■	■	■	■	■	■	■	■
河内			■	■	■	■	■	■	■	■
和泉			■	■	■	■	■	■	■	■
大和			■	■	■	■	■	■	■	■
山城			■	■	■	■	■	■	■	■
美濃			■	■	■	■	■	■	■	■
越前			■	■	■	■	■	■	■	■
遠江			■	■	■	■	■	■	■	■
上野		■	■	■	■	■	■	■	■	■
下総		■	■	■	■	■	■	■	■	■

図3 各地域における周濠の採用

を中心とする西部においては中期の古墳そのものが少ないとはいえ、8期の塚森古墳のみが該当資料となる。

**筑前** 周濠をもつ古墳ともたない古墳の混在状況が特徴的である。周濠をもたないものがやや優勢で、その間に周濠をもつものが入り込むかのような状況を示す。周濠をもたない例として1期・名島古墳、3期・若八幡古墳、5期・丸隈山古墳などがあり、伴う例として1期・那珂八幡古墳、2期・端山古墳、4期・築山古墳、拝塚古墳などがある。この状況は1期から7期まで続き、8期以降は基本的に周濠が普遍化する。

**美濃** 周濠は3期の矢道長塚古墳において導入され、4期には昼飯大塚古墳をはじめ粉糠山古墳、可児長塚古墳など主要な大形墳に採用される。以降、周濠をもたない古墳も中小規模墳に認められるが、野古墳群など大形墳に継承され9期まで継続する。

なお、図3には示していないが、尾張においては断夫山古墳が築かれる9期に周濠の採用が活発となり、それは10期まで継続する。

**上野** 2期から10期まで一貫して周濠が採用される。このうち2期には前方後方墳に方形気味の平面形をとる周濠をめぐる例が多く、畿内との関係を論じることは適当でないかもしれないが、3期の朝子塚古墳にみられる墳丘と相似形で前方後円形をなす周濠や、4期の浅間山古墳における二重周濠の採用などからみて、3期以降は常に畿内の周濠の影響下にあったとみてよい。

以上に整理した周濠の採用状況から明らかなのは、大和をのぞいて前期には周濠をもつ古墳はさほど多くないことで、畿内の主要地域、河内、摂津、山城などにおいても3ないし4期までは周濠は一般化しない。このことは、前方後円墳は弥生墳丘墓の一種の統合・飛躍的な展開として成立したものであり（近藤1983）、それを担ったのが中・東部瀬戸内地域から畿内の有力首長層であった（都出1989）という理解にもとづくとしても、周濠というきわめて大きな要素に関しては統合がなされず、纏向石塚に代表される先行する弥生墳墓にそれを採用してきた大和においてのみ継続して採用・発展がなされたということとなり、「統合」の意味を問うものとも言える。

畿内以外の地域のうち、東日本の美濃、上野、下野などにおいては大和周辺地域と同様に3期に出現しており、大きな時期差を示さない。一方、北部九州では1期から継続して周濠を採用する古墳が認められるが、地域全体に周濠が波及するわけではない。そして、北部九州と畿内の中間にあたる中四国地域では周濠の採用は遅れ、讃岐が5期から、出雲は7期からとさらに遅く、しかも地域全体への波及は示さない。前章において述べたように吉備では5期に早い例が出現するが、本格的な波及は7期からである。

## (2) 波及の意義

**周濠と古墳立地** 吉備においては小盛山古墳、造山古墳と、まず大首長墳に採用され、続いて中小の首長墳に広がるが、讃岐でも同様に大首長墳である富田茶白山古墳の築造以降地域内に波及するとみられる。各地域における状態をなお十分に整理できていないが、このパターンが基本的な波及のあり方を示すと考える。

吉備での状況をもとに周濠の意義を考えるとすれば、周濠の採用は古墳景観の大きな転換で

あるが、それにとどまるものではなく、古墳立地の大幅な転換を伴うものと言える。前期古墳はさほどの広さをもたない山頂に築かれることを常とするが、それと全く同じ立地をとって周濠を伴うことはほぼ不可能である。

5～6期の吉備の古墳に立地の変化が生じるが、それは古墳の性格が、山頂など集団領域の外縁にあつて集団の守護のために機能すると観念される祭祀的構造物から、交通路などに面し首長の権威を間近に視覚的に表示する政治的な構造物へと変化したことを示し、後者は畿内からの新たに伝来した古墳の思想であると考えた（第1章）。周濠の採用はこの立地の転換と同時に生じており、周濠は古墳の新たな意義と一体となって畿内から受容されたと考える。

河内など多くの地域で丘陵上で周濠をもたない古墳から低地で周濠をもつ古墳へという変化が生じることからすれば、他地域における周濠の出現もその時期はそれぞれ異なるが、多くはこの古墳の性格の転換と連動しているとみられる。それまでの古墳に与えられた祭祀性を払拭し新たな性格を受容することになる要因は、強制によるものでないとするなら、地方の側が畿内の古墳と同じ景観、古墳形状の同一性を求めたためであり、それは地域間で政治的な意味での中央と地方という関係が明確になったことによると考える。

**天狗山古墳の周濠** さて、天狗山古墳は周濠をもちながらも比高70mの山頂に位置しており、水をたたえる濠とならんら遜色のない濠が水が溜まるべくもない山頂に設けられていると言えるが、同様な立地をとる例として鹿歩山古墳がある。こうした前期古墳さながらの立地は上記の理解のなかでどのように整理・評価できるだろうか。この2基はともに8期に位置付けられる。それに先立つ7期の古墳は、両宮山古墳や宿寺山古墳の立地に示されるように平地に築かれることを原則としており、大形墳で山頂に築かれるものはない。続く8期においても朱千駄古墳や築山古墳など7期と同様の立地をとるものは多い。つまり、この2基の立地はこの期にあつてはやや特異なものであり、5期以前と同様の山上に立地が回帰したと考えるべきである。続く9期には周濠そのものが消滅しており、吉備においては伝統的な立地への指向が完全には払拭されず、古墳の「畿内型古墳」化は曲折しながら進んだことを示すと考える。

## 5 おわりに

ここでは吉備を中心に周濠のあり方を検討した。古墳の諸要素すべてを畿内の古墳に求めることは適当ではないが、多くの要素の発信地が畿内であることは否定できない。地方の古墳が畿内の古墳をどこまで指向しているか、どこまで要素を受容しているかを見る指標として葺石・段築・埴輪があるが、それらと並んで周濠も地方と畿内の関係を表示するものと言える。

検討により、地域によって周濠の伝播・導入の時期に大きなばらつきがあることを確認した。これはそれぞれの地域と大和との関わり、親疎を示すものと言えるが、畿内政権の中核である大和勢力が関係の強化をいずれの地域に指向したかを明瞭に示すものとも言えよう。

早くから周濠を採用するのは北部九州と関東の2地域である。周濠の最高位の形態と評価できる二重周濠が他の地方に先駆けて関東と南九州に導入される<sup>3)</sup>のも、それと軌を一にする事象とみられ、これらのことは畿内政権が勢力扶植に最も意を注いだのがこの2地域であったこ

とを示すと考える。また、古墳時代前半期の北部九州では地域全体には普及せず、受容するものとしなないものが混在する。こうした要素の混在状態は副葬刀剣のあり方・埋葬頭位においても認められ（第5章）、外部からもたらされた要素が古墳や小地域ごとに選択・採用されて複雑な分布状況を造り出している可能性が強い。

一方、吉備をはじめとする中四国地域では周濠の受容は遅く、またその採用が長続きしない場合があり、これは遅くまで伝統的な祭祀的性格が古墳に保持されたことに起因するとみられる。

周濠の地方伝播からは地方と畿内の政治的関係の一端を垣間見ることができると考える。ここでは現象の大まかな整理にとどまらざるをえなかったが、今後の整理と検討によって、より詳細な動態を把握することができると思われる。なお、ここでは果たせなかったが、多くの地域において9期には周濠の築造は終息にむかうのに対し、尾張のほか関東、北部九州においてはむしろ活発化する。このことについても総括的な評価が必要であろう。

#### 註

- 1) たとえば古市古墳群の2例、峯ヶ塚古墳内濠は滞水状態（下山・吉澤2002）、大鳥塚古墳周濠は空ぼりであった（上田1986）と堆積土の状態から推定されている。  
 なお、中規模古墳のさほど広くない「ほり」を周濠と呼ぶのは不適切とも思われるが、規模による区分がむずかしいためここでは周濠に一括する。ただし、小墳の場合は幅1、2mのものを濠とは呼びにくいいため周溝とする。
- 2) 小盛山古墳は穴窯焼成の埴輪を伴わないことによってこの時期に位置付けているが、埴輪資料が十分とは言いがたく、将来編年上の位置が動く可能性もある。  
 現在、墳丘の周囲には周濠を利用して設けられた大小の溜池4つが設けられているが、戦前には3ヶ所であったことが記されており、北西側の池はそれ以降に設けられたものである。また、草原1996では渡り土手が存在した可能性が示されているが、現状では判断はむずかしい。
- 3) 群馬県浅間山古墳（4期）、同太田天神山古墳（5期）、宮崎県男狭穂塚古墳（5期）



## 第9章 巨大古墳の諸要素—両宮山古墳の占める位置—

## 1 墳長と総長

## (1) 古墳の総長

墳長あるいは墳丘全長は古墳の墳丘部分の長さであり、総長は濠・堤など墳丘の周辺施設を含めた数値である。墳丘規模に関してはランキングが示され古墳被葬者の力の優劣の指標とされることが多いが、総長や外濠の形状が比較検討されることは少ない。

築造時期が近接した吉備の2つの巨大古墳、作山古墳と両宮山古墳は周辺施設とそれによる規模において対照的な存在である。墳長206mの両宮山古墳の総長は主軸線上で349m、外濠前面幅は318mを測る。一方、作山古墳は墳長286mを測るが周濠をもたない。後円部裾をとりまく幅20m前後の平坦部は周辺施設の可能性があるが、それを含めても総長は約310mである。この場合、いずれが大きいと言えるだろうか。

総長は古墳、とりわけ巨大古墳の重要な指標ではあるが、その比較はたいそうむずかしい。両宮山古墳のそれが判明したのもごく最近のことであることから明らかなように、正確な数値が明確でないものが大半を占める。外域の全体像が判明していないためごく大まかな推定値とせざるをえないものが多く、また、発掘調査によっても判明することが少ない外堤の幅をどう見積もるかという問題がある。さらに前章でもふれたが畿内の巨大古墳に実施された幕末の修陵や池（濠）の拡張など後世の改変をどのように把握して本来の周濠を復元するかという問題も生じることになる。

とはいえ、巨大古墳の評価には総長の比較がきわめて有効と考えられるため、図1にそれをまとめた。個別の古墳の検討を行って数値を確定するにはかなりの時間を要するため、ここでは『前方後円墳集成』（近藤編1991）に示された数値を主に用い、それに明らかな誤認がある場合や、新たな数値が得られているものについて差し替えを行った。前方部側の外濠が平城宮の造営によって削平・消失している市庭古墳については後円部側外濠幅から適宜復元し、浅間山古墳は畦畔線から総長を推定するなど、概略の数値を用いたものも少なくない。

なお、資料はすべて前方後円墳からなるため、グラフはそれぞれの古墳の総面積の関係をほぼ示すとも言える。また、資料からは箸墓古墳、渋谷向山古墳など前期（1～3期）古墳、見瀬丸山古墳など後期後半（10期）の資料を除いているため、図は全古墳での比較ではない。

## (2) 墳丘規模と総長

この図からは墳丘と総長に関していくつかの特徴を読み取ることができる。

最大の特徴は墳丘規模—墳長と、総長が必ずしも比例しないことである。津堂城山古墳は墳丘長206mに対して総長は436mと、総長が墳丘長の倍以上となり、田出井山古墳もそれに近い。そうした例があるため、墳長も図の右にむかって漸減してはいくが凹凸が著しい。

墳長で示される墳丘規模は首長間の政治的序列・力関係を表示すると通常理解される。この

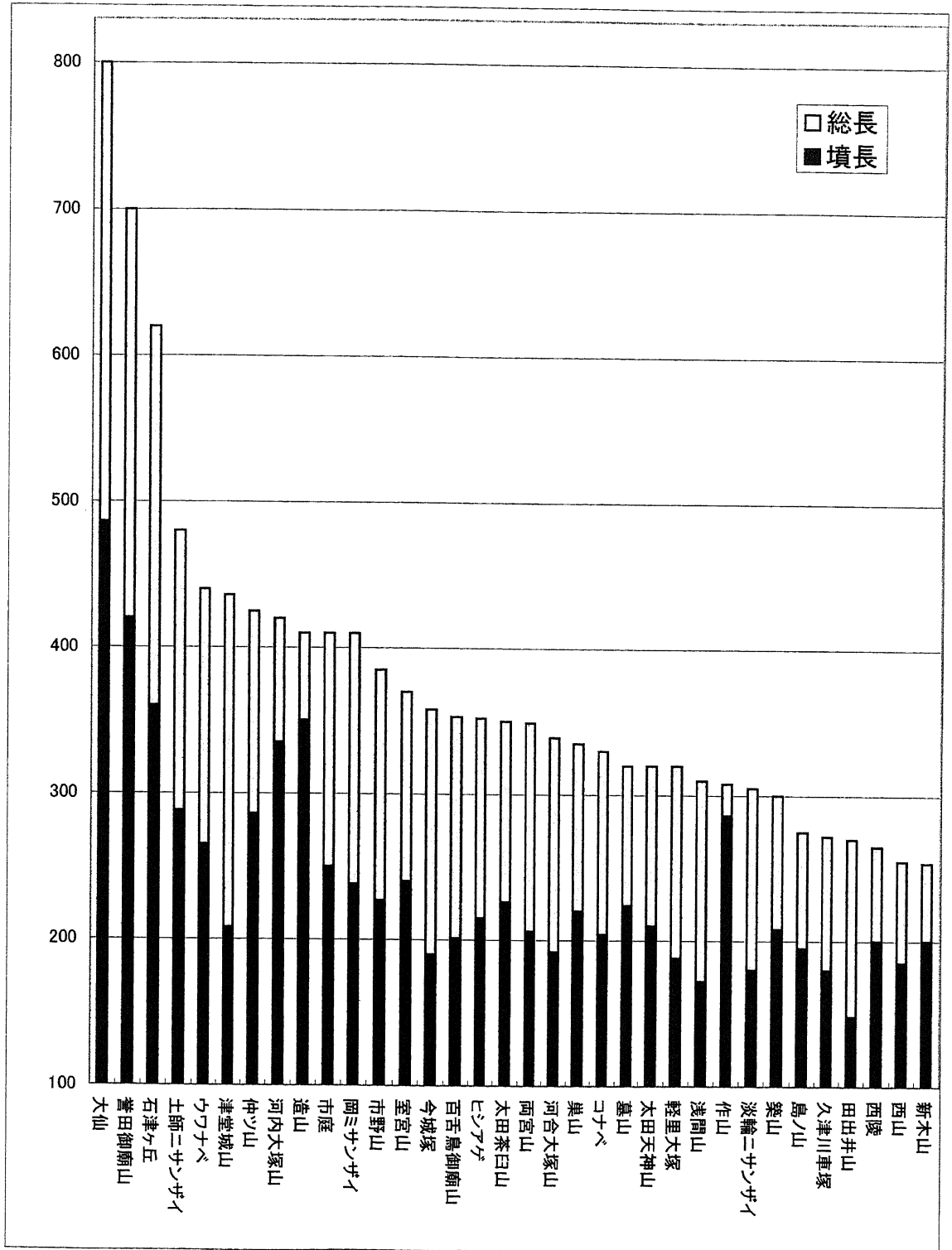


図1 巨大古墳の墳長と総長

考えにたてば、総長に示される古墳全体の面積は墳丘規模とおおむね重なりながらも細部では異なる指数であって、墳長とは若干異なる政治的序列を示していると考えられることができる。

以下、巨大古墳の総長について特徴の整理を行う。

#### a 二重周濠の卓越

上位の大部分が二重周濠をもつ古墳である。一重の周濠からなるのは仲津山、河内大塚山、造山、岡ミサンザイ、巢山、軽里大塚、墓山、築山、島ノ山、西陵、西山、新木山古墳であり、二重周濠が巨大な総長のもととなっていることがよくわかる。

#### 総長の階層

大仙・菅田御廟山・石津丘の3大巨墳が抜群の大きさを示す。墳丘長においては石津丘古墳と造山古墳の差は僅少であるが、総長では極端な差をもつ。これらに続く位置にあるのが土師ニサンザイ古墳である。先の3基とは差があるが、下位とも差がありこれを含めてトップグループとすべきと考える。

これに続く第2のグループが440～360mの一群、ウワナベ古墳から今城塚古墳までの10基である。ただし室宮山古墳、今城塚古墳の2基は下位グループの規模にも近く、中間的な存在とも言える。これらの過半数は上記の4大古墳に前後する時期の大王墳であり、残りは4大古墳と同時期の最有力墳である。この第1と第2のグループまでが大王墳の規格であり、第1グループの大王墳が築かれる段階では、この規格で大王に次ぐ位置の首長墳が築かれることになる。

350m以下に有力首長墳が連なる。グラフはかなりなだらかな下降を示しており大きな境界を見出しがたいが、270m付近で上下に大別できる可能性がある。

グラフでは同様な規模の総長がそろい階段状になる部分はいくつかある。大王墳級では410mにまとまりがあり、その下に350、320、270mなどがある。先に述べたように多くが推定値であるため厳密な検討は困難であるが、たとえば後述のように350m級では両宮山、御廟山、ヒシアゲの3基はほぼ同じ総長になる可能性が強く、こうしたまとまりが誤差によって生じているとも考えにくい。したがって、本来はグラフは細かい階段状をなす、換言すれば総長の規格が段階的に設けられていたと推定するが、これについては、それぞれの古墳の数値の確定を待たざるをえない。

#### b 吉備の古墳の特色

ここに示した資料の大半は畿内、百舌鳥・古市・佐紀・馬見古墳群中の古墳であって、それ以外は太田天神山と浅間山の2基が関東の上野、そして造山・作山・両宮山という吉備の3基である。関東の2基および両宮山古墳はグラフのなかで違和感がないのに対し、造山・作山の2基は異彩をはなつ存在である。作山古墳には周濠がなく後円部を平坦部がとりまき、造山古墳の場合は濠幅の数値がきわめて小さく、実際その形状も周濠というよりも周庭に近いものであったと考えている。これは吉備では周濠の受容がきわめて遅れることに起因するわけであるが(第8章)、そのことは吉備の中期古墳の大きな特色であり、両宮山古墳の段階でそれが完全に払拭されたと言える。

#### (3) 両宮山古墳の同規模墳

さて、両宮山古墳は第3グループの最上位に属し、大王墳に準じる位置にある。第3グルー

プの最上位、総長350m級には、両宮山古墳以外に百舌鳥古墳群の百舌鳥御廟山古墳、摂津北部三島野古墳群の太田茶臼山古墳、佐紀古墳群のヒシアゲ古墳、馬見古墳群の河合大塚山古墳の4基（図2～6）が含まれる。これらと両宮山古墳の関係を整理してみる。

**築造年代** まず時期であるが、百舌鳥御廟山古墳は7期に編年されていたが、最近の埴輪研究により6期とされている。太田茶臼山古墳、河合大塚山古墳が7期の古い段階、ヒシアゲ古墳が7期の新しい段階、両宮山古墳はヒシアゲ古墳に近い時期と考えており、これらは近接した時期に築造されたと言える。

**墳形** 中期の巨大古墳は大王墳と形を同じくし規模を縮小したもの、つまり相似形の墳形をとることが明らかになっており、6期から7期には古市古墳群の誉田御廟山古墳と百舌鳥古墳群の大仙古墳が基本的なモデルになる。両宮山古墳を含めた5基の墳形であるが、両宮山古墳は後円部径と前方部長さの対比から大仙型に区分され、大仙古墳のほぼ2/5の大きさに設計されているとみられる。百舌鳥御廟山古墳と河合大塚山古墳の2基は同じ大仙型に区分され、太田茶臼山古墳とヒシアゲ古墳は誉田御廟山型である（岸本1992）。

**墳丘規模** いずれも墳端が水没あるいは埋没しているため正確な墳丘規模の比較はむずかしいが、把握されている数値を以下に示す。

太田茶臼山古墳は墳長が226m、総長の推定値350m、ヒシアゲ古墳は墳長215m、総長352m、河合大塚山古墳は墳長192m、総長の推定値339mである。両宮山古墳は墳長206m（濠水面上の墳長は194m）、総長349mである。百舌鳥御廟山古墳の墳丘規模は通常186mが用いられるが、これは濠水面上の規模である。いま宮内庁の陵墓図をみると墳丘をとりまくように破線の表示がある。これは内濠底の傾斜変換ラインを表示したものではないかと推定され、それがおおむねの墳丘規模を示すとすると墳長201m、総長は353mである。

墳丘の数値を見くらべれば太田茶臼山古墳とヒシアゲ古墳の2基が他よりも大きく、両宮山古墳、百舌鳥御廟山古墳、河合大塚山古墳の3基がほぼ等しい大きさとなり、墳丘規模では前者2者が上位であったことになる。

**外濠の形状** 墳形の対比検討が進められる一方、外濠の形状に関して細かく検討されることは少ない。これは先にも述べたように外濠に関する情報が十分に得られていないためであり、対比はかなりむずかしいが、あえて試みれば以下のように整理できる。

河合大塚山古墳の外濠は前方部側の角が直角に近く、前方部前面幅と後円部中央幅がほぼ等しいのに対し、他の4基は前方部側が広がるため前方部側角がやや鋭角をなす。この外濠形状の相違は大仙古墳と誉田御廟山古墳との間でも見られ、前方後円墳全体では後者が優勢である。この相違が墳丘の型式と関連するのではないことは、大仙型築造規格どうしの中で生じていることことから明らかである。外濠形状がどのような原則にもとづいて決められ、どのように地方波及しているのか研究を進める必要があるが、ここでは今後の課題とせざるをえない。河合大塚山古墳の外濠に限れば、大仙古墳の外濠形状を導入したとみることも可能であるが、河合大塚山古墳に先行する巨大古墳、築山古墳や新木山古墳の周濠も前方部側が開かないものであり、馬見古墳群の伝統的な周濠形状を採用したとみたほうがよいだろう。

**百舌鳥御廟山古墳** 河合大塚山古墳を除くと、検討の対象となるのが百舌鳥御廟山古墳となる。

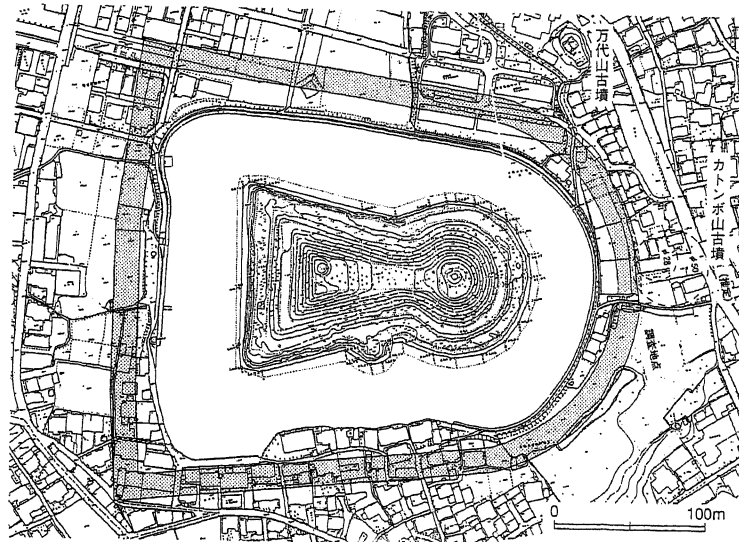


図2 百舌鳥御廟山古墳

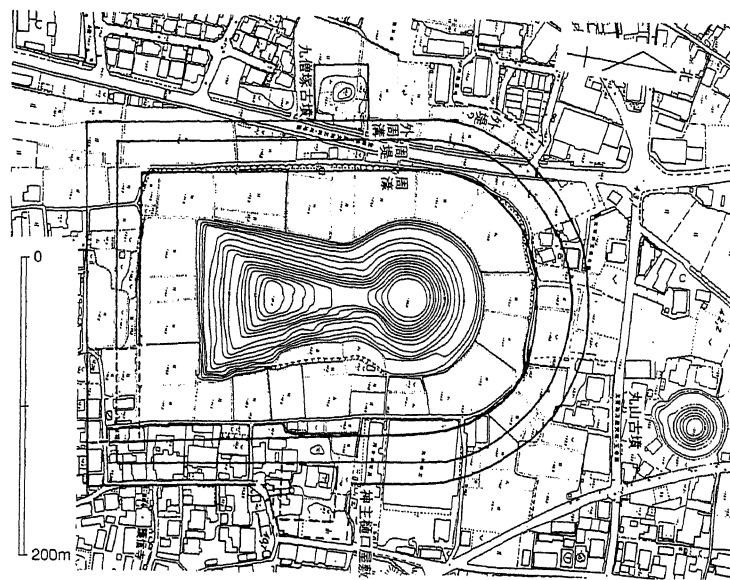


図3 河合大塚山古墳

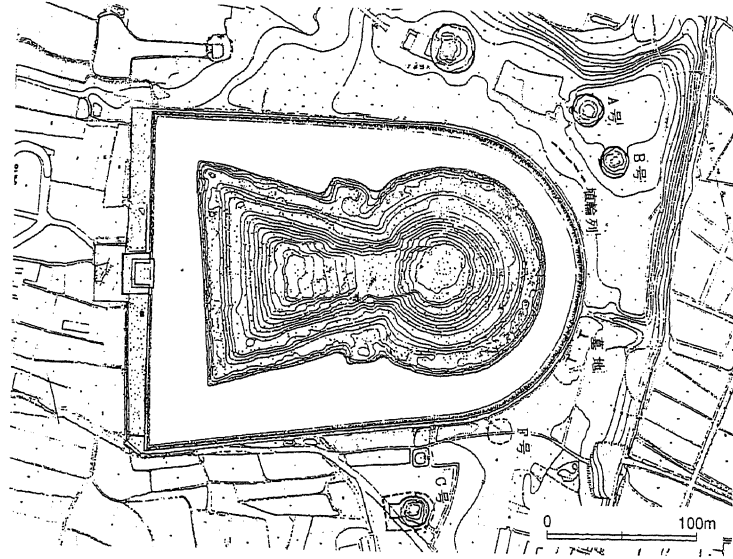


図4 太田茶臼山古墳

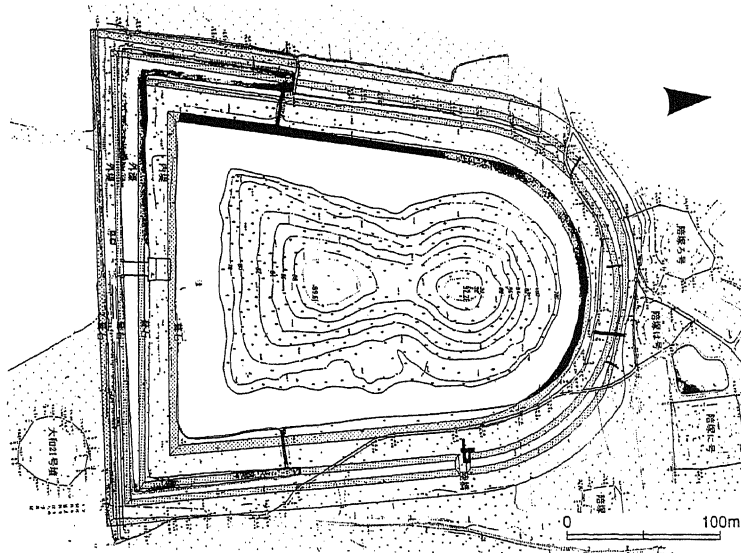


図5 ヒシアゲ古墳

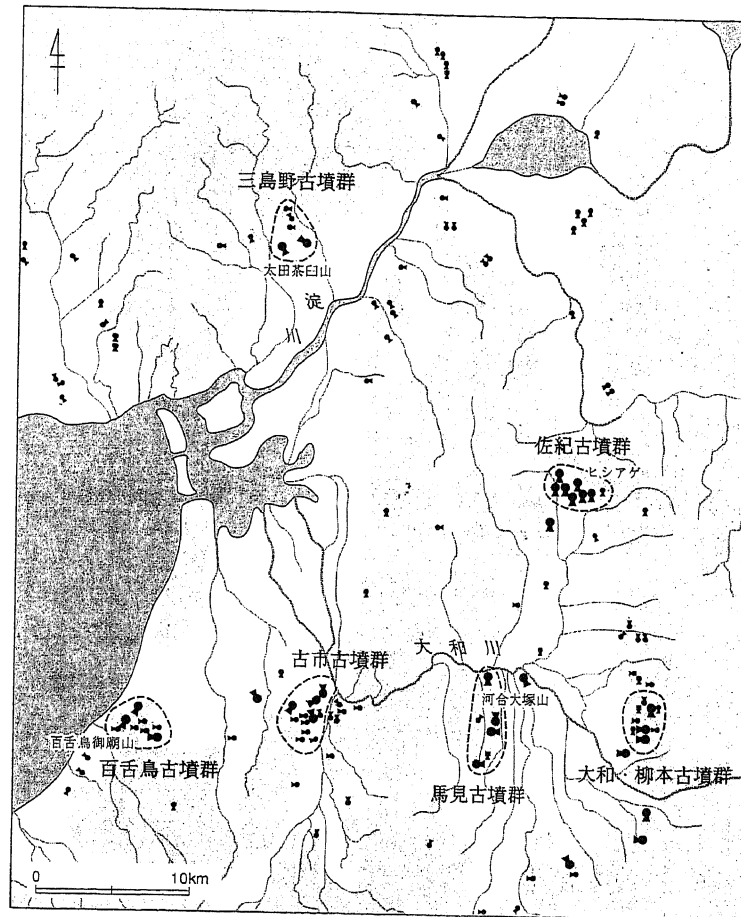


図6 畿内の主要古墳の分布

	百舌鳥御廟山古墳	両宮山古墳
外濠長さ（総長）	353	350m
外濠後円部中央幅	254	267m
外濠前方部前面幅	302	318m
墳丘全長	201	206m
後円部径	113	116m
前方部長さ	110	110m
前方部幅	138	145m

百舌鳥御廟山古墳の数値の多くは推定値であることを考慮すれば、よく似た数値をとることができ、墳丘・外濠ともに等しい可能性が強い。つまり、両宮山古墳は百舌鳥御廟山古墳の設計を導入して築かれた可能性が考えられる。ただし、両宮山古墳後円部上段・中段を併せた高さ18.6m、前方部上段・中段の高さ18.7mに対して、百舌鳥御廟山古墳の高さはそれぞれ12m、11mと異なり、高さに関する設計は大幅に変更されているとみてよい。なお、両宮山古墳の造り出しが墳丘の両くびれ部に設けられきわめて高いのに対し、百舌鳥御廟山古墳は片側に1つで低い。

また、ヒシアゲ古墳の外濠規模は両宮山古墳や百舌鳥御廟山古墳のそれよりも若干小さいが、外濠をとりまく外堤を含めた総長は352m、前方部前面の幅320mで、平面形状もほぼ一致している。外域の範囲を同じくし、外濠や中堤の幅などについては異なる設計を行ったと考えることができる。

外域の規格と、それを構成する要素である中堤や外濠の規模や形状の比較検討も、先の外濠形状の問題とともに、今後研究を進めていく必要がある。

#### (4) 両宮山古墳の位置づけ

広瀬和雄氏は、古墳時代中期の大和政権はこの時期に巨大古墳を継続して築造する4大古墳群、大阪府の古市古墳群と百舌鳥古墳群、奈良県の佐紀古墳群と馬見古墳群を形成した4系譜の有力首長によって共同統治されており、古市、百舌鳥両古墳群の造営主体となった2つの有力首長が代々大王を出していたとの考えを示している（広瀬2001）。この政治構造は7期をもって終了し、8期には古市古墳群の岡ミサンザイ古墳のみが大王墳として単独に存在する状態となる。

ヒシアゲ古墳は佐紀古墳群最後の巨大古墳である。また、それまで200mを越える墳長の前方後円墳を継続的に築造していた馬見古墳群では河合大塚山古墳に続く8期の狐井城山古墳は墳長150mと縮小にむかう。つまり、政権を複数の有力首長がになう中期の体制の最後の段階においては、大王以外の有力首長墳に350m級の総長が等しく採用されたとみることができる。

この評価を妥当とするなら、吉備の首長が政権中枢の首長と同等の格付けを得たとしてよいだろう。上記の四大古墳群のうち馬見古墳群は、記紀に登場する有力豪族葛城氏によって築造された可能性が説かれている（白石2000）。両宮山古墳の被葬者は中央政権を支えたそうした有力氏族と等しい地位にあったとみることができる。



## 2 二重周濠の地方波及とその意義

### (1) 問題の所在

両宮山古墳、和田茶臼山古墳の2基は、二重の周濠を伴う。両宮山古墳群においてはこの2基のほかに正免東古墳も二重周濠をもつ可能性があり、つごう3基の二重周濠古墳を中核として形成されていることになる。二重周濠が両宮山古墳群の大きな特徴となるが、それは通常の周濠とどのような差異をもち、それはどのような意義をもつと言えるのか。

二重周濠を含む周濠については前章で述べたように、白石太一郎氏（白石1983）、一瀬和夫氏（一瀬1992）らによって検討がなされている。それぞれの論では、畿内の巨大古墳の周濠や周堤など墳丘外周の諸要素について形態変化を整理し変遷の諸段階が設定され、その評価が詳細に示されているが二重周濠の特性を論じたものではない。

二重周濠の評価に限った場合、政権中枢であり古墳の諸要素の変化を主導することになる大王墳における変遷過程の把握が基本となることは言うまでもないが、地方における展開状況の把握も重要な課題となる。それからは二重周濠の意味を考える手がかりを得ることができ、さらに、中央と地方の関係を考察することも可能である。

ここでは分布の時期的な変化を中心に二重周濠の概観と評価を試み、それを通じて両宮山古墳群がもつ意味を考えてみる。

古墳の年代は基本的に『前方後円墳集成』（近藤義郎編1991ほか）に拠ったが、一部はそれ以降の研究に依拠している。

### (2) 外濠の機能

二重周濠を形成するのは外濠であるが、その機能をととして以下の2つを想定することができよう。

一つは、墓域の広大化を図る、広大な外域の設定を目的とするものであるとの理解である。これについては、広大な外周施設の建設によって墳丘を含めた墓域をより荘厳なものにし、また、埴輪列と周濠によって形成される埋葬施設と外域との隔絶線をさらに多重化する、という二つの企図を想定することができる。

また、もう一つの可能性は、墳丘周辺からの流水や地下水を排除するという、墳丘築造工事に際しての実際的な機能である。湧水の多い丘陵側を深く掘削する両宮山古墳の外濠の様相を見る限り、後者の機能もある程度考慮すべきとも思われる。しかしながら、二重周濠古墳全般を概観した場合、大阪府白髪山古墳のように地形が高くなる部分で外濠を掘削していない例、また逆に、最も外側のものは外周溝と呼ばれることが多いが、大仙古墳のように三重の周濠をもつ例があり、排水あるいは地下水脈の切断などの実際的な機能を主に想定するのは適当ではないと考えられる。

このことから、外濠の主要な機能の一つは墓域の広大化と荘厳化にあると考える。外堤の有無によって総面積は大きく変わってくるが、両宮山古墳では外濠によって1.3倍、和田茶臼山古墳では1.2倍の面積増加となる。両墳では外堤は設けられなかったと考えているが、それがあ

場合にはさらに面積が増大することは言うまでもない。この面積増大は小墳の場合さらに顕著であり、奈良県三河3号墳を例にとれば墓域は周濠一重の場合の約2.1倍の広さとなっている。なお、この古墳の場合、外濠の外縁は別の古墳の周濠縁に近接しており、外堤はなかったとみられる。

また、もう一つ、隔絶線の多重化が大きな比重をもつと考える。これは両宮山古墳の断面形に端的にあらわれる。濠の最深部、下段底面は断面の中央ではなく中堤に近い部分に設けられるため、斜面は外側よりも内側のほうがはるかに急でになる。後端側を除き調査時の各トレンチでは外側は歩いて上がることが可能であるが、内側の斜面はトレンチ側壁があるため上がり下りは可能であったものの、それがなかったとするなら両手を用いても中堤上に上がることは困難である。

### (3) 資料の特徴

表1は中期～後期の二重周濠をもつ前方後円墳古墳を集成したものである。帆立貝形古墳を含めたが、円墳については主要なものに限り関東の資料については割愛した。外側の溝が周堤を画する溝であるのか外濠であるのか、区分がむずかしいものもある。

資料からは、古墳の他の構成要素は異なるいくつかの特徴を指摘できる。

第1は類例がきわめて少ないこと、稀少性である。二重周濠をもつ古墳の数は少なく、管見の範囲では表1に示した約100基にすぎない。周濠をもつ古墳が一般的な畿内においてもその数は多くはなく、吉備を含めた畿外においては周濠・周堤を伴う古墳そのものが少ないが、二重周濠をもつ古墳はさらに僅少である。

巨大古墳といえども外濠が埋没せずに残存している例はまれであり、多くが確認調査によって検出されていることや、過去に削平されて新たに確認された古墳に伴うことが判明した例も少なくないことなどからすれば、今後新たに検出され数を増すことは確実であるし、資料検索の遺漏も少なくないと思われる。しかしながら資料の追加や補遺によってこの数が変化するとしても、全国の前方後円墳総数5200基、さらにそれに中小の円墳を加えた数と対比するなら、その稀少性は動かしがたい。

第2の特徴は、巨大古墳、とりわけ大王墳の多くに採用されることである。いずれからを大形古墳とするかはむずかしいが、100 m以上を大形とするならそれは資料の4割を占め、そのなかには大仙古墳や誉田御廟山古墳といった最大の巨墳が含まれる。

巨大古墳の最上位にあり大王墳と目される各期最大の古墳における採用状況を見るならば、津堂城山古墳（4期）→仲津山古墳（5期）→石津丘古墳（Ⅱ）→誉田山古墳（6期）→大仙古墳（7期）→ニサンザイ古墳（Ⅱ）→岡ミサンザイ古墳（8期）→今城塚古墳（9期）の8基のうち、仲津山古墳と岡ミサンザイ古墳の2基をのぞいて二重周濠を伴うことが知られている。

現在知られる二重周濠の最古例は津堂城山古墳であり、以後、主要な大王墳に継続して採用されることからすれば、二重周濠は巨大な墳丘とともに大王墳の卓越と隔絶を表すものとして創出され、発展したと考えられる。そして、地方における二重周濠は、直接・間接は別として畿内中枢から伝播・波及した要素と理解することができる。

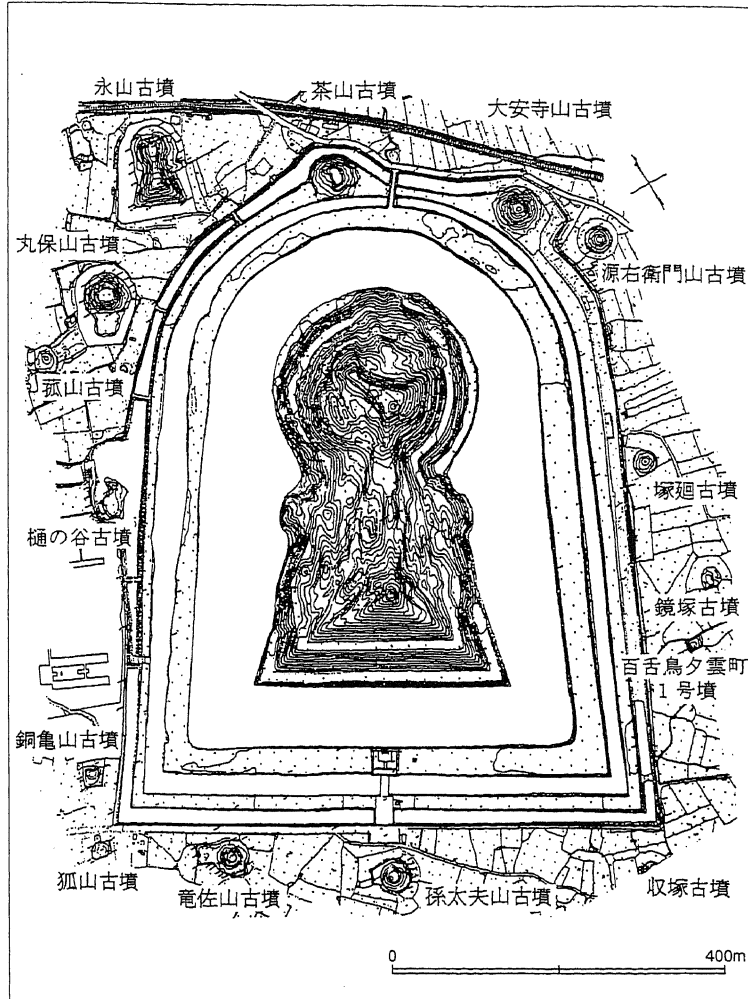


図7 大仙古墳

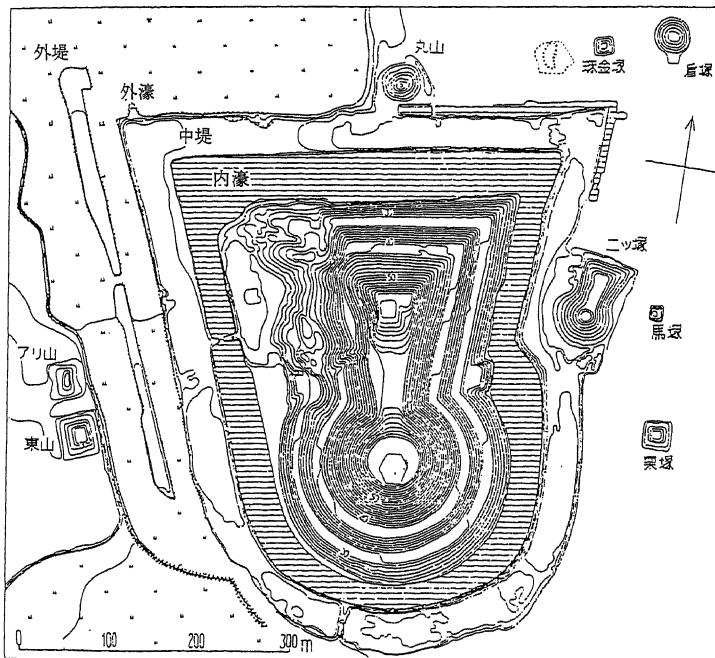


図8 菅田御廟山古墳

表1 二重周濠古墳一覧表

	古墳名	所在地	時期	墳形	墳丘規模	総長	備考
1	月岡古墳	福岡県浮羽郡吉井町若宮	7	前方後円	95		一部で3重
2	塚堂古墳	福岡県浮羽郡吉井町宮田字四太郎他	8	前方後円	91	140	
3	天仲寺古墳	福岡県築上郡吉富町広津字和井田	10	円	23	36	
4	御塚古墳	福岡県久留米市大善寺町宮本字一本松	8	帆立貝形	78	121	3重濠
5	大善寺鏡子塚古墳	福岡県久留米市大善寺町宮本字北島	8~9	前方後円			
6	権現塚古墳	福岡県久留米市大善寺町宮本字彼岸田	9	円	50	152	
7	仙道古墳	福岡県朝倉郡三輪町久光字仙道他	10	円	29	46	
8	東光寺剣塚古墳	福岡県福岡市博多区竹下3丁目1-1	9	前方後円	75	126	3重濠
9	今宿大塚古墳	福岡県福岡市西区今宿字大塚	9	前方後円	64	100	
10	彦徳甲塚古墳	福岡県京都郡豊津町彦徳	10	円	29	55	
11	天満2号墳	大分県日田市小迫字天神山1854他	9	前方後円	60		
12	木柑子古墳	熊本県菊池市木柑子西原	9	前方後円	60~70	100	
13	花見塚古墳	熊本県下益郡城南町塚原	8	前方後円	46	62	
14	男狭穂塚古墳	宮崎県西都市三宅字丸山	6	帆立貝形	155	247	
15	女狭穂塚古墳	宮崎県西都市三宅字丸山	5	前方後円	176		
16	樹之本古墳	愛媛県越智郡朝倉村丈六寺甲970	7	帆立貝形	40		
17	青塚古墳	香川県観音寺市原町	7~8	帆立貝形	43		
18	盛土山古墳	香川県仲多度郡多度津町奥白方	7	円	42	75	
19	青龍古墳	香川県善通寺市吉原町1705	7	円	42		
20	尼塚古墳	徳島県鳴門市大津町大代	6	円	37		
21	十六夜山古墳	岡山県津山市椿高下62-3	8	前方後円	60	92	
22	築山古墳	岡山県邑久郡長船町西須恵	8	前方後円	81	114	
23	両宮山古墳	岡山県赤磐郡山陽町穂崎・和田	7	前方後円	206	349	
24	和田茶臼山古墳	岡山県赤磐郡山陽町和田	7	帆立貝形	55	99	
25	正免東古墳	岡山県赤磐郡山陽町穂崎	7~8	円~帆立	23		
26	御願塚古墳	兵庫県伊丹市御願塚4丁目325	7	帆立貝形	52	85	
27	野々池7号墳	兵庫県三木市	9	前方後円	21	35	
28	宇治二子塚古墳	京都府宇治市五ヶ庄大林	8	前方後円	112	218	
29	久津川車塚古墳	京都府城陽市平川車塚	6	前方後円	180	272	
30	千歳車塚古墳	京都府亀岡市千歳町車塚	8	前方後円	81	136	
31	今城塚古墳	大阪府高槻市郡家新町686他	9	前方後円	190	358	
32	太田茶臼山古墳	大阪府茨木市太田3丁目	7	前方後円	226	350	
33	津堂城山古墳	大阪府藤井寺市津堂	4	前方後円	208	436	
34	市野山古墳	大阪府藤井寺市国府1丁目	7	前方後円	230	385	
35	誉田御廟山古墳	大阪府羽曳野市誉田6丁目	6	前方後円	425	700	
36	峯ヶ塚古墳	大阪府羽曳野市軽里2丁目	8	前方後円	96	168	
37	白髪山古墳	大阪府羽曳野市西浦6丁目	9	前方後円	115	192	
38	土師ニサンザイ古墳	大阪府堺市百舌鳥西之町3-420	7	前方後円	290	480	
39	田出井山古墳	大阪府堺市北三国ヶ丘2丁目	7	前方後円	148	270	
40	大仙古墳	大阪府堺市大仙町	7	前方後円	486	800	3重濠
41	百舌鳥御廟山古墳	大阪府堺市百舌鳥本町1丁目	6	前方後円	201	353	
42	石津丘古墳	大阪府堺市石津丘	5	前方後円	360	620	
43	淡輪ニサンザイ古墳	大阪府泉南郡岬町淡輪	7	前方後円	180	305	
44	ウワナベ古墳	奈良県奈良市法華寺町宇和那辺	6	前方後円	270	442	
45	ヒシアゲ古墳	奈良県奈良市佐紀町ヒシアゲ	7	前方後円	215	352	
46	市庭古墳	奈良県奈良市佐紀町ニジ山	5	前方後円	250	410	
47	屋塚2号墳	奈良県天理市二階堂上ノ庄町	9	帆立貝形	41	87	
48	西乗鞍古墳	奈良県天理市袖之内町乗鞍	9	前方後円	118		
49	三河3号墳	奈良県磯城郡三宅町三河	9	円	20	52	
50	鉾山1号墳	奈良県磯城郡田原本町八尾	9	前方後円	50		
51	水晶塚古墳	奈良県大和郡山市八条町	9	帆立貝形	50	95	
52	四条1号墳	奈良県橿原市四条町九ノ坪	8	方	38	64	
53	河合大塚山古墳	奈良県北葛城郡河合町西穴間	7	前方後円	192	339	

表1 二重周濠古墳一覧表

	古墳名	所在地	時期	墳形	墳丘規模	総長	備考
1	月岡古墳	福岡県浮羽郡吉井町若宮	7	前方後円	95		一部で3重
2	塚堂古墳	福岡県浮羽郡吉井町宮田字四太郎他	8	前方後円	91	140	
3	天仲寺古墳	福岡県築上郡吉富町広津字和井田	10	円	23	36	
4	御塚古墳	福岡県久留米市大善寺町宮本字一本松	8	帆立貝形	78	121	3重濠
5	大善寺鏡子塚古墳	福岡県久留米市大善寺町宮本字北島	8~9	前方後円			
6	権現塚古墳	福岡県久留米市大善寺町宮本字彼岸田	9	円	50	152	
7	仙道古墳	福岡県朝倉郡三輪町久光字仙道他	10	円	29	46	
8	東光寺剣塚古墳	福岡県福岡市博多区竹下3丁目1-1	9	前方後円	75	126	3重濠
9	今宿大塚古墳	福岡県福岡市西区今宿字大塚	9	前方後円	64	100	
10	彦徳甲塚古墳	福岡県京都郡豊津町彦徳	10	円	29	55	
11	天満2号墳	大分県日田市小迫字天神山1854他	9	前方後円	60		
12	木柑子古墳	熊本県菊池市木柑子西原	9	前方後円	60~70	100	
13	花見塚古墳	熊本県下益郡城南町塚原	8	前方後円	46	62	
14	男狭穂塚古墳	宮崎県西都市三宅字丸山	6	帆立貝形	155	247	
15	女狭穂塚古墳	宮崎県西都市三宅字丸山	5	前方後円	176		
16	樹之本古墳	愛媛県越智郡朝倉村丈六寺甲970	7	帆立貝形	40		
17	青塚古墳	香川県観音寺市原町	7~8	帆立貝形	43		
18	盛土山古墳	香川県仲多度郡多度津町奥白方	7	円	42	75	
19	青龍古墳	香川県善通寺市吉原町1705	7	円	42		
20	尼塚古墳	徳島県鳴門市大津町大代	6	円	37		
21	十六夜山古墳	岡山県津山市椿高下62-3	8	前方後円	60	92	
22	築山古墳	岡山県邑久郡長船町西須恵	8	前方後円	81	114	
23	両宮山古墳	岡山県赤磐郡山陽町穂崎・和田	7	前方後円	206	349	
24	和田茶白山古墳	岡山県赤磐郡山陽町和田	7	帆立貝形	55	99	
25	正免東古墳	岡山県赤磐郡山陽町穂崎	7~8	円~帆立	23		
26	御願塚古墳	兵庫県伊丹市御願塚4丁目325	7	帆立貝形	52	85	
27	野々池7号墳	兵庫県三木市	9	前方後円	21	35	
28	宇治二子塚古墳	京都府宇治市五ヶ庄大林	8	前方後円	112	218	
29	久津川車塚古墳	京都府城陽市平川車塚	6	前方後円	180	272	
30	千歳車塚古墳	京都府亀岡市千歳町車塚	8	前方後円	81	136	
31	今城塚古墳	大阪府高槻市郡家新町686他	9	前方後円	190	358	
32	太田茶白山古墳	大阪府茨木市太田3丁目	7	前方後円	226	350	
33	津堂城山古墳	大阪府藤井寺市津堂	4	前方後円	208	436	
34	市野山古墳	大阪府藤井寺市国府1丁目	7	前方後円	230	385	
35	誉田御廟山古墳	大阪府羽曳野市誉田6丁目	6	前方後円	425	700	
36	峯ヶ塚古墳	大阪府羽曳野市軽里2丁目	8	前方後円	96	168	
37	白髪山古墳	大阪府羽曳野市西浦6丁目	9	前方後円	115	192	
38	土師ニサンザイ古墳	大阪府堺市百舌鳥西之町3-420	7	前方後円	290	480	
39	田出井山古墳	大阪府堺市北三国ヶ丘2丁目	7	前方後円	148	270	
40	大仙古墳	大阪府堺市大仙町	7	前方後円	486	800	3重濠
41	百舌鳥御廟山古墳	大阪府堺市百舌鳥本町1丁目	6	前方後円	201	353	
42	石津丘古墳	大阪府堺市石津丘	5	前方後円	360	620	
43	淡輪ニサンザイ古墳	大阪府泉南郡岬町淡輪	7	前方後円	180	305	
44	ウワナベ古墳	奈良県奈良市法華寺町宇和那辺	6	前方後円	270	442	
45	ヒシアゲ古墳	奈良県奈良市佐紀町ヒシアゲ	7	前方後円	215	352	
46	市庭古墳	奈良県奈良市佐紀町ニジ山	5	前方後円	250	410	
47	屋塚2号墳	奈良県天理市二階堂上ノ庄町	9	帆立貝形	41	87	
48	西乗鞍古墳	奈良県天理市袖之内町乗鞍	9	前方後円	118		
49	三河3号墳	奈良県磯城郡三宅町三河	9	円	20	52	
50	鉾鉾山1号墳	奈良県磯城郡田原本町八尾	9	前方後円	50		
51	水晶塚古墳	奈良県大和郡山市八条町	9	帆立貝形	50	95	
52	四条1号墳	奈良県橿原市四条町九ノ坪	8	方	38	64	
53	河合大塚山古墳	奈良県北葛城郡河合町西穴間	7	前方後円	192	339	

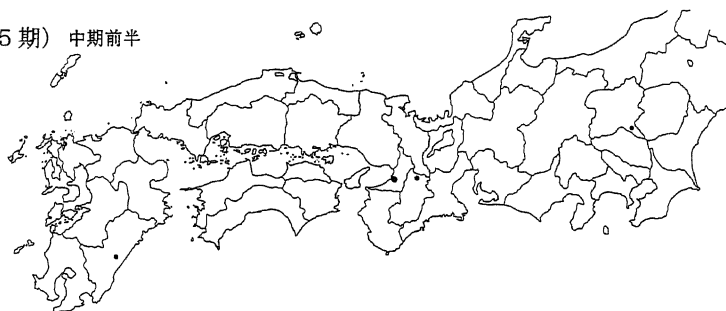
54	林ノ腰古墳	滋賀県野洲町小篠原	8	前方後円	90	155~160	
55	琴塚古墳	岐阜県岐阜市琴塚4丁目	6	前方後円	115		
56	不動塚古墳	岐阜県揖斐郡大野町野字	7	前方後円	58		
57	小幡長塚古墳	愛知県名古屋守山区小幡字小林2984	9	前方後円	81		
58	西塚古墳	愛知県名古屋市中区新栄2丁目	9	前方後円	66	125	
59	味美二子山古墳	愛知県春日井市二子町2丁目	9	前方後円	95		
60	溝口の塚古墳	長野県飯田市上郷	7	前方後円	50		
61	塚原二子塚古墳	長野県飯田市竜丘	8	前方後円	67		
62	上瀧天神山古墳	長野県飯田市松尾	9	前方後円	60		
63	久保田1号墳	長野県飯田市川路	9	前方後円	67		
64	懿麿王塚古墳	長野県飯田市川路	10	円	27		
65	琵琶塚古墳	栃木県小山市飯塚655	9	前方後円	123		東園のみ外濠
66	摩利支天塚古墳	栃木県小山市飯塚362	8	前方後円	121	197	
67	天神二子古墳	群馬県館林市高根字寺内乙108-2・3	9	前方後円	58	70	
68	太田天神山古墳	群馬県太田市内ヶ島字天神1575他	5	前方後円	210	320	
69	鶴山古墳	群馬県太田市鳥山字八幡	7	前方後円	95		
70	古海松塚1号墳	群馬県邑楽郡大泉町古海字原前	8	帆立貝形	47	67	
71	中二子古墳	群馬県前橋市西大窪町1501ほか	9	前方後円	108	200	
72	正円寺古墳	群馬県前橋市堀之下町380-1	9	前方後円	73	104	
73	梨ノ木山古墳	群馬県佐波郡玉村町下茂木1027		前方後円	82		
74	広瀬鶴巻塚古墳	群馬県前橋市朝倉町3-39-6	8	前方後円	86	155	
75	綿貫観音山古墳	群馬県高崎市綿貫町観音山1572	10	前方後円	97		
76	浅間山古墳	群馬県高崎市倉賀野町東上正六197ほか	4	前方後円	172	310	
77	七輿山古墳	群馬県藤岡市上落合字七輿甲831ほか	8	前方後円	146		一部で3重か
78	保渡田八幡塚古墳	群馬県群馬町保戸田字八幡塚1956	8	前方後円	102	176	
79	保戸田薬師塚古墳	群馬県群馬町保戸田字薬師塚1873	8	前方後円	105	164	
80	井出二子山古墳	群馬県群馬町井出字二子山1403-1ほか	8	前方後円	108	234	
81	上並榎稲荷山古墳	群馬県高崎市上並榎町八反田186ほか	8	前方後円	122	172	
82	真名板高山古墳	埼玉県行田市真名板字堂裏	10	前方後円	104		
83	小沼耕地1号墳	埼玉県北埼玉郡騎西町上種足字四番		帆立貝形	40	69	
84	女塚1号墳	埼玉県熊谷市今井字女塚	8	帆立貝形	46	62	
85	稲荷山古墳	埼玉県行田市埼玉	8	前方後円	120		周濠長方形
86	将軍山古墳	埼玉県行田市埼玉	10	前方後円	90	182	周濠長方形
87	二子山古墳	埼玉県行田市埼玉	9	前方後円	138		周濠長方形
88	愛宕山古墳	埼玉県行田市埼玉	9	前方後円	53		周濠長方形
89	瓦塚古墳	埼玉県行田市埼玉	9	前方後円	75	113	周濠長方形
90	鉄砲山古墳	埼玉県行田市埼玉	10	前方後円	109		周濠長方形
91	中の山古墳	埼玉県行田市埼玉	10	前方後円	79		
92	殿塚古墳	千葉県山武郡横芝町中台字外記		前方後円	88	115	周濠長方形
93	根崎12号墳	千葉県山武郡武戸町久保谷	10	前方後円	96		
94	朝日ノ岡古墳	千葉県山武郡松尾町蕪木・朝日ノ岡	10	前方後円	70		
95	大堤権現塚古墳	千葉県山武郡松尾町大堤字宮前	10	前方後円	115	170	3重濠
96	西ノ台古墳	千葉県山武郡成東町板附字西ノ台	10	前方後円	90		
97	南羽鳥高野1号墳	千葉県成田市南羽鳥字高野		前方後円	40	70	
98	栗野049号墳	千葉県佐倉市宮本字栗野477ほか		帆立貝形	17	21	
99	油井古塚原19号墳	千葉県東金市油井字古塚原		前方後円	45		
100	土気舟塚古墳	千葉県千葉市土気町舟塚		前方後円	44	53	
101	人形塚古墳	千葉県千葉市椎名崎町	10	前方後円	41	63	周濠長方形
102	江古田金環塚古墳	千葉県市原市江古田字送り神119-1	9	前方後円	47	63	
103	三条塚古墳	千葉県富津市下飯野字三条塚989ほか	10	前方後円	122	193	
104	九条塚古墳	千葉県富津市下飯野字九条塚767ほか	9	前方後円	105	164	
105	稲荷山古墳	千葉県富津市青木字稲荷山1145ほか	10	前方後円	106	201	
106	金鈴塚古墳	千葉県木更津市長須賀熊野廻	10	前方後円	95		

時期は「前方後円墳集成」の10期区分による。一部は1995「九州における古墳時代首長墓の動向」九州考古学会・宮崎考古学会合同学会実行委員会、2003「墳輪論叢」4号・5号増補検討会などにもついて変更している。

(4期) 中期前葉



(5期) 中期前半



(6期) 中期中葉



(7期) 中期後半



(8期) 中期後葉

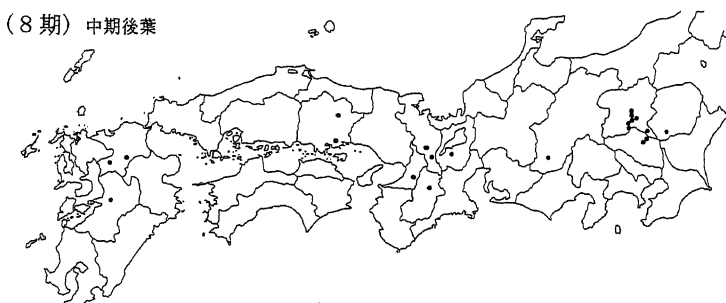


図9 二重周濠古墳の分布(1)

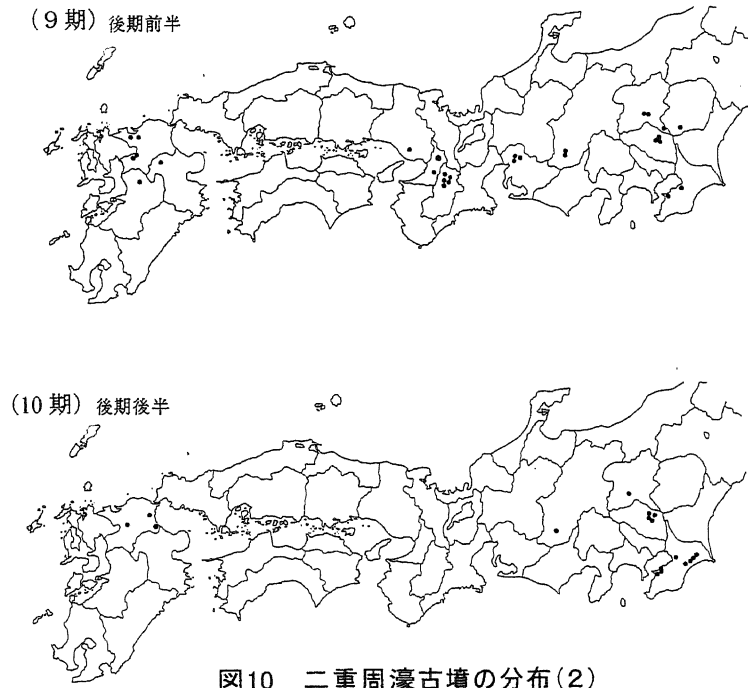


図10 二重周濠古墳の分布(2)

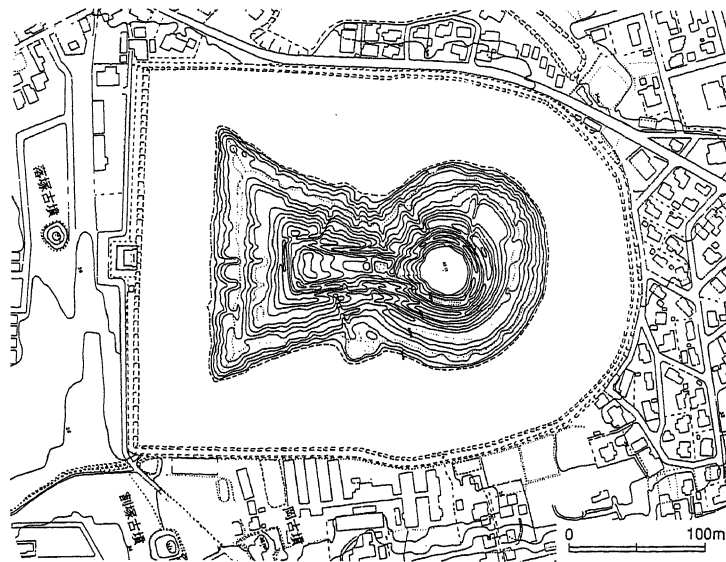


図11 岡ミサンザイ古墳



## (4) 地方への波及の様相

地方への波及がどのようになされていったか、また、畿内内部ではどのような採用状況を示すのかを把握するため、時期的な変遷を概観する（図9・10）。

**4～5期** 畿内では津堂城山古墳が築造され、二重周濠の出現を見る。続く5期には石津丘古墳が築かれ二重周濠が設けられる。この時期、大王墳を除けば畿内においてそれを採用する古墳はない。

地方においては、この時期数基の古墳に二重周濠が採用される。関東では群馬県浅間山古墳（4期）、同太田天神山古墳（5期）があり、九州では宮崎県女狭穂塚古墳（5期）が知られる。これらのうち、浅間山古墳は中堤が狭く、外濠が内濠よりも広いなど、津堂城山古墳に見られる整った築造企画とは異なる点が多く、早い段階の地方波及においては詳細な設計が伝わっていない可能性がある。

この段階の二重周濠は畿内においても少数であり、地方においてはごく一部の巨大古墳にのみ採用される。注目すべきは、この時期大王墳は大和から河内の古市古墳群に移るが、それまで大王墳の築造がなされてきた大和においては巨大古墳の築造が継続するものの二重周濠の導入が遅れることである。佐紀古墳群のコナベ古墳にはそれは設けられず、続く市庭古墳で構築されており、二重周濠の採用がきわめて限定されていたことを示すとみられる。

**6期** 大王墳では誉田御廟山古墳が築造される。古市、百舌鳥古墳群においては、群形成の中心となる大王墳のほか、大王墳周辺に築かれた巨大古墳である百舌鳥御廟山古墳にも二重周濠が採用される。また、佐紀古墳群ではウワナベ古墳に採用されるほか、畿内の四大古墳群以外では久津川車塚古墳に採用される。

畿内においては大王墳以外の巨大古墳にも採用は広がるが、なお、ごく一部に限られるといえる。

地方ではこの時期の資料は岐阜県琴塚古墳、宮崎県男狭穂塚古墳などでそれまでに比べてやや多くはなるが、なお少数である。

**7期** 巨大古墳の頂点となる大仙古墳が築造される。二重周濠の外側に外周溝が設けられており、三重の周濠がめぐる広大な景観を示す。このほか土師ニサンザイ古墳、国府市野山古墳など百舌鳥、古市古墳群に設けられる大王墳に前時期に続いて採用される。

佐紀古墳群ではヒシアゲ古墳、馬見古墳群では河合大塚山古墳、畿内4大古墳群以外では淡輪ニサンザイ古墳、太田茶臼山古墳などへの採用されており、巨大古墳の構成要素として普遍化すると言える。

6期までの地方波及は少数で、個別の要因をうかがわせるかのようなあり方であったが、この時期から資料が増加し地方への波及が始まるとみることができる。讃岐の青塚古墳、美濃では不動塚古墳に採用され、信濃、上野にも分布が広がる。北部九州では月岡古墳が築かれ、この古墳が所在する筑後川中流域では以降の首長墳においても二重周濠が継続的に採用されていく。

注意されるのは40～50mの帆立貝形古墳でありながら二重周濠を採用する青塚古墳および摂津の御願塚古墳、あるいは径42mの円墳である讃岐の盛土山古墳のような例がみられることで

ある。これらはそれぞれの地域において卓越した規模をもつとはいえ傑出した墳丘規模ではなく大首長墳とはみなしがたい。地域によっては、大首長を後援しそれを介する形ではなく、中位の首長を畿内の王権が直接掌握し、それらに上位の格付けである二重周濠の構築が許容される場合があったとみられる。

両宮山古墳はこの時期の資料であり地方波及の1例とも言えるが、むしろ巨大古墳の基本的属性として採用されるという畿内でのあり方と共通するとみたほうがよいと考える。

**8期** 畿内中枢の資料は大形墳では峯ヶ塚古墳が知られるのみであり、分布が希薄となる。

この期の大王墳、古市古墳群の岡ミサンザイ古墳では二重周濠が採用されていない。この古墳は広大な周濠を特徴としており、墳丘の後円部径148mに対し、周濠横幅は260mに達する（図11）。この周濠幅は二重周濠の内濠と中堤を合わせた幅に相当するとみることができ、二重周濠が大王墳に限定して採用される特別なものから巨大古墳全般の要素へ、さらに中小首長墳の要素へと「変質」し、一般化していくことに対し、新たに広大な周濠という新しい形態を創出し差別化を図った可能性を考えることができる。

この時期の資料のうち大和の四条1号墳は全長38mの小規模墳であり、小規模墳への採用がこの時期からはじまることが知られるが、そのことは二重周濠が王権の表象という意義を失い、単に上位の墳丘外周施設になったとみてよい。なお、この小規模墳での採用は大和においては後の9期にさらに盛行するが、これは大和に限った現象であり地方においてはなお大形の首長墳での採用が中心である。

地方においては分布は広がるが、普遍的な分布の拡大ではなく、いくつかの地域あるいは古墳群に限って採用されることが多く、いわば局地的な盛行を示すといえる。関東では埼玉古墳群がその典型的な例であり、埼玉稲荷山古墳に採用され、二子山古墳、鉄砲山古墳など後続する後期の古墳に採用される。また、同じく関東においては保戸田古墳群など上野の主要古墳にも採用される。よく知られているように埼玉古墳群においては中堤・外濠は方形を呈しており、畿内の二重周濠を規範として継続的に導入されたのではなく、地域独自の規格が設けられ継続して保持されたとみられる。

北部九州、筑後川中流域の首長系譜では月岡古墳に後続する塚堂古墳に採用されるほか、下流域にあたる久留米平野の御塚古墳でも採用がなされる。

吉備においては、備前の築山古墳、美作の十六夜山古墳がこの期の資料であり、一部の首長墳においてこの周濠形態が採用される。

**後期** 9期は前時期に出現した様相が継続する。二重周濠の分布は北部九州、畿内、関東に集中する。畿内では大王墳・今城塚古墳において再び用いられ、また、古市古墳群の白髪山古墳に採用される。一方、小墳への導入例はさらに多くなり、星塚2号墳、三河3号墳など奈良盆地平野郎の削平小墳に伴う例が増加しつつある。関東では埼玉古墳群での採用が継続するほか、上野、下総などの首長墳においても採用される。

続く後期後半には大王墳での採用が停止し、二重周濠をもつ古墳の築造は関東と北部九州に限られ、とりわけ関東では活発な築造が続く。

#### (5) 二重周濠の意義と検討課題

## a 二重周濠の意義

以上のように、二重周濠はきわめて特色のある分布の変化を示しており、古墳の構成要素の地方への伝播というだけでなく、時期・地域・墳丘規模における時期的な偏在からは、畿内政権の中心となる大王と地方首長との関係を読み取ることができる。

4・5期における関東、九州への伝播は、婚姻関係など地方首長と大王の個別特殊な関係にもとづいて生じた可能性を考える。

そののち6・7期には大王墳以外の畿内の巨大古墳にも採用されるが、これは大王墳の墳丘構成要素が畿内の有力首長にも許容され、王権の主要構成員が古墳の諸要素を共有することになったとみられる。また、この段階までの地方の古墳への拡散は、長持形石棺の分布と同じく一部の有力首長墳に限られており、大王・中央政権を構成する有力首長の古墳と同じ墳丘景観の形成が許容されたと考える。つまり、この段階までの二重周濠の分布は政治的関係を反映するとみてよい。

8期は、古備では大首長墳の築造が停止し、一方で小墳での埴輪使用が活発化するなど、古墳の諸様相の大きな転換期ととらえているが、二重周濠の採用についても大きな変容がみられる。畿内にあっては、一時的ではあるが大王墳における採用の停止が生じ、小墳への拡散がはじまる。また、地方においては独自の平面形をもつ二重周濠が出現する。これらのことから、二重周濠が墳丘周辺施設のなかで最上位に位置するという意味は保持するものの、中央と地方との政治的関係を表出する要素という性格を失い、単に上位の古墳の構成要素といういわば一般的な要素に変化し、その採用の可否は地域内部での政治的関係にもとづくことになると推定される。9期以降は、8期に生じた様相の延長と理解してよいだろう。

## b 両宮山古墳群の二重周濠

以上に示した理解にもとづけば、両宮山古墳に設けられた二重周濠は畿内の王権との親縁性、大首長墳としての格付けを表示するものであったとみられる。

一方、和田茶臼山古墳、そして今のところ二重周濠に関しては可能性の指摘にとどまらざるをえないが正免東古墳、この2基は陪塚であり、首長墳からなる他の諸例とはやや異なる意味をもつ。次章で述べるように、これらは大首長のもとで地域政権を構成した近親者を基本的な被葬者と理解するが、陪塚にみられる墳丘規模、埋葬施設、副葬品の卓越からは、それらに大首長に次ぐ格付けが与えられたとみることができる。両宮山古墳群の場合も、通常的首長以上の格付けが分与・投影された結果、二重周濠が設けられることになったと考えている。

## c 外濠の断面形

ここでは二重周濠の評価を、時期的な分布変化から試みた。二重周濠の分析はこれ以外に外濠の規模や断面形などに関する検討が必要であるものの、現在の資料ではいささかむずかしい。最後に外濠断面に関して簡単に整理しておく。

両宮山古墳の外濠は深く、斜面に段をもって下降する。外濠が段掘りとなる例は菅田御廟山古墳、ニサンザイ古墳、白髪山古墳などがあり、一方、市庭古墳は逆台形の一段掘りであり、百舌鳥御廟山古墳、田出井山古墳なども同様である。外濠の深さは市庭古墳が70cm、菅田御廟山古墳が3m、ニサンザイ古墳が2.3m、白髪山古墳が1.6mであるから、浅い場合には一段掘

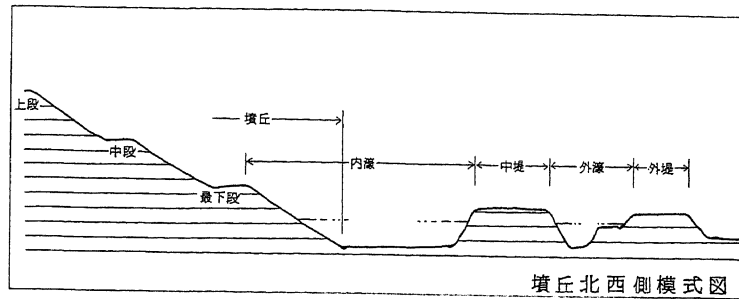


図12 菅田御廟山古墳外域断面

り、深さ1.5mを越えた場合に二段掘りとなるとみられるが、これは深さにかかわらず一段掘りを基本とする内濠とのちがいである。段掘りとなる諸例のうちニサンザイ古墳、白髪山古墳では中堤基部の外側には上段底面が設けられ、そこから下降して下段底面となっており、両宮山古墳の外濠断面はこれらと共通する。

また両宮山古墳外濠の下段底面は前方部前面を除いて中堤側に偏った形となる。これは内外2つの斜面のうち内側を急角度にするためであったと考えるが、この形状は二段掘りの諸例でも類例は少なく、現在知られる資料では菅田御廟山古墳の断面形状（図12）が最も近い。

以上、小論では二重周濠の分布の変化を中心に検討し、その素描を試みた。中期の様相の整理に重点を置いたため後期の資料については概観するにとどめたが、これについては各地域でさらに様相を整理していく必要がある。また、外濠の断面形についても今後さらに分析が必要である。

### 3 陪塚の空間表示

#### (1) 陪塚の研究

巨大古墳の周辺には中小規模の古墳が築かれる場合がしばしばあり、陪塚あるいは陪冢と称される。主墳よりも年代が先行し2つの古墳間に直接の関係がないことが明らかになった例もあるが、多くの場合は巨大古墳周辺の小形墳は主墳と同時期ないしやや遅れての築造であり、主墳に従属して築かれたものであることは動かし難い。

これらは主墳にきわめて近接して所在するという位置関係にあり、主墳と軸線が平行したり外周施設に辺をあわせるといった企画的な配置がなされる場合もある。また、前方後円墳とは異なる方・円・帆立貝形という下位の墳形の使用、主墳とは格段に墳丘規模が小さいといった特徴をもつ。この陪塚の性格については長い研究史があり数多くの論考が示されており、それについては山田幸弘氏によって簡潔にまとめられている（山田1997）。

その被葬者像についてはその従属的なあり方から大首長の「権力機関にあつて、各種の権能・職種を分掌する官僚的階層」（西川1961）とみなす点でおおむね一致をみているが、被葬者は「中小首長の少なくとも一部、あるいは最高首長の親族をもふくむとする近藤義郎氏の見解（近藤1983）から、より下の階層に属するとする山田幸弘氏の見解まで、やや幅がある。

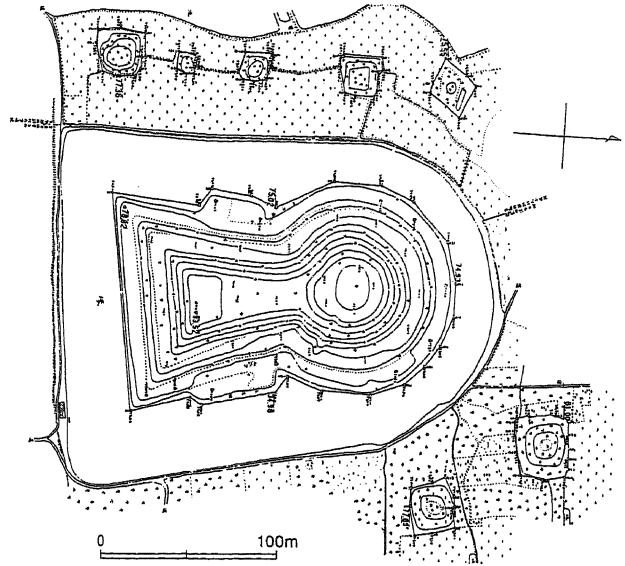


図13 コナベ古墳

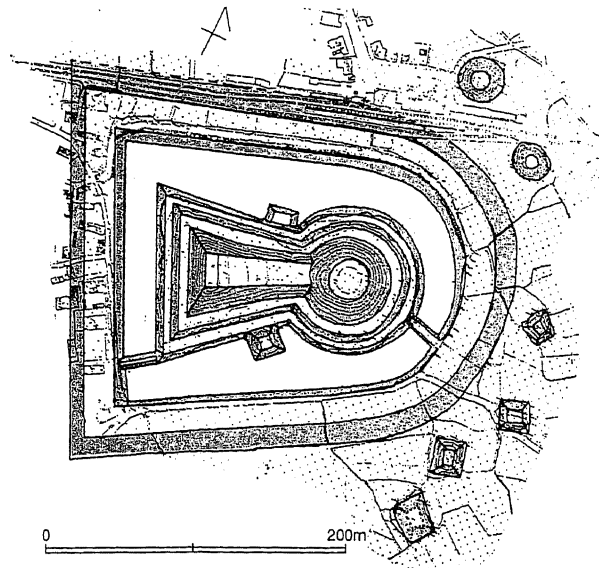
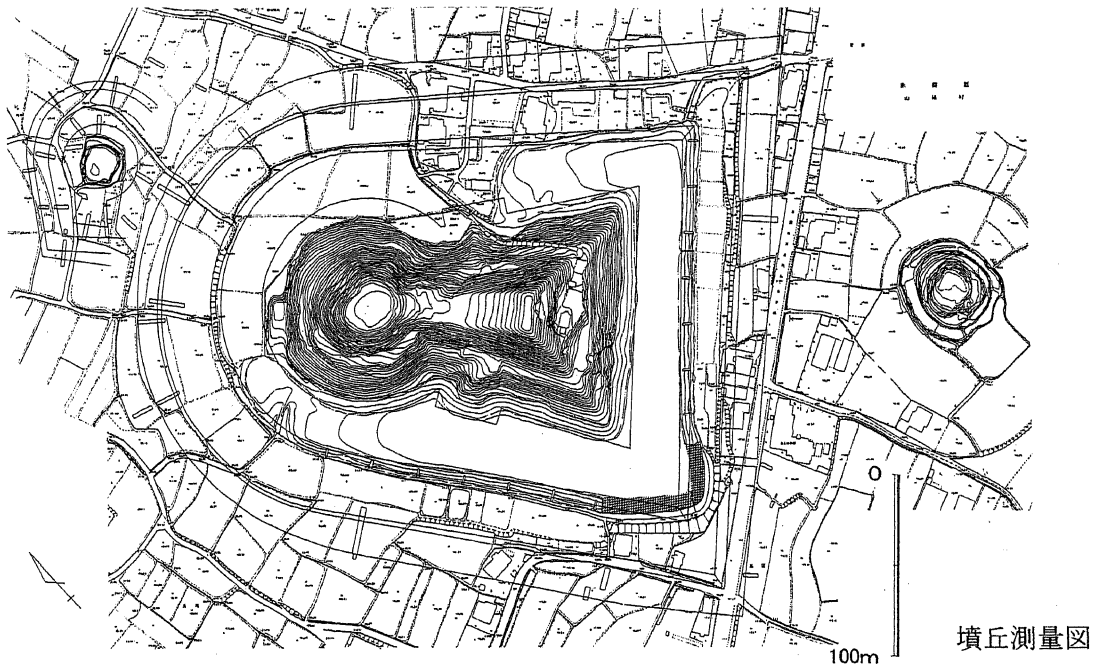
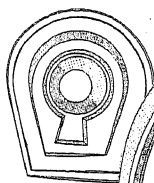


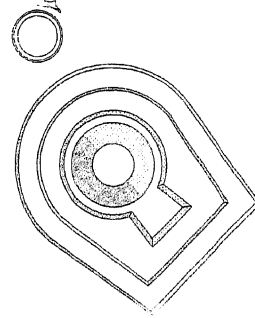
図14 淡輪ニサンザイ古墳



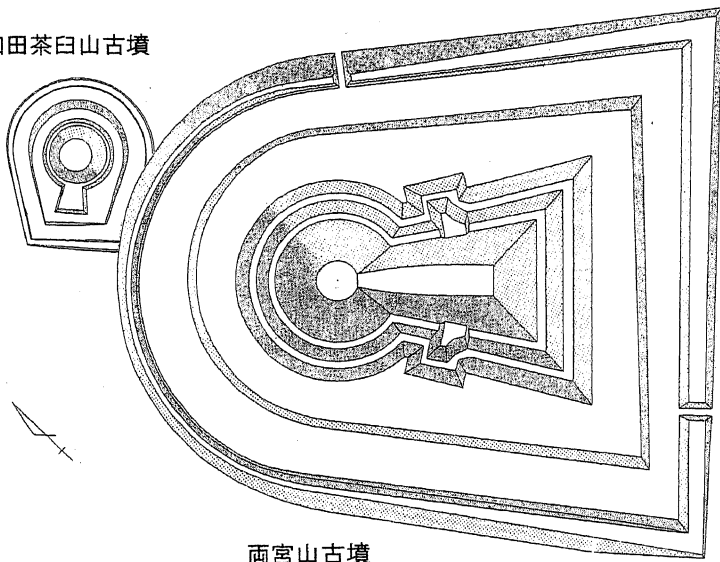
和田茶白山古墳



正免東古墳



森山古墳



両宮山古墳

復元図

図15 両宮山古墳

## (2) 陪塚の諸例

分析に入る前に陪塚の一般的なあり方を提示しておく。

陪塚に採用される墳形は方墳・円墳・帆立貝形古墳の3種であり、まれに前方後円墳が含まれる。5期までは方墳が採用されることが多く、中葉以降は円墳・帆立貝形古墳が主流となる。

陪塚が多数築かれるのは畿内の巨大古墳である。百舌鳥古墳群の大仙古墳の場合、全長87mの帆立貝形古墳、丸保山古墳をはじめ、15基の帆立貝形古墳・円墳・方墳が主墳の周囲を取り巻くように築かれている。また、佐紀古墳群のコナベ古墳(図13)では径42mの円墳、大和21号墳と、大和17号墳以下9基の方墳が墳丘を馬蹄形に取り巻くことが知られている。もう一つ例をあげるなら、古市古墳群の市野山古墳がある。多くが削平され消滅してしまったが、後円部周辺に長持山古墳、唐櫃山古墳など大小7基の帆立貝形古墳・円墳・方墳が所在する。

こうした主墳を取り巻くような配置が一般的であるが、それとは異なる配置パターンとして造山古墳(第11章図1)がある。ここでは千足古墳、榊山古墳など7基の帆立貝形古墳・円墳が築かれているが、それらはすべて前方部前面の低丘陵上に散在するように築かれている。造山古墳の場合、墳丘は低位部に突出した丘陵先端を加工して形成されており、後円部の周辺は古墳の築造には適さない地形であったとみられる。そのため、周辺への陪塚の配置が原則であったとしても、その実施は困難であるため、こうした偏った配置になったと推定されるが、逆に言えばそのことを考慮していない立地である。

さて、両宮山古墳の場合であるが、先に述べたように後円部後端側に和田茶臼山古墳が築かれ、この古墳は両宮山古墳と外濠が接続すると判断した(図15)。また、前方部前面には外濠外側に森山古墳と正免東古墳が築かれる。

一方は外濠を接するまでに接近し、もう一方は外濠から離れて所在する。こうした位置関係と濠の接続は何を物語るのだろうか。この章ではこの問題について少し掘り下げて考えてみたい。

## (3) 濠の共有

和田茶臼山古墳のように、陪塚の濠が主墳の濠に接続する例は、管見の範囲で以下の数例が確認できる。

**南山寺山古墳** 大仙古墳に次ぐ墳丘規模の石津丘古墳は墳丘全長360mの巨大古墳で、二重周濠をもつ。もとは七観古墳をはじめ7～10基の陪塚が所在したらしいが削平され、現状では2基が残存するにすぎない。そのうちの1基、寺山南山古墳は辺41.5mの方墳で、ミサンザイ古墳後円部後端側に所在する。確認調査の結果、墳丘の1辺をミサンザイ古墳外濠にそろえ、幅11mでコ字形をなす周濠が外濠に接続することが判明した(図16)。

**西都原171号墳** 墳丘全長176mを測る女穂塚古墳は九州最大の前方後円墳で、確認調査によって外濠の存在が明らかになった。西都原171号墳は一辺25mの方墳で、女狭穂塚古墳の後円部南西側(後円部側面)に所在する。上記の寺山南山古墳と同様、墳丘の1辺を女狭穂塚古墳外濠の外縁にそろえ、コ字形の平面をなす周濠がそれに接続する(図17・18)。

**唐櫃山古墳・長持山古墳** 上記のほかにも、推定となるがこの2基も同様な形状になると考えている。両墳は古市古墳群を構成する巨大古墳の1つ、市野山古墳の陪塚である。市野山古墳は墳

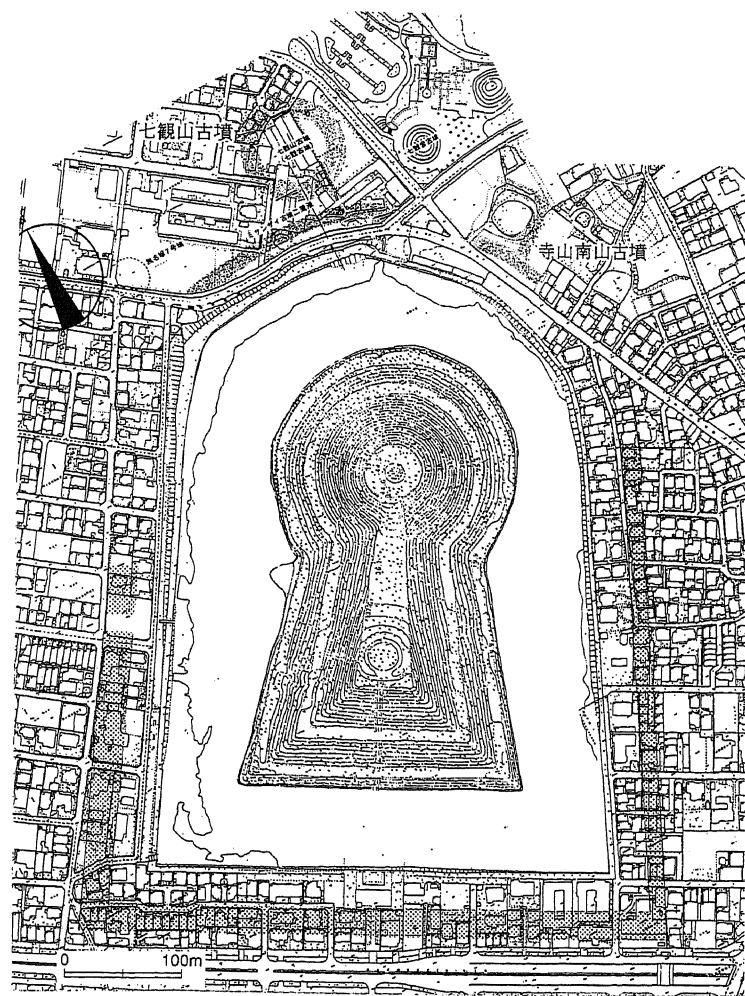


図16 石津丘古墳と寺山南山古墳



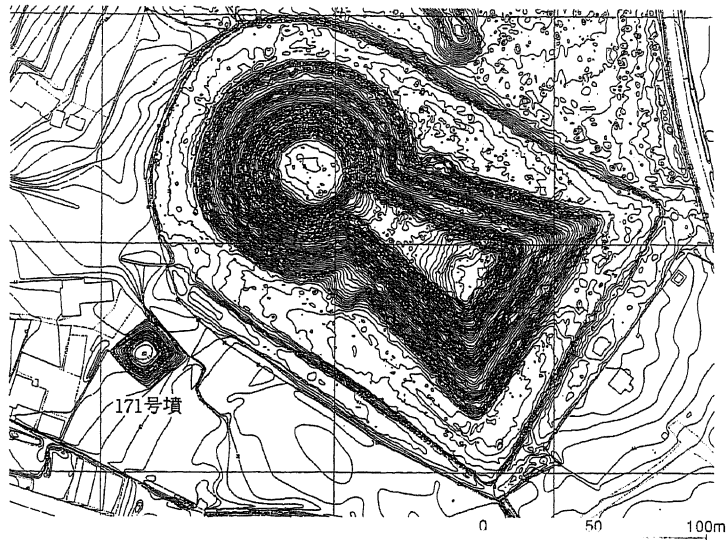


図17 女狭穂塚古墳と西都原171号墳

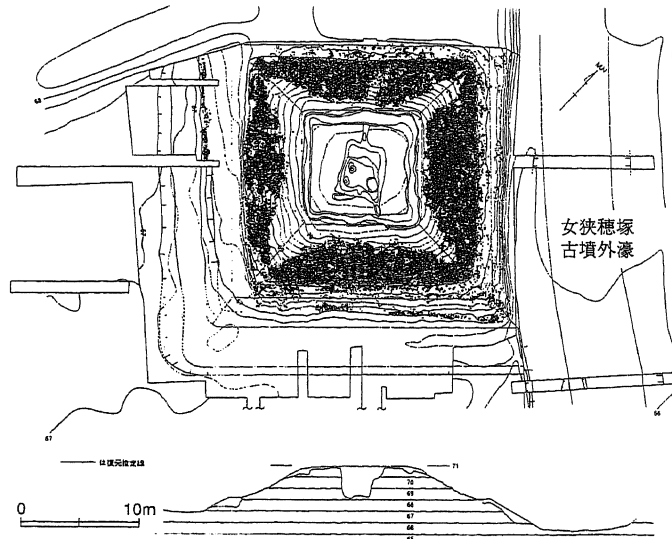


図18 西都原171号墳

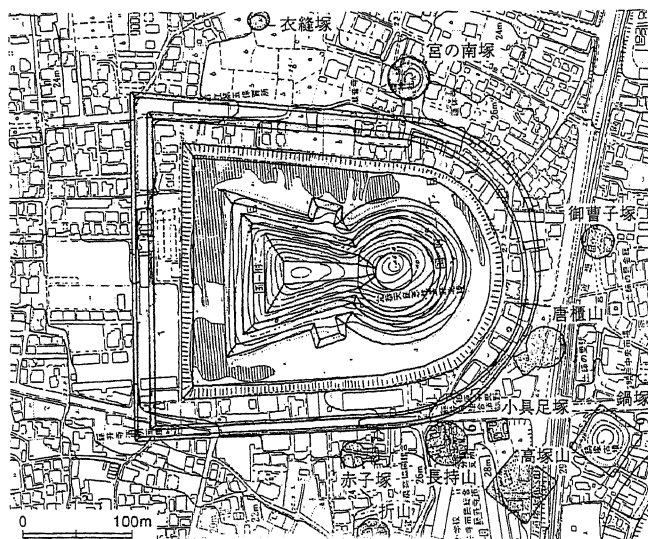


図19 市野山古墳

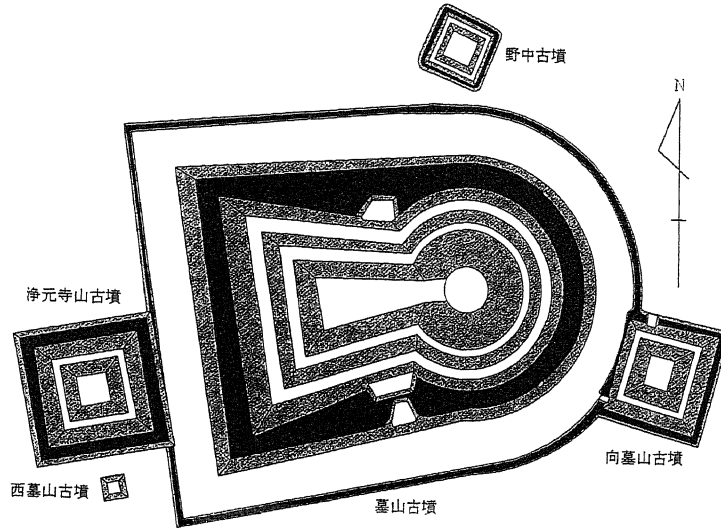


図20 墓山古墳と陪塚

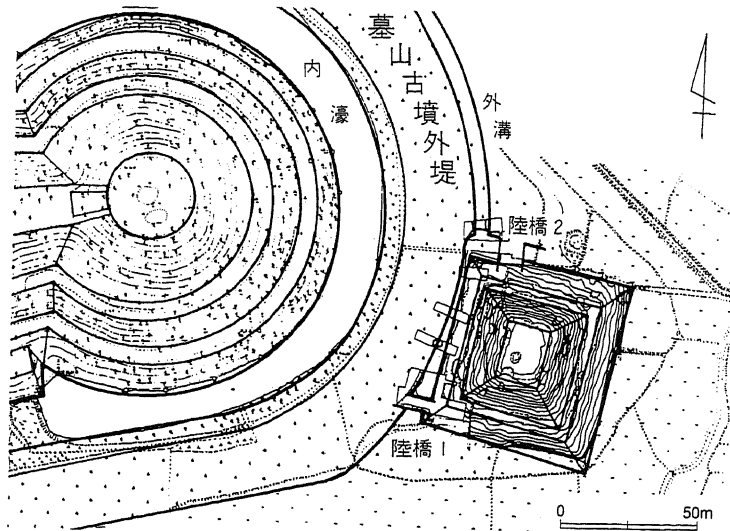


図21 向墓山古墳

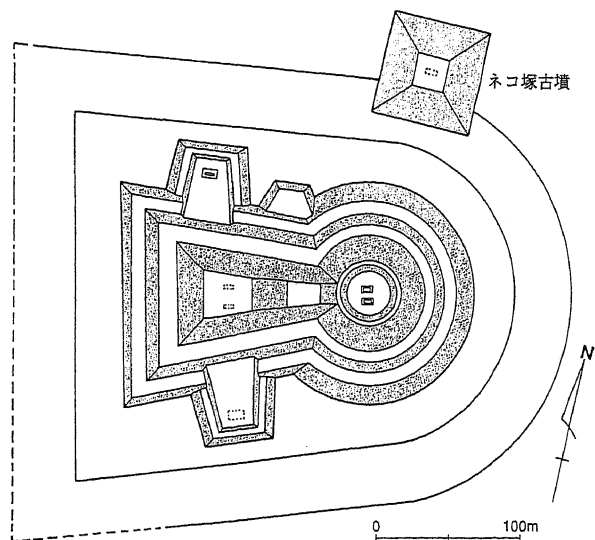


図22 室宮山古墳

丘全長230mを測り、大王墓の1つと目される巨大古墳で、二重周濠をもつ。巨大古墳が近接して所在しているため、どれまでがこの古墳の陪塚か、わかりにくいところもあるが、計7基の帆立貝形・円・方墳が随伴する。これらのうち唐櫃山古墳、長持山古墳は現在墳丘が削平されているが掛甲をはじめとする豊富な副葬品と阿蘇溶結凝灰岩製の刳抜式家形石棺を使用することによく知られる。

このうち唐櫃古墳は墳丘全長53mの帆立貝形古墳で市野山古墳の後円部後端近くに、長持山古墳は径40mの円墳で後円部の西側面に所在する。ともに墳丘は市野山古墳の外濠に接する位置に築かれており、また、それぞれ周濠をもつことが判明している。それらの周濠と主墳である市野山古墳外濠との関係は確認されていないが、周濠が通常どおりめぐるとするならば、それは主墳の外濠に接続すると考えざるをえない（図19）。

陪塚の周濠が主墳のそれに接続する例は陪塚全体からみればごく少数である。しかしながら、宮内庁による陵墓指定、そしてそれ以上に百舌鳥・古市古墳群における古墳周辺の市街化のため陪塚の墳丘や周濠の確認調査例がさほど多くないことを考慮すれば、必ずしもこうした例はごく特殊な例であるとも言い難い。百舌鳥古墳群の御廟山古墳（201m）の後円部後端に所在するカトンボ山古墳（円50）（図2）、大仙古墳（486）の前方部側面に所在する塚廻古墳（帆立貝形38）（図7）も墳丘と主墳の外濠の位置からその例に含まれる可能性が強い。

さらに和田茶臼山古墳の事例から、陪塚の周濠に二重周濠が採用される場合があることを勘案すれば、主墳の外濠あるいは周濠に接続する例はより増加すると考える。

**向墓山古墳** このほか、墓山古墳（225）の後円部後端側に所在する大形の方墳、向墓山古墳（68）は、墳裾をめぐる溝が主墳の周堤外側の溝に接続し、さらにそれを横切って主墳の周堤と墳丘をつなぐ陸橋をもつ（図20・21）。周濠の接続ではないが、それと同様に主墳と陪塚の一体性を表示する事例である。

これに似た陪塚の配置をとる例として室宮山古墳とネコ塚古墳（図22）、久津川車塚古墳と梶塚古墳（図23）、仲津山古墳と鍋塚古墳、コナベ古墳の陪塚群といった諸例があり、ネコ塚古墳と梶塚古墳は陪塚が周堤に乗る形になる。久津川車塚古墳の場合は梶塚古墳付近で外濠が途切れるとみられることが明らかになっているものの、他は遺構の状況は明らかになっていない。久津川車塚古墳が6期、向墓山古墳を含めた他が5期に属することから、今後の資料の増加を待つ必要があるが、向墓山に見られる接続の形から、濠の接続・共有へと変わっていく可能性を考えている。

#### (4) 陪塚の配置

以上に示した濠が接続する陪塚の諸例は、いずれも主墳の後円部付近に築かれている。

畿内の主要巨大古墳における陪塚の配置を簡単に整理したのが表2である。先にも述べたように確実に陪塚と認定できるものばかりではなく、築造時期が前後し狭義の陪塚からは除外したほうが良いものを含む可能性がある。また、古くに削平されたものもかなりの数にのぼると考えられており、確定的な資料ではないが、築造位置選択の傾向を知ることは可能である。山田幸弘氏が指摘するように、陪塚は後円部側に配置される例が圧倒的に多い。陪塚の数が多い場合にはコナベ古墳や国府市野山古墳のように後円部にそって弧状の配置を示し、少ない場合

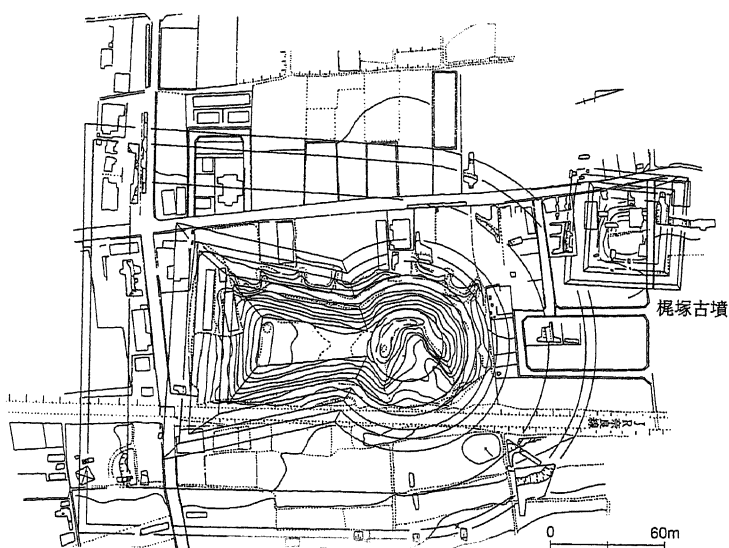


図23 久津川車塚古墳

表2 陪塚の築造位置

古墳名	資料総数	後円部側	前方部側面	前方部前面	備考
佐紀石塚山	3	3			
コナベ	10	7	3		
墓山	4	2		2	
石津丘	4	3	1		もと10基前後
誉田御廟山	8	1	3	4	
百舌鳥御廟山	2	2			
大仙	15	7	4	4	
市野山	7	6	1		
太田茶臼山	4	4			
淡輪ニサンザイ	6	6			
計	63	41	12	10	

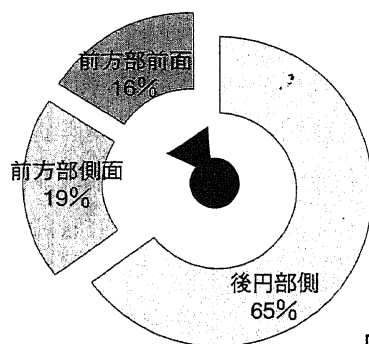


図24 陪塚の築造位置

は後端付近に築かれることになる。一方、前方部、とりわけ前方部前面に配置される例はきわめて少ない。

この原則からはずれるのは大仙・誉田御廟山という2つの巨墳である。誉田御廟山古墳の場合、陪塚の総数が少なくそれらは前方部側に多く、上記の原則から逸脱する(図8)。このことについては現在十分な解釈は困難で、あるいは古くに削平されたものがかかなりあるのかもしれない。

他方、大仙古墳の場合は総数が15基と多く墳丘全体をとりまく形になる(図7)。後円部後端側に所在する2基の円墳、茶山古墳と大安寺山古墳は外堤上に築かれており、先に述べた濠の共有の資料でもある。くびれ部両側の塚廻古墳、樋の谷古墳も三重濠に近接しており濠が接続する可能性が強い。一方、前方部前面に所在するグループは竜佐山古墳、孫太夫山古墳など帆立貝形古墳で、そのうちの竜佐山古墳が三重濠に最も近接するが、この古墳は大仙古墳とは埴輪に時期差があり、時期をおいて近接した位置に築かれたものである。こうした例もあるが、他の2基は三重濠から少し距離をとっている。また、後円部側でも丸保山古墳や源衛門山古墳は三重濠から若干の距離をとる。

したがって、陪塚群は後円部にきわめて近接するグループと、墳丘からやや離れて築かれるグループによって構成されているとみることができ、後者は後円部側から前方部前面にわたって築かれているとみてよいだろう。

なお、大仙古墳と竜佐山古墳、墓山古墳と浄元寺山古墳、誉田御廟山古墳と誉田丸山古墳など、前方部前面の陪塚は陪塚群のなかで最も新しく、最後に築かれる例が多いようである。

##### (5) 陪塚の空間表現

以上に示した陪塚の配置と濠の接続から、陪塚配置の約束事を知ることができると考える。

前記のように陪塚が築かれる基本的な位置は後円部周辺である。

そして、それらに加わる形で主墳の周辺という位置が選択される。これは後円部側でもやや離れた位置であったり前方部側であったりと具体的な形は多様である。

さらに、百舌鳥・古市古墳群では、これら確実な陪塚以外に中小規模墳の古墳が巨大古墳の間に散在する。陪塚の認定要件の一つである配置の企画性からははずれることになるが、それらは主墳との位置関係が明確でない形の陪塚とみることができる。

このように陪塚の築造位置は任意ではなくそこに一定の傾向を見出すことができ、陪塚の築造位置の決定には一定の原則があると判断できる。陪塚は主墳の後円部中心点、すなわち主墳の被葬者からの距離にもとづく環状の配置構造をもつとみるべきである。そして、これにそれぞれの陪塚の墳形と規模の相違が加わって主墳の被葬者と陪塚の被葬者との関係を表示すると考えてよい。この環状構造の最も内側の、主墳後円部に近接するグループに主墳の外濠に周濠が接続するものが含まれる。

こうした視覚的な形での主墳との関係の表示は、主墳の側からすれば従属という言葉で括ることが可能ではあるが、濠を接続し共有するという形状は陪塚の被葬者にとっては主墳との親縁関係の表示である。いわゆる陪塚は王権あるいは大首長の政治組織を構成した官僚的な層の墳墓であるというこれまでの理解にたつが、主墳の被葬者との関係をまさに明示することから

みて、その中核となるのは主墳の被葬者と血縁・婚姻関係にある首長の一族であり、それらが後円部に近接する陪塚の被葬者になると考える。

上記の陪塚の配置は畿内においては長く保持されるのに対し、地方では必ずしもそれに則っていない。先に示した吉備の造山古墳と陪塚群の関係は、地形が大きく作用していることは否めないが、あるべき陪塚の配置を取るよう努めたとも考えにくい。あるいは、この場合は前方部前側の尾根に後続する古墳が順次築かれるという前期以来の吉備の古墳群形成のあり方が優先されたのかもしれない。同じ吉備の宿寺山古墳の2基の陪塚は主墳の側面下方側に並んでおり、後円部への近さというよりも側面からの見かけを重視しているようである。さらに、讃岐最大の前方後円墳、富田茶臼山古墳では前方部前面の周濠外側で陪塚とみられる2基の方墳の所在が確認されているが、やはり配置の原則からすれば逆の位置となる。

#### (6) 和田茶臼山古墳と森山古墳

そうした、不完全とも言える陪塚の配置に対して、両宮山古墳群の和田茶臼山古墳の築造位置は畿内の大王墳や有力首長墳におけるあり方と同様であり、外濠の接続も特異とすべきものでないことは以上に見たとおりであり、陪塚の築造についての規範を正しく受容している。そしてここに提示した陪塚の被葬者像を妥当とするなら、和田茶臼山古墳の被葬者は両宮山古墳の被葬者のもとで政権の職務にあたった一族の1人と言うことができ、埴輪・葺石が和田茶臼山・両宮山の2古墳に共通して欠落することも、その原因は別としても、理解しやすい。

一方、両宮山古墳の前方部前面に所在する森山古墳の性格、被葬者像を考察することはなかなかむずかしい。両宮山古墳との位置関係、帆立貝形古墳という前方後円墳よりも下位となる墳形からすれば陪塚として扱うことになる。両宮山古墳後円部からは最も離れる位置にあることからすれば、両宮山古墳被葬者に従属した首長をイメージすることもできる。それに対して問題は、墳丘の大きさである。墳丘全長82m、総長136mという規模は主墳に対してきわめて大きい。大仙古墳の陪塚のうち最も大きな帆立貝形古墳が丸保山古墳で墳丘全長87mを測る。この場合は主墳が日本最大で墳丘全長486mであることからすれば、主墳と陪塚の関係として問題はない。それに対して墳丘全長が半分以下の両宮山古墳の場合、大きさの関係はやや不適當なものとなる。

主墳の規模が小さくなれば他の古墳との規模の差は縮小してくるため一律の比較はむずかしいが、陪塚と言いがたい大形墳が随伴する例として、兵庫県五色塚古墳と小壺古墳、群馬県太田天神山古墳と女体山古墳など5期にいくつかの例があり、こういった随伴古墳の被葬者像をどのように想定するかという考察も必要となってくる。しかしながら、それらの位置はいずれも主墳の後円部側に築かれており、森山古墳の場合とは少し異なる。

森山古墳の問題点のもう1つは両宮山古墳・和田茶臼山古墳と異なり葺石・埴輪を伴うという様相の相違で、同じく葺石・埴輪を伴う正免東古墳は森山古墳の陪塚ともいえる位置にある。

こうしたやや特異な要素を勘案し、森山古墳は両宮山古墳の陪塚であると同時に、両宮山古墳に後続する首長墳としての性格を併せもつと考える。

## 第10章 巨大古墳築造の試算

## 1 はじめに

巨大古墳の築造には膨大な労働力が投入されたであろうことは想像に難くない。しかしながら、それがどの程度の規模でありどれほどの期間を要したかを正確に算出することは、ほぼ不可能と言っても過言ではないだろう。これは、多くの巨大古墳では盛土量算出の基礎となる地山の高さや濠の深さといった諸元が不明であること、そしてそれ以上に、作業の歩掛かり、つまり積算の根拠のほぼすべてが推定とならざるをえず、いわば推定に推定を重ねざるをえないことにある。とはいえ、投入労働力の推定は巨大古墳の築造に邁進した古墳時代の社会を理解するうえで、また、王権の大きさを考えるうえで、たとえ一つのシミュレーションであるにしても有効な作業となる。

よく知られ、また、しばしば引用される古墳築造労働量の試算として、株式会社大林組によって試みられた大仙古墳に関する推定作業があり<680万7000人の人員を要し、15年8ヶ月の歳月がかかる>という積算結果が示されている（大林組編1986）。墳丘全長475m、墳丘体積140万6000立方mの大仙古墳に対し、両宮山古墳は墳丘全長206mであり、その規模は及ぶべくもない。しかしながら、濠の深さや地山の高さに関する資料がかなり得られており、これをもとに独自に築造作業量の試算を行い、大林組の試算と比較してみたい。

## 2 古墳築造に関する研究

古墳築造に関する研究の始点となるのが梅原末治氏の検討である。大仙古墳の体積を算出し、かりに1人が1日に1立方mの土を250m運んだとしても、それだけで140万人を要するとし、築造にはおびただしい労力と期間が必要であり、こうした巨大古墳の造営は被葬者の生前からなされたであろうとした（梅原1955）。

これ以降の研究において特筆されるのは石川昇氏の墳丘体積に関する研究である。近畿地方の前方後円墳の総体積を求め地域間にきわめて大きな格差があることを指摘し、大王墳の突出した規模を明示した。また、その中でそれまでの研究を整理し、掘削や運搬などの歩掛かりについても詳細な検討を行った（石川1989）。

具体的な積算の事例としては上記の大林組による作業が著名であるが、このほかに大仙古墳に関して川上敏朗氏による算出があり、398万6000人、15～20年という数値が示されている（川上1983）。また、造山古墳についても株式会社大本組・高橋護・葛原克人氏による試算があり152万3000人という数値が得られている（大本組ほか1989）。

なお、これらの研究は大手建設会社によってなされた例が多く、1980年代に集中する点に特徴がある。それらは独立して行われており、また、研究者による検討や批判もないままに数字

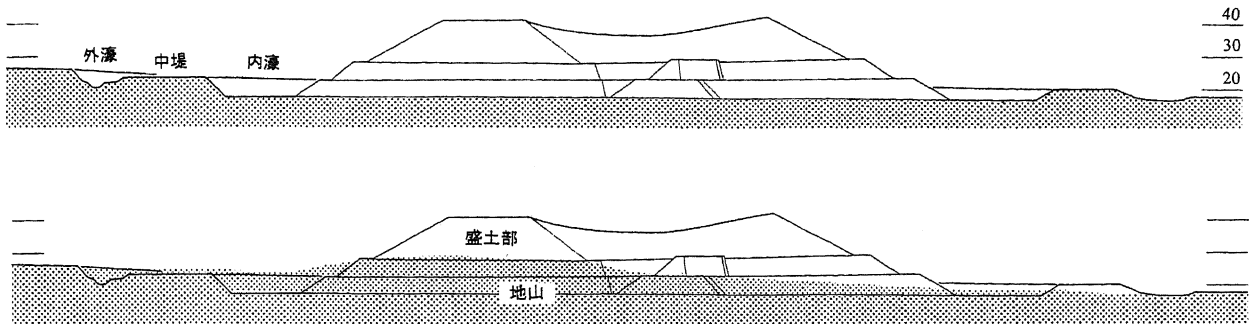


図1 両宮山古墳の復元と旧地形の推定 下段 トーン：推定旧地形

が一人歩きしている状況にあるといつてよい。憶測を重ねるほかない作業ではあるが、あえて小論をまとめた理由は、そうした状況に注意を喚起することにある。

### 3 両宮山古墳の体積と盛土量

#### (1) 地山と旧地形

両宮山古墳は緩やかに下降する扇状地状の斜面に築かれている。墳丘主軸を等高線に直交させ、前方部を下方側に向ける。

内濠の波浪によって削られた後円部西側の現墳端には岩盤が認められるが、外濠のトレンチに岩盤が現れることはない。また、後円部後端側では外濠の外側が中堤上面よりも3m高くなる。これらのことから、後円部の位置に岩盤を核にした小規模な丘陵が所在し、それに向かって後方から幅の広い尾根状の高まりが接続していたとみられる。つまり、古墳築造前の地形はいわば後円部を中心にして墳丘を逆向きにした形状であったと判断できる。

後円部はこの小丘陵を利用して築かれている。一方、前方部前面ではそこに弥生時代後期の大型の遺構を見ることができ、遺構の位置からみて前方部下段の上部は盛土によって築かれているとみてよい。中堤についてはトレンチ調査を行っており、かなりの部分が盛土によって形成されていることが明らかになっている。盛土は後円部の両側面付近からはじまり、前方部前端にむかって徐々に厚さを増し、前方部前面で厚さ1.8mを測る。

なお、後円部の築造に小丘陵を利用する点は、盛土量の削減を目的としたものと考えられることもできるが、第1章で述べたように吉備では古墳の立地が5期から6期にかけて大きく変わり、築造位置が山頂から平地に移るものの、なお造山古墳のように丘陵を利用したり、8期の天狗山古墳のように再び山頂に立地する例がある。両宮山古墳の場合も、墳墓に山を用いるという伝統的な思想を反映して墳丘に小丘陵を取り込んだと理解している。

#### (2) 墳丘の体積と盛土量

墳丘の体積は23万7462立方mを測る。これは下段の地山部分を含んだ数値であり、盛土量を示すものではない。中段・上段の体積は12万6035立方mであるが先に述べたように後円部の地山は高くなる可能性が強く、墳丘の盛土量はこの数値よりも小さくなると見込まれる。



中堤については墳丘よりも高い精度で盛土量を算定することができ、その盛土量は2万8023立方mとなる。

次に掘削土量に目を転じれば、内濠が8万9112立方m、外濠が1万5795立方m、後円部後端側の尾根状部分の切り下げに5400立方mであり、掘削量は計11万0306立方mとなる。この数値から中堤の盛土量を差し引いた値が客土を想定しない場合の墳丘盛土量となるが、それは8万2283立方mで、上記の墳丘中段・上段の体積よりも4万3752立方m小さい値となる。後円部中段の体積は3万1724立方mであるから、後円部中段と前方部中段の後円部側が地山からなるとすれば数値はつりあい、また、想定される旧地形とも矛盾しない。なお、前方部下段の前端肩付近は盛土によると考える。

つまり、両宮山古墳墳丘・中堤の盛土は内濠・外濠の掘削によって得られる土によってまかなわれたと考えることが可能であり、客土を考える必要はないことになる。以下では11万0306立方mの土量を対象として試算を試みる。

### (3) 盛土量の比較

労働量の算定に先立って該期の古墳間の盛土量の差を示しておく

両宮山古墳	前方後円墳	206m	110,306立方m
小山古墳	前方後円墳 復元	67m	4,000立方m
正崎2号墳	円墳	20m	109立方m
前内池1号墳	方墳	14m	101立方m
前内池3号墳	方墳	7m	11立方m

これらは両宮山古墳と同地域にある7期から8期にかけての古墳である。小山古墳は両宮山古墳に後続する首長墳であり、正崎2号墳、前内池1号墳の2基はこの地域の小首長および有力家長を被葬者に想定できる。盛土量は墳長よりも明瞭かつ顕著に階層差を示しており、また、両宮山古墳の規模はとりわけ圧倒的である。

なお、吉備の7期後半の巨大古墳・大形古墳は最大墳が備前の両宮山古墳、これに続くのが備中の宿寺山古墳(114m)であるが、その盛土量は2万立方m前後と見込まれ、両宮山古墳との差は大きい。

## 4 築造工程と労働量

### a 築造位置の決定・作業計画の策定

これらは重要な作業であるが、所要労働力はごく小さいとみてよい。平地での築造であれば他の築造事例の応用でも可能であろうが、地形の起伏が大きいため、樹木の伐採後地形の測量を行い、たとえば地形の模型を作成して掘削範囲・盛土範囲を決定するといった工程を想定すべきかもしれない。

### b 樹木の伐採

両宮山古墳付近は集落域に近接しているとみられ、全域が山林であったとは考えない。墳丘域全体では14万9250平方mに達するが、後円部が位置する小丘陵を中心にまばらに樹木が生え

ている程度と推定する。その範囲を3万6000平方mとし、1人1日20平方mを処理すると見込めば1800人を要する。

#### c 排水溝・盛土範囲を示す溝の掘削

掘削の歩掛かりは後述するが、緩傾斜地であるため、外濠掘削範囲の外側、後円部北側から南西部にかけて上方からの水の流入を防止する排水溝の設置が必要と考えられる。溝の規模はさほど大きい必要はなく幅1m、深さ50cm程度でよい。延長は550mが必要となる。

中堤盛土部の調査において、盛土端に近い部分で盛土によって埋められた溝を検出している。後円部東側では幅3.2m、深さ50cm、後円部西側では推定幅1.2m、深さ50cmを測る。堆積土は認められず、排水にかかわるものとは考えにくいいため、盛土範囲を示す溝と考えており、この評価を妥当とすれば墳丘・中堤の盛土範囲の総延長1675mに溝を掘削したことになる。なお、掘削範囲を示す溝が別に設けられた可能性も考えられるが、その労働は以下に述べる内濠・外濠の掘削に含まれる。

以上の2種類の溝の掘削に要する人員は1030人である。

#### d 内濠・外濠の掘削

11万0306立方mの掘り下げを行う。

掘削の歩掛かりは、他の試算では1人1日1.8から5立方メートルとかなりの差をもつ。川上1983では5立方メートル、大林組編1986では道具の効率の悪さを勘案して現代の半分、2立方mとするが、これらは発掘現場の実際からみてやや過大と思われる。

『延喜式』木工寮には掘埴として「掘開埴土一人一日立方五尺、堅埴減一尺、一人一日取埴大（土か）二千斤、堅埴減千斤 工一人作埴槌十五柄、夫一人作運埴葛籠十五口」と記す。この記載は続いて作瓦の歩掛かりが述べられていることからみて、瓦用粘土の採取に関する規定と考えられるが、両宮山古墳の地山となる土は礫を多く含んでおり、これは洪積段丘に立地する古市古墳群においても同様である。

したがって、堅埴の場合の立方四尺=1.7立方メートルよりも効率をさらに下げて考えるべきであり、1人1日1立方メートル程度とするのが妥当であろう。この歩掛かりで考えた場合、掘削に要する人員は11万0306人である。

#### e 盛土の締め固め

運ばれた土は単に積み重ねるのではなく、叩き締める必要がある。この歩掛かりについては京都府作山1号墳の復元作業の実績値、1人1日1.15立方メートル（佐藤1995）を用いれば9万5918人となる。

#### f 運搬

掘削と叩き占めをつなぐのが運搬作業であるが、これは運搬距離に比例し、また何よりも、参考にできる数値がないため算定が最もむずかしい。古墳時代の運搬は畜力や車の利用は想定できないため人力を考えることになり、試算例ではモッコなどの使用を想定することが多い。内濠・外濠の掘削箇所から墳丘までの運搬が想定できる両宮山古墳の場合、運搬距離は60～90mと比較的短い、客土を想定した場合は遠距離の運搬となるため効率は著しく落ちることになる。

大林組編1986ではそれを考慮して採土場所からの距離に応じて1人1日1立方m（内濠から）、0.85立方m（外濠から）、0.2立方m（客土取り場から）とし、すべて客土の使用を想定する大本組ほか1989では1人1日0.45立方mとみる。

さて、『日本書紀』の箸墓築造の記事には、よく知られる「日は人作り、夜は神作る」という語句に続いて、「則ち山より墓に至るまでに、人民相踵ぎて手遞傳にして運ぶ」という記載があり、『播磨風土記』にも同様な記事がある。これらは石材の運搬に関する記事であり、またそれが全くの史実を伝えているとは思わないが、この運搬方法・バケツリレー方式はきわめて合理的かつ効率的な運搬方法である。古墳築造工程のなかで最も規模が大きく、また、築造工事域の外でなされるため、古墳の築造を代表する作業として記憶され伝えられた可能性を考えておく。

この方法を用いたとすれば効率的な土の搬送が可能となる反面、距離に比例した人員が必要となる。問題は歩掛かりであるが、その推定はきわめてむずかしい。土1立方mは1.4トンに達するため、モッコで運ぶなど他の運搬方法を用いて大林組編1986に示す1人1日1立方mの運搬が可能かどうか疑問があるため、ここではこの方式によってそれが達成できると考えておく。

したがって、11万0306立方mの土を運搬する両宮山古墳の場合11万0306人が必要となる。

#### g 葺石と埴輪の設置

以上の人員、計31万9360人によって現状の両宮山古墳は築造できたことになる。

両宮山古墳は埴輪と葺石を欠くが、これは何らかの事情によって本来配置すべきものが置かれなかったと考えており、これらが伴うと仮定して試算を続ける。なお、ここでは埴輪と葺石は墳丘にのみ配されたと考えておく。

墳丘斜面の総面積はほぼ2万平方mであるため、葺石が空隙を除いての厚さ12cmに葺かれたとすれば2399立方m、6238トンが必要となる。葺石石材の採取地としては西1.2kmの山麓部、あるいは南西3kmの旭川河岸が候補地となる。前者とした場合、土と同じ歩掛かりで運んだとすれば運搬は1200人が4日を要することになる。

多大な人員を要するのが葺石の敷設である。作山1号墳の復元工事では411平方mの施工に3人一組のチームが3から4組で約40日を要した（佐藤1995）。この例を参考に1人1日の施工面積を1平方mとすれば2万人を要することになる。

また、埴輪の場合は墳丘平坦部の総延長から円筒埴輪3100本が必要となる。大半が小形品からなり大形品は少量で、それらが1日3本の割合で製作できたとすれば製作に1033人が必要となる。製作場所は両宮山古墳に比較的近い南1kmの山麓部を想定すれば製品の運搬に1000人が必要となる。そして、その配置作業に200人を要すると見積もられる。

ここには葺石の場合、転石の採取・集積に要する人員、埴輪では粘土の採取・形象埴輪の製作・焼成の関係などを含めておらず、必要人員はこの数よりも大きくなるし、また、近畿の場合と同様、中堤にも葺石・埴輪が配されたとするならさらに加算が必要となることは言うまでもない。

これ以外に、ここでは試算を行っていないが、石棺の製作と、それが竜山石だったとすれば

播磨からの運搬、石室の構築といった作業が必要となってくる。

#### h 試算の集計

以上の試算を総計すれば、両宮山古墳の築造と完成には少なくとも35万人を要するとみることができ、最大の動員が必要となるのは葺石の運搬となる。これを古代の税制の一つである雑徭を参考に、農閑期に60日の労働でまかなったとすれば1日500人が働いて12年を要することになる。きわめて大規模な事業ではあるが、この程度の動員規模であるなら当時の社会にとってさほど無理のない負担であったとみることができる。

### 5 他の試算の問題点

両宮山古墳の推定労働量は大仙古墳の680万7000人（大林組編1986）、造山古墳の152万3000人（大本組ほか1989）にくらべてはるかに小さい数である。これは対象とする古墳の規模が大きく異なり、またそれぞれの推定歩掛かりが異なることによるのであるが、それを割り引いても著しい差がある。

（株）大林組編1986に示された試算において最大の比率をもつ労働は客土の運搬で、それに370万人を見込む。つまり総労働量の54%を客土の運搬が占めることになる。大本組ほか1989においても同様で、墳丘盛土はすべて客土によるとみるこの試算では運搬に59万4000人、39%を要する。つまり、ここで示した両宮山古墳での試算との差の要因は客土運搬にあり、それを行ったかどうか、墳丘盛土が濠の掘削で得られる土でまかなわれたかどうか大きな問題となる。

百舌鳥御廟山古墳は両宮山古墳と同規模同規格、両宮山古墳のモデルになった古墳と考えている。平面形はよく一致するのに対して、高さはやや異なり、上段・中段をあわせた高さを比較すると百舌鳥御廟山古墳のほうが両宮山古墳よりも後円部で6.6m、前方部で7.7m低い。また、両宮山古墳の場合、前方部側に地形が下降するため濠の地表からの深さは浅くなり、最も面積が大きい前方部前面内濠部分の掘削土量は比較的小さいが、平坦な地形に築かれた百舌鳥御廟山古墳の場合、前方部側からも多くの土を得ることができるとみてよい。先に述べたように両宮山古墳では後円部中段は地山と見込まれるのに対し、平地に所在する百舌鳥御廟山古墳は中段以上はすべて盛土からなるとみられるが、上記の諸点を勘案すれば盛土は濠の掘削土でまかなわれたと考えることが可能である。

また、大本組ほか1989の試算には多くの問題がある。旧地形を墳形よりも一回り小さな丘陵とみなし、墳丘盛土27万立方mを得るため古墳南方の丘陵を掘削し運搬したという想定にもとづいているが、その想定には特に明確な根拠があるわけではない。造山古墳の場合、前方部前面とこれに向き合う丘陵の間は延長150m、外側の丘陵上からの深さ7mの巨大な堀切状をなすことで知られる。したがって造山古墳は紡錘形の平面形をなす丘陵を中央付近で切断し、それによって生じた土と前方部側面の成形の際に生じた土をもって後円部が築かれたと考えるべきであり、27万立方mもの客土を想定することには疑問がある。

なお、前方部前面の丘陵切断によって得られる土量は7万8000立方mである。これ以外にどれほどの土が掘削されたか明確でないものの、墳丘盛土の少なくとも大半が墳丘形成時の掘削

土であるとすれば、盛土の総量はこの数の倍にまでは達しない可能性がある。造山古墳と両宮山古墳は墳丘規模において大きな差をもつが、盛土量に極端な差はなく、それは吉備の大首長墳の築造に投入される労働量の上限であった可能性を示唆すると考える。

## 6 おわりに

以上、仮定を重ねることになったが、両宮山古墳を素材として巨大古墳築造に関わる労働量の算定を試み一つの数を示すことができた。作業によって明らかになったのは、これまでに示されたいくつかの試算はきわめて過大な数値になっている可能性が強いことである。

いかに大きな数値であっても巨大古墳ということに納得してしまいがちではあるが、それが妥当であるかどうかさまざまな形で検討を試みる必要がある。はたして5世紀の総人口を大幅に上回る総労働量を大仙古墳1基に必要とするのであろうか。

それぞれの作業の歩掛かりの推定は明治以前の土木工事の記録や手引き書（近世地方書）の検討が有効であろう。上記のように試算に大きな影響を与えるのが客土の有無であり、基本的に客土はなかったと考えるが、他の巨大古墳で盛土量と掘削量を算定し検証していく必要がある。

## 第11章 吉備の帆立貝形古墳

### 1 はじめに

前方後円墳を頂点とする多様な古墳の墳形の一つに帆立貝形古墳がある。大形化をとげる前方後円墳の前方部に対し、短く低平な前方部をその特徴とする。

この墳形については、河内政権による地域の前方後円墳築造に対する規制にもとづくとする小野山節氏の評価（小野山1970）があり、これがその後の研究の基軸となる。

それ以降の論考としては、その築造企画を検討した石部正志氏らの研究（石部・田中・宮川・堀田1980）、櫃本誠一氏による集成と分析（櫃本1984）、遊佐和敏氏による帆立貝形古墳全般にわたる論考（遊佐1988）があるほか、木下亘氏による整理（木下1992）、吉備の資料については安川満氏による築造企画と規模に関する分析（安川1998）などがある。最近では中四国の資料についての集成と検討（中国・四国前方後円墳研究会第5回研究会事務局1999）がなされている。

中期古墳論のなかで帆立貝形古墳の評価が示されることも多い。都出比呂志氏は、中期の首長は前方後円墳を築きうる首長と大形円墳や帆立貝形古墳を築く首長とに区分され、後者は前方後円墳被葬者を頂点とする地域秩序のなかに組み込まれたと述べ（都出1992）、和田晴吾氏は大首長による中小首長に対する規制・序列化の結果、後者は帆立貝形古墳・円墳・方墳を営んだと考える（和田1992）。両氏の見解は近似するが、「規制」の評価では若干相違を示すと言える。

これまでの研究においては帆立貝形古墳の起源および造り出し付き円墳との区分に重点が置かれており、5世紀後半の帆立貝形古墳について十分に評価が深められてきたとは言いがたいところがある。小野山氏の論考から30年以上が経過し不十分とはいえ資料が増加した今、氏が分析の対象とした備前・長船系譜を含む吉備地域の資料を用いて帆立貝形古墳の性格を考えてみることも、あながち無意味でもないだろう。以下、吉備の資料の整理と検討をおこない、帆立貝形古墳の評価の再検討を試みたい。

なお、帆立貝形古墳の分析にあたっては立面形の検討や前方部長さの比較が有効であることは言うまでもないが、墳端や段築が確定できた資料が僅少であるためここでは割愛する。

### 2 帆立貝形古墳の特色

前方後円墳との対比において帆立貝形古墳を特徴付ける要素は2点ある。

第1は前方部の形状である。前方後円墳の前方部は一貫して大形化を遂げ、よく知られているように前方部が後円部の高さを凌駕し、体積も前方部が後円部を上回ることになる。一方、帆立貝形古墳はそうした変化を示さず、出現期にはややバリエーションを示すものの、以降は

後円部高の3分の1という低平な形状をほぼ保持しており、前方後円墳の前方部の影響を受けていない。

第2は墳丘規模の格差である。前方後円墳の場合、同様の墳形をとりながら大は墳丘全長300m以上、小は数十mと極端な差をもち、最大規模墳は一貫して畿内に所在すること（広瀬1987・1988）が知られている。一方の帆立貝形古墳であるが、畿内と吉備で墳丘規模を比較すると次のようになる。

5期	6期	7期	8期
畿内：乙女山古墳（130）	青山古墳（73）	丸保山古墳（87）	蕃上山古墳（53）
吉備：小盛山古墳（105）	千足古墳（75）	森山古墳（82）	天狗山古墳（60）

このうち畿内の例は馬見古墳群、古市古墳群、百舌鳥古墳群から抽出した。時期が不明確なものや削平によって墳丘規模が不明確となっているものを除外したため、必ずしも各期の最大規模墳を示せてはいないが、7期の例、両宮山古墳に随伴する森山古墳と大山古墳に随伴する丸保山古墳の規模関係が端的に表すように、墳丘規模の差はごく小さいかほとんどないと言うことができる。

以上の2点、とりわけ後者は帆立貝形古墳が前方後円墳に似て非なる性格をもつことをよく示すと考える。

### 3 吉備の諸資料

吉備南部に所在する帆立貝形古墳の総数は16基であるが、前方部の削平を考慮すればこの数はもう少し増えるとみてよい。論の対象に前方部がやや短い程度の前方後円墳は含めないとするなら、帆立貝形古墳の出現は5期で、以降8期まで築造が継続する。

#### 5期 小盛山古墳

本墳は造出し付き円墳、帆立貝形古墳のいずれにも分類されることのある資料である。径95mの3段築成の円丘部に長さ15mの前方部が付く。前方部は損壊を受けているものの2段築成であったとみられ、巨大古墳なみの後円部にごく小規模な前方部が付いたと言える。他に類例がないため比較検討がむずかしいが、以降の帆立貝形古墳の多くは2段築成で前方部は1段となるのに対し、3段築成という大首長墳の格付け要素をもっており、首長墳に対する規制と理解しうる。これは以降では見られない特徴であり、定型的な帆立貝形古墳以前の様相を示すと考える。

#### 6期 一本松古墳、千足古墳、隋庵古墳、土師茶臼山古墳

いずれも墳端部の調査がなされていないため確定はできないが、千足古墳をのぞく3基は周濠の痕跡が認められず、また立地からも本来周濠はなかった可能性が考えられる。一方、千足古墳は周囲の畑地割りから周堀・周堤の存在が考えられるが、畑の幅がそれほどないため周堀は幅がかなり狭いものである可能性が強い。

周堀をもつとみられる千足古墳は造山古墳の陪塚で山麓に立地する。それをもたない3基は単独の首長墳で前期以来の山頂部と、対照的な立地のあり方を示す。

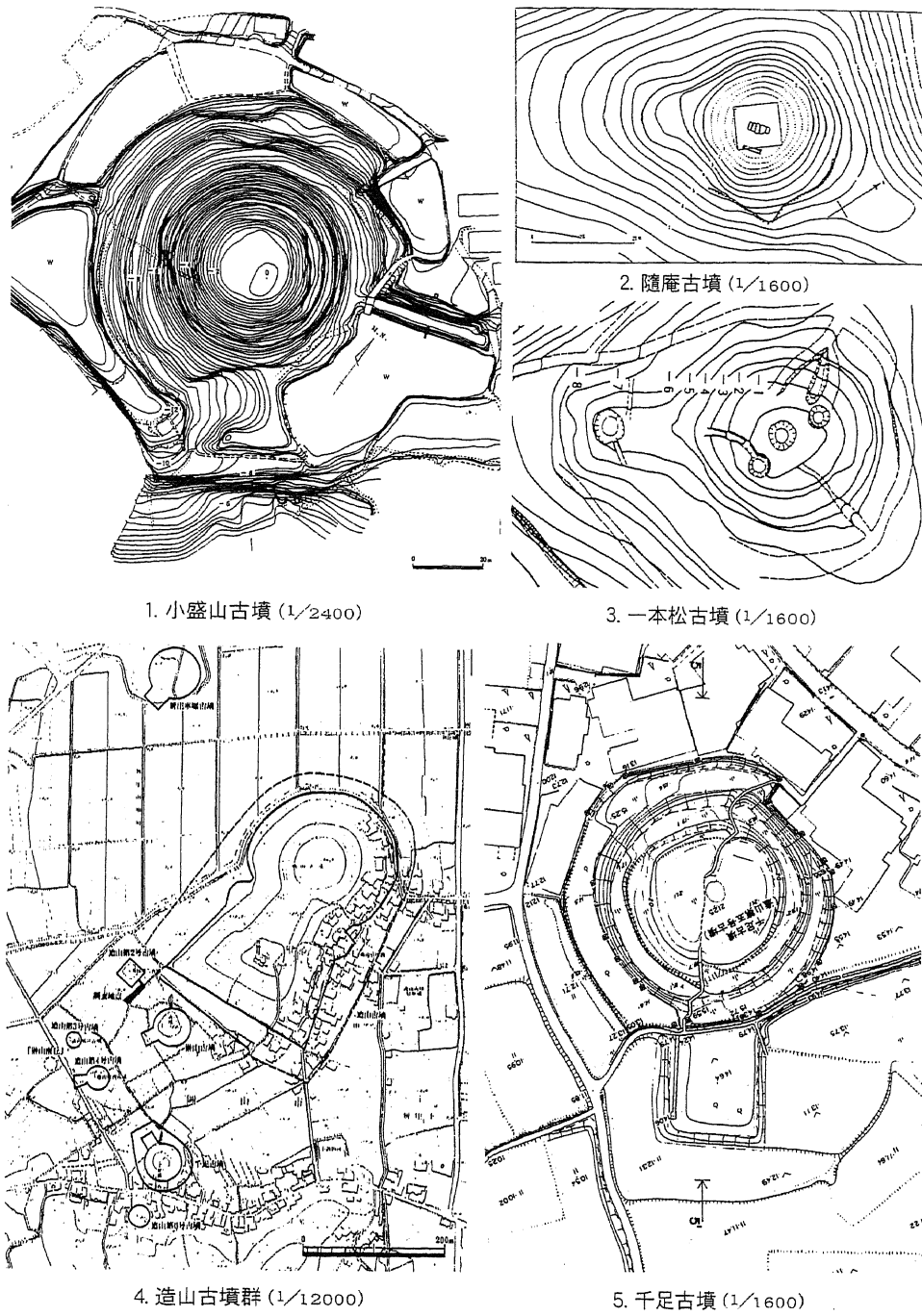
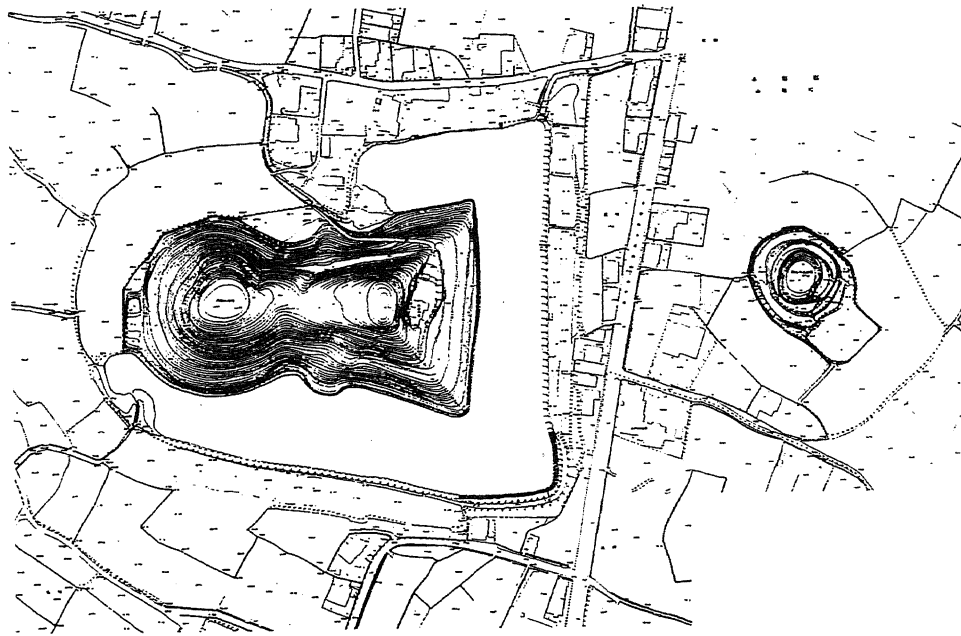
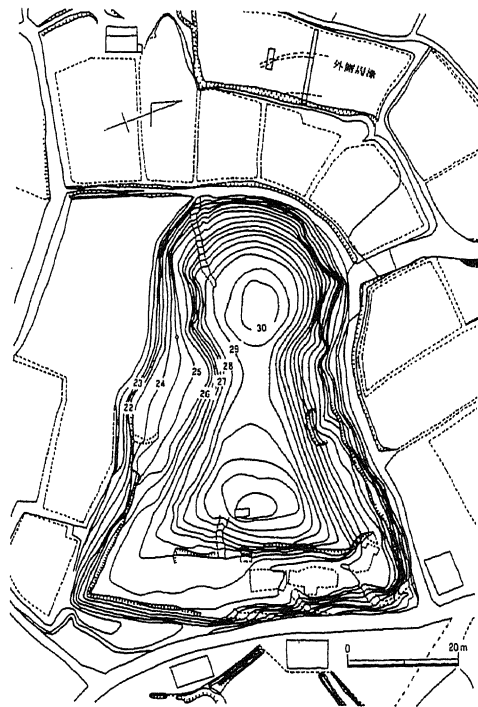


図1 吉備南部の帆立貝形古墳 (1)

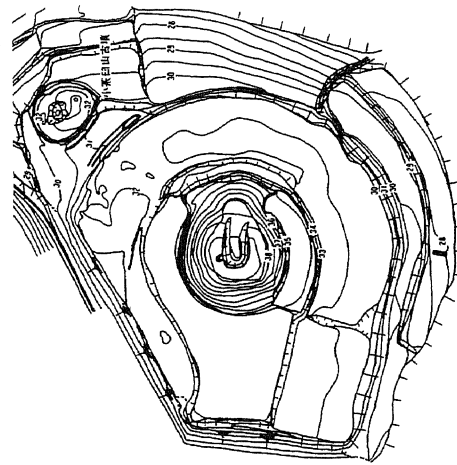




6. 両宮山古墳・森山古墳 (1/5000)



7. 築山古墳 (1/1600)



8. 牛文茶臼山古墳 (1/1600)

図2 吉備南部の帆立貝形古墳 (2)

### 7期 森山古墳、宿車塚古墳、造山4号墳

森山古墳は両宮山古墳の前面に位置しており両宮山古墳の陪塚と考えられるが、埴輪を伴わない主墳に対し埴輪を伴うという相違があり、後継の首長墳でもある可能性がある。宿車塚古墳は宿寺山古墳の、造山4号墳は造山古墳の陪塚である。

この時期の資料はいずれも巨大古墳に随伴する陪塚であり、周堀をもつとみられる。

### 8期 牛文茶臼山古墳、小山古墳、夫婦塚古墳、天狗山古墳、仙人塚古墳

いずれも首長墳である。7期を以て巨大古墳の造営が停止し帆立貝形古墳が陪塚として築かれることがなくなり、8期には首長墳への採用を基本とする。続く9期には定型的な帆立貝形古墳は見られなくなり8期で定型的な帆立貝形古墳は消滅するとみられる。なお、小山古墳はこれに先行する朱千駄古墳、後続する廻り山古墳の両者がきわめて発達した前方部をもつものに対し、前方部の長さは後円部径にほぼ等しく短い。しかしながら後円部3段、前方部2段と中規模墳ではまれな上位の段構成をもつ。通常の帆立貝形古墳とは異なるが、ここでは前方部の短さを重視して広い意味での帆立貝形古墳として取り扱った。あるいはこの墳形が帆立貝形古墳の最終的な形であるかもしれない。

なお、8期には造り出し付き円墳と呼んでも支障のない墳形が中小規模墳に普及する可能性が強い。中期前半の造り出し付き円墳とは異なり、通常の帆立貝形古墳よりもさらに小規模な前方部をもつもので、西山44号墳が知られる。こうした例は現地観察で認識することは困難であり類例は今後増加すると考えている。9期の吉備南部で「造り出し付き円墳」の調査例はないが、吉備北部では蒜山四つ塚13号墳がある。また、10期には二塚2号墳、便木山7号墳など短い前方部をもつ前方後円墳があるが、前方部はかなりの高さをもっており、前方部の高さが後円部の1/3程度となる8期までの帆立貝形古墳とは異なる。これらは小形の前方後円墳であり10期における下位の前方後円墳の形態と評価すべきと考える。

以上のように吉備において帆立貝形古墳は5期に初現的な形態が首長墳に出現し、6期には首長墳と陪塚の二者に用いられる。そのうち後者では周堀・周堤を伴う定型的な形態をもち、以降、それが一般化する。7期には陪塚の墳形として盛行し、8期には陪塚が築かれなくなるためそうした例はなくなる一方、首長墳に採用されるという変遷をとげる。

## 4 各系譜における出現状況

以上に示したように帆立貝形古墳のあり方は出現から消滅までの間一様ではない。6期は5期と7期の過渡的な様相であるとすれば、その様相は5・7・8期に区分できるとしてよいだろう。最も問題となるのは築造数が増加し広範な分布を示す8期の状況である。指摘されているように8期の帆立貝形古墳が前方後円墳の築造規制の結果として採用されたかどうかを検証するため、いくつかの系譜を取り上げて帆立貝形古墳の出現状況を見ておく。

	7期		8期		9期
高月：	両宮山古墳→(森山古墳)		→朱千駄古墳→小山古墳		→廻り山古墳
長船：			築山古墳		→牛文茶臼山古墳→金鶏塚古墳→
真備：					天狗山古墳→小ぐる古墳→二万大塚古墳
笠岡：	双つ塚古墳		→仙人塚古墳→東塚古墳		
(参考)					
牛窓：			鹿歩山古墳		→波歌山古墳→
					( ) - 「陪塚」、ゴチー帆立貝形古墳

これは各系譜ごとの編年表の抜粋であるが、8期に帆立貝形古墳が集中する様相を見ることが出来る。問題は8期の一時期にそれが並ぶかどうかで、ほぼ同時期となるなら吉備地域全体に対して規制がなされたことになろうし、ある程度の差があるなら一時期の規制とは別の理解を行うことが妥当ということになる。

各系譜における築造順は動かないとしても、これらの細かい時期的関係の検討は調査報告書の刊行を待って行なう必要があり見通しを示すことになるが、仙人塚古墳→牛文茶臼山古墳・小山古墳→天狗山古墳の順になる可能性が考えられ、全く同時期とはならないようである。また、築造状況の参考として示した牛窓系譜では帆立貝形古墳は築かれておらず、吉備のすべての系譜でその築造がなされたのではなかったことも明らかである。

## 5 帆立貝形古墳の性格

これら首長墳に採用される帆立貝形古墳の意義であるが、上記の状況からは、一律に地域・時期を限定して規制の網がかかった結果生じたとみることはややむずかしいように思われる。注目されるのは長船の築山古墳と牛文茶臼山古墳、笠岡の東塚古墳と仙人塚古墳のように、発達した前方部をもつ前方後円墳と時期的に近接して築かれる場合が多いことである。

この、時期的に近接した築造状況から、帆立貝形古墳はいわば余分に築かれているとみることが出来る。笠岡系譜の場合を典型的な例と考えるが、双つ塚古墳と東塚古墳だけで順当な築造状況とみることが出来るし、高月、長船の系譜においても8期は築造が集中し編年表がいささか立て込んだ状況を示している。

先に示したようにきわめて規格的ながらその立面形において前方後円墳と大きな相違をもち、また、すべての場合において付近の前方後円墳よりも墳丘規模は小さい。畿内における基本的なあり方は巨大古墳の陪塚としてであり、吉備においても6期の一部と7期は同じ様相をもつ。主墳・前方後円墳に従属する陪塚という格付けを明示する墳形として帆立貝形古墳が定型化をとげていったとみてよければ、この墳形の首長墳への導入は低い格付けの付与であり、一種の規制とみることが出来る。しかしながら上記のように「余分」に、前方後円墳からなる首長墳の系譜のなかに築造されたものであるとするなら、それは規制としての側面はもつが緩和としてとらえることができる。8期以降中規模前方後円墳からなる系譜が各地域に出現し、巨

大古墳が単一の卓越を示す状況から中規模古墳の並列に変化するが、中小首長に広範に前方後円墳の築造が許容されるにあたってやや低い格付けを表示する墳形として帆立貝形古墳が導入され、新興の首長層、さらに首長の傍系親族などの墳形として用いられたと考える。また、その規格的な墳形からは単に前方後円墳よりも低いというだけでなく、新たな格付けとしての側面を与えられ、中小首長の編成に際して大きな役割を果たすことになるのではないか。帆立貝形古墳で新たな系譜が始まる真備系譜もそうした動きのなかに位置づけられると考える。

この7～8期の帆立貝形古墳に見られる墳形の定型化、ここに示した格付けの付与は吉備の内部において達成されたものでないことは明らかで、畿内において創出され導入されたものと考えられる。また、そうした性格であるがゆえに前方後円墳にかわって、あるいは新たな築造が許容される際に採用され、最終的に東北地方から九州に至る分布を示すことになると思われる。

一方、5期～6期の一部、定型化以前の様相はそれとは異なる。吉備では小盛山古墳があるが、5期の前方部が短い前方後円墳の例として伊賀の美旗古墳群・女良塚古墳がよく知られている。前方部の大きさに対する規制が広範になされ、それが制度的に整った形として定型的な帆立貝形古墳が成立すると考える。

## 6 おわりに

以上、吉備の資料を題材に帆立貝形古墳の検討を行った。5期から8期までそれぞれの時期ごとに微妙に性格の変化を示すが、つねに前方後円墳よりも一段下の格付けとして推移する。その出現期における形態は多様であり、前方部が短く低いものに規制されることによって成立したとみられる。以降、陪塚の規格として方墳にとってかわり、定式化する。そして一定の格付けとして広範に波及するという動きを見せる。

列島各地に分布する画一的とも言える形状・規模からは、前方後円墳の築造から除外されていた中小首長層が新たな格付けを与えられて編成された可能性が考えられる。

ここでは全国的な動態を整理・分析するに至らなかった。今後、ここに示した視点での検討を試みたい。

## 第12章 吉備地域における埴輪の普及とその画期

## 1 はじめに

吉備は埴輪の起源となった地域であり、第4章で述べたように古墳時代前期前半には特殊器台形埴輪が備前南部の首長墳で広く採用される。それ以降のこの地域において埴輪はどのような展開を示すのか、そして、使用の画期はいずれにあるのか、この問題について考えてみる。

以下では、どのクラスの古墳に埴輪が用いられるのか、特に小墳への埴輪の採用がどのようになされていくのか。そして、埴輪に畿内との関係がどのように表示されているか。こうした視点をもとに吉備地域の埴輪の使用状況を整理する。

現在、埴輪研究は編年作業に重点が置かれ、地域ごとに詳細な編年が積み立てられ古墳の編年に多大な貢献をなしているが、地域のなかでどのように定着し使用が広がっていくかについては論じられることは少ない。しかしこの問題は古墳祭式の格差がどのような意味をもち、また解消、消滅していくのか、さらに、小墳をどのように評価するかという問題につながる重要な研究課題と考える。ここで展開、解消といった言葉を用いたが、一般的な技術や道具とは異なる埴輪の場合、そうしたことが自然に生じたとは考えにくく、基本的には使用についての許容と理解され、それは古墳時代社会の変革を明瞭に示すと考える。

## 2 各時期の様相（図1）

## 前期（2・3期）

第4章で述べたように特殊器台形埴輪は特有の胎土をもち、比較的丁寧な製作がなされる。これ以後の埴輪資料で良好なものは少ないが、胎土や突帯形状などは大きく異なっており、基本的にはその生産体制ないし製作集団は特殊器台形埴輪のそれを引き継ぐものではなかった可能性が強い。ただし、津山市美和山1～3号墳では施文をもつ埴輪が出土しており、特殊器台形埴輪の影響を濃く残す場合もあったとみられる。

埴輪を使用する古墳の数は少ない。備前の該期の古墳、用木3号墳は全長39mの前方後円墳で葺石をもつが、埴輪は伴わない。これに前後する時期の武宮古墳（前方後円52）も埴輪はないとみられる。これに対して花光寺山古墳（前方後円97）では埴輪が配されている。これと同時期とみられる湊茶臼山古墳（前方後円120）では埴輪小片が採集されており埴輪の使用は確実であるが、資料の追加採集がきわめて困難であり、配列個体数は少なかった可能性が考えられる。

一方、備中の天望台古墳（前方後円53）では円筒埴輪と焼成前穿孔の土師器壺が採集されており、続いて築かれた三笠山古墳（前方後円63）も円筒埴輪を伴う。これらはいずれも前方後円墳であるが、これ以外に径25mの円墳・西山2号墳（山磨ほか1979）が埴輪を伴う。

以上のように、備前では大形の前方後円墳に、円墳では径41m新庄天神山古墳に伴うとすれば、これ以上の規模に埴輪が伴う。一方、備中では中形以上の前方後円墳に用いられる。また備中では下位の小円墳で使用される例が目されるが、これが一般的なあり方であったとは考えにくい。

なお、備中の小規模墳、西山1号墳（円24）で壺形埴輪が、殿山8号墳（方13）では壺形埴輪と形容することもできる土師器壺が並べて置かれており（平井1982）、それらが円筒埴輪に代わるものとして用いられたとみられる。ただしこうした例は少数で、通常10m前後の小墳では前期前半には壺・甕・高杯などの土師器が少量出土するものの、以降はそれらの使用も明確でないことが多い。

#### 中期前半(4・5期)

使用の基本的な階層関係は2・3期と同様である。

金蔵山古墳がこの時期最大の首長墳であり、全長162mを測る3段築成の大形前方後円墳である。後円部頂の2つの主体部をそれぞれ囲む埴輪列と方形の区画の存在で知られるが、そのほかに各段の平坦部に埴輪列を配し、墳端にも埴輪列を設ける。この古墳では円筒埴輪・朝顔形埴輪以外に豊富な形象埴輪が伴っており、家・蓋・盾・草摺などが知られる。このうち蓋は笠部の四方に肋木を表現する庵寺山タイプと津堂城山タイプ古相の2型式がある。また、鱗付円筒埴輪が出土しているが、この器種は吉備では本墳に知られるのみである。さらに、円筒埴輪では突帯貼り付け位置を均等に設定するための方形刺突が施されることが明らかになっている（宇垣2000）。この技法は近畿地方では一般的に用いられる技法であるが、吉備では本墳および本墳に関係をもつとみられる陣場山遺跡の出土資料に見られるのみである。

方形刺突技法および鱗付き円筒はいずれも近畿で出現・発展をとげる技法・器種であり、蓋形埴輪も畿内の型式に合致することからみて、金蔵山古墳の築造にあたって畿内から情報の伝播があったとみることができるが、その中には製作の技術を含むことからみて、単に情報の伝達となされたのではなく工人派遣あるいは技術の指導という形をとった可能性が強い。本墳の副葬品には鍬形石・碧玉製大刀柄頭・石製刀子といった、それまでの吉備に見られず畿内の巨大古墳に通有の石製品が含まれており、古墳の築造全般にわたる支援がなされ、その一部に埴輪製作が含まれていたとみても支障ないと考える。

なお、金蔵山古墳よりもやや先行し4期前半に位置づけられる鶴山丸山古墳（円81）では盾形埴輪が採集されており、武具形埴輪の吉備での初出になる可能性がある。埴輪の様相については明確でないが、三角縁神獸鏡を含む多量の鏡、碧玉製盤・盒子、滑石製埴・器台といった石製品など、類例の少ない副葬品を多量に保有する古墳であり、金蔵山古墳と同様、畿内政権からの支援があった可能性が考えられる。

金蔵山古墳、可能性の提示にとどまるが鶴山丸山古墳の資料からみて、吉備の埴輪の革新は大形墳の築造を契機に生じたとみられる。なお、金蔵山古墳の場合、後円部中央石室に後出する南石室に伴う蓋形埴輪は津堂城山タイプ新相に変化しており、畿内から埴輪に関する情報が継続して伝えられたとみられるが、受容した技術や型式が他の古墳の資料にも共通する、つまり地域内に波及するという状況は見られず、受容はその古墳に限ってというべきものであった

可能性が強い。

上記以外に埴輪を伴う例は、時期比定にやや不確実なものを含むが神宮寺山古墳（前方後円158）、牛窓天神山古墳（前方後円81）、尾上車山古墳（前方後円122）など大形の前方後円墳が該当するとみられる。中小墳では操山31号墳（方25）、同32号墳（方25）があるが、この2基は金蔵山古墳の陪塚とみられる古墳である。このほか旗振台古墳（方27）がこの時期とみられる。

### 中期中葉(6期)

巨大古墳・造山古墳の築造がなされる時期である。

造山古墳の形象埴輪は蓋・盾・靱・家が知られ、陪塚である造山4号墳からは甲冑形埴輪の良好な資料が出土している。造山古墳の蓋形埴輪は津堂城山タイプ新相に属するが、そのうちの一部は在地性がまったくうかがわれず畿内中枢の製品と強い共通性を示しており、畿内中枢との密接な人的交流が想定されている（松木1994）。また、円筒埴輪も口縁部端に帯状の突帯を配するものが認められる（野崎2000）。この形態の口縁部は古市古墳群等で通有の口縁部形態であり、蓋形埴輪とともに近畿から埴輪についての情報が具体的に伝達されたことを示す資料となる。

**埴輪棺** 造山古墳の築造に際して必要とされる埴輪の数は5100本とも言われるが（大本組ほか1989）、膨大な数の埴輪を必要としたであろうことはうたがいない。

造山古墳の築造時期には円筒埴輪棺を主体部とする小墳が数多く築かれる。甫崎天神山6号墳、前池内8号墳、道金山古墳、西山26号墳など確実な資料で7基9棺であるが、転用棺の場合は発掘調査によらなければ確認することができないため、本来はさらに多数であったとみてよい。

これらは造山古墳から半径4kmまでの範囲に散在する（図2）。甫崎天神山6号墳を例にあげれば、造山古墳の東に位置する丘陵の南東斜面、つまり造山古墳の反対側に築かれており、造山古墳から直線距離で1.0kmを測る。辺5mの小方墳で中央に大形の埴輪棺を設置するほか、周溝内にも2基の埴輪棺を埋葬していた。周溝内の埴輪棺は長さ56cmの小形品を用いたものであるが、中心埋葬に用いられた埴輪棺は長さ1.7mを測る大形品である。形態は大形の円筒埴輪と同一ではあるが、最上段に直弧文を簡略化した文様が刻まれており棺として用いること目的として製作されたとみてよい。この埴輪では小口の閉塞には蓋形埴輪の笠部が用いられていた（宇垣ほか1994）。また、小山ヶ谷古墳は径9mの小円墳である。上端にドーム状の蓋を作り付けた特製の円筒埴輪2本を用い、一方を他方に差し込んで棺とする（武田2004）。これら埴輪棺の被葬者は埴輪工人とみられるが、その数や分布状況からみて、造山古墳の周辺に埴輪工人が配されて埴輪を供給する体制が整えられ（野崎2000・2002）、造山古墳、そしておそらくは作山古墳や小造山古墳など後続する巨大古墳・大形墳の埴輪製作を行ったとみられる。

**小墳** この時期、造山古墳周辺では埴輪をもつ小墳が出現する。後池内古墳は径10mの小円墳で、周溝底におおむね2.5mの間隔で円筒埴輪を配置していた。埴輪は口径43cm前後の中形品で、設置時に高さをそろえるため基部を打ち欠いたものも見られ、本来この古墳に設置することを目的として製作されたのではなく、他で用いるものを転用して配置したかに思われる（葛原19

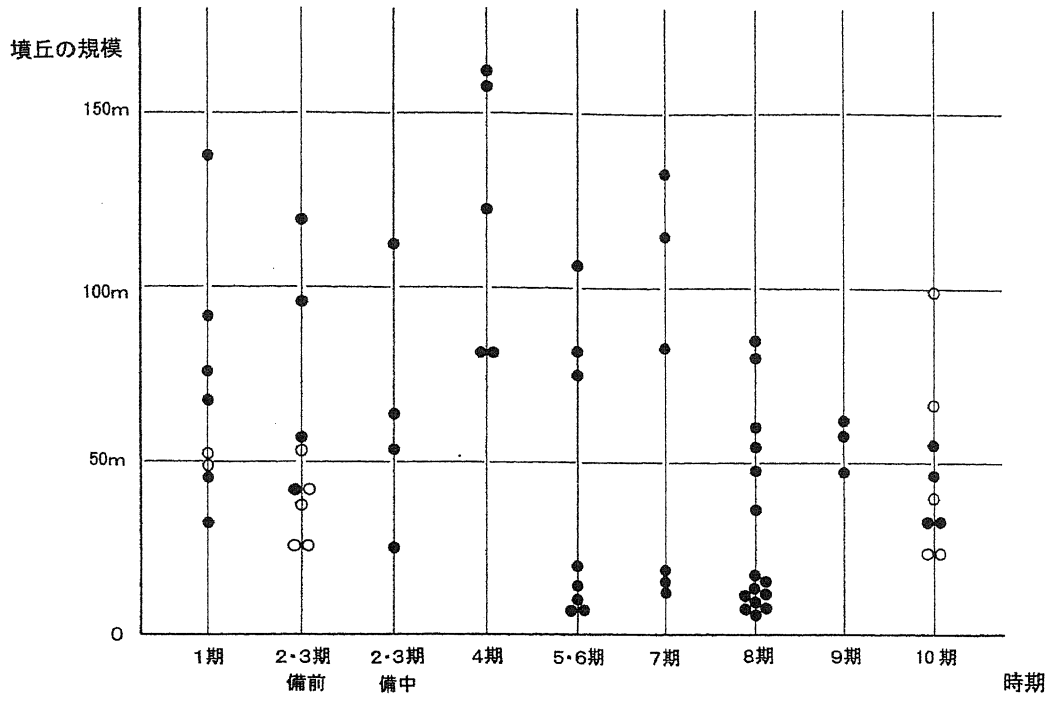


図1 埴輪使用古墳の時期別変化 ● 埴輪あり ○ 埴輪なし

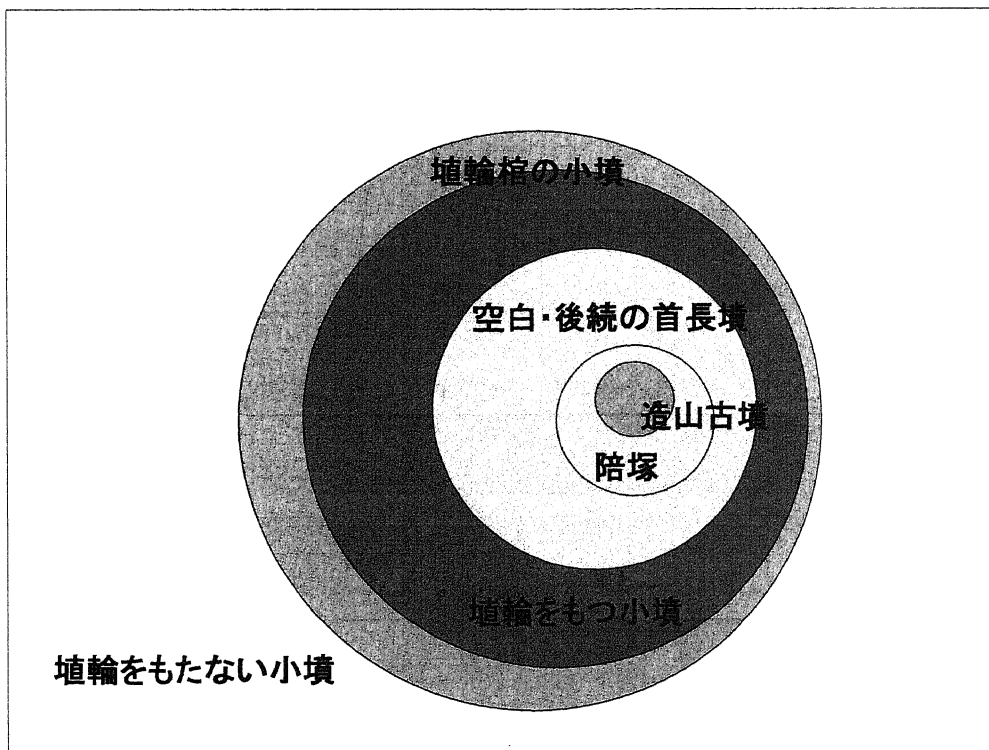


図2 造山古墳と周囲の古墳



94)。このほかに辺8mの小方墳である法蓮37号墳では墳頂に家形埴輪1個体が置かれていた。これに後続する同22号墳は7期の築造であるが、径11mの小円墳で円筒埴輪数個体が墳丘の平野側に配されていたとみられる(村上1985)。第7章で造山古墳群における古銅輝石安山岩の搬入と使用について述べ、造山古墳周辺の小墳においてもそれを使用する例があることを示したが、法蓮古墳群、また先にふれた甬崎天神山古墳群はその資料にも該当する。

埴輪を伴う小墳群である前池内古墳群や上記の後池内古墳は造山古墳から東1.0kmに位置し、法蓮古墳群は西1.0kmの位置にある。造山古墳をとりまく丘陵や尾根の先端には数多くの前半期小墳が築かれている。それらのうちどれほどが造山古墳と同時期あるいはやや遅れる時期であるのか不明ではあるものの、発掘調査の対象となった多くがこの時期であったことからすれば、さらに多くの小墳が同時期に築かれ埴輪を伴っている可能性は強いとみてよい。なお、これら小墳で葺石を伴うものはない。こうした埴輪を伴う小墳の築造は造山古墳周辺に限られており、同じ小墳であっても、たとえば造山古墳から8km離れた秦金子古墳群には埴輪は伴っていない。

つまり、造山古墳の周囲数kmの範囲に埴輪をもつ小墳が数基から多くても10基以内の小群をなして多数築かれているわけであるが、これらは造山古墳の造営にあたった、あるいは造山古墳被葬者の活動に関わった階層の墓が造営されたとみることが可能である。埴輪を伴う大規模な小墳群、大阪府長原古墳群は古市古墳群と強い関連をもつことが明らかになっており、大王の支配機構の一端を担った階層をその被葬者とみる理解があるが(桜井1987)(高橋2000)、造山古墳被葬者も下位の階層を直接に掌握・編成し、それらの造墓にあたって埴輪の使用を許容したと考えることができる。

これら以外に、6期の例として法伝山古墳(方40)がある。

一方、備前においては6期には前方後円墳の築造はきわめて低調で、前方後円墳は黒島古墳(80)が知られるにすぎない。砂川中流域・赤磐市南部では辺20mの方墳、岩田3号墳が築かれ、この地域ではこの古墳以降埴輪が継続的に用いられることになる。主体部は竪穴式石室であるが長さ1.9mと小規模である。墳丘はさほど大きくないが、2段築成で葺石を伴い、円筒埴輪と形象埴輪では短甲・靱か・草摺など武具形埴輪を伴う(神原1971)。円筒埴輪は造山古墳のそれによく似ており、胎土分析によらなければならないが備中からの搬入の可能性もあると考えている。

以上のように6期には造山古墳の築造を契機として埴輪生産の体制が設けられるが、その形成に際しては畿内中樞からの支援があったとみられる。これは吉備の埴輪生産の大きな画期をなし、備前の地域にも影響を与えるものであった可能性もある。造山古墳周辺では小墳への埴輪の使用がはじまり、それ以外の地域では、前方後円墳以外の墳形でしかも規模の小さな古墳で埴輪の使用が見られるようになる。

#### 中期後半(7期)

これに続く7期には備前・備中ともに埴輪の使用はきわめて活発になる。

備前の森山古墳(帆立貝82)、宿寺山古墳(前方後円116)を筆頭に埴輪が用いられるが、首長墳ばかりでなく、小墳での使用も多くなっていく。赤磐市南部を例にとれば宮山4号墳(方17)は葺石も伴い、四辻1号(円18)も葺石を伴う可能性が強く、埴輪と葺石というセットは

なお保持されるようである。

形象埴輪は蓋・家・楯・靱・短甲が知られるが、小墳では家以外の器種は出土していない。

#### 中期後葉(8期)

埴輪を伴う古墳は著しく増加する。備前では前内池1号墳(方14)、同4号墳(方11)、寺山7号墳(方10)、四辻5号(円15)、備中では雲山古墳群(方7前後)、小造山西古墳群(円・方4基7~10)などがある。10m前後、あるいはそれ以下の小墳で、円墳よりも方墳が卓越する。埴輪の配列が判明した例は少ないが、小造山西1号墳(円10)では墳丘斜面に2.2mの距離を置いて据えられた円筒埴輪が遺存しており、同古墳群の他の資料でも埴輪の出土量は少なく、かなり疎らな間隔で配置されていたとみられる。また、前内池古墳群は該期の小墳6基のうち2基に埴輪が伴う。そのうちの1基、4号墳では形象埴輪を含めて30個体程度が配置されていたと推定されており(蛭原ほか2003)配置の間隔はやはり広いものであったとみられる。

ただしこうした小墳であっても形象埴輪の種類は比較的多く、前内池1号墳には石見型埴輪・人物・馬、同4号墳では石見型埴輪・家、小造山西1号墳・3号墳には人物が伴う。

一方、中山6号墳は辺13.5mで、墳丘規模は上記と変わらないが墳端部に円筒埴輪を密に配しており、本来の配列個体数は154本であったと推定されている。墳頂部に家形埴輪が置かれていたとみられ、それ以外に馬・人物がある(椿1997)。

前方後円墳においては基本的に埴輪が用いられる。発掘調査が実施された事例として天狗山古墳、小山古墳がある。両墳とも葺石をもち、埴輪は密に配される。形象埴輪は小山古墳では明確でないが、天狗山古墳では蓋が伴う。また、美作の事例であるが十六夜山古墳(前方後円60)では蓋・盾・石見型、家?が伴うことが明らかになっている(尾上1998)。

以上のように、8期には埴輪はほぼすべての古墳に普及するといっても過言ではない。この時期以前は埴輪の存在そのものが首長墳と小墳を区分するものであったが、この段階においては格差の表示となるのは配列個体数、つまり密な埴輪列を設けるかどうかである。この評価の場合、先に示した中山6号は小墳でありながら埴輪を多量に配しており逸脱する資料となるが、主体部に竪穴式石室を採用し、多量のガラス小玉や鉄製農耕具を副葬するなど、この古墳は要素全体が通常の小墳と首長墳との中間的なあり方を示すやや特殊な例とみてよい。

埴輪列以外では葺石の有無が首長墳と小墳の相違点となる。第10章に示すように、葺石の設置は多大な労力を要するものであり古墳築造作業においても大きな比重をもつが、それを実施することが首長墳の優位と格式を示すものとして保持されたとみられる。なお、7期には宮山4号墳のようなやや規模の大きな小墳で葺石と埴輪を伴う例が見られたが、この期にはそうした例は認められない。

形象埴輪に関しては家・人物・動物は共通し、蓋・武具という威儀を表示する器種が首長墳に残るとみられる。なお、前内池4号墳では円筒埴輪の形状がよく把握されたが、それらには著しくひずんだものが多く認められる。一方、小山古墳の埴輪にはそこまでのもの見られず、個々の埴輪の質的な差も小墳と首長墳の間にあるとみてよい。

#### 後期(9・10期)

9期の小墳の調査事例は少なく埴輪の使用状況が明確でないが、これは小墳の築造が減少す

ることに起因する可能性がある。船山古墳（前方後円59）、廻り山古墳（前方後円47）など首長墳では埴輪の使用が続くが、葺石は設けられていない可能性が強い。

10期には前半を中心に可真丸山（前方後円33）、二万大塚（前方後円42）など首長墳で埴輪が用いられるが、斎富2号のようにそれを用いない小規模な前方後円墳も現れる。

10期後半には首長墳でも埴輪を用いるものとそうでないものが混在するようになる。大形の墳丘と巨大な石室をもつ首長墳においても、こうもり塚古墳（前方後円100）、鳥取上高塚古墳（前方後円67）には用いられず、二塚山古墳（前方後円55）で使用されるといったばらつきをもつ。また、鳥取上高塚古墳と同地域に所在し続いて築かれる弥上古墳（前方後円30）には埴輪があり、地域性や首長の階層差は考えにくい状況にある。

この段階で埴輪は首長墳の選択可能な構成要素の一つにすぎないという位置づけとなり、消滅をむかえることになる。

### 3 埴輪使用の画期

以上に示したように、埴輪は古墳時代前期から後期の間、首長墳の表象として一貫した性格をもつ一方で、大きく使用の様相を変化させる。

2期から5期までは上位の首長墳を表示するものとして推移する。6期には巨大古墳・造山古墳に大量に用いられる一方で、造山古墳周辺の小墳に埴輪の使用がはじまる。これは大首長に直属して編成された集団に埴輪の使用が許容されたものとみられ、埴輪使用の大きな変革として捉えることができる。さらに、6・7期には20m弱の方・円墳においても埴輪が用いられるようになる。造山古墳周辺の小墳の場合とは異なり、葺石を伴い他の小墳との格差を示してはいるが、埴輪が首長墳に限定されるという規範が失われたとみられる。そして、この動きの帰結として8期には小墳・古式群集墳への埴輪の採用という大きな変革が生じる。

この急激な下位の古墳への埴輪の波及、とりわけ8期の状況は、単に墓制の一要素が普及していったのではなく、埴輪の使用が広範に許容されたことを示すとみられる。墓制を通じて有力世帯の直接編成が図られ、それに際して埴輪の使用が許容されたとみるべきである。巨大古墳の築造が停止にむかうのと時期的に平行して急速に進行し、また、首長墳との境界があいまいなものになるという状況を招来するものであることからすれば、それは畿内政権に主導されたものと考えられるべきである。

寺前直人は摂津北部豊島地域において7期に埴輪を伴う小墳が増加することを指摘し、それは倭王権による地域首長の傍系世帯あるいは有力家長に対する新たな支配方式と考える（寺前2001）。つまり、吉備での変化は畿内のそれと軌を一にするものであるとみてよく、この小墳の築造と埴輪の使用という墓制を通じてなされた編成は、より広範なものであった可能性が強い。

こうした政治的な動きの結果、かつて埴輪が保持していた性格は著しく弱まり、埴輪使用の衰退、消滅を招くことにもなったとみられる。

## 第13章 後期古墳の様相

### 1 はじめに

古墳時代後期、吉備には備中こうもり塚古墳に代表される大形の墳丘と巨大な空間の横穴式石室をもつ首長墳が築かれ、同時に群集墳の築造が活発になされる。

これらについての研究も早くからなされており、第1章に述べたように近藤義郎氏の研究と評価は以降の研究の枠組みとなるものであった。これ以降も研究は継続してなされているが、その重点は横穴式石室の導入過程や石室の特性（亀山1999）（土井1999）、あるいは群単位での分析に主眼が置かれており（村上1980）、地域の後期古墳全体をいかに評価するかという作業は今井堯・近藤義郎両氏による石室規模と副葬品構成にもとづく階層関係の整理（今井・近藤1970）によって評価が定まったかに見え、議論されることは少ない。ここでは巨視的に吉備の後期古墳を概観し、その特性を抽出してみたい。

### 2 横穴式石室の規模と階層

図1は発掘調査によって石室規模が明らかになったものを中心に、岡山県下の横穴式石室の規模を表示したものである。縦軸には本来は石室最大幅を用いるべきであるが、奥壁幅しか判明していない資料が少なくないためこれを用いた。また、時期が明確でない資料を含むため、ここでは10期・11期Ⅰをあわせて表示している。このグラフから明らかなのは以下の5点である。1. 全長と玄室幅は相関関係をもつ。2. 最大の石室は全長19mである。3. 全長12m付近に境界があり、それよりも大きい石室はごく少数である。4. 12m以下の規模の石室は8m付近で区分できる。5. 幅1m程度の小規模な石室が大多数を占める。

まず2であるが、これに該当するのが備中こうもり塚古墳、箭田大塚古墳、牟佐大塚古墳であり、それぞれ19.4m、19.1m、19.1mという数値を示す。3者は近似した数値であることからみて、これが吉備における石室の最大の規模として扱われたと考える。なおこの長さは奈良県石舞台古墳の石室全長と等しく、政権中枢における石室の規格に関連している可能性がある。

3に示したように石室規模は12mで大きく区分できる。この12m級およびそれ以上の規模の石室の分布を示したのが図2である。備中南部・窪屋郡と備前南部・上道郡に集中が見られ、それ以外の地域では律令下の各郡に1～2基という分布を示している。12m級の石室はそれぞれの小地域で最大の石室であることからみて、この規模が各地域の首長の石室規模として用いられたと判断できる。

したがって、吉備の10期の首長墳の指標は前方後円墳という墳形と石室規模の2つであったことになる。備中こうもり塚古墳、鳥取上高塚古墳などはその両方を満たしており、前方後円墳が首長の政治的地位を表示するという機能をはたしたとみられるが、それ以下の墳丘規模で

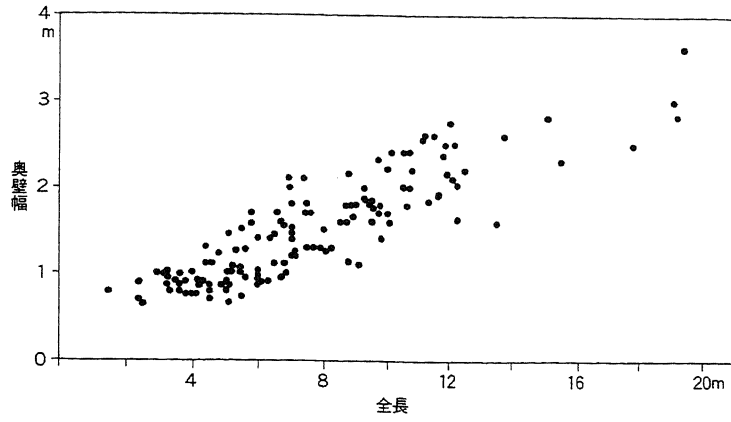


図1 石室規模の比較



図2 巨石墳・大形石室(11.5m以上)の分布

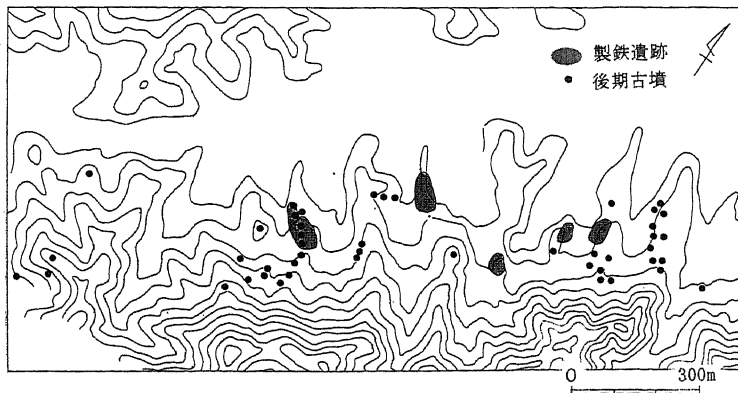


図3 総社市久代地区における製鉄遺跡と後期古墳

は大形円墳との差は僅少である。この時期の前方後円墳は築造数が少ないことからみて首長の格式の表象となり、地域を貫徹する階層の指標は墳形よりも石室規模であったとみられる。12m級の石室で発掘調査が実施された例として赤磐市岩田14号墳、津山市万燈山古墳、美作市川戸2号墳などがある。このうち岩田14号墳は径20mの円墳で石室全長11.8m、玄室長さ5.5m、奥壁幅2.4mを測り、推定308個体の須恵器、同45個体の土師器のほか、玉類、鉄刀・鉄鏃などの武器類、馬具2組などが副葬されていた。馬具のうち1組は鉄地金銅張で、武器には2点の単竜環頭大刀が含まれる。また、玉類のなかには雁木玉1点が含まれる。万燈山古墳は岡山県北部山間の盆地に所在する径24mの円墳で、石室全長12.1m、玄室長さ6.5m、奥壁幅2.1mを測る。副葬品には須恵器・土師器のほか鉄刀、鉄鏃、金銅装馬具、馬鈴などがあり、そのほかに鉄滓が出土している。

これら首長墳のあり方は多様で、万燈山古墳が単独墳として築かれるのに対し、川戸2号墳は4基からなる群集墳の中央部に築かれる。岩田14号墳は近接して他の後期古墳が所在するという立地ではないが、数100mの範囲に散漫に分布する後期古墳群の1基であり、群集墳のなかの1つという位置づけになる。したがって、立地や他の古墳との関係は多様であり、定まったあり方とはとらないといえることができる。

### 3 群集墳の形成

10・11期には小規模な横穴式石室を内部主体とする後期古墳、いわゆる群集墳が瀬戸内海島嶼部から中国山地山間部まで、この地域全域にわたって形成される。群集のあり方は多様で、2～3基からなる群を形成する場合、数十基が群在する場合などがあり、また、群をなさず1基が単独で築かれる場合もある。

群集墳の形成は小地域の各所に点的になされるのが一般的であるが、しばしば特異な形成状況を示すことがあり、群集墳のもつ性格をよく示すとみてよい。特徴的ないくつかの群集墳を概観してみる。

**旭川下流域平野における後期古墳** 旭川下流域に形成された沖積平野は古墳時代には東岸平野が東西4km、南北3km、西岸平野は東西2.5km、南北5kmの広がりを持ち、東西両平野の面積や集落遺跡の形成にさほどの差はない。

東岸平野には218基の後期古墳が築かれ、そのうち60基は石室の規模・形状から11期の築造とみられる。一方、西岸平野の築造数は極度に少なく63基で、そのうち41基は11期の築造とみられる。つまり、両平野における築造状況には大きな差があり、それは10期の築造数に起因するとみられる。この現象について、西岸平野では北西に隣接する小平野に墓域が設定されたとの理解（草原2004）もあるが、その地域に過度の築造状況が生じているわけではなく、築造数の偏りは別の要因にもとづくと考えたほうがよい。西岸平野では後期古墳の築造が許容されなかった、あるいは、西岸平野の集団の墓域は東岸平野に設定されたかであり、前者の可能性が強いと考える。この築造の偏在は、後期古墳群の形成が集団の自律的な意志に基づくものではなかったことをよく示す事例と判断する。

**製鉄遺跡との関わり** 岡山県総社市域には数多くの古墳時代製鉄遺跡と後期古墳が所在する。その一例、久代地区に所在する水島機械金属工業団地協同組合西団地内遺跡群は東西1.6km、南北400mの範囲に広がる遺跡群である（図3）。北にむかって下降する山麓に低い尾根がいくつも派生する地形であり、尾根上あるいは緩斜面には古墳が、尾根側面の斜面には製鉄遺跡が形成されている。製鉄遺跡は5遺跡を数え、検出された製鉄炉は62基、製炭窯16基と、発掘調査の実施された製鉄遺跡としては有数の規模である。

古墳は7つの古墳群からなり総数は現状保存がなされたものを含めて49基で、そのほぼ2/3、33基が調査された。これらのうち3基は中期の小墳で、他は後期古墳である。後期古墳のうち4基が9期の築造で箱式石棺から横穴式石室へ主体部が変化する状況がとらえられた。以降、10・11期に活発な築造がなされ、少数ながら7世紀後半に築かれるものもある。製鉄遺跡に近接あるいは重複して築かれるのは40基で、9基が群集する板井砂奥古墳群、数基ずつが散在する藤原古墳群などと、それぞれの古墳群のあり方は多様である。

製鉄遺跡は詳細な年代を確定することが困難であるため、古墳群と製鉄遺跡の時間的関係を把握することはむずかしいが、製炭窯が古墳によって破壊された例があり、また8世紀の須恵器を出土した製鉄遺跡もあることからみて、7世紀に両者はこの地域内に併存していることは確実である。製鉄遺跡によって破壊された古墳はないため、製鉄で利用した土地を利用して古墳が築かれていった可能性が強い。

こうした製鉄遺跡とそれに近接あるいはほぼ重複して後期古墳が所在する状況はこの遺跡群に限ったことではなく、同じ総社市の千引カナクロ谷遺跡と千引古墳群、また、古墳がやや離れるが、津山市緑山遺跡と緑山A1号墳、岡山市津高地区に所在する猪坂南遺跡と佐良池古墳群もこうした事例とみることができる。なお、後期古墳にしばしば見られる鉄滓の出土は、ここに示した製鉄にかかわるとみられる古墳において顕著に認められるが、第5節に述べるように、いったんは鉄生産と切り離して考えるべきことがらと判断している。

**須恵器生産** 備前南部で密集した築造状況を示す群集墳として知られるものに亀ヶ原古墳群がある。南北500m、東西200mの範囲に34基の古墳が築かれている。そのうちの2基、金鶏塚古墳と亀ヶ原大塚古墳は前方後円墳で、前者が全長35m、後者が40mを測る。他は径10m前後の円墳で横穴式石室をもつ。金鶏塚古墳が9期の築造でこの古墳群形成のはじまりとなり、10期に亀ヶ原大塚古墳が築かれさらに11期にかけて群集墳の形成をむかえるとみられる。10・11期にはこの古墳群の周辺に数多くの須恵器窯が築かれており、古墳群の間にも2基の須恵器窯跡の所在が知られる。

**塩生産** 手工業生産と関連する古墳群として喜兵衛島の製塩遺跡と古墳群がある。よく知られるように喜兵衛島は瀬戸内海の備讃瀬戸に所在する差し渡し600mの小島である。海岸部には古墳時代後期の製塩遺跡が形成されており、島内には後期古墳15基が築かれている。古墳の築造は9期から11期にわたるが築造の盛期は10期であり、土器製塩が最も盛んになされる時期と重複する。古墳群の築造要因として製塩を考えるほかはない。同様な事例は備讃瀬戸島嶼部、牛窓湾などにも見られる。

**交通** 河川交通とのかかわりがかねてから指摘されてきたのは岡山市林原古墳群である。旭川

中流が山間を通過する箇所であるため河岸の両側は急斜面となっており、平地は河川の屈曲部に形成されるにすぎない。林原古墳群は屈曲部に形成された幅300m長さ250mの舌状の平地に所在する古墳群で、7基の後期古墳からなる。可耕地がきわめて僅少であるにもかかわらず、石室規模は通常のものと同色なく、最大の石室は全長7m以上、玄室幅1.8mを測る。これと同様の立地をとるものに、吉井川中流域の小平野に所在する和気町苦木上古墳、同西の窪古墳などがある。

#### 4 群集墳形成の特色

以上、後期古墳の築造状況をおもに生業との関わりから概観した。交通あるいは流通に関しては推定にとどまらざるをえないものが多いが、鉄・塩・須恵器といった特殊な技術に関わる集団によって群集墳の顕著な築造がなされることは確実である。農業のみを基盤とする地域の事例として、赤磐市中部の旧赤坂町域を例にとれば東西6km、南北8km、総面積43平方kmに後期古墳50基という分布であり、例示した「西団地内」の後期古墳46基、亀ヶ原古墳群34基という数がきわめて大きなものであることがあきらかである。

こうしたあり方からみて、後期古墳、とりわけ群集墳の形成はそれぞれの集団の自律的な意志にもとづくものではなく、外的な要因にもとづくと考えてよい。専門化の程度は明確でないとしても、生業のなかに特殊な技術を伴う生産活動を置く手工業集団の成立自体が、外部からの編成によるものであったらうことは想像に難くない。そうして形成された集団の社会的位地を表示する墓制として横穴式石室墳の築造が許容されたみられる。また、旭川下流域平野の事例は、築造が許容されるばかりではなく制限されることあったことを示しており、地域集団の分断・差別化の手段としても用いられたと考える。この墓制を通じた地域集団の編成は、畿内政権による直接的な地域支配の形とみてよい。

よく知られるように横穴式石室墳には須恵器・土師器といった食器類、耳環・玉類などの装身具以外に武器・武具が副葬されることが多い。武器は大刀・鉄鏃を基本とし、武具は馬具類からなるが、後者は規模が大きく上位とみられる石室に伴うことが多い。武器・武具の副葬は10期に顕著であり、11期にはほぼ見られなくなるが鉄鏃数点程度が副葬される場合もある。副葬される鉄鏃は平根鏃を中心とし尖根鏃の比率は低く、常用の矢一式ではなく矢を選択して儀礼的に副葬したとみられるが、10期における大刀の普遍的ともいえる副葬からは横穴式石室を通じてなされた集団の編成は軍事編成の形をもって進められたことを示している。

なお、ここに示した資料のうち亀ヶ原古墳群は群集密度が高いのに対し、「西団地内」の古墳群はやや散漫な配置を見せ、さらに旭川下流域東岸平野の操山古墳群では大きな丘陵上に古墳群が形成されるため、強い密集を示す箇所もあるが丘陵全体として見れば密度は高くない。後期古墳のあり方は多様であるが、大きくは密集型と散在型に区分可能である。前者の例として総社市三因千塚古墳群が著名であり、他に岡山市竜ノ口山頂古墳群、赤磐市八つ塚古墳群などがある。後者の例としては赤磐市岩田古墳群があり、後者が一般的とみられる。前者は墓域の指定がなされ、後者は位置の指定まではなされなかった可能性がある。



## 5 後期古墳出土の鉄滓の評価

古墳出土の鉄滓については早くから注意がはらわれ、また、年代が確実な資料として製鉄に関する研究においても重視されてきた。これまでのところ、鉄滓を伴う古墳については被葬者が製鉄に関わっていたことを示すとする意見が一般的であり（安川1992）（杉山1992）、吉備における鉄生産の隆盛を物語る資料として取り扱われているが、その評価は見直す必要がある。

鉄滓を出土した古墳の数は1982年の集いで35基（大澤1982）、1994年で96基に達している。これらのなかには総社市千引古墳群（武田1991）や同じく総社市久代地区の水島機械金属工業団地内の古墳群（村上幸雄1991）のように製鉄遺跡に近接して所在するものもあるが、総社市緑山17号墳や岡山市甫崎天神山8号墳など付近に製鉄遺跡の所在が確認されていない地域の古墳においても出土が判明してきた。

後期古墳における鉄滓のあり方としては土器内に鉄滓が入れられていた椋山古墳群のコウデン2号墳（村上1980）のような例もあるが、そうしたものは少数で、基本的に石室入り口付近ないし周溝から出土している。山麓部に築かれることの多い後期古墳にあつては、これらの部分は最も削平や流出を受けやすく、最も遺存しにくい遺物の一つとみられる。また、1970年代前半以前の発掘調査では石室内の調査が中心で、周溝内の調査が十分に行われていないものも多いため、それらの資料は鉄滓の有無については不明確とせざるをえない。

したがって、保存状態の良好な後期古墳を全面的に発掘調査した場合、数基に1基の割合で鉄滓が出土するとみてよく、鉄滓をもつ古墳の数は膨大なものとなろう。ちなみに、山陽自動車道の建設に伴って浅口市から岡山市東部までの間で28基の横穴式石室墳の発掘調査が実施された。そのうち鉄滓が出土したのは9基、小鉄塊が出土したのが1基である。鉄滓が出土しなかった古墳のうち岡山市前池内古墳群や松尾古墳群などは多くが畑の造成によって石室の前半を削り取られているため不明データとして除外するなら、出土の確率は約1/2となる。

また、上記のように鉄滓は他の副葬品とは全く別に取り扱われており、被葬者の職能、鉄生産を示すものとして説明するのはむずかしい。さらに、川戸2号墳、備中こうもり塚古墳、万燈山古墳などの首長墓からの出土が明らかになっている。これらの首長は当然それぞれの地域における鉄生産を掌握していたであろうことは疑いないが、直接製鉄に携わった可能性はないとみてよい。それにもかかわらず鉄滓が供献されていることについて、これまでの論では十分な説明が困難である。

そのほか、古墳出土鉄滓と近接して所在する製鉄遺跡の鉄滓の成分分析がある。津山市緑山A1号墳と緑山製鉄遺跡の例では分析値は近似した値を示したが（中山1986）、久米町椋山古墳群と大蔵池南製鉄遺跡では直接的な結びつきは確定できず（森田1982）、総社市板井砂奥古墳群他と沖田奥製鉄遺跡他との分析では古墳群出土の鉄滓は他からの搬入された可能性が考えられている（村上ほか1991）。つまり、至近の距離で製鉄が実施されていても供献された鉄滓は別のところからもたらされることがあったようであり、短絡的に鉄滓の供献された古墳の被葬者が製鉄に関係していたと考えることは適当ではない。

これらの点をふまえれば、吉備においては少なくとも古墳時代後期には古墳への鉄滓の供献は一般的になされていたことと考えられ、それは被葬者の職能を表示するものではなく、大甕等を用いて行われる石室入り口付近での祭祀のなかで用いられる器物であったと思われる。鉄滓に呪的な意義を見出した祭祀は鍛冶集団の祭祀に起源をもつとみられるが、それが古墳祭祀の一角に組み込まれ、さらに横穴式石室墳における祭祀の一部として吉備全域に拡大していったものと思われる。なお、このことは鉄滓の入手が容易であってばじめて可能となるものであり、鉄滓供献古墳の多さは間接的に吉備における鉄生産の隆盛を物語るものと言えよう。

## 註

- 1) TK217型式併行期。前方後円墳消滅後の古墳時代後期で、おおむね7世紀前半。

## 終章 古墳時代政治構造の変遷

吉備の古墳の様相、すなわち墳墓に表示された首長間の関係、また、首長と共同体一般成員の関係はいくつかの画期をもちながら変遷をとげる。以下ではこれまで述べたことがらにもとづいて吉備の古墳時代を概観し、まとめとする。

### 1 前方後円墳の出現

弥生時代後期に吉備で成立・発展をとげた特殊器台が埴輪の祖形となったのはよく知られるところである。また、楯築墳丘墓がその代表となるが、大規模な墳丘と顕著な墳丘外表施設をもち、特殊器台をはじめとする土器類と弧帯石以下の器材を伴う弥生墳丘墓が弥生時代後期後半に築造されており、吉備地域は前方後円墳の成立に際して葬送の思想や儀礼の祖形を提供し、前方後円墳の創出に大きな役割をになったと推定される。しかしながら、弥生時代の墳丘墓から前期古墳への変化を跡づける資料は必ずしも多くはない。

吉備における最古の前方後円墳は矢藤治山古墳である。墳長35.5mの小規模な前方後円墳で、宮山型に併行する時期の特殊器台を伴う。後円部中央に設けられた竪穴式石槨は北頭位をとるが長さ2.7mと短く、付近で産出する塊状の角礫を用い、蓋は木製と推定されている。副葬品は鏡・勾玉・小玉である。鏡は径16.4cmの方格規矩鏡であるが、破砕されており、主要な破片は被葬者頭部の横に置かれ数片が棺内に散在した状態で出土した。勾玉も割って副葬されており、小玉は棺内に散在した状態で出土した。墳丘斜面には葺石が設けられ墳形を明示する。なお、前方部に埋葬施設が設けられていることが明らかになっている。

先行する弥生時代の墳丘墓、たとえば楯築墳丘墓を例にとれば、中心主体の埋葬頭位は東南方向であり、円丘部の斜面下半および墳端には明瞭な区画の施設は設けられず、また、円丘部の形状は正円というよりもやや紡錘形になる。副葬品は鉄剣、勾玉・管玉、小玉である。埋葬施設に関しては楯築墳丘墓では木槨であるが、黒宮墳丘墓、金敷寺裏山墳丘墓など後期後半の弥生墳丘墓の石槨の長さは2.2～2.7mである。矢藤治山古墳と弥生墳丘墓を比較した場合、相違点は埋葬頭位（北頭位）、幾何学的に整った墳形とその明示であり、一方、埋葬施設の規模・構造は後続する前期古墳よりもむしろ弥生墳丘墓のそれに近い。したがって、前方後円墳成立の最初の段階には墳丘に関する情報がまず伝達され、その後に埋葬施設や副葬品についての規範・約束事が入ったとみられる。

副葬品の構成については鏡が加わる点で弥生墳丘墓とは異なるが、破壊して副葬する点で後の前期古墳とも相違を示す。破壊副葬は鑄物師谷2号墓、みそのお42号墓、同44号墓などの諸例から弥生時代末期に出現し盛行する副葬品の取り扱い方である。この副葬のあり方は古墳時代前期の首長墳の儀礼には継承されないが、前期の小墳である岡山市浅川3号墳では鉄剣を曲げて副葬しており、小墳の儀礼には残存するとみてよい。

## 2 前期古墳の諸要素と階層

### (1) 前期古墳の諸要素

矢藤治山古墳からさほど時期をおかず定型的な前方後円墳・前方後方墳の築造が開始される。

この時期の主要古墳は備前南部に集中する。その筆頭となるのは全長138mの浦間茶臼山古墳であり、以下、網浜茶臼山古墳（92m）、操山109号墳（76）、備前車塚古墳（48）、七つぐろ1号墳（45）、都月坂1号墳（33）などが旭川下流域平野に面した丘陵上に築かれ、片山古墳（51）、津倉古墳（39）も同時期とみられる。これらにはいくつかの共通項と格差が表示されており、そこに前期前半の首長間関係を見ることができる。

**墳丘規模と墳形** 第1の共通項は墳形で、中小規模墳では地形による形状の変更や施工時の誤差があるようで比較がむずかしい例もあるが、奈良県箸墓古墳と同形の墳丘形態を採用する。また、箸墓古墳の全長の1/6である47mを境に、それ以下が前方後方墳、それよりも上が前方後円墳となる。墳丘規模と墳形が対応し、前方後方墳が下位に位置づけられ墳形によって首長間の関係を表示する。

**埋葬頭位** 埋葬施設には全長4～7mの竪穴式石槨が採用され、北頭位をとる。一方、この時期の小墳の埋葬頭位は東を基本としており小墳と首長墳とで大きな差異を見せる。ただし、墳長25mの前方後方墳・七つぐろ5号墳、また、地域は備中南部になるが27mの前方後方墳・南坂8号墳は埋葬頭位を東にとっており、前方後円・後方墳のうち最も下位に位置するものは小墳と同じ属性をもつ。

**石槨石材** 39m以上の墳丘規模の古墳では石槨の構築用材として瀬戸内海の豊島から搬入された古銅輝石安山岩が用いられる。この石材は火山岩で節理が発達し扁平な板状をなすため、整った壁面を形成することができ、曲面の構築も容易であるなど用材としてすぐれるが、それ以上に、遠隔地からもたらされた地域内にはない特別な石という稀少性をもつものでもある。

畿内、さらに山陽を含めた各地の前期古墳では基本的に安山岩、玄武岩などの板状石材が用いられており、板状石材を用いることが前期古墳の竪穴式石槨の規範となっていたとみられるが、多くの場合産出地が限定されるため、遠隔地からの搬入がなされることが少なくない。海を渡り石材の搬入をおこなう吉備の前期古墳はその典型的な事例であるが、特殊な石材を使用することによって下位の古墳との差を明示することになり、また、同じ石材を用いることで首長間の紐帯・並列的關係を表示したとみられる。石材の搬入はそれぞれの首長によって個別になされたとは考えにくく、首長間の共同作業あるいは最も上位の首長が搬入し分与したと推定される。

**特殊器台形埴輪** 4番目の共通項として特殊器台形埴輪の使用がある。この地域の首長墳に共通し、最大の浦間茶臼山古墳から最小の都月坂1号墳まで使用されるが、墳丘規模の階層関係の中ほどに位置する備前車塚古墳には用いられない。特殊器台形埴輪には特殊器台の伝統を引く弧帯文が刻まれるが、その文様の共通性や胎土の特徴からみて、古墳の築造に際して個別に製作されるのではなく、備前、備中それぞれ1つ程度の集団によって製作され、各古墳に配布

されたとみられる。

前期における首長墳の様相を述べるにあたって、まず備前南部・旭川下流域の首長墳を取り上げた。墳丘の大小とそれに応じた前方後円・後方という墳形の相違によって上下の関係を明示する一方、石槨石材や特殊器台形埴輪の使用状況からは首長墳がきわめて等質的な側面をもつと言える。

## (2) 首長墳の築造状況

ここに示した七つぐろ1号墳や備前車塚古墳など旭川下流平野の首長墳は平野に面した丘陵上あるいは尾根の先端に築かれており、東西9km、南北7.5kmの範囲に1期から2期にかけて9基の前方後円墳・後方墳が築かれることになる。墳形以外に時期判断の手がかりがなく詳細な時期を確定できないものを含みはするが、1期における築造数が単純にこの数の半分になるとは見なしがたい。操山109号墳とそれに後続し近接して築かれた網浜茶臼山古墳は、型式差はあるがともに特殊器台形埴輪を伴っており1期の築造である。また、七つぐろ1号墳と都月坂1号墳も尾根は異なるものの600mという近接した位置に築かれており、1期のなかできわめて活発な築造がなされたことが明らかである。3期以降は前方後円墳の築造数が急減し前方後方墳は築かれなくなり、その結果、4期には首長墳は多くみても3基、おそらく1系譜に減少する。

こうした1・2期における築造数の多さはこの地域に限った現象ではなく、山陽地域東部および四国東部における前期古墳の大きな特性である。播磨では全長104mの丁瓢塚古墳が最大規模墳となるが、備前南部の場合のような墳丘規模の階層は構成せず、60m級数基を含むが大多数を占めるのは吉島古墳、竜子三ツ塚古墳など30m級の小形墳で、それらが並列的に築かれる。築造数は1期のみで18基にのぼり、この築造状況は揖保川流域など播磨西半部で顕著である（岸本2004）。

播磨・備前とは瀬戸内海を隔てて対岸にあたる讃岐もまた前期古墳は1・2期には40基と築造数が多く、また、その大部分が小規模な前方後円墳であり築造数は3期以降急激な減少を示している。

1・2期における前方後円墳の築造数は備中が15基、備後3基という数であり、中規模の円墳を含めたとしても瀬戸内海東部沿岸地域の播磨、備中の一部および備前、讃岐の3地域の築造数は突出したものであることが明らかである。前方後円墳の築造状況について全国的な整理をおこなった大久保徹也はここに述べた山陽地方東部および四国東部地域におけるの前期前半の前方後円墳の築造数の多さを指摘し、「埋葬祭式をつうじて政治的地位を表現する、という方法は共有しているものの、諸エリアが各自の政治状況に応じて、個別的に表示体系の構築を志向したことを示す」と評価する（大久保2004）。つまり、他地域にくらべて「相当に広範な層」が前方後円墳の築造をおこなったためこうした築造数の多さをもたらすことになったとする。

前期古墳の築造主体については、吉備の場合、弥生墳丘墓の分布密度を参考とすることができる。旭川中流域に形成された盆地、岡山市御津町では盆地北部に1期に前方後方墳<sup>オビ</sup>菅2号墳（44）が築かれるが、この古墳は隣接する尾根に継続して形成された弥生時代後期前葉から古墳時代初頭にかけての弥生墳丘墓・古墳群、みそのお遺跡の造営主体そのものが、あるいは、

みそのお遺跡の形成が終了にさしかかる時期ではあるものの造墓活動がなお終了していないとすれば、造営主体の一部が墓域を移動して前方後円墳の築造をおこなったとみることができる。

また、古墳時代前期には前方後円墳の築造が活発でないため対応関係を検討することはむずかしいが、弥生墳丘墓の分布状況がある程度把握できている備中南部、足守川下流域平野の状況が参考になる。ここでは、たとえば特殊器台第1型式立坂型・楯築型の段階では1.6kmを隔てて楯築、雲山鳥打2・3号、甫崎天神山と3遺跡3基以上の弥生墳丘墓が築かれる。このうち楯築墳丘墓は卓越した墳丘規模や埋葬施設をもち「王墓」と呼んでさしつかえない存在であるため他と同列に扱うことはできないが、これらの築造密度からみて、造墓主体がもつ領域はそれほど広範なものではなく、大規模な集落遺跡に対応するものであった可能性が強い。そして、先に見た旭川流域平野の前期における前方後円墳の築造数の多さは、弥生墳丘墓の造営主体を個々の集落を統括する首長とみなすなら、それらが古墳時代の開始とともに前方後円・後方墳の築造主体に転化した可能性を考えることができる。

**三角縁神獸鏡の分布** 七つぐろ1号墳中心主体の副葬鏡は方格規矩鏡・き鳳鏡である。この資料も過去の盗掘や攪乱を経た後に残存した遺物であり副葬された鏡群の全体像を知ることはむずかしく、浦間茶臼山古墳も副葬鏡の本来の構成は不明と言わざるをえない。しかしながら同じ備前の資料、吉原6号墳の鏡の構成は上方作獸帯鏡・方格規矩鏡であり、やや時期が下るが用木1号墳の副葬鏡は尚方作獸帯鏡であることからすれば、三角縁神獸鏡の副葬は普遍的なものではなく、11面の三角縁神獸鏡をもつ備前車塚古墳は特異な事例と推定される。

山陽地域において舶載三角縁神獸鏡出土古墳は播磨8基16面、備前4基16面、美作2基2面、備中1基1面、備後3基3面、安芸1基1面、周防2基5面である。この数字は現在把握できている数であって副葬の実数ではないことはいままでの間もないが、筑前の15基18面と比較した場合、播磨と備前以外の地域は面数・出土古墳ともかなり小さい数となる。播磨の場合は権現山51号墳の5面、吉島古墳4面が総数を大きくしているが、出土古墳数も多く畿内や北部九州の様相に近い。それに対して備前16面は備前車塚古墳の11面、鶴山丸山古墳からは4面が出土している可能性が強く、この2基が面数を押し上げていることになり出土古墳の数は少ない。

以上のように三角縁神獸鏡の分布は総じて希薄である一方、一部の古墳に偏在すると言える。三角縁神獸鏡の製作地についての議論は措くとしても、分布の中心は畿内であり、これが畿内と地方の関係を示すと考えてよい。吉備では畿内との関わりが北部九州の首長層にくらべて弱く、地域内の一部の首長が関係を取り結んだとみることができよう。

### (3) 山陽東部における前期古墳築造の特性

以上に示したように前期前半(1～2期)における前方後円墳築造状況は、吉備とそれよりも西の地域で大きな差をもつ。吉備における前方後円・後方墳の多数築造は、首長層全体の墓制として前方後円墳が導入され、おしなべて築造がなされることになったと理解される。備前においては首長間の上下の階層関係を表示するが、それ以上に要素の共有という側面が強く、差別化よりもむしろ首長間の横の関係・紐帯を表示する墓制として普及したとみられる。前方後円墳という墓制をほぼ完全に受容している点において箸墓古墳を頂点とする前方後円墳体制に参画したとみることができるが、三角縁神獸鏡の受容状態からみて、畿内と直接関係を結ん

だ首長はそのなかの一部であったとみられる。

前方後円墳のもつ政治性は畿内と吉備では相違をもち、瀬戸内海沿岸東半地域においてはまず第1に首長層に用いられる上位の墳形として広がったのに対し、畿内においては大和の巨大古墳を頂点に墳丘規模とそれに付随する諸要素によって首長間の階層関係を表示するという強い政治性を備えていたとみることができる。前方後円墳は集団の一般成員の墓とは異なる儀礼と内容をもった首長層の墓制という性格を基層にもち、その上に首長間関係を表示するという性格が重層するものであり、前者と後者が完全には重ならない形で波及していったためこうした差違を生じたと考える。この両者は前方後円墳のもつ政治性の2つの側面であり、前方後円墳成立期には受容する地域によってばらつきを生じたとみられる。畿内との関係は三角縁神獣鏡をもつ一部の前方後円墳・後方墳、そして、おそらくは浦間茶臼山古墳、播磨の丁瓢塚古墳など地域の頂点にたつ古墳の被葬者が取り結んでいたとみるべきであろう。

### 3 首長墳の減少と大形墳の築造（3・4期）

1期に見られた前方後円・後方墳が多数築造され、首長間の紐帯を表示するという備前・播磨の様相は2期のなかで解消にむかい、3期、4期を通じてそれはさらに進行する。そのため前方後円墳の築造数は大きく減少するが墳丘規模は逆に大形化する。

この時期の大形墳として、3期には備前では湊茶臼山古墳（120）、4期には備前に神宮寺山古墳（158）、金蔵山古墳（162）がある。

金蔵山古墳はこの時期の中四国・九州で最大の墳丘規模を有し、主体部をとりまく方形区画をもつ。注目されるのは埴輪の様相で、それまで山陽地方で用いられていなかった鱗付き埴輪が用いられ、円筒埴輪にはやはりそれまでなされなかった突帯貼り付け位置に方形刺突を施す技法が用いられる。また、副葬品には鍬形石や碧玉製大刀環頭が含まれる。こうした諸要素、とりわけ埴輪の技法から、この古墳の築造において畿内政権の関与・技術指導があったことを知ることができ、4期の前方後円墳のうち大首長墳の築造に関しては、畿内政権の関与があったとみてよい。

2期から続く前方後円墳築造数の減少、首長系譜の途絶は首長系譜の淘汰と理解されることが多いが、むしろ前方後円墳の採用・築造が有力首長や大首長に限定されていったためであり、一般の首長層はおもに円墳や方墳に変わると推定される。

### 4 巨大古墳の築造（5～7期）

#### (1) 築造状況

4期の金蔵山古墳に続いて大形前方後円墳、巨大古墳の築造がなされる。墳長100m以上を中心に山陽地方の主要な古墳を示せば、5期に壇場山古墳（播磨・145）、玉丘古墳（播磨・109）、行者塚古墳（播磨・109）、小盛山古墳（備中・105）、白鳥古墳（周防・120）、6期には造山古墳（備中・350）、小造山古墳（備中・133）、佐古田堂山古墳（備中・148）、三ツ城

古墳（安芸・92）、7期に作山古墳（備中・286）、宿寺山古墳（備中・114）、両宮山古墳（備前・206）などがあり、12基のうち6基が備中に集中する。造山古墳、作山古墳、両宮山古墳の3基は墳長200mを超える巨大古墳であり、備中南部の卓越は明瞭である。そして、また、6・7期に築造の盛期をむかえる点も、他の地方と異なり畿内と同様である。

築造状況を広範に見渡した場合、中期前半(5期)に大形の前方後円墳を築造して以後中期の間は前方後円墳の築造が途絶える地域と、逆にその時期から築造が活発化する地域とに区分できる。播磨中西部においては壇場山古墳、周防では白鳥古墳という大形古墳の築造をもって前方後円墳の継続的な築造は停止する。備前では後に巨大古墳・両宮山古墳の築造がなされる点で上記の地域とは異なるが、金蔵山古墳の築造をもって前期以来形成されてきた旭川下流域の首長系譜が終わっており、この事象を重視すれば備前もおおむね播磨や周防と同様な動きを示すと言える。これに対して5期以降大形前方後円墳を継続して築き、そのなかには大王墳にも比肩する規模の巨大古墳が含まれる備中南部はきわめて特異である。また、備前のうち東南部の牛窓湾沿岸では4期の牛窓天神山古墳にはじまる系譜が出現し後期まで継続して前方後円墳が築かれる。

## (2) 周濠・陪塚の受容の多様性

山陽地方において東部の播磨（壇場山古墳）と西部の周防（白鳥古墳）は5期に畿内と同じ周濠形状・陪塚配置が導入されており、とりわけ播磨の例は違うところがない。畿内の巨大古墳の要素を十分に取り入れていることからみて、その築造に際しては畿内政権の関与・支援を考慮することができる。

それに対して、吉備においては周濠・陪塚配置の「畿内化」、畿内的な古墳景観への転換が大きく遅れ、周濠の導入は5期ないし6期、さらに完周する周濠の構築は7期となる。また、陪塚のそのものの築造は4期の金蔵山古墳にさかのぼるとみられるが以後の古墳には継続せず、6期の造山古墳で再度導入されるものの、続く作山古墳では再度設けられないなど必ずしも普遍化しない。陪塚の企画的な配置はさらに遅れて7期のなかでも新しい段階の両宮山古墳において受容される。両宮山古墳においては二重周濠の採用もなされ「畿内化」が達成されることになる。

造山古墳は墳形の特徴から石津丘古墳の築造規格が用いられたと推定されており、また、蓋形埴輪の検討から埴輪製作には畿内の埴輪工人の指導・関与があったと考えられている(松木1994)。こうした事象からは築造に際して畿内政権の関わりがあったとみられるが、一方で、周濠や陪塚に関しては先に述べた相違をもつ。このことから畿内の古墳の諸要素が選択して導入されたと理解することができるが、吉備において古墳の立地や築造に関する独自の思想が形成・保持されていたことが、その背景にあると考える。吉備において墓は、弥生時代後期以降つねに山頂・丘陵上に築かれており、山が墓を設け死者を祀るべき空間と観念されていた可能性が強く、そのため巨大古墳・大形古墳の築造にあたって山丘の利用を強く指向した可能性が強い。この吉備における古墳立地の原理・思想は周濠の設置や陪塚の企画的な配置を著しく困難になものとするようになるが、逆に言えばそれらは山丘を用いての築造を行うことほどには重視されなかったことになる。



両宮山古墳の段階でこの吉備の独自性はほぼ払拭され、7期後半から8期にかけて周濠は急速に普遍化する。そして鹿歩山古墳、天狗山古墳のように山頂に立地する場合でも完周する周濠が設けられることになる。

## 5 古墳諸要素の変革（8～9期）

7期後半から8期には古墳の様相は大きな転換をとげる。7期をもって巨大古墳の築造は終了し、これと交代するように各地域で首長墳の築造が活発化する。造山・作山古墳群とその周辺に古墳の築造が集中していた備中においては、早く7期に長福寺裏山古墳群の築造がはじまり双塚古墳以下の前方後円墳、帆立貝形古墳からなる首長墳系譜が形成されるほか、小田川流域にも天狗山古墳にはじまる系譜が出現する。このほか備前においては御野のお塚古墳、長船の築山古墳、美作では十六夜山古墳、井口車塚古墳などその数は多く、この状況は9期にさらに顕著となる。

これらは30～80mの墳丘規模であることが多いが、帆立貝形古墳が高い割合で含まれる。それぞれの系譜において、たとえば築山古墳（前方後円）→牛文茶臼山古墳（帆立貝形）というように前方後円墳に続いて築かれることが多いが、天狗山古墳のように系譜が帆立貝形古墳ではじまるものもある。首長墳系譜への採用の多さや、前方後円墳と近接した時間的關係で築かれる例が多いことからみて帆立貝形古墳が前方後円墳に次ぐ格付けの墳形として確立し、やや下位の首長、あるいは首長の近親・傍系層にその築造が許容されることになったと考える。

**群集小墳** またこの時期小墳の築造が活発となる。墳丘規模は一辺十数mないしそれ以下で、方墳からなる場合と円墳が主体をなす場合とがある。

群集小墳の早い例としては旭川下流域東岸平野の沖積平地に形成された方墳・円墳からなる7期中井南三反田古墳群があるが、築造が集中するのはこの時期である。大規模なものとしては径6～18mの円墳約50基が群集する日上畝山古墳群（美作）、数基の群集を示す例として前内池古墳群（備前）などがあり、その形態は多様である。日上畝山古墳群は前期の前方後円墳・日上天王山古墳に近接して形成されており、同様な例として備中の大形中期古墳である小造山古墳に近接して形成される小造山西古墳群があり、以前に築かれていた前方後円墳を核に古墳群の形成がなされたとみられる。

日上畝山古墳群をはじめ美作地域においてはこの時期の小墳群の形成が顕著であり、前方後円墳、帆立貝形古墳からなる首長墳の築造もこの時期に再開する。備後北部三次盆地においては3000基とも4000基とも言われる数の小墳が中期後半から後期前半にかけて群をなして築かれる。小墳群の形成状況がややわかりにくい、大きくは美作において8期からはじまる小墳群の形成、首長墳築造の再開と一連の動きが、著しく大規模な形でなされたものと考えられる。山陽地方中部山間地域における古墳築造の著しい活発化は、畿内政権による山陽北部山間の集団の掌握に起因すると考えるのが妥当であろう。

なお、吉備南部の事例が中心となるが、埴輪をもつ小墳が増加するのもこの時期の特徴である。それまで首長墳に使用が限られていた埴輪が下位の古墳に許容されるわけであるが、この

ことも下位への古墳築造の許容と一連の動きとみてよい。小墳群の築造、各地域ごとに再開する首長墳の築造は、中期に成立した中央と地方の関係が大首長を介した地方と畿内政権という関係から、畿内政権がそれぞれの小地域の首長と個別に関係をむすび、さらには個別の集団を直接掌握する形に移行し、その表象として古墳の築造を大幅に許容したことによると考える。

## 6 横穴式石室墳の展開（10期）

### (1) 横穴式石室の導入

吉備における最古の横穴式石室として6期の千足古墳があるが、特殊な事例であり以降の墓制に影響を与えた形跡はない。これ以降の資料では、8期の仙人塚古墳の石室が竪穴系横口式石室である可能性が議論されるなど横穴系の埋葬施設が導入された可能性は考えられているが、確実な資料は報告されていない。

9期前半の資料として三輪山6号墳があり、この時期が横穴式石室の導入期とみることができる。続く9期の後半、TK10型式期には資料数が増加し、瀬戸内海沿岸部から中国山地山間部まで点散的ながら広範な分布を示す。これらのなかには中規模の円墳である蒜山原四つ塚1号墳、小形の前方後円墳である斎富2号墳などがあり、まず首長・小首長層の埋葬施設として横穴式石室が波及するようである。

### (2) 首長墳と群集墳

続く10期から11期にかけて横穴式石室墳は広範に普及し、群集墳が形成される。一方、首長墳では早い地域では9期、遅くとも10期の末に前方後円墳が消滅する。

播磨においては9期に小形の前方後円墳が、先に述べた前期の状況に似て地域に並列的・等質的に多数築造され、それをもって前方後円墳の築造は停止することが明らかになっている。そこでは単独で築かれるもの以外に、群集墳の一角に所在する例がある程度の比率で認められる（岸本2004）。それに対し、吉備南部では前方後円墳は10期にも築かれ、その多くが単独での築造である。

10期に築かれる前方後円墳のおもなものとして備前では二塚山古墳（55）、鳥取上高塚古墳（67）、備中ではこうもり塚古墳（100）と江崎古墳（45）、備後では二子塚古墳（73）があり、備中こうもり塚古墳や鳥取上高塚古墳は8・9期の最大規模墳よりも大規模な墳丘をもつ。副葬品の点でも江崎古墳では鏡が含まれ、牛窓二塚山古墳では挂甲小札が採集されているなど、通常の円墳とは異なる品目を含んでいる。こうした後期における大形前方後円墳の築造は、河内大塚古墳（335）、見瀬丸山古墳（310）と、墳丘規模が縮小していく傾向にあった大王墳が、この時期に再度巨大化することと連動した動きと考えられる。二塚山古墳と二子塚古墳の前方部は通常の形態であるが、備中こうもり塚古墳は長く低平な前方部をもち、鳥取上高塚古墳も同様な墳形になる可能性があり、長大な前方部形状は見瀬丸山古墳と同様である。

したがって、10期における前方後円墳のうち少なくとも墳丘規模が格段に大きな一群には政治的な格付けとしての意味が与えられていたとみることができるが、大形円墳との差異は顕著なものではない。箭田大塚古墳は径46mの大形円墳であるが備中こうもり塚古墳とほぼ同規模

の石室をもつ。また、径35mの円墳、八幡大塚2号墳は全長8.7m以上と石室規模はそれほど大きくはないが、竜山石製の家形石棺を使用し副葬品には挂甲、金製垂飾付耳飾、銀製鍍金うつろ玉といった特殊な品目が含まれている。石室規模・副葬品のいずれにおいても前方後円墳と大形円墳の間に差を見出すことは困難であり、前方後円墳のもつ政治的意味はさほど大きなものではなくっていただけと考えるべきであろう。

そうした大形の墳丘をもつ大首長墳以外の首長墳は石室規模によって抽出することができるが、それらは群集墳のなかの最上位という位置であり、首長と共同体一般成員との差は墳墓においては縮小を示す。

大首長墳とみられる大形墳および首長墳は備前南部の上道郡、備中南部の窪屋郡にまとまった分布を示すが、この2地域は備前・備中の国府が置かれた地域である。また、それ以外の地域では首長墳は律令制下の各郡に1、2基という分布を示しており、これら首長層の領域は後の郡に、また首長層は郡司層に転化していくことになると思われる。

またこの時期、横穴式石室を埋葬施設とする小墳の集中的築造・群集墳の形成がなされる。これらは吉備全体にあまねくなされると見られがちであるが、実際には著しい偏在を示し分布に濃淡をもつ。製鉄・製塩・須恵器生産といった手工業集団の所在地、あるいは交通の要衝となる箇所でも卓越を示している。一方、旭川下流域西岸平野のように、重要な穀倉地帯でありながら一時期築造がほとんどなされない地域もある。こうした築造状況からは群集墳の形成がすぐれて政治的なものであったことがうかがわれ、造墓の許容が、共同体を構成する一般世帯の家長を直接掌握する手段として用いられ、とりわけ手工業集団の編成に重点が置かれたものであったとみられる。

以上の動きを経て吉備の古墳時代は終わりをむかえることになる。

## 7 吉備の古墳時代の特質

吉備に展開する古墳は、きわめて個性的な部分と、逆にごく一般的な部分によって構成される。吉備地域の個性をなしたのは古墳時代に先行する弥生時代後期に形成された墳墓祭祀の思想であり、一方のここでの「一般的」は畿内の要素と同義である。つまり、吉備の伝統的な墳墓祭祀の思想と畿内の祭祀様式が相剋するなかで多様な古墳の様相が生み出されたとみることができる。

畿内の要素の伝播は単なる墓制の波及ではなく、畿内との政治的関係を明瞭に示すものである。政治的な中枢である畿内の西に位置し、瀬戸内海航路を含めて畿内から西進する際の中継地点としての機能を求められ、またそれを担うに足る生産力を保有するという地政上の位置からすれば、畿内政権の介入が断続的であったことも当然と言える。それに対して小墳の埋葬頭位や古墳の立地の様相からは、古墳築造の基盤となる祭祀の思想がきわめて強固・保守的であったことがうかがわれる。古墳の景観、さらには墳丘の設計自体にも大きな影響を及ぼす要素である周濠の受容は、出雲・越とならんで大きく遅れるが、それはそのことに起因するとみてよい。しかし、5・6期に曲折を経ながら受容した後には7期に周濠だけでなく陪塚の配置ま

で畿内の様相を完備した両宮山古墳が築造されることになる。6期の造山古墳の築造を画期として吉備的な要素は急速に払拭されていくが、このことは吉備が畿内政権の内部に組み込まれたことを示すと考えられ、吉備の古墳時代史の最大の転換期と考える。

そうした吉備の様相と対照をなすのが北部九州や関東である。北部九州は前期古墳の刀剣副葬の配置方式においては畿内のそれをかなり受容しており、三角縁神獸鏡・仿製三角縁神獸鏡はともに地方では群を抜いた出土量をもつ。また、関東で早くから周濠が受容されることは先に示したとおりである。そうした前期段階での畿内との要素の共通に対し、後期の様相は対照的である。10期における二重周濠の分布を典型的な事例と考えるが、畿内・吉備においてその分布がなくなるのに対し、両地域ではなお構築が続く。とりわけ関東では二重周濠の構築はきわめて活発であるし前方後円墳の築造も盛んである。また、関東における埴輪祭式の盛行、九州北半における石人・石馬に代表される墳丘外表施設の地域的展開も顕著である。列島の東西両端地域が地域的な特色を發揮していくのに対して、吉備は畿内と同化していくと捉えることができる。

吉備を地域として大別した場合、美作と備後はおおむね後背地と位置づけられ、備前・備中の南部が中枢域であることは動かない。しかしながら備前・備中が一体であったことはなく、両地域の関係は古墳時代を通じて対照的である。前期に備前、中期中葉に備中、中期後半に備前、後期に再び備中と、最大規模墳だけでなく古墳築造の核は往復をくりかえす。また、それに対して備前南東部邑久の地域は振幅が少なく一貫した古墳の築造状況を示すというように、地域内部の関係は複雑である。

論究では美作・備後地域についてはふれるところが少なかった。もとより地域を網羅的に記載することを目的とはしていないことにもよるが、前期前半における特殊器台形埴輪の系譜を引く埴輪の出現、前期における多数の首長墳の築造など、吉備南部との比較材料は多い。とりわけ古式群集墳の形成状況は、数基から5基程度からなる群が散在的に形成される備前・備中南部地域に対して、特定の範囲に膨大な数の小墳からなる群が形成されており、きわめて対照的である。播磨を含めて対比検討することにより、これら地域の特性だけでなく中期後半から後期前半にかけての小墳群のもつ意義をより明確にできると考える。また、後期古墳についても素描にとどまったが、課題は多い。横穴式石室の形態や副葬品などの検討から、備前・美作・備中南部・備後南部・備後北部と、おおむね旧国程度の範囲の地域的性が把握されている（亀山1999・土井1999）が、それを継承しつつ石室形態の検討をおこなう必要がある。首長墳は長大な羨道の構築を続けるのに対し、小墳では羨道は形骸化し短小なもの、さらには玄室との区分が不明確なものとなる。首長墳・大形墳の石室と、小墳の石室がいかなる関係にあるのかという視点で整理していく必要がある。また、壺類など杯以外の須恵器や土師器が群集墳内の階層関係にどのように関わるのかも検討課題である。このほか、TK10型式期における横穴式石室の導入の様相が明確になりつつある現在、その様相の整理とそれに続く横穴式石室の普及がどのような過程を経てなされるのか検討していきたい。

中期前半までは讃岐や播磨など瀬戸内海中東部沿岸地域と大きくは同様の政治構造の変遷をたどってきた吉備地域に、中央と地方という関係をあいまいなものとするともいえる巨大古墳

がなぜ築かれることになったのか。それを解くにはなお多くの作業を必要とする。

ここで述べた吉備の古墳時代史はまだ素描にすぎず、上記を含めて多くの課題が残る。本論究をそれらの解明、そして、吉備地域の新たな古墳時代像提示にむけての一里塚とする。

## 引用・参考文献一覧（50音順）

- 秋山日出雄・網干善教 1959『室大墓』奈良県史跡名勝天然記念物調査報告第18冊
- 足利健亮 1992「山陽・山陰・南海三道と土地計画」『新版古代の日本4 中国四国』角川書店
- 東 潮 1981「中山大塚古墳」『磯城・磐余地域の前方後円墳』奈良県史跡名勝天然記念物調査報告第42冊
- 天野末喜 1986 a 「古市古墳群について」『古市古墳群』藤井寺の遺跡ガイドブックNo. 1 藤井寺市教育委員会
- 天野末喜 1986 b 「岡ミサンザイ古墳〔仲哀天皇恵我長野西陵〕」『古市古墳群』藤井寺の遺跡ガイドブックNo. 1 藤井寺市教育委員会
- 天羽利夫・岡山真知子 1981「曾我氏神社古墳群調査報告」『徳島県博物館紀要』第13集
- 伊賀高弘 1991「上人ヶ平古墳群における小規模な方墳について」『京都府埋蔵文化財論集』第2集 財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター
- 井沢洋一・米倉秀紀 1985「福岡平野における前方後円墳の調査から」昭和60年度九州史学会考古学部会発表資料 九州史学会
- 石川 昇 1989『前方後円墳築造の研究』六興出版
- 石野博信・関川尚功ほか 1976『纏向』奈良県立橿原考古学研究所
- 石野博信 1983「古墳出現期の具体相」『関西大学考古学研究室開設三十周年記念考古学論叢』
- 石部正志・田中秀夫・宮川 徠・堀田啓一 1980「帆立貝形古墳の築造企画」『考古学研究』第27巻第2号
- 石部正志・田中英夫・堀田啓一・宮川徠 1991「造山・作山および両宮山古墳の築造企画の検討」『考古学研究』第38巻第3号
- 泉本知秀 1974「茶臼山古墳外周墳輪列・陪冢周溝調査概要」『節香仙』第25号 大阪府教育委員会
- 泉森 皎 1985「刀剣の出土状態の検討—刀剣の呪術的性格の理解のために—」『末永先生米寿記念献呈論文集』
- 一瀬和夫 1980「応神陵古墳外堤試掘調査報告『節香仙』第31号 大阪府教育委員会
- 一瀬和夫 1992「周濠」『古墳時代の研究7』古墳I 墳丘と内部構造 雄山閣出版
- 伊藤 晃・島崎 東 1984「須恵器の原流 中国地方—岡山県—」『日本陶磁の原流』 柏書房
- 井上 弘 1993「矢部古墳群B」岡山県埋蔵文化財発掘調査報告88
- 今井 堯・近藤義郎 1970「群集墳の盛行」『古代の日本』4 中国・四国 角川書店
- 今尾文昭 1982「素環頭鉄刀考」『橿原考古学研究所紀要 考古学論攷』第8冊
- 今尾文昭 1984「古墳祭祀の画一性と非画一性」『橿原考古学研究所論集』第6 吉川弘文館

- 今尾文昭 1987「高地・丘陵・低地の前期古墳と地域性」『考古学と地域文化』同志社大学考古学シリーズⅢ
- 上田宏範・中村春寿 1961『桜井茶臼山古墳』奈良県史跡名勝天然記念物調査報告第19冊
- 上田宏範 1961「櫛山古墳」『奈良県史跡名勝天然記念物調査報告』第19冊
- 上田宏範 1984「前方後円墳における築造企画の展開（その三）－巨大古墳にみられる吉備と畿内－」『橿原考古学研究所論集』第6 吉川弘文館
- 上田 睦 1986「大鳥塚（質屋山）古墳」『古市古墳群』藤井寺の遺跡ガイドブックNo.1 藤井寺市教育委員会
- 宇垣匡雅 1981「特殊器台形土器・特殊壺形土器に関する型式学的研究」『考古学研究』第27巻第4号
- 宇垣匡雅 1982「七つぐろ古墳群の調査」『考古学研究』29巻3号
- 宇垣匡雅 1984「特殊器台形埴輪に関する若干の考察」『考古学研究』31巻3号
- 宇垣匡雅 1987「吉備の前期古墳1－浦間茶臼山古墳の測量調査－」『古代吉備』第9集
- 宇垣匡雅 1987「竪穴式石室の研究－使用石材の分析を中心に－」『考古学研究』第34巻第1・2号
- 宇垣匡雅・片山泰輔 1988「甫崎天神遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』18
- 宇垣匡雅 1991「塚の上1号墳」岡山県埋蔵文化財報告21
- 宇垣匡雅 1991「両宮山古墳」『図説日本の史跡』第3巻 同朋舎出版
- 宇垣匡雅 1991「地域の概要 備前」『前方後円墳集成』中国・四国 山川出版社
- 宇垣匡雅ほか 1994「甫崎天神山遺跡」岡山県埋蔵文化財発掘調査報告89
- 宇垣匡雅 1995「大和王権と吉備地域」『古代王権と交流』6 名著出版
- 宇垣匡雅 1997「前期古墳における刀剣副葬の地域性」『考古学研究』第44巻第1号
- 宇垣匡雅 2000「金蔵山古墳」『岡山市埋蔵文化財センター年報1 2000（平成12）年度』岡山市教育委員会
- 宇垣匡雅 2002「宿寺山古墳の研究(1)」『環瀬戸内海の考古学 平井勝氏追悼論文集』古代吉備研究会
- 宇垣匡雅 2004 a 「吉備の首長墓系譜」『古墳時代の政治構造』青木書店
- 宇垣匡雅 2004 b 「古墳の立地とはなにか」『古墳時代の政治構造』青木書店
- 宇垣匡雅 2004 c 『森山古墳・両宮山古墳』山陽町文化財調査報告第2集
- 宇垣匡雅 2005『両宮山古墳』赤磐市文化財調査報告第1集
- 宇垣匡雅 2006「吉備地域の帆立貝形古墳」『畿内弥生社会像の再検討・「雄略朝」期と吉備地域・古代山陽道をめぐる諸問題』考古学研究会例会シンポジウム記録5 考古学研究会
- 内本勝彦 1994「御廟山古墳（周濠部）発掘調査概要報告」『堺市文化財調査概要報告』第44冊
- 梅原末治 1925「備中国都窪郡の二三の墳壟について」『歴史と地理』第15巻第1号
- 梅原末治 1937「備前行幸村花光寺山古墳」『近畿地方古墳墓の調査』2 日本古文化研究所
- 梅原末治 1937「河内四条畷村忍岡古墳」『日本古文化研究所報告』第4冊

- 梅原末治 1938「備前和気郡鶴山丸山古墳」『日本古文化研究所報告』第9冊
- 梅原末治 1938「備中千足の装飾古墳」『日本古文化研究所報告』第9冊
- 梅原末治 1938「美作郷村観音山古墳」『日本古文化研究所報告』第9冊
- 梅原末治 1938『安土瓢箪山古墳』滋賀県史蹟調査報告第7冊
- 梅原末治 1955「乙訓郡寺戸大塚古墳」『京都府文化財調査報告』第21冊
- 梅原末治 1955「応神、仁徳、履中三天皇陵の規模と造営」『書陵部紀要』第5号
- 梅原末治 1956「岡山県下の古墳調査記録1」『瀬戸内海研究』8
- 梅原末治 1957「岡山県下の古墳調査記録2」『瀬戸内海研究』9・10
- 梅原末治 1965『椿井大塚山古墳』京都府文化財調査報告第23冊
- 梅原末治・森本六爾 1923「大和磯城郡柳本大塚古墳調査報告」『考古学雑誌』第3巻第8号
- 蛭原啓介ほか 2003「前内池古墳群」岡山県埋蔵文化財発掘調査報告174
- 大久保徹也 2004 a 「前期前方後円墳の築造頻度と規模構成」『古墳時代の政治構造』青木書店
- 大久保徹也 2004 b 「讃岐の古墳時代政治秩序への試論」『古墳時代の政治構造』青木書店
- 大澤正己 1982「大蔵池南製鉄遺跡を中心とする製錬滓、鍛冶滓の検討」『糠山古墳群』IV  
久米開発事業に伴う文化財調査委員会
- 大塚初重 1966「古墳の変遷」『日本の考古学』IV 河出書房新社
- 大林組（編） 1986「仁徳天皇陵」『復元と構想』東京書籍
- 大本組・高橋護・葛原克人1989「造山古墳復元想定図」（研究報告書は公開されていないが  
概要は、高橋護 1989『吉備の大王』山陽新聞社 に掲載）
- 岡田晃治ほか 1987「帯城墳墓群II」『埋蔵文化財発掘調査概報』京都府教育委員会
- 岡山県史編纂室 1986「付図1 造山古墳」『岡山県史』第18巻考古資料
- 岡山県史編纂室 1986「付図3 両宮山古墳群」『岡山県史』第18巻考古資料
- 岡山市教育委員会 1975『吉備中山総合調査報告』
- 岡山大学七つぐろ古墳群調査団 1982「コロタイプ図版解説 七つぐろ古墳群の調査」『考古学研究』第29巻第3号
- 置田雅昭 1977「初期の朝顔形埴輪」『考古学雑誌』第63巻第3号
- 奥田 尚 1983 a 「石材とその採石地について」『玉手山9号墳』柏原市教育委員会
- 奥田 尚 1983 b 「大和・河内の前期古墳の石室材」『橿原考古学研究所紀要考古学論攷』第9冊
- 奥田 尚 1983 c 「巨石の切り出し技術」『季刊考古学』3号 雄山閣出版
- 奥田 尚 1984 a 「箸墓古墳の石材」（箸墓古墳の再検討）『国立歴史民俗博物館研究報告』第3集
- 奥田 尚 1984 b 「大和を中心とした古墳の石室・石槨材」『橿原考古学研究所論集』第7  
吉川弘文館
- 奥田 尚 1985 a 「砂礫構成からみた特殊器台と埴輪の動き－岡山県内を例として－」『末永先生米寿記念献呈論文集』



- 奥田 尚 1985 b 「大和・河内における古墳の石室材」『古代学研究』108号
- 奥田 尚 1986 「紅簾片岩が見られる竪穴式石室」『古代学研究』111号
- 奥田 尚 1990 「造山古墳の石材と埴輪」『橿原考古学研究所紀要考古学論攷』第14冊
- 奥田 尚・米田敏幸・岸本道昭・狐塚省蔵 1984 「吉備形器台・壺の砂礫観察とその産出地」  
『橿原考古学研究所紀要考古学論攷』第10冊
- 小栗明彦 1994 「奈良市磐之媛陵古墳後円部外濠発掘調査概報」『奈良県遺跡調査概報1993年  
度』奈良県立橿原考古学研究所
- 小郷利幸 1997 「埋葬施設について」『有本古墳群』津山市埋蔵文化財発掘調査報告第59集
- 小沢一雅（前方後円墳研究会編）「前方後円墳－古墳の築造法」 [ホームページ資料]
- 小野一臣・間壁忠彦・間壁葎子 1977 「岡山県清音村鋳物師谷2号墳出土の土器」『倉敷考古  
館研究集報』13号
- 小野忠熙（編） 1977 『長光寺山古墳』 山陽町教育委員会
- 尾上元規 1998 「十六夜山古墳・十六夜山遺跡」岡山県埋蔵文化財発掘調査報告130
- 小野山 節 1970 「五世紀における古墳の規制」『考古学研究』第16巻第3号
- 小野山 節ほか 1993 『紫金山古墳と石山古墳』京都大学文学部博物館図録第6冊
- 香川県教育委員会 1970 『高松市茶白山古墳緊急発掘調査概報』
- 柿沼菜穂ほか2002 「ミサンザイ古墳」『平成12・13年度市内遺跡発掘・立会調査概要報告』堺  
市文化財調査概要報告第100冊
- 奈良県立橿原考古学研究所編 1981 『磯城・磐余地域の前方後円墳』奈良県史跡名勝天然記念  
物調査報告第42冊
- 堅田 直 1964 『池田市茶白山古墳の研究』大阪古文化研究会
- 堅田 直 1968 『茨木市将軍山古墳移築報告』考古学シリーズ3 帝塚山大学考古学研究室
- 堅田 直・原口正三・西谷 正・田代克巳・北野耕平 1967 『弁天山古墳群の調査』大阪府文  
化財調査報告第17輯
- 鎌木義昌 1962 「岡山市域の古墳時代遺跡」『岡山市史』古代編
- 鎌木義昌 1962 「神宮寺山古墳」「神宮寺山古墳の盗掘について」『岡山市史』古代編
- 鎌木義昌ほか 1978 『榑津古墳発掘調査報告』 榑津古墳発掘調査団
- 鎌木義昌・近藤義郎 1968 「備前車塚古墳」『考古学研究』14巻4号
- 鎌木義昌・西谷真治 1959 『金蔵山古墳』倉敷考古館研究報告第1冊
- 鎌木義昌・東村武信・藁科哲男・三宅寛 1984 「黒曜石、サヌカイト製石器の産地推定による  
古文化交流の研究」『古文化財の自然科学的研究』古文化財編集委員会編 同朋舎
- 亀田修一 1998 a 「築山古墳」『長船町史資料編（上）』
- 亀田修一 1998 b 「牛文茶白山古墳」『長船町史資料編（上）』
- 亀山行雄 1999 「岡山県内の横穴式石室」『論争吉備』シンポジウム記録1 考古学研究会
- 川上敏朗 1983 「古墳築造に動員された人の数と実態」『季刊考古学』第3号 雄山閣出版
- 川西宏幸 1973 「埴輪研究の課題」『史林』第56巻第4号
- 川西宏幸 1978 「円筒埴輪総論」『考古学雑誌』第64巻2号

- 岸本直文 1992「前方後円墳築造規格の系列」『考古学研究』第39巻第2号
- 岸本直文 2005『前方後円墳の築造規格からみた古墳時代の政治的変動の研究』科学研究費補助金成果報告書
- 岸本道昭ほか 1982『淡輪遺跡発掘調査概要』Ⅳ 大阪府教育委員会
- 岸本道昭 1986「前方後円墳成立期の播磨・揖保川流域」『考古学研究』第33巻第3号
- 岸本道昭 2004 a 「播磨の前方後円墳とヤマト政権」『古墳時代の政治構造』 青木書店
- 岸本道昭 2004 b 「後期前方後円墳の時代」『古墳時代の政治構造』 青木書店
- 北野耕平 1964『河内における古墳の調査』大阪大学文学部国史研究室研究報告第1冊
- 北山 惇 1978「東播地域の竪穴式石室について」『播磨・竜山5号墳発掘調査報告』高砂市文化財調査報告6
- 狐塚省蔵 1977「岡山県古井町あたご山遺跡出土の器台・壺」『考古学雑誌』第63巻第3号
- 木下 修ほか 1978『神蔵古墳』甘木市文化財調査報告第3集
- 木下 亘 1992「古墳の形－帆立貝式古墳－」『季刊考古学』第40号 雄山閣出版
- 喜兵衛島遺跡調査団（編） 1956「謎の師楽式」『歴史評論』1月号
- 君島俊行 2000「岡高塚古墳の竪穴式石槨をめぐる諸問題」『美作の首長墳』美作地方における前方後円墳秩序の構造的研究Ⅰ 吉備人出版
- 木許 守ほか 1996『室宮山古墳範囲確認調査報告』御所市教育委員会
- 清野謙次 1906「主墳と陪塚との関係」『考古界』第5篇第7号～11号
- 清野謙次 1925「備前国赤磐郡平島村大字浦間古墳」『日本原人の研究』
- 九州大学文学部考古学研究室編 1969『老司古墳調査概報』福岡市教育委員会
- 草原孝典ほか 1996「小盛山古墳の測量調査－岡山市足守地域の地域史研究(4)－」『古代吉備』第18集
- 草原孝典 2004「位置と環境」『ハガ遺跡－備前国府関連遺跡の発掘調査報告－』岡山市教育委員会
- 葛原克人 1983「吉備巨大古墳の時代」『展示図録古代吉備』岡山市・山陽新聞社
- 葛原克人 1986「朱千駄古墳」『岡山県史』第18巻考古資料
- 葛原克人 1986「作山古墳」『岡山県史』第18巻考古資料
- 葛原克人 1987「古墳時代前期」『岡山県の考古学』 吉川弘文館
- 葛原克人 1987「大古墳」『吉備の考古学』 福武書店
- 葛原克人 1994「後池内古墳」岡山県埋蔵文化財発掘調査報告89
- 葛原克人・宇垣匡雅 1991「両宮山古墳」『前方後円墳集成 中国四国編』山川出版社
- 倉光清六 1932「古墳発見の伯耆弥生式土器」上・下『考古学』第3巻第4号・第7号
- 小泉裕司ほか 1999「久津川車塚古墳」『城陽市史』第3巻
- 神原英朗 1971『岩田第3・5号墳発掘調査概報』岡山県営山陽新住宅市街地開発事業用地内埋蔵文化財発掘調査概報第2集 山陽町教育委員会
- 神原英朗 1973『四辻土壌墓遺跡・四辻古墳群 他方形台状墓発掘調査概報3編』岡山県営山陽新住宅市街地開発事業用地内埋蔵文化財発掘調査概報第3集 山陽町教育委員会

- 神原英朗 1975『用木古墳群』岡山県営山陽新住宅市街地開発事業用地内埋蔵文化財発掘調査概報第1集 山陽町教育委員会
- 神戸市教育委員会 1981『史跡処女塚古墳現地説明会資料』
- 神戸市教育委員会 1985「史跡五色塚・小壺古墳」『昭和59年度遺跡現地説明会資料』
- 後藤守一 1926『漢式鏡』 雄山閣
- 後藤守一・内藤政光・高橋勇 1939『静岡県磐田郡松林山古墳発掘調査報告』 静岡県磐田郡御厨村郷土教育研究会（静岡県文化財保存協会復刻）
- 後藤守一 1941『日本の文化黎明編』 葦牙書房
- 小林久彦 1992「古墳の選地Ⅰ－三河・遠江地域における前方後方墳からの視界に注目して－」『豊橋市立美術博物館研究紀要』創刊号
- 小林久彦 1993「古墳の選地Ⅱ－東三河における首長墳の立地と視界から－」『三河考古』第5号
- 小林行雄 1934「技術からみた古墳の様式」『考古学』5巻6号
- 小林行雄 1941「竪穴式石室構造考」『紀元二千六百年記念史学論文集』京都帝国大学文学部編（小林行雄1976『古墳文化論考』平凡社 所収）
- 小林行雄 1952『福岡県糸島郡一貴山村田中銚子塚古墳の研究』 便利堂
- 小林行雄 1956「茨木市将軍山古墳調査概報」日本考古学協会第17回総会研究発表要旨
- 小林行雄 1957『河内松岳山古墳の調査』大阪府文化財調査報告書第5集
- 小林行雄 1959『古墳の話』岩波書店
- 小林行雄 1959「周溝」『考古学辞典』東京創元社
- 小林行雄 1962「紫金山古墳の調査」『大阪府の文化財』大阪府教育委員会
- 小林行雄 1962「古墳文化の形成」『岩波講座日本歴史』第1巻
- 小山睦夫 1984「放射化分析による土器の産地分析－指標元素とそれらの意義」『古文化財の自然科学的研究』古文化財編集委員会編 同朋舎
- 小山田宏一 1995「前期前方後円墳の特徴－副葬品－」『季刊考古学』第52号 雄山閣出版
- 近藤喬一・都出比呂志（京都大学文学部考古学研究室向日丘陵古墳群調査団） 1971「京都向日丘陵の前期古墳群の調査」『史林』第54巻第6号
- 近藤喬一ほか 1977『平尾城山古墳第1次発掘調査概報』 平安博物館
- 近藤喬一（編） 1990『京都府平尾城山古墳』古代学研究所研究報告第1輯
- 近藤義郎 1852『佐良山古墳群の研究』第1冊 津山市
- 近藤義郎 1956「牛窓湾をめぐる古墳と古墳群」『私たちの考古学』10号
- 近藤義郎 1960「考古学的検討・副葬品、月の輪古墳を通してみた発掘期古墳の性格」『月の輪古墳』 月の輪古墳刊行会
- 近藤義郎 1977「古墳以前の墳丘墓」『岡山大学法文学部紀要』37
- 近藤義郎 1980「矢喰・鯉喰・楯築」『鬼ノ城』 鬼ノ城学術調査委員会
- 近藤義郎 1983『前方後円墳の時代』 岩波書店
- 近藤義郎 1986「前方後円墳の誕生」『岩波講座 日本考古学』6 岩波書店

- 近藤義郎 1986「雲山鳥打弥生墳丘墓群」『岡山県史』第18巻考古資料
- 近藤義郎 1986「一本松古墳」『岡山県史』第18巻考古資料
- 近藤義郎（編） 1991『前方後円墳集成』中国四国編 山川出版社
- 近藤義郎 1991「最古型式前方後円（方）墳における二者」『権現山51号墳』 権現山51号墳刊行会
- 近藤義郎（編） 1991『権現山51号墳』 権現山51号墳刊行会
- 近藤義郎・春成秀爾 1967「埴輪の起源」『考古学研究』第13巻第3号
- 近藤義郎・松本正信・加藤史郎 1985『養久山墳墓群』兵庫県揖保川町教育委員会
- 近藤義郎・宇垣匡雅 1985「岡山県七つぐろ古墳群」『日本考古学年報』35（1982年度版）  
日本考古学協会
- 近藤義郎・鎌木義昌 1986「備前車塚古墳」『岡山県史』第18巻考古資料
- 近藤義郎・高井健司（編） 1987『七つぐろ古墳群』 七つぐろ古墳群発掘調査団
- 近藤義郎・新納泉 1989「半田山丘陵七つぐろ丸古墳群7号墳および10号地点の発掘」『都市近郊林（半田山）の自然特性およびその環境保全機能に関する研究（Ⅲ）』（昭和63年度岡山大学教育研究学内特別経費研究成果報告書）
- 近藤義郎・新納泉（編） 1991『岡山市浦間茶白山古墳』 浦間茶白山古墳発掘調査団
- 紺谷永子 1986「市野山古墳〔允恭天皇恵我長野北陵〕と周辺の古墳」『古市古墳群』藤井寺の遺跡ガイドブックNo.1
- 西条古墳群発掘調査団 1964『西条古墳群調査略報』
- 堺市教育委員会 1990『堺の文化財―百舌鳥古墳群―』
- 佐上静夫 1955「興味ある石棺の石質に就て」『私たちの考古学』5号 考古学研究会
- 桜井久之 1987「埴輪と中・小規模墳」『季刊考古学』第20号 雄山閣出版
- 佐藤晃一 1995「史跡蛭子山・作山古墳の整備」『考古学研究会40周年記念論集展望考古学』考古学研究会
- 佐藤利秀 1982「大吉備津彦命墓整備工事箇所の立会調査」『書陵部紀要』第33号
- 白石 純 1991「吉備地方の竪穴式石室石材の原産地推定」『古文化談叢』第24集
- 白石太一郎 1983「古墳の周濠」『角田文衛博士古稀記念 古代学叢論』
- 白石太一郎 2000「葛城地域における大型古墳の動向」『古墳と古墳群の研究』 塙書房
- 白石太一郎 2001『古墳とその時代』日本史リブレット4 山川出版社
- 白石太一郎・春成秀爾・杉山晋作・奥田 尚1984「箸墓古墳の再検討」『国立歴史民俗博物館研究報告』第3集
- 白石太一郎・杉山晋作 1984「箸墓古墳の墳丘」（箸墓古墳の再検討）『国立歴史民俗博物館研究報告』第3集
- 白神典之 1981「玉手山7号墳採集の石製盒子」『史泉』56号 関西大学文学部
- 島崎 東 1992「埴輪の種類と編年中・四国」『古墳時代の研究』9 雄山閣
- 嶋田 暁 1967「古式古墳の竪穴式石室の構築について」『愛泉女子短期大学紀要』2号
- 島田貞彦 1926「周防国富田町竹島御家老屋敷古墳発見遺物」『考古学雑誌』第16巻第1号

- 清水宗昭・高橋 徹 1982「大分の石棺」『九州考古学』56号
- 清水芳裕 1984「胎土分析による窯跡出土陶器の分類」『京都大学構内遺跡調査研究年報』昭和57年度第Ⅱ部 京都大学埋蔵文化財研究センター紀要Ⅲ
- 清水芳裕 1973「縄文時代の集団領域について」『考古学研究』19巻4号
- 下山恵子・吉澤則男 2002『史跡古市古墳群 峯ヶ塚古墳後円部発掘調査報告書』羽曳野市埋蔵文化財調査報告書第48号
- 新東晃一・伊藤晃・間壁菫子 1974「西の平古墳」『王墓山遺跡群』 倉敷市教育委員会
- 末永雅雄 1941『日本上代の武器』 弘文堂出版（1981木耳社）
- 末永雅雄 1975『古墳の航空大観』学生社
- 菅原康夫ほか 1983『萩原墳墓群』 徳島県教育委員会
- 杉山尚人 1992「陶棺」『吉備の考古学的研究』（下）山陽新聞社
- 杉原和雄 1970「鳥居前古墳発掘調査概要」『埋蔵文化財調査概報』京都府教育委員会
- 杉原和雄ほか 1979「中上司遺跡発掘調査報告書」『加悦町文化財調査報告』第2集
- 十河良和ほか 2001『平成12年度国庫補助事業発掘調査報告書』堺市教育委員会
- 鷹野一太郎 1986『大住南塚古墳発掘調査概報』田辺町埋蔵文化財調査報告書第6集
- 竹下 賢 1986『松岳山古墳群』柏原市埋蔵文化財発掘調査概報1985年度
- 高橋克壽 2000「畿内から見た吉備の埴輪」『考古学研究会例会シンポジウム記録2 国家形成過程の諸変革』 考古学研究会
- 高橋進一 1996「兎登木21号墳」総社市埋蔵文化財調査年報6
- 高橋護・鎌木義昌・近藤義郎 1986「宮山墳墓群」『岡山県史』18巻考古資料
- 武田恭彰 1991「鬼ノ城ゴルフクラブ造成に伴う発掘調査概報」『総社市埋蔵文化財調査年報』1
- 武田恭彰 2004『小山ヶ谷古墳 小造山古墳群』総社市埋蔵文化財発掘調査報告17
- 辰馬悦蔵・吉井太郎・渡部多仲 1928「会下山二本松古墳」『兵庫県史跡名勝天然記念物調査報告』第5輯
- 伊達宗泰・小島俊次・森浩一 1963『大和天神山古墳』奈良県史跡名勝天然記念物調査報告第22冊
- 伊達宗泰 1966『小泉狐塚・大塚古墳』奈良県史跡名勝天然記念物調査報告第23冊
- 伊達宗泰ほか 1977『メスリ山古墳』奈良県史跡名勝天然記念物調査報告第35冊
- 田中勝弘 1973「前期古墳の竪穴式石室構造について」『史想』16号
- 田中和弘 1986「古市古墳群における小古墳の検討」『考古学研究』第32巻第4号
- 田中彩太 1982「特殊円筒棺の諸問題－京都府与謝郡谷垣遺跡をめぐって－」『古代文化』第34巻第7号
- 田中英夫 1985「奈良県中山大塚古墳の特殊器台形埴輪について」『古代学研究』109号
- 谷山雅彦 1997「すりばち池南墳墓群」総社市埋蔵文化財調査年報7
- 中国・四国前方後円墳研究会第5回研究会事務局 1999『中国・四国前方後円墳研究会第5回研究会資料集－帆立貝形古墳をめぐる諸問題－』

- 辻 葩 学 1994「向墓山古墳」『羽曳野市史』第3巻資料編 I
- 都出比呂志 1979「前方後円墳出現期の社会」『考古学研究』第26巻第3号
- 都出比呂志 1981「埴輪編年と前期古墳の新古」小野山節編『王陵の比較研究』京都大学文学部考古学研究室
- 都出比呂志 1983「古墳に使われた石材」『向日市史』上巻第5章古墳時代
- 都出比呂志 1986『竪穴式石室の地域性の研究』大阪大学文学部国史研究室
- 都出比呂志 1989「古墳が造られた時代」『古代史復元』6 講談社
- 都出比呂志 1989「前方後円墳の誕生」『古代を考える古墳』吉川弘文館
- 都出比呂志（編） 1990『雪野山古墳』雪野山古墳発掘調査団
- 都出比呂志 1992「墳丘の型式」『古墳時代の研究』第7巻古墳 I 墳丘と内部構造 雄山閣出版
- 都出比呂志・福永伸哉（編） 1992『長法寺南原古墳の研究』大阪大学文学部考古学研究報告第2冊 大阪大学南原古墳調査団
- 椿 真治（編） 1993『みそのお遺跡』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告87
- 椿 真治 1997「中山遺跡・中山古墳群」岡山県埋蔵文化財発掘調査報告121
- 坪井正五郎 1888「足利古墳発掘報告」『東京人類学会雑誌』3巻30号
- 寺前直人 2001「古墳時代中期における倭王権の地方支配方式－豊島地域における小古墳の検討を通して－」『待兼山遺跡Ⅲ』大阪大学埋蔵文化財調査委員会
- 土井基司 1999「備後の横穴式石室」『論争吉備』シンポジウム記録1 考古学研究会
- 徳島考古学研究グループ 1985「徳島市渋野古墳群の研究」「徳島県的前方後円（方）墳」『徳島考古』第2号
- 徳島市教育委員会 1981『古墳時代の徳島市』
- 内藤 晃・大塚初重編 1961『三池平古墳』庵原村教育委員会
- 中田啓司・近藤義郎 1987「小造山古墳」『総社市史』考古資料編
- 長津宗重 1999『男狭穂塚女狭穂塚陵墓参考地測量報告書』宮崎県文化財調査報告書第42集
- 中塚 良 1988「山城盆地における古墳立地の検討」『物集女車塚』向日市埋蔵文化財調査報告書第23集
- 中村一郎・笠野毅 1976「大市墓の出土品」『書陵部紀要』第27号
- 中山俊紀 1986『緑山遺跡』津山市埋蔵文化財発掘調査報告 第19集
- 長嶺正秀 1984「豊前国（北部豊前）の前方後円墳からみた古墳時代」『八雷古墳』行橋市文化財調査報告書第14集
- 長嶺正秀編 1996『豊前石塚山古墳』苅田町・かんだ郷土史研究会
- 永山卯三郎 1930『岡山県通史』上
- 新納 泉 1992「巨大古墳から巨石墳へ」『新版古代の日本』4 中国四国 角川書店
- 西川 宏 1961「陪塚論序説」『考古学研究』第8巻第2号
- 西川 宏 1964「吉備政権の性格」『日本考古学の諸問題』考古学研究会
- 西川 宏ほか 1966「古墳文化の地域的特色・瀬戸内」『日本の考古学』IV

- 西川 宏 1970「吉備の王者とその舞台」『古代の日本』4 角川書店
- 西川 宏 1971「岡山県造山古墳とその周辺の前半期古墳」『古代学研究』60
- 西川 宏 1975『吉備の国』学生社
- 西川 宏 1986「造山古墳」『岡山県史』第18巻考古資料
- 西川 宏 1986「両宮山古墳」『岡山県史』第18巻考古資料
- 西川 宏 1986「佐古田堂山古墳」『岡山県史』第18巻考古資料
- 西川 宏 1986「宿寺山古墳」『岡山県史』第18巻考古資料
- 西谷真治 1983「海人びとの墓」『展望アジアの考古学』樋口隆康教授退官記念論集 新潮社
- 西谷真治 1965「向日町元稲荷古墳」『京都府文化財調査報告書』第23冊
- 野崎貴博 2000「吉備の集団と地域間交流－埴輪と棺から－」『考古学研究会例会シンポジウム記録2 国家形成過程の諸変革』 考古学研究会
- 野崎貴博 2002「埴輪棺墓の群構成－中国地方の事例の検討から－」『環瀬戸内海の考古学－平井勝氏追悼論文集－』 古代吉備研究会
- 乗安和二三・大村秀典 1988『国森古墳』 田布施町教育委員会
- 橋本清一 1983「長法寺南原古墳と今里大塚古墳の石材調査」『長法寺南原古墳』 大阪大学南原古墳調査団
- 橋本博文 1981「埴輪研究の動静を追って」『歴史公論』第7巻第2号 雄山閣出版
- 橋本博文 1976「東国への初期円輪埴輪波及の一例とその史的位置づけ」『古代』第59・60合併号 早稲田大学考古学会
- 埴輪検討会（編） 2003『埴輪論叢』第4号
- 埴輪検討会（編） 2003『埴輪論叢』第5号
- 原口正三・西谷正 1967「弁天山C1号墳」『弁天山古墳群の調査』大阪府文化財調査報告第17輯
- 原島礼二・石部正志・今井堯・川口勝康 1981「近畿地方の巨大古墳」『巨大古墳と倭の五王』 青木書店
- 春成秀爾・葛原克人・小野一臣・中田啓司 1969「備中清音村鋳物師谷1号墳墓調査報告」『古代吉備』第6集 古代吉備研究会
- 春成秀爾 1977「埴輪」『地方史マニュアル』6 柏書房
- 春成秀爾 1982「備前の大形古墳の再検討」『古代を考える』31 古代吉備の検討 古代を考える会
- 春成秀爾 1983「造山・作山古墳とその周辺」『岡山の歴史と文化』 藤井駿先生喜寿記念会編 福武書店
- 春成秀爾 1984「箸墓古墳の埴輪」（箸墓古墳の再検討）『国立歴史民俗博物館研究報告』第3集
- 菱田哲郎 1993「副葬品からみた古墳時代の前期と中期」『紫金山古墳と石山古墳』京都大学文学部博物館図録第6冊
- 櫃本誠一 1984「帆立貝形古墳について」『考古学雑誌』第69巻第3号

- 櫃本誠一・松下勝 1984『日本の古代遺跡』3 兵庫県南部 保育社
- 平井 勝 1982『殿山遺跡・殿山古墳群』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告47
- 広瀬和雄 1987・1988「大王墓の系譜とその特質(上)(下)」『考古学研究』第34巻第3・4号
- 広瀬和雄 1991「前方後円墳の畿内編年」『前方後円墳集成 中国四国編』山川出版社
- 広瀬和雄 1999「弥生墳墓と政治関係」『季刊考古学』67 雄山閣出版
- 広瀬和雄 2001『各地の前方後円墳の消長に基づく古墳時代政治構造の研究』平成10年度～平成12年度科学研究費補助金研究成果報告書
- 広瀬和雄 2003『前方後円墳国家』角川選書、角川書店
- 古瀬清秀 1985「原始・古代の寒川町」『香川県大川郡寒川町史』
- 藤井治左衛門 1929「岐阜県不破郡青墓村大字矢道長塚古墳」『考古学雑誌』第19巻第7号
- 藤井利章 1982「津堂城山古墳の研究」『藤井寺市史紀要』第3集 藤井寺市
- 藤田和尊 1989「副葬品の種類と性格－武器・武具－」『季刊考古学』第28号雄山閣出版
- 藤田 等 1963「山口県都濃郡竹島古墳」『日本考古学年報』10 1957年度版 日本考古学協会
- 布目順郎 1988『絹と布の考古学』考古学選書28 雄山閣出版
- 逸見吉之助 1974「X線回折法による石材の同定」『倉敷考古館研究集報』9号
- 北條芳隆 1986「墳丘に表示された前方後円墳の定式とその評価－成立当初の畿内と吉備の対比から－」『考古学研究』第32巻4号
- 北條芳隆 1987「墳丘と方位からみた七つぐろ1号墳の位置」『岡山市七つぐろ古墳群』七つぐろ古墳群発掘調査団
- 北條芳隆 1990「古墳成立期における地域間の相互作用」『考古学研究』第37巻第2号
- 前島己基・松本岩雄 1976「島根県神原神社古墳出土の土器」『考古学雑誌』第62巻第3号
- 間壁忠彦 1970「沿岸古墳と海上の道」『古代の日本』4 中国・四国 角川書店
- 間壁忠彦・間壁葎子 1968「岡山県井原市金敷寺裏山古墳」『倉敷考古館研究集報』5号
- 間壁忠彦・間壁葎子ほか 1974～1976「石棺研究ノート」(1)・(2)・(3)・(4)『倉敷考古館研究集報』9・10・11・12号
- 間壁忠彦・間壁葎子・藤田憲司 1977「岡山県真備町黒宮大塚古墳」『倉敷考古館研究集報』13号
- 間壁忠彦・間壁葎子 1977「「大塚」は古墳か否か」『倉敷考古館研究集報』13号
- 間壁忠彦・間壁葎子 1981「石の軌跡」『吉備古代史の未知を解く』 新人物往来社
- 正岡睦夫 1976「岡山県赤磐郡熊山町武宮古墳について」『岡山県埋蔵文化財報告』6
- 正岡睦夫・田仲満雄・二宮治夫 1977「西江遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』20
- 松木武彦 1993「岡山平野における弥生～古墳時代の地域集団」『鹿田遺跡』3 岡山大学構内遺跡発掘調査報告第6冊 岡山大学埋蔵文化財調査研究センター
- 松木武彦 1994「吉備の蓋形埴輪－器財埴輪の地域性研究に関する予察－」『古代吉備』第16集
- 松木武彦 1994「山陽の前期古墳と鏡」『倭人と鏡』2 埋蔵文化財研究会



- 松木武彦 1997「岡山県における中期古墳の展開」『瀬戸内中期古墳社会の変動と要因』古代学協会四国支部第11回大会発表要旨
- 松木武彦 2004「中国地方における前方後円墳の消滅過程」『西日本における前方後円墳消滅過程の比較研究』大阪大学大学院文学研究科
- 松本琢己 1985『石州府古墳群』鳥取県教育文化財団調査報告書17
- 松本豊胤 1983「高松市茶臼山古墳」『香川の前期古墳』日本考古学協会昭和58年度大会香川県実行委員会編
- 松本正信 1985「古墳立地の意味するもの」『松岡秀夫傘寿記念論文集兵庫史の研究』神戸新聞出版センター
- 松本正信・今里幾次・池田次郎 1984「龍野市とその周辺の考古資料」『龍野市史』第4巻
- 松本亮 江戸後期『東備郡村志』（『吉備群書集成』第2輯）
- 馬淵久夫・平尾良光・西田守夫 1984「鉛同位体比法による本邦出土青銅器の研究」『古文化財の自然科学的研究』古文化財編集委員会編 同朋舎
- 三辻利一 1983『古代土器の産地推定法』考古学ライブラリー14 ニューサイエンス社
- 三辻利一・山本成顕・佐々木哲也 1984「胎土分析による産地推定の実例」『古文化財の自然科学的研究』古文化財編集委員会編 同朋舎
- 水内昌康 1959「岡山市津島都月坂1号墳の発掘」『私たちの考古学』第5巻第3号
- 三宅博士・広江耕史・赤沢秀則 1985「主体部の頭位」『奥才古墳群』
- 宮崎県教育委員会 2003『西都原171号墳（第1分冊）』特別史跡西都原古墳群発掘調査報告書第4集
- 宮原晋一 1989「副葬品の地域性－近畿地方－」『季刊考古学』第28号 雄山閣出版
- 三好博喜 2001「古墳の景観」『京都府埋蔵文化財論集』第4集（財）京都府埋蔵文化財調査研究センター
- 宗田克己 1937「郷土考古学へ二三の貢献」『吉備考古』32号
- 村井崑雄 1976「岡山市一本松古墳の甲冑」『MUSEUM』307号
- 村上幸雄 1980「横穴式石室について」『稼山古墳群』Ⅱ 久米開発事業に伴う文化財調査委員会
- 村上幸雄 1985『法蓮古墳群』総社市埋蔵文化財発掘調査報告2
- 村上幸雄ほか 1991『水島機械金属工業団地協同組合西団地内遺跡群』総社市埋蔵文化財調査報告9
- 茂木雅博 1992「築造技術」『古墳時代の研究 第7巻古墳Ⅰ墳丘と内部構造』雄山閣出版物部茂樹
- 1997『前山遺跡』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告115
- 森 浩一 1986「海と陸のあいだの前方後円墳」『日本の古代』5 前方後円墳の世紀 中央公論社
- 森 毅 1985「棺の構造」『古墳の起源と天皇陵』堅田直編 帝塚山考古学研究所
- 森田友子 1982「まとめと若干の考察」『稼山古墳群』Ⅳ 久米開発事業に伴う文化財調査委員会

- 森本六爾 1926「備中における金釵発掘の古墳」『中央史壇』第12巻第6・7号
- 安川豊史 1992「古墳時代における美作の特質―群小墳の動向と評価―」『吉備の考古学的研究』（下）山陽新聞社
- 安川 満 1998『造山第4号古墳』岡山市教育委員会
- 安川 満 1998「造山古墳群と造山第4号古墳」『造山第4号古墳』岡山市教育委員会
- 安川 満 2000『造山第2号古墳』岡山市教育委員会
- 安田博幸ほか 1970「宝塚市万籟山古墳測量調査報告」『武庫川女子大学紀要人文科学編』第18集
- 安村俊史ほか 1983『玉手山9号墳』柏原市教育委員会
- 柳沢一男 1986『丸隈山古墳Ⅱ』福岡市埋蔵文化財調査報告書第146集
- 柳沢一男 1984『鋤崎古墳1981～83年調査概報』福岡市埋蔵文化財調査報告書第112集
- 柳本照男ほか 1980『史跡大石塚古墳・小石塚古墳―保存事業に伴う調査報告―』豊中市教育委員会
- 山田幸弘 1997 a 「西墓山古墳の築造企画について」『西墓山古墳』藤井寺市文化財報告第16集
- 山田幸弘 1997 b 「畿内における陪塚について」『西墓山古墳』藤井寺市文化財報告第16集
- 山磨康平ほか 1979『西山遺跡』岡山県真備町教育委員会
- 山本三郎 1980「畿内における古墳時代の政治動向についての一視点―埋葬施設の構造を中心として―」『ヒストリア』87号
- 山本 清 1970「古墳文化各説―山陰地方―」『新版考古学講座』5 雄山閣出版
- 山本三郎 1998「王権と海上交通・序説」渡辺誠先生還暦記念論集『列島の考古学』
- 山本輝雄ほか 1981「恵解山古墳第3次発掘調査概要」『長岡京市文化財調査報告書』第8冊
- 行田裕美 1991「古墳の築造時期と若干の考察」『小原遺跡』津山市埋蔵文化財発掘調査報告第38集
- 遊佐和敏 1988『帆立貝式古墳』同成社
- 用田政晴 1980「前期古墳の副葬品配置」『考古学研究』第27巻第3号
- 吉田 晶 1990「吉備一族の反乱」『図説岡山県の歴史』河出書房新社
- 吉田 晶 1995『吉備古代史の展開』塙書房
- 吉留秀敏 1991「前期古墳と階層秩序」『古文化談叢』第26集 九州古文化研究会
- 吉村公男 1999「古墳の正面観」『考古学に学ぶ―遺構と遺物―』同志社大学考古学シリーズ
- VII
- 和田晴吾 1992「群集墳と終末期古墳」『新版古代の日本』第5巻近畿Ⅰ 角川書店
- 和田千吉 1918「備中国都窪郡新庄下古墳」『考古学雑誌』第9巻第11号
- 和田正尹ほか 1737『備陽国誌』（『吉備群書集成』第1輯）
- 渡部明夫・藤井雄三 1983『鶴尾神社4号墳調査報告書』高松市教育委員会

## 参考文献[岩石学関係]

- 氏家治 1970「四国北東部の第3紀火山岩類の岩石学的研究」『岩石鉱物鉱床学会誌』63巻2号
- Ujike, O. 1972 Petrology of Tertiary calc-alkaline volcanic rock suite from northeastern Shikoku and Shodo-shima Island, Japan, Science Report, Tohoku Univ., Ser. 3, Vol. 11
- 都城秋穂・久城育夫 1972『岩石学』I 偏光顕微鏡と造岩鉱物 共立全書 189 共立出版
- 坂東祐司ほか 1979『香川県地学のガイド』 コロナ社
- 松本征夫 1984「九州の火山と陥没構造」『アーバンクボタ』22
- 光野千春 1977「表層地質」『土地分類基本調査 岡山北部』 岡山県
- 光野千春ほか 1980 a 『岡山県地質図』（10万分の1） 内外地図
- 光野千春ほか 1980 b 『岡山県地学のガイド』 コロナ社
- 光野千春ほか 1982『岡山の地学』 山陽新聞社
- Yamaguchi, M. 1958 Petrography of the Otozan Flow on Shodo-shima Island, Setouchi Inland sea, Japan, Mem. Fac. Sci., Kyushu Univ., Ser. D, 6,
- 山崎貞治・大貫仁 1969「大阪府二上山地域におけるカルク・アルカリ岩系マグマの分化」『岩石鉱物鉱床学会誌』62巻4号

## 挿図出典一覧

### 第1章

- 図1 宇垣作成
- 図2 平井 勝1982『殿山遺跡・殿山古墳群』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告47 に加筆
- 図3 宇垣作成

### 第2章

- 図1 宇垣作成
- 図2 1 末永雅雄1975『古墳の航空大観』学生社、2 近藤義郎・鎌木義昌1986「備前車塚古墳」『岡山県史』第18巻考古資料、3 渡部明夫・藤井雄三1983『鶴尾神社4号墳調査報告書』高松市教育委員会、4 東 潮1981「中山大塚古墳」『磯城・磐余地域の前方後円墳』奈良県史跡名勝天然記念物調査報告第42冊

### 第3章

- 図1 松本征夫1984「九州の火山と陥没構造」『アーバンクボタ』22 一部改変
- 図2 1 間壁忠彦・間壁菫子・藤田憲司1977「岡山県真備町黒宮大塚古墳」『倉敷考古館研究集報』13号、2 間壁忠彦・間壁菫子 1968「岡山県井原市金敷寺裏山古墳」『倉敷考古館研究集報』5号、3 古瀬清秀1985「原始・古代の寒川町」『香川県大川郡寒川町史』
- 図3 松本豊胤1983「高松市茶臼山古墳」『香川の前期古墳』日本考古学協会昭和58年度大会香川県実行委員会編
- 図4 春成秀爾・葛原克人・小野一臣・中田啓司1969「備中清音村鋳物師谷1号墳墓調査報告」『古代吉備』第6集 古代吉備研究会
- 図5～10 宇垣作成
- 図11 1 近藤義郎・鎌木義昌1986「備前車塚古墳」『岡山県史』第18巻考古資料  
2 宇垣匡雅1982「七つぐろ古墳群の調査」『考古学研究』29巻3号
- 図12 梅原末治1965『椿井大塚山古墳』京都府文化財調査報告第23冊
- 図13 梅原末治1938『安土瓢箪山古墳』滋賀県史蹟調査報告第7冊
- 図14・15 宇垣作成
- 表1 宇垣作成
- 表2 妹尾護氏測定データ

### 第4章

- 図1 近藤義郎・春成秀爾1967「埴輪の起源」『考古学研究』第13巻第3号  
前島己基・松本岩雄1976「島根県神原神社古墳出土の土器」『考古学雑誌』第62巻第3号

図2～11 宇垣作成

図12 1 正岡睦夫・田仲満雄・二宮治夫1977「西江遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』20、2  
中村一郎・笠野毅1976「大市墓の出土品」『書陵部紀要』第27号、3 近藤義郎・春成秀爾196  
7「埴輪の起源」『考古学研究』第13巻第3号、4 山磨康平ほか1979『西山遺跡』岡山県真備  
町教育委員会、5・6・7 宇垣作成

図13 1 平井勝氏原図 2 宇垣作成

図14 宇垣作成

## 第5章

図1 宇垣作成

図2 1 原口正三・西谷正1967「弁天山C1号墳」『弁天山古墳群の調査』大阪府文化財調査報告第  
17輯、2 北野耕平1964『河内における古墳の調査』大阪大学文学部国史研究室研究報告第1冊、  
3 小野山 節ほか1993『紫金山古墳と石山古墳』京都大学文学部博物館図録第6冊、4 梅原  
末治1965『椿井大塚山古墳』京都府文化財調査報告第23冊、5 末永雅雄・島田暁・森浩一1954  
『和泉黄金塚古墳』日本考古学協会、6 梅原末治1938『安土瓢箪山古墳』滋賀県史蹟調査報告  
第7冊、7 近藤義郎・高井健司（編）1987『七つぐろ古墳群』七つぐろ古墳群発掘調査団、8  
平井勝1982『殿山遺跡・殿山古墳群』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告47、9 神原英朗1975『  
用木古墳群』岡山県営山陽新住宅市街地開発事業用地内埋蔵文化財発掘調査概報第1集 山陽  
町教育委員会、10 蓮岡法暉1984「古代」『加茂町史』、11 三木文雄1986『那須駒形大塚』小  
川町教育委員会 以上文献の図に加筆

図3 宇垣作成

図4 1 近藤義郎・鎌木義昌1986「備前車塚古墳」『岡山県史』第18巻考古資料、2 松本琢己1985  
「石州府古墳群」鳥取県教育文化財団調査報告書17、3 近藤義郎・高井健司（編）1987『七つ  
ぐろ古墳群』七つぐろ古墳群発掘調査団、4 神原英朗1975『用木古墳群』岡山県営山陽新住宅  
市街地開発事業用地内埋蔵文化財発掘調査概報第1集 山陽町教育委員会、5 近藤義郎（編）  
1991『権現山51号墳』権現山51号墳刊行会、6 北野耕平1964『河内における古墳の調査』大  
阪大学文学部国史研究室研究報告第1冊、7・8 梅原末治1965『椿井大塚山古墳』京都府文化  
財調査報告第23冊

図5 宇垣撮影

図6 宇垣作成

表1・2 宇垣作成

## 第6章

図1 1 井上弘1993「矢部古墳群B」岡山県埋蔵文化財発掘調査報告88、2 物部茂樹1997『前山遺  
跡』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告115、3 宇垣匡雅1991「塚の上1号墳」岡山県埋蔵文化財  
報告21、4 高橋進一1996「兎登木21号墳」総社市埋蔵文化財調査年報6

図2 1 北條芳隆1987「墳丘と方位からみた七つぐろ1号墳の位置」『岡山市七つぐろ古墳群』七つ

ぐろ古墳群発掘調査団、2・3 宇垣作成

- 図3 平井勝1982『殿山遺跡・殿山古墳群』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告47 に加筆
- 図4 1 宇垣作成、2 柴田英樹1994「甬崎天神山遺跡 土壙墓の主軸方向と頭位について」岡山県埋蔵文化財発掘調査報告89、3 北條芳隆1987「墳丘と方位からみた七つぐろ1号墳の位置」『岡山市七つぐろ古墳群』七つぐろ古墳群発掘調査団
- 図5 谷山雅彦1997「すりばち池南墳墓群」総社市埋蔵文化財調査年報7

## 第7章

- 図1・2 宇垣作成
- 図3 亀山行雄氏撮影
- 図4 村上幸雄1985『法蓮古墳群』総社市埋蔵文化財発掘調査報告2
- 図5 岡山県史編纂室1986「付図1 造山古墳」『岡山県史』第18巻考古資料 に加筆
- 図6 1・3・5 春成秀爾1983「造山・作山古墳とその周辺」『岡山の歴史と文化』 藤井駿先生喜寿記念会編 福武書店、2・4・6 宇垣作成
- 図7 宇垣作成
- 表1 宇垣作成

## 第8章

- 図1 1 近藤義郎・高井健司（編）1987『七つぐろ古墳群』七つぐろ古墳群発掘調査団、2 草原孝典ほか1996「小盛山古墳の測量調査－岡山市足守地域の地域史研究(4)－」『古代吉備』第18集、3 中田啓司・近藤義郎1987「小造山古墳」『総社市史』考古資料編、4 岡山県史編纂室1986「付図1 造山古墳」『岡山県史』第18巻考古資料、5 岡山県史編纂室1986「付図3 両宮山古墳群」『岡山県史』第18巻考古資料
- 図2 1 宇垣匡雅2002「宿寺山古墳の研究(1)」『環瀬戸内海の考古学 平井勝氏追悼論文集』 古代吉備研究会、2 宇垣匡雅2004『森山古墳・両宮山古墳』山陽町文化財調査報告第2集、3 亀田修一 1998b「牛文茶臼山古墳」『長船町史資料編（上）』
- 図3 宇垣作成

## 第9章

- 図1 宇垣作成
- 図2 内本勝彦1994「御廟山古墳（周濠部）発掘調査概要報告」『堺市文化財調査概要報告』第44冊
- 図3 吉村公男1999「古墳の正面観」『考古学に学ぶ－遺構と遺物－』同志社大学考古学シリーズVII
- 図4 泉本知秀1974「茶臼山古墳外周埴輪列・陪冢周溝調査概要」『節香仙』第25号 大阪府教育委員会
- 図5 小栗明彦1994「奈良市磐之媛陵古墳後円部外濠発掘調査概報」『奈良県遺跡調査概報1993度』奈良県立橿原考古学研究所
- 図6 白石太一郎2001『古墳とその時代』日本史リブレット4 山川出版社

- 図7 堺市教育委員会1990『堺の文化財―百舌鳥古墳群―』
- 図8 北野耕平1964『河内における古墳の調査』大阪大学文学部国史研究室研究報告第1冊
- 図9・10 宇垣作成
- 図11 天野末喜1986b「岡ミサンザイ古墳〔仲哀天皇恵我長野西陵〕」『古市古墳群』藤井寺の遺跡ガイドブックNo.1 藤井寺市教育委員会
- 図12 一瀬和夫1980「応神陵古墳外堤試掘調査報告『節香仙』第31号 大阪府教育委員会
- 図13 末永雅雄 1975『古墳の航空大観』学生社（他の陵墓図も本書による）
- 図14 岸本道昭ほか1982『淡輪遺跡発掘調査概要』IV 大阪府教育委員会
- 図15 宇垣匡雅2005『両宮山古墳』赤磐市文化財調査報告第1集
- 図16 十河良和ほか2001『平成12年度国庫補助事業発掘調査報告書』堺市教育委員会  
柿沼奈穂ほか2002
- 図17 長津宗重1999『男狭穂塚女狭穂塚陵墓参考地測量報告書』宮崎県文化財調査報告書第42集
- 図18 松林豊樹2003『西都原171号墳（第1分冊）』特別史跡西都原古墳群発掘調査報告書第4集 宮崎県教育委員会
- 図19 紺谷永子1986「市野山古墳〔允恭天皇恵我長野北陵〕と周辺の古墳」『古市古墳群』藤井寺の遺跡ガイドブックNo.1
- 図20 山田幸弘1997a「西墓山古墳の築造企画について」『西墓山古墳』藤井寺市文化財報告第16集
- 図21 辻葩学1994「向墓山古墳」『羽曳野市史』第3巻資料編I
- 図22 木許守ほか1996『室宮山古墳範囲確認調査報告』御所市教育委員会
- 図23 小泉裕司ほか1999「久津川車塚古墳」『城陽市史』第3巻
- 図24 宇垣作成
- 表1・2 宇垣作成

## 第10章

- 図1 宇垣作成

## 第11章

- 図1 1 草原孝典ほか1996「小盛山古墳の測量調査―岡山市足守地域の地域史研究(4)―」『古代吉備』第18集、2 鎌木義昌1965『総社市随庵古墳』総社市教育委員会、3 近藤義郎1986「一本松古墳」『岡山県史』第18巻考古資料、4 安川満2000『造山第2号古墳』岡山市教育委員会、5 岡山県史編纂室 1986「付図1 造山古墳」『岡山県史』第18巻考古資料
- 図2 6 岡山県史編纂室 1986「付図3 両宮山古墳群」『岡山県史』第18巻考古資料、7 亀田修一1998a「築山古墳」『長船町史資料編（上）』、8 亀田修一1998b「牛文茶臼山古墳」『長船町史資料編（上）』

## 第12章

- 図1・2 宇垣作成

第13章

図 1・2・3 宇垣作成



## 初出一覧

序章 古墳時代の吉備－研究の目的－

新稿

第1章 古墳の立地とはなにか

（『古墳時代の政治構造』青木書店 2004年）

第2章 前方部の形状に関する一試論

（「吉備の前期古墳Ⅱ 穴甘山王山古墳の測量調査」『古代吉備』第10集 1988年）を補訂

第3章 竪穴式石室の研究－使用石材の分析を中心に－

（『考古学研究』第34巻第1号・第2号 1987年）を補訂

第4章 特殊器台形埴輪に関する若干の考察

（『考古学研究』第31巻第3号 1984年）を補訂

第5章 前期古墳における刀剣副葬の地域性

（『考古学研究』第44巻第1号 1997年）を補訂

第6章 吉備南部における古墳時代前半期小墳の埋葬頭位

（『古代吉備』第23集 2001年）を補訂

第7章 吉備の中期古墳の動態－使用石材の検討から－

（『考古学研究』第39巻第3号 1992年）を補訂

第8章 周濠の地方伝播に関する一試論－吉備の事例を中心に－

新稿（『天狗山古墳発掘調査報告書』岡山大学考古学研究室 掲載予定）

第9章 巨大古墳の諸要素－両宮山古墳の占める位置－

（『両宮山古墳』日本の遺跡14 同成社 2006年）を補訂

第10章 巨大古墳築造の試算

新稿

第11章 吉備の帆立貝形古墳

（『古墳時代の政治構造』青木書店 2004年）を補訂

第12章 吉備地域における埴輪の普及とその画期

新稿

第13章 後期古墳の様相

新稿（「古墳文化の地域的諸相 山陽」『講座日本の考古学』青木書店 掲載予定）および（「川戸2号墳の占める位置」『川戸古墳群発掘調査報告書』大原町教育委員会 1995年）をもとに作成

終章 古墳時代政治構造の変遷

新稿（「古墳文化の地域的諸相 山陽」『講座日本の考古学』青木書店 掲載予定）